山 梨 県 北 杜 市

上原遺跡

県営農地環境整備事業天王原地区ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022
山梨県中北農務事務所
北杜市教育委員会

山 梨 県 北 杜 市

上原（かみはら）遺跡

県営農地環境整備事業天王原地区ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022
山梨県中北農務事務所
北杜市教育委員会

遺跡遠景

PJ266 号住居

PJ274 号住居

例　　言

1．本報告書は山梨県中北農務事務所所管の県営農地環境整備事業天王原地区ほ場整備天王原１工区・２工区に伴い、北杜市教育委員会が実施した埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は山梨県北杜市明野町浅尾 4016 番地ほかの農地において実施した。上原遺跡（かみはらいせき）の名称は当該地の小字名に由来し、地元では天王原（てんのうはら）とも呼ばれている。

3．発掘調査は以下のとおり実施した。

天王原１工区　平成 24 年６月 4 日～平成 25 年 3 月 15 日
天王原２工区　平成 25 年６月 3 日～平成 25 年 12 月 25 日
平成 26 年４月 21 日～平成 26 年 10 月 31 日
平成 27 年４月 22 日～平成 27 年 10 月 1 日
平成 28 年４月 8 日～平成 29 年 3 月 31 日
平成 29 年４月 14 日～平成 29 年 5 月 16 日

発掘調査の対象面積は正味 59,595 ㎡で、別に 14,800 ㎡において遺構確認のみを実施し現状保存措置を講じた。遺物はテンバコ 757 箱分が出土した。

4．発掘調査は北杜市教育委員会が実施し、調査担当者は以下のとおりである。

天王原１工区　北杜市教育委員会学術課　渡辺泰彦
天王原２工区　北杜市教育委員会学術課　佐野 隆

調査支援業務

平成 25 年度　特定非営利活動法人茅ヶ岳歴史文化研究所　長谷川哲也・小熊詩音
平成 26 年度　特定非営利活動法人茅ヶ岳歴史文化研究所　小熊詩音・渋谷賢太郎
昭和測量株式会社　小谷亮二・泉英樹
平成 27 年度　特定非営利活動法人茅ヶ岳歴史文化研究所　小熊詩音
昭和測量株式会社　高野高潔・萩野谷主税
平成 28 年度　特定非営利活動法人茅ヶ岳歴史文化研究所　功力司
株式会社シン技術コンサル　桑宮慶一
平成 29 年度～令和 2 年度　特定非営利活動法人茅ヶ岳歴史文化研究所　功力司

5．現地調査と並行して基礎整理を実施し、本格整理は令和 2 年度に完了した。令和 3 年度（繰越明許）に本書を印刷製本した。

6．以下の理化学分析業務を株式会社パレオ・ラボに委託し、その成果を本報告書に収録した。

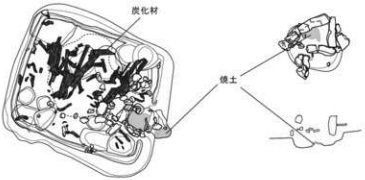
出土炭化材樹種同定業務・年代測定業務
出土炭化種実同定業務
土器圧痕同定業務

7．出土土器に付着した炭化物の年代測定を小林謙一氏（中央大学）に委託し、その成果を本報告書に収録した。

8．発掘調査に際し、地元地権者、浅尾原財産区、芋ヶ岳土地改良区をはじめとする関係機関、関係者の多大なる協力を得た。記して感謝申し上げる。
9．本書中で用いた図面の出典は、国土地理院発行の電子地図のほか山梨県中北農務事務所作製の天王原地区現況平面図、工事計画図、北杜市役所 GIS である。
10．付録 DVD には、本書に掲載できなかった記録写真、観察表等を収録した。
11．本調査に係る調査記録および出土品は北杜市教育委員会学術課（埋蔵文化財センター）が保管している。

凡　　例

1．報告書中の遺構図および遺物実測図の縮尺は、各図版に示す。
2．報告書中のトーンの意味するところは下図に示す。その他のトーンについては個別に記載した。



3．土坑観察表の断面形状欄にあるア～カは、下に示す断面形を表す。

目　　次

例言
凡例
目次
第１章　調査に至る経緯と調査方法
第１節　調査に至る経緯 …… 1 ～ 3
第２節　調査の方法 …… 3
第１図　上原遺跡平面図 …… 3
第２章　遺跡の概要 …… 4
第３章　検出された遺構
第１節　住居跡 …… 5
第２節　掘立柱建物 …… 5
第３節　土坑・ピット …… 5
第４節　溝跡 …… 5
第５節　その他の遺構・保存区域 …… 5
第２図　上原遺跡の位置と周辺遺跡 …… 6
第１表　周辺遺跡地名表 …… 7 ～ 9
第３図　上原遺跡調査範囲 …… 10
第４図　上原遺跡調査区全体図 …… 11
第５図～第 251 図　遺構図 …… 13 ～ 266
第252図～第 258 図　遺物図 …… 267 ～ 273
第４章　理化学分析
第１節　炭素年代測定 …… 274 ～ 283
第２節　樹種同定・炭化種実同定 …… 284 ～ 312
第３節　種実圧痕 …… 313
第５章　総括 …… 313・314
写真図版１～ 128 …… 315 ～ 442
抄録
奥付

住 居 遺 構 図 目 次

住居番号	掲載ページ
1工区 PH1	13 p
1工区 PH2	14 p
1工区 PH3	15 p
1工区 PJ4	16 p
以下2工区	
PH1	17 p
PH2	17 p
PH3	18 p
PH4	18 p
PH5	19 p
PH6	19 p
PH7	20 p
PH8	20 p
PH9	20 p
PH10	21 p
PH11	22 p
PH12	22 p
PH13	21 p
PH14	23 p
PK15	21 p
PH16	23 p
PH17	24 p
PH18	24 p
PH19	25 p
PH20	25 p
PH21	26 p
PH22	26 p
PH23	27 p
PH24	28 p
PH25	28 p
PH26	29 p
PH27	29 p
PH28	30 p
PH29	30 p
PH30	31 p
PH31	31 p
PH32	31 p
PH33	32 p
PH34	32 p
PH35	33 p
PJ36	33 p
PH37	34 p
PJ38	27 p
PH39	34 p
PH40	35 p
PH41	35 p
PH42	36 p
PH43	36 p
PH44	37 p
PH45	37 p
PH46	38 p
PH47	38 p
PH48	39 p
PH49	39 p

住居番号	掲載ページ
PJ50	40 p
PH51	40 p
PJ52	41 p
PH53	41 p
PH54	42 p
PH55	42 p
PH56	43 p
PJ57	43 p
PJ58	44 p
PJ59	44 p
PH60	45 p
PH61	45 p
PH62	46 p
PJ63	46 p
PJ64	47 p
PH65	47 p
PH66	48 p
PJ67	49 p
PH68	49 p
PH69	50 p
PH70	50 p
PH71	欠番
PJ72	51 p
PJ73	47 p
PJ74	51 p
PJ75	52 p
PJ76	52 p
PJ77	53 54 p
PJ78	54 p
PJ79	55 56 p
PJ80	56 p
PJ81	57 p
PJ82	53 p
PJ83	57 p
PJ84	欠番
PJ85	48 p
PJ86	58 p
PJ87	58 p
PH88	59 p
PH89	59 p
PJ90	59 p
PJ91	60 p
PJ92	60 p
PJ93	61 p
PJ94	61 p
PJ95	62 p
PJ96	63 p
PJ97	55 p
PJ98	63 p
PH99	60 p
PJ100/ PH100	64 p
PJ101	55 56 p
PH102	64 p

住居番号	掲載ページ
PH103	65 p
PH104	66 p
PH105	67 p
PH106	66 p
PH107	68 p
PH108	69 p
PH109	68 p
PH110	70 p
PH111	71 p
PH112	72 p
PH113	72 p
PH114	73 p
PH115	74 p
PH116	74 p
PH117	75 p
PH118	76 p
PH119	76 p
PH120	77 p
PH121	77 p
PH122	78 p
PH123	78 p
PH124	79 p
PH125	79 p
PK126	80 p
PK127	80 p
PK128	80 p
PH129	81 p
PH130	82 p
PH131	82 p
PH132	82 p
PH133	83 p
PH134	83 p
PH135	84 p
PH136	84 p
PH137	85 p
PJ138	86 p
PH139	87 p
PK140	88 p
PH141	88 p
PH142	89 p
PH143	89 p
PH144	90 p
PJ145	90 p
PH146	91 p
PJ147	67 p
PJ148	67 p
PJ149	91 p
PJ150	65 p
PJ151	92 p
PJ152	92 p
PJ153	93 p
PJ154	93 p
PJ155	94 p
PJ156	94 p
PJ157	95 p
PJ158	95 p

住居番号	掲載ページ
PJ159	96 p
PJ160	71 p
PH161	76 p
PJ162	96 p
PJ163	97 p
PJ164	97 p
PJ165	98 p
PJ166	99 p
P□ 167	欠番
PJ168	99 p
PJ169	100 p
PJ170	101 p
PJ171	101 p
PJ172	102 p
PJ173	102 p
PJ174	103 p
PJ175	103 p
PJ176	104 p
PJ177	104 p
PJ178	104 p
PJ179	105 p
PH180	欠番
PH181	106 p
PH182	106 p
PH183	107 p
PH184	108 p
PH185	109 p
PH186	109 p
PH187	109 p
PH188	109 p
PH189	110 p
PH190	110 p
PH191	111 p
PH192	111 p
PH193	112 p
PH194	112 p
PH195	113 p
PH196	113 p
PH197	欠番
PH198	108 p
PH199	114 p
PH200	114 p
PH201	115 p
PH202	115 p
PJ203	116 p
PJ204	117 118 p
PH205	121 p
PJ206	121 122 p
PH207	122 p
PH208	123 p
PH209	123 p
PH210	115 p
PH211	124 p
PJ212	121 p
PH213	欠番

住居番号	掲載ページ
PH214	欠番
PH215	125 p
PH216	125 p
PH217	126 p
PH218	126 p
PH219	127 p
PH220	127 p
PJ221	128 p
PH222	128 p
PH223	129 p
PJ224	130 p
PH225	129 p
PJ226	131 p
PJ227	132 p
PJ228	133 p
PJ229	132 p
PJ230	134 p
PJ231	133 p
PJ232	134 p
PJ233	135 136 p
PJ234	130 p
PJ235	135 136 p
PJ236	135 p
PJ237	139 p
PJ238	139 p
PH239	140 p
PJ240	140 p
PH241	141 p
PH242	142 p
PJ243	142 p
PJ244	143 p 144 p
PJ245	147 p
P□ 246	欠番
PJ247	148 p
PJ248	149 p
PJ249	150 p
P□ 250	欠番
PJ251	152 p 153
PJ252	152 153 p
PJ253	152 154 p
PJ254	欠番
PJ255	欠番
P□ 256	欠番
PJ257	151 p
PJ258	155 p
PJ259	152 154 p
PK260	156 p
PK261	156 p
PJ262	157 158 p
PJ263	163 p

住居番号	掲載ページ
PJ264	164 165 p
PJ265	166 p
PJ266	167 p
PJ267	143 144 p
PJ268	168 169 p
PJ269	170 p
PJ270	157 158 p
PJ271	171 p
PJ272	172 p
PJ273	172 p
PJ274	173 p
PJ275	173 p
PJ276	174 p
PJ277	177 178 p
PJ278	179 p
PH279	180 p
PJ280	181 182 p
PJ281	183 184 p
PJ282	185 p
PJ283	186 p
PJ284	186 p
PJ285	187 p
PJ286	187 p
PJ287	187 p
PJ288	188 p
PJ289	189 p
PJ290	190 p
PJ291	193 p
PJ292	181 182 p
PJ293	194 p
PJ294	194 p
PJ295	181 182 p
PJ296	195 p
PJ297	195 p
PJ298	196 p
PH299	196 p
PJ300	197 p
PJ301	198 p
PJ302	199 p
PJ303	200 p
PJ304	201 202 p
PJ305	203 p
PJ306	204 p
PJ307	205 p
PJ308	206 p
PJ309	207 p
PJ310	208 p
PJ311	欠番
PJ312	209 p
PJ313	210 211 p

住居番号	掲載ページ
PJ314	210 211 p
PJ315	212 p
PJ316	213 p
PJ317	213 p
PJ318	214 p
PJ319	215 216 p
PJ320	217 p
PJ321	218 p
PJ322	欠番
PJ323	215 p
PJ324	219 p
PJ325	220 p
PH326	221 222 p
PJ327	221 p
PH328	223 p
PK329	221 p
PK330	224 p
PJ331	225 p
PH332	226 p
PH333	227 p
PH334	228 p
PH335	229 230 p
PH336	229 p
PJ337	231 p
PH338	232 233 p
PH339	234 p
PH340	234 p
PJ341	235 p
PJ342	236 p
PJ343	237 238 p
PJ344	237 238 p
PH345	240 p
PJ346	240 p
PH347	241 p
PJ348	242 p
PJ349	242 p
PJ350	243 p
PJ351	244 p
PJ352	239 p
PJ353	245 p
PJ354	244 p
PJ355	245 p
PJ356	246 p
PJ357	246 p
PJ358	246 p
PJ359	246 p
PJ360	246 p

第１章　調査に至る経緯と調査方法

第１節　調査に至る経緯

山梨県北西部の茅ヶ岳西麓に位置する北杜市明野町は、富士川の支流、塩川に沿った河岸段丘面に水田が広がり、茅ヶ岳の火山性扇状地の西面緩斜面は畑地として利用されている。小河川しかない茅ヶ岳西麓の畑地帯では、天水に依存した農業が行われ、灌漑施設の整備が農業者の永年の要望であった。平成 10 年に灌漑、上水道、発電等の多目的ダムである県営塩川ダムが完成することを見据え、平成８年頃から茅ヶ岳西麓の畑地帯で県営畑地帯総合整備事業が計画され、灌漑施設の整備と圃場整備が段階的に実施された。本報告書の対象である上原遺跡が所在する畑地でも平成 20 年頃から圃場整備が構想された。

上原遺跡は以前から大規模な集落遺跡として知られ、圃場整備に伴う記録保存のための発掘調査には、多額の経費と数ヵ年を要することが容易に想定されたが、荒廃農地を解消し、農業生産法人を誘致して農地を有効活用したいとする地権者、農政関係者の要望は強く、圃場整備事業が具体化されていった。北杜市教育委員会は山梨県中北農務事務所、北杜市役所産業観光部農政課と圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の保存について協議し、平成 22 年度に遺跡の内容と範囲を確認する試掘調査を実施することとした。

試掘調査は平成 22 年６月７日から７月 28 日にかけて、689,677 ㎡の工事予定範囲を対象に実施した。荒廃農地で地形の起伏もあることから人力により試掘溝及び試掘坑 295 ヶ所を発掘した。その結果、256,000 ㎡において縄文時代の住居跡 15 基、平安時代の住居跡２基を検出した。遺構の分布確率から遺跡全体では縄文時代の住居 170 基、平安時代の住居 220 基が予想された。

試掘調査の結果は、平成 22 年 10 月 28 日に圃場整備工区の地権者組織である施工委員会に報告された。施工委員会委員からは遺跡の保存活用と圃場整備事業の両立を図れないものかとの意見があったが、圃場整備の効果の観点から難しい課題であった。農政側は圃場整備工事の設計を進めつつ、埋蔵文化財の取り扱いを検討したが、切土造成部分では遺跡の保存が困難であった。市教育委員会は中北農務事務所、市農政課と着工前、着工後に協議を重ね、圃場整備事業と埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査を並行して実施する計画を練り、工区を複数工区に分割し、発掘調査して施工する計画を具体化した。後述する調査区は、こうした経緯で設定された。

圃場整備事業の正式名称は県営農地環境整備事業天王原地区１工区・２工区となった。１工区は茅ヶ岳広域農道の西側であり、２工区は東側の圃場である。１工区は平成 24 年度から、２工区は小工区に分割し、平成 25 年度から順次発掘調査に着手することとした。

本発掘調査にかかる公文書と調査地点、調査経費は以下のとおりである。試掘調査を除く発掘調査費は 473,669,780 円で、県農務部側が 90％を負担し、市教育委員会が国宝重要文化財等保存活用事業費補助金、県文化財保存事業費補助金の交付を受けて、地元農家負担分に相当する 10％を負担した。

平成 22 年度

北杜農政第 161 号　　平成 22 年５月 20 日　区画整備事業実施に伴う埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）
北杜学術第 113-2 号　　平成 22 年 10 月 28 日　区画整備事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査について（回答）

平成 24 年度（天王原１工区）

調査費 17,534,335 円（農政側 15,764,000 円・文化財側 1,770,335 円）
中北農第 474 号　　平成 24 年５月７日　埋蔵文化財発掘の通知について
教学文第 633 号　　平成 24 年５月 24 日　周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）
北杜学術第 90-4 号　　平成 24 年６月５日　埋蔵文化財発掘調査の報告について
北杜学術第 90-5 号　　平成 25 年３月 21 日　埋蔵文化財調査終了報告
北杜学術第 90-6 号　　平成 25 年３月 21 日　埋蔵物発見届
北杜学術第 90-7 号　　平成 25 年３月 21 日　埋蔵文化財保管証・埋蔵文化財保管請証
教学文第 406 号　　平成 25 年５月 16 日　埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）

平成 25 年度（天王原 2 工区 1 地区・2 地区・3 地区・6 地区）

調査費 7,405,247 円（1 工区整理作業・農政側 6,648,000 円・文化財側 757,247 円）

調査費 47,577,974 円（2 工区発掘調査・農政側 42,812,000 円・文化財側 4,765,974 円）

中北農第 884 号　平成 25 年 5 月 17 日　埋蔵文化財発掘の通知について（1 ～ 8 地区）

教学文第 814 号　平成 25 年 5 月 29 日　周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

中北農第 2611 号　平成 25 年 8 月 23 日　埋蔵文化財発掘の通知について（6 地区）

教学文第 1853 号　平成 25 年 9 月 9 日　周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

北杜学術第 120-3 号　平成 25 年 5 月 25 日　埋蔵文化財発掘調査の報告について

北杜学術第 120-10 号　平成 25 年 12 月 25 日　埋蔵文化財調査終了報告（1・2 地区・6 地区）

北杜学術第 120-11 号　平成 25 年 12 月 25 日　埋蔵物発見届

北杜学術第 120-12 号　平成 25 年 12 月 25 日　埋蔵文化財保管証・埋蔵文化財保管請証

教学文第 2896 号　平成 26 年 1 月 8 日　埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）

平成 26 年度（3 地区・10 地区）

調査費 66,051,787 円（農政側 59,130,000 円・文化財側 6,921,787 円）

北杜学術第 318-5 号　平成 26 年 11 月 4 日　埋蔵文化財調査終了報告（3 地区）

北杜学術第 318-11 号　平成 26 年 11 月 4 日　埋蔵物発見届・埋蔵文化財保管請証

北杜学術第 318-12 号　平成 26 年 11 月 4 日　埋蔵文化財保管証

教学文第 2212 号　平成 26 年 11 月 11 日　埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）

中北農第 4274 号　平成 26 年 12 月 9 日　埋蔵文化財発掘の通知について（7・10 地区）

教学文第 2555 号　平成 26 年 12 月 24 日　周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）

北杜学術第 366-4 号　平成 27 年 2 月 20 日　埋蔵文化財発掘調査の報告

北杜学術第 366-5 号　平成 27 年 2 月 26 日　埋蔵文化財調査終了報告

北杜学術第 366-6 号　平成 27 年 2 月 26 日　埋蔵物発見届・埋蔵文化財保管請証

北杜学術第 366-7 号　平成 27 年 2 月 26 日　埋蔵文化財保管証

教学文第 3250 号　平成 27 年 3 月 9 日　埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）

平成 27 年度（7・10 地区）

調査費 64,541,493 円（農政側 58,086,000 円・文化財側 6,455,493 円

北杜学術第 324-5 号　平成 27 年 10 月 6 日　埋蔵文化財調査終了報告

北杜学術第 324-6 号　平成 27 年 10 月 6 日　埋蔵物発見届・埋蔵文化財保管請証

北杜学術第 324-7 号　平成 27 年 10 月 6 日　埋蔵文化財保管証

教学文第 2318 号　平成 27 年 10 月 21 日　埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）

平成 28 年度（4・5・8 地区）

調査費 114,245,252 円（農政側 102,816,000 円・文化財側 11,429,252 円）

平成 29 年度（4 地区・整理作業）

調査費 53,563,771 円（農政側 48,150,000 円、文化財側 5,413,771 円）

北杜学術第 97-1 号　平成 29 年 5 月 19 日　埋蔵文化財調査終了報告（4 ～ 8 地区）

北杜学術第 97-2 号　平成 29 年 5 月 19 日　埋蔵文化財保管証

北杜学術第 97-3 号　平成 29 年 5 月 19 日　埋蔵物発見届

北杜学術第 97-4 号　平成 29 年 5 月 19 日　埋蔵文化財保管請証

平成 30 年度（整理作業）

調査費 47,748,834 円（農政側 42,966,000 円・文化財側 4,782,834 円）

平成 31 年度（整理作業）

調査費 32,400,756 円（農政側 29,160,000 円・文化財側 3,240,756 円）

令和２年度（整理作業）

調査費 20,020,331 円（農政側 18,017,363 円・文化財側 2,002,968 円）

令和３年度（印刷製本・綴越明許）

調査費 2,580,000 円（農政側 2,322,000 円・文化財側 258,000 円）

第２節　調査の方法

圃場整備工区のうち埋蔵文化財が所在する範囲を対象に発掘調査を実施した。天王原１工区は工区のうち埋蔵文化財が確認された範囲が限定的であったため、平成 24 年度に発掘調査した。天王原２工区は工区のほぼ全域で埋蔵文化財が確認されたため西側から東側へ向かって小工区ごとに分割し、順次発掘調査を実施した。

発掘調査区域では大型重機を用いて表土をはぎ取った。遺構の精査と発掘調査は人力で行った。調査記録写真は中判カラーネガフィルムと 35 ㎜判デジタルカメラで撮影した。遺構の形状、遺物の出土地点は世界測地系第Ⅷ系に基づき、光波測量機を用いて測量した。遺構の微細図は実測により作図したほか、デジタルカメラ写真から Agisoft 社製 Photoscan を用いてオルソ画像を合成し、デジタルトレースして作図した。この際、世界測地系による基準点を写し込み、精度管理した。

調査範囲が広いため調査段階ではグリッドを設定しなかったが、本報告書では遺構の位置を簡便に表記するため遺構図上にグリッドを設定した。

天王原２工区のうち４地区と８地区は、遺構が多数検出された。圃場整備工事の工期との兼ね合いから、工事を設計変更し、遺跡の一部を盛土保存することとした。盛土保存する範囲は遺構精査時に略測図を作成したが、正確な遺構数、遺構の時期は不明である。

出土品は洗浄、注記、接合を経て、報告すべきものを抽出し資料化した。土器は実測により作図したが、炉体土器など被熱して脆弱化し接合・復元が困難なもので、実測を断念したものがある。資料化のために抽出した石器は、Keyence 社製 3D スキャナー VL-320 を用いて計測し、実測図に代わる画像を作成した。なお調査期間と費用の制約から、本報告書に出土品の詳細を報告することが叶わなかった。出土品の整理作業を進めて、将来、遺物編を刊行したい。

第１図　　上原遺跡平面図

第２章　遺跡の概要

上原遺跡は、茅ヶ岳の西麓、標高 740 ～ 850m の西向緩斜面に位置する。遺跡が広がる斜面には塩川の支流、鰻沢川が流れる。鰻沢川は複数の水源に発する流れが標高 640m 付近で合流し、塩川に注ぐ。上原遺跡内には埋没した旧河道が認められ、現河道と旧河道に侵食されて分断された尾根筋が東西に延びる。遺構はこうした尾根筋に展開する。

検出された遺構と遺物は縄文時代早期から平安時代に及び、わずかに中世の遺物も出土した。縄文時代早期では鵜ヶ島台式と思われる条痕文系土器、土坑が少数、検出された。前期の遺構、遺物は認められない。中期中葉の藤内式期の遺構と遺物が少数、検出された。

中期末葉の曽利式土器期になると集中的な土地利用が認められる。曽利Ⅱ式期の住居３軒、曽利Ⅳ式期の住居 21 軒、曽利Ⅴ式期の住居 45 軒と掘立柱建物９棟、加曽利 E3 式期の住居１軒、加曽利 E4 式期の住居５軒が検出された。本遺跡の南側１kmには梅之木遺跡が所在する。梅之木遺跡は井戸尻式３段階から曽利Ⅴ式期にかけての環状集落跡である。また上原遺跡から鰻沢川に沿って塩川沿いの河岸段丘まで下ると諏訪原遺跡がある。諏訪原遺跡は藤内式期から曽利Ⅴ式期までの集住的な居住地跡である。上原遺跡とこれらの遺跡との関係は、第５章総括で触れたい。

後期初頭の称名寺式期は、遺構数が少ないが土地利用が継続した。八ヶ岳南麓と茅ヶ岳西麓では称名寺Ⅰａ式土器がほとんど見られないが、本遺跡では中津式と思われる土器が少量だが出土している。称名寺Ⅰ式期になると住居６軒、称名寺Ⅱ式期に２軒が検出されている。本遺跡から南西 4.5kmにある屋敷添遺跡では関沢類型、称名寺Ⅰｂ式土器を伴う土坑が検出されている。また本遺跡の北側 0.8km、鰻沢川と尾根筋を越えた地点にある上ノ原遺跡は、遺跡の継続時期、遺構内容が本遺跡と重なり、本遺跡と一体的に営まれた居住地と考えられる。

後期前葉の堀之内式期になると遺構数が急増する。住居は壁沿いに部分的な敷石を施す住居が主流で、長い柄部をもつ柄鏡形敷石住居は認められない。住居は同一地点で繰り返し建て替えしている。堀之内１式期の住居 62 軒、堀之内２式期の住居 15 軒、堀之内式期としか分からない住居４軒を認めたが、住居数のカウントは厳密に建て替え回数を含めていない。

後期中葉の加曽利Ｂ式期になると遺構数がやや減少する。住居は加曽利 B1 式期が主で住居７軒を検出した。加曽利 B2 式期は土器が出土し、当該時期の可能性がある遺構を確認したのみである。加曽利 B3 式以降の土器は出土しなかった。

弥生時代前期と思われる条痕文土器が少量出土し、古墳時代前期の住居８軒が検出された。本遺跡の南側 0.8kmに所在した浅尾原Ⅵ遺跡で古墳時代前期の住居２軒が、南西 4.1kmの神取遺跡で住居８軒が発掘調査されている。

平安時代になると本遺跡が再び集中的に土地利用され、９世紀後半から 11 世紀代の住居 162 軒と多数の掘立柱建物が検出された。第 61 号住居で出土した鉄製鋤は、本遺跡が古代牧の経営に関係した居住地であることを示唆する。

中世以降、本遺跡での土地利用はみえなくなる。わずかに 16 世紀以後と思われる焙烙が出土したのみである。本遺跡の西側 1.8kmにある浅尾集落には、かつて集落が上原遺跡付近にあり、応永年間に現在地に移転したとの伝承がある。本発掘調査ではこの伝承を裏付ける遺構、遺物は検出されなかった。

第３章　検出された遺構

第１節　住居跡

光波測量機で遺構形状を計測するにあたり、住居の時代別に略記号を用いた。PJ 番号＝縄文時代の住居跡、PK 番号＝古墳時代の住居跡、PH 番号＝平安時代の住居跡、である。

遺構の位置は整理作業の便宜上、設定したグリッド番号で示す。グリッドの大きさは、大グリッド 40m、中グリッド 20m、小グリッド 10m 四方である。

遺構の時期は出土土器から推測した。縄文時代の土器編年は、今福利恵 2011「縄文時代の編年 (9) 中期後半（曽利式土器）」『山梨県史資料編 2 原始・古代考古（遺構・遺物）』山梨県、小林達雄編 2008『総覧縄文土器』アムプロモーション、平安時代の土師器編年は、甲斐型土器研究グループ 1992『甲斐型土器－その編年と年代－』山梨県考古学協会に従った。

現状保存した地区の住居

現状保存した地区でも多数の住居が確認されている。遺構精査時に出土した土器破片から、その時期は曽利Ⅳ式期から加曽利 B2 式期に及ぶと推測される。上原遺跡の調査では、決して多くはないが加曽利 B2 式土器破片が出土している。茅ヶ岳西麓では加曽利 B1 式期で廃絶する集落が多いから、加曽利 B2 式期と推測される遺構が確認された点は重要である。

第２節　掘立柱建物

縄文時代中期から平安時代の掘立柱建物 102 棟を検出した。出土遺物が少なく、所属時期を不明としたものが多いが、概して縄文時代の掘立柱建物は柱穴が大きく深い。対して平安時代の建物は柱穴が小さい。また掘立柱建物の可能性が高いピット列がほかに数ヵ所で検出されている。茅ヶ岳西麓の縄文時代遺跡で、上原遺跡ほど多くの掘立柱建物が検出された遺跡はない。特筆すべき遺構の概要を以下に記す。

第３節　土坑・ピット

縄文時代早期から平安時代の土坑 1420 基、ピット 3450 基を検出した。土坑数、ピット数は住居柱穴、貯蔵穴などを含む暫定値である。特筆すべき土坑の概要を報告する。

第４節　溝跡

時期不明の溝跡 4 条を検出した。所属する時期は不明である。

第５節　その他の遺構・保存区域

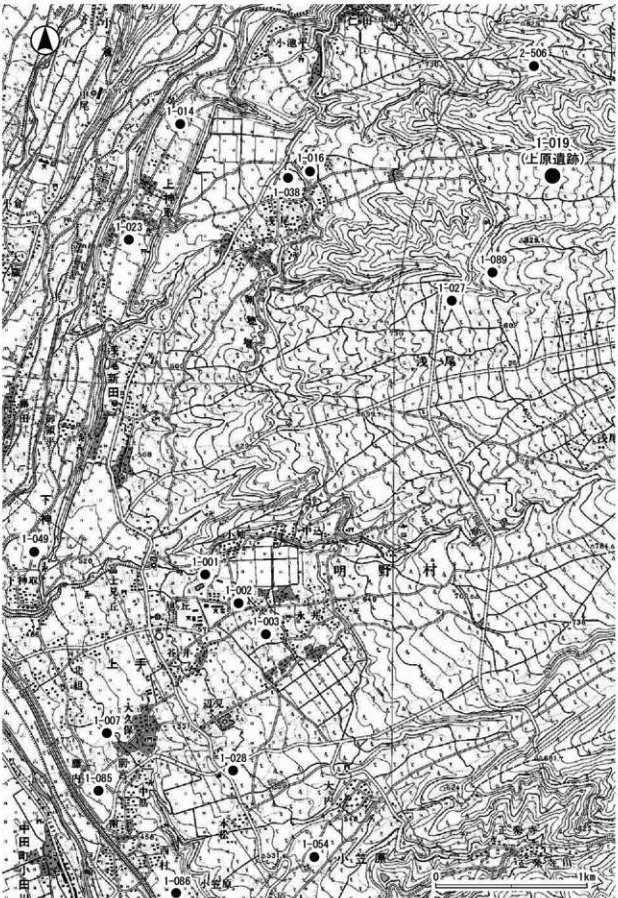
配石遺構 6 基、埋設土器 17 基、焼土跡 22 基、集石遺構 7 基を検出した。

配石遺構は中期末から後期の敷石住居の断片と思われるもので、単独・大規模ないわゆる配石遺構は認められない。

埋設土器は曽利Ⅳ式期から曽利Ⅴ式期、後期の土器を埋設した遺構で、中期末葉の埋設土器 7 基が H-13-1-3 グリッドでまとまって検出されている。後期の埋設土器は住居の炉体土器の残骸かと思われる。

焼土跡は時期不明な遺構が多い。周辺から出土した土器から中期末葉から後期の炉跡かと思われるもの、中世の内耳土器を伴うものがある。

集石遺構は縄文時代の敷石住居の残骸と思われる遺構のほか、PH211 号住居埋土内で検出した SY005 号集石、PH338 号住居埋土内で検出した SY007 号集石のように火葬施設と思われる遺構がある。また SY006 号集石とした遺構は、後期の住居が集中する F-22-1-2 グリッド一帯で検出され、尾根北側の斜面を埋める状況から、住居構築時に生じた地山礫を集中廃棄した場、もしくは狭い尾根を拡張しようとした地業と推測される。



第 2 図　上原遺跡の位置と周辺遺跡（1/25,000）

遺跡番号	遺跡名	町名	時代	遺構数	遺物	編著者	発行年	報告書名		発行機関
1-001	清水端	北杜市明野町	縄文中期後葉	埋設土器1基。中期後葉～後期中葉のピット群。		宮沢公雄	1986	『清水端遺跡』	明野の文化財 第1集	明野村教育委員会
			縄文後期初頭	後期初頭～後期前葉の住居1軒。中期後葉～後期中葉のピット群。						
			縄文後期前葉	後期初頭～後期前葉の住居1軒。埋設土器1基。中期後葉～後期中葉のピット群。						
			縄文後期中葉	竪穴住居1軒。中期後葉～後期中葉のピット群。						
1-002	平林	北杜市明野町	縄文中期中葉	中期中葉～後葉の環状集落跡。中期中葉～後葉までの土坑数十基。	人面把手付土器	佐野 隆	2006	『駒飼場・平林遺跡』	北杜市埋蔵文化財調査報告 第18集	北杜市教育委員会
			縄文中期後葉	中期中葉～後葉の環状集落跡。中期中葉～後葉までの土坑数十基。						
			縄文中期後葉	中期中葉～後葉の環状集落跡。中期中葉～後葉までの土坑数十基。						
			平安	竪穴住居2軒。						
1-003	高台中谷井	北杜市明野町	縄文中期後葉	竪穴住居1軒。土坑7基（後期前葉2・古墳前期1・平安1・近世以降1）。	遺構外で三十稲遺式横倒土器出土	佐野 隆	1995	『村之内Ⅱ・Ⅲ遺跡、高台・中谷井遺跡』	明野村文化財調査報告 9	明野村教育委員会
			縄文後期前葉	土坑7基（後期前葉2・古墳前期1・平安1・近世以降1）。						
			古墳前期	土坑7基（後期前葉2・古墳前期1・平安1・近世以降1）。						
			平安	竪穴住居12軒。土坑7基（後期前葉2・古墳前期1・平安1・近世以降1）。						
			中近世	土坑7基（後期前葉2・古墳前期1・平安1・近世以降1）。						
1-007	屋敷添	北杜市明野町	縄文中期初頭	五領ヶ台式土器の埋設土器		佐野 隆	1993	『屋敷添』	明野村文化財調査報告 7	明野村教育委員会
			縄文中期後葉	竪穴住居（縄文中期後葉3・後期前葉の敷石住居3・後期中葉1）。配石16基（中期後葉1・中期後葉～後期中葉1）。土坑約350基（中期後葉 ～後期中葉）。						
			縄文後期初頭	竪穴住居（縄文中期後葉3・後期前葉の敷石住居3・後期中葉1）。配石16基（中期後葉1・中期後葉～後期中葉1）。土坑約350基（中期後葉 ～後期中葉）。						
			縄文後期前葉	竪穴住居（縄文中期後葉3・後期前葉の敷石住居3・後期中葉1）。配石16基（中期後葉1・中期後葉～後期中葉1）。土坑約350基（中期後葉 ～後期中葉）。						
			縄文後期中葉	竪穴住居（縄文中期後葉3・後期前葉の敷石住居3・後期中葉1）。配石16基（中期後葉1・中期後葉～後期中葉1）。土坑約350基（中期後葉 ～後期中葉）。						
			平安	竪穴住居23軒。矩形竪穴遺構1基。方形竪穴遺構1基。						
			縄文後期中葉	縄文後期中葉～晩期末の土坑1基		柳原功一	2002	『深山田・下反俣・屋敷添遺跡』		屋敷添遺跡等発掘調査会
1-014	諏訪原	北杜市明野町	縄文中期中葉	藤内・井戸尻・曽利の住居が100軒を超える環状集落。		佐野 隆	1996	『諏訪原遺跡』『年報 平成7年度』		北巨摩市町村文化財担当者会
			縄文中期後葉	藤内式期から曽利式期の大規模環状集落。主体は曽利式期。既調査住居数は新道式期1軒、藤内式期2軒、井戸尻式期7軒、曽利式期33軒		佐野 隆	2003	『諏訪原遺跡』『八ヶ岳考古 平成14年度年報』		北巨摩市町村文化財担当者会
			中近世	近世初頭の石列。 溝。道路状遺構。						
1-019	上原Ⅱ・Ⅲ	北杜市明野町	縄文中期後葉	敷石住居。竪穴住居（縄文中期後半・後期前半・平安あわせて20軒ほど）。（試掘）		宮沢公雄・中山千恵	1991	『上原遺跡群試掘調査概報』		明野村上原遺跡群発掘調査団
			縄文後期初頭	配石。（試掘）						
			平安	竪穴住居（縄文中期後半・後期前半・平安あわせて20軒ほど）。（試掘）						
1-023	寺前	北杜市明野町	縄文早期後半	竪穴住居1軒。		佐野 隆	2001	『寺前遺跡』『八ヶ岳考古 平成12年度年報』		北巨摩市町村文化財担当者会
			縄文前期後葉	竪穴住居約20軒。						

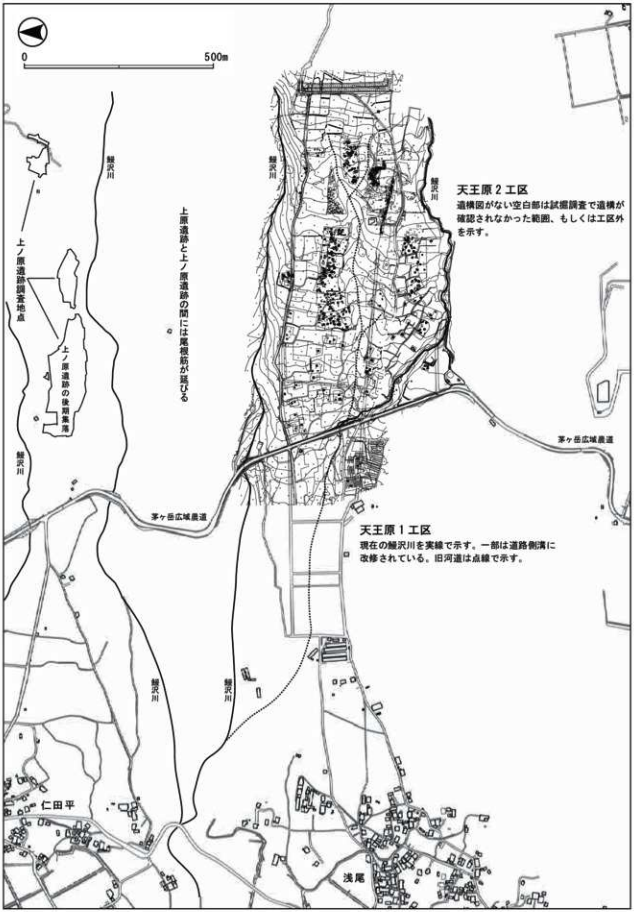
周辺遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	町名	時代	遺構数	遺物	編著者	発行年	報告書名		発行機関
I-023	寺前	北杜市明野町	縄文中期前葉	竪穴住居 1 軒。		佐野　隆	2001	「寺前遺跡」『八ヶ岳考古　平成 12 年度年報』		北巨摩市町村文化財担当者会
			縄文中期後葉	竪穴住居約 30 軒。						
			縄文後期前葉	敷石住居 2 軒。						
			平安	竪穴住居約 100 軒。掘立柱建物。						
			中近世	竪穴遺構、掘建柱建物多数。土坑群、井戸。						
I-027	梅之木	北杜市明野町	平安	竪穴住居 92 軒。掘立柱建物 21 棟。土坑 219。ピット 843 基。 御牧「穂坂牧」後院牧「小笠原牧」に関連した集落の可能性あり	多数の墨書刻書土器。銙巾。若鈴銅体の馬歯骨	佐野　隆	2002	『梅之木Ⅰ』	明野村文化財調査報告　14	明野村教育委員会
			中近世	近世の土坑 1 基。						
			縄文中期後葉	竪穴住居 4 軒。土坑 1 基。埋設土器 1 基。		大山祐基・原　正人	2003	『梅之木遺跡Ⅱ』	明野村文化財調査報告　15	明野村教育委員会
			弥生前期	土坑 5 基。						
			平安	竪穴住居 26 軒。掘立柱建物 7 棟。土坑 102 基。ピット 347 基。						
			平安	竪穴住居 13 軒。掘立柱建物 4 棟。土坑 2 基。ピット 4 基。						
			縄文中期中葉	竪穴住居 2 軒。土坑 3 基。（保存）		佐野　隆	2008	『梅之木遺跡Ⅶ』	北杜市埋蔵文化財調査報告　第 26 集	北杜市教育委員会
			縄文中期後葉	竪穴住居 7 軒。敷石竪穴住居 1 軒。土坑 14 基。道路。集石土坑。（保存）	人面装飾付釣手土器。神津島産黒曜石					
I-028	駒飼場	北杜市明野町	縄文中期後葉	竪穴住居 2 軒。		佐野　隆	2006	『駒飼場・平林遺跡』	北杜市埋蔵文化財調査報告　第 18 集	北杜市教育委員会
I-038	宮後	北杜市明野町	平安	竪穴住居 21 軒。土坑 2 基。時期不明の掘立柱建物 2 基・竪穴遺構 1 基・土坑 81 基・ピット群。		大森陸志	1991	『宮後遺跡・浦田遺跡』	明野村文化財調査報告　6	明野村教育委員会
			中近世	中世の地下式土坑 1 基。土坑 3 基。時期不明の掘立柱建物 2 棟・竪穴遺構 1 基・土坑 81 基・ピット群。						
I-049	神取	北杜市明野町	縄文草創期		草創期の石器群。隆起線文土器、爪型文土器、表裏縄文土器、格状沐圧痕文土器	佐野　隆	1994	『神取』	明野村文化財調査報告　8	明野村教育委員会
			縄文草創期前半		撚糸文系土器					
			縄文早期後半	竪穴住居（早期後半 1・古墳前期 8・平安 12・時期不明 1）。時期不明の土坑 1 基・石積土坑 2 基・土坑群 3 基。	撚糸文系土器。隆帯文系土器					
			古墳前期	竪穴住居（早期後半 1・古墳前期 8・平安 12・時期不明 1）。時期不明の土坑 1 基・石積土坑 2 基・土坑群 3 基。						
			平安	竪穴住居（早期後半 1・古墳前期 8・平安 12・時期不明 1）。時期不明の土坑 1 基・石積土坑 2 基・土坑群 3 基。						
			中近世	竪穴住居（早期後半 1・古墳前期 8・平安 12・時期不明 1）。中世の地下式土坑 6 基。						
I-054	下大内	北杜市明野町	縄文草創期		有舌尖頭器	佐野　隆	1997	『下大内遺跡、屋敷添第 2 遺跡、中原遺跡』	明野村文化財調査報告　11	明野村教育委員会
			弥生前期	再葬墓 1 基。	条痕文系広口壺再葬墓					
			平安	竪穴住居 14 軒。竪穴遺構 2 基。平安末～中世初頭の土坑 356 基と溝。						
			中近世	平安末～中世初頭の土坑 356 基と溝。						

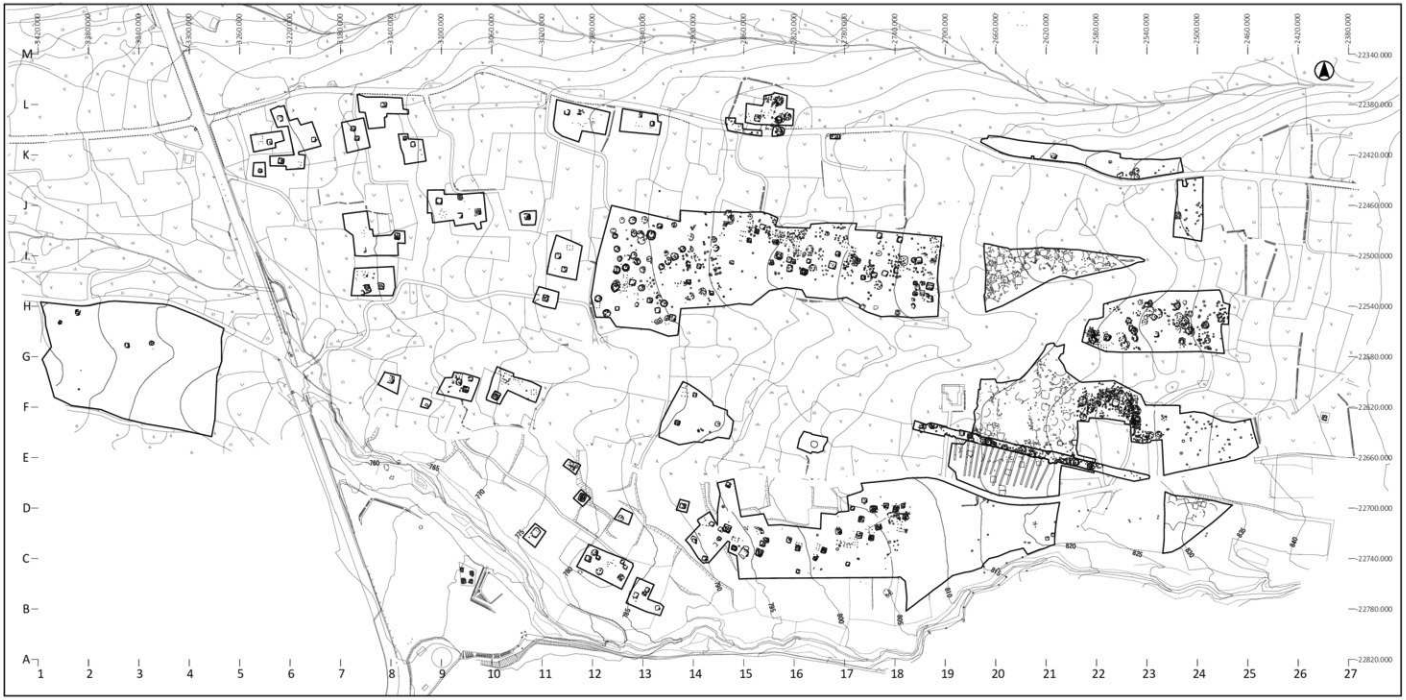
周辺遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	町名	時代	遺構数	遺物	編著者	発行年	報告書名	発行機関
1-085	屋敷添第2	北杜市明野町	平安	竪穴住居2軒、土坑3基、平安末～中世までのピット150基。		佐野　隆	1997	『下大内遺跡、屋敷添第2遺跡、中原遺跡』	明野村文化財調査報告　11
			中近世	平安末～中世までのピット150基。					明野村教育委員会
1-088	大日川原	北杜市明野町	縄文早期後半		土器片	高田賢治・内藤かおり・大山祐喜	2001	『大日川原遺跡』	明野村文化財調査報告　13
			古墳前期	竪穴住居1軒、方形周溝墓12基、土坑2基（古墳前期1・時期不明1）。					明野村教育委員会
			平安	竪穴住居1軒、土坑2基（古墳前期1・時期不明1）。					
1-089	浅尾原VI	北杜市明野町	縄文早期前半	遺構なし	押型文土器	佐野　隆	2008	『浅尾原VI遺跡』	北杜市埋蔵文化財調査報告　第27集
			縄文中期後葉	配石遺構3基					北杜市教育委員会
			縄文後期前葉	土坑					
			縄文晩期前半	晩期の土坑					
			縄文晩期後半	晩期の土坑					
			弥生前期	土坑群					
			弥生中期	土坑群					
			古墳前期	竪穴住居2軒					
			平安	竪穴住居50軒、掘建柱建物5棟					
2-506	上ノ原	北杜市須玉町	縄文中期後葉	竪穴住居（縄文中期後葉18・中期末～後期初頭1・後期初頭16・後期前葉100・平安72・時期不明6）、縄文の掘建柱建物7棟・配石1基、土坑661基（中期後葉153・後期初頭52・後期前葉129・後期中葉1・後期47・弥生前期4・平安5）。		平野　修・櫛原功一他	1999	『上ノ原遺跡』	上ノ原遺跡発掘調査団
			縄文後期初頭						
			縄文後期前葉						
			縄文後期中葉						
			弥生前期						
			平安						
			中近世	掘建柱建物（平安6・平安及び近世5・近世以降2）。					

周辺遺跡地名表



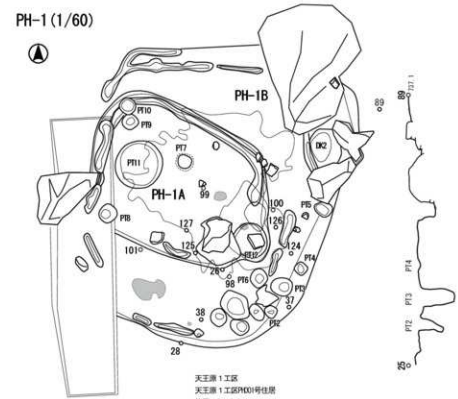
第３図　　上原遺跡調査範囲（1/10,000）



表示しない試掘溝がある。
調査区外の空白部は遺構がない、もしくは工区外である。
遺構確認に留めた地区は現状保存した。
現況地形図の等高線と調査区全体図を合成した。

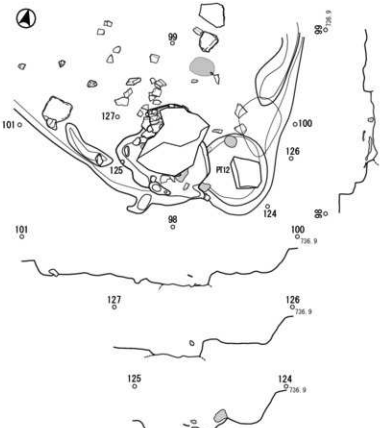
第４図　上原遺跡調査区全体図（1/3,000）

PH-1(1/60)

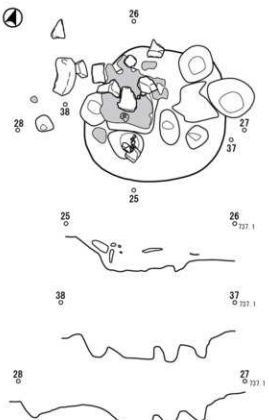


天王源１工区
天王源１工区PH001号住居
位置　G-1-4-4
時期　甲類型X並期？
特記事項　同一地点で建て替え・重複、甲類型坏、カキメ省略した甲類型甕、羽釜、東北系坏、泥岩製紡石

PH-1Aカマド(1/30)

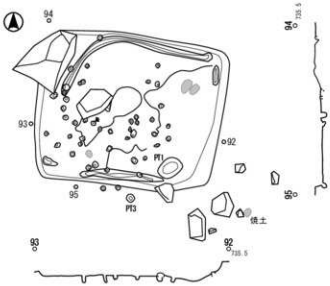


PH-1Bカマド(1/30)

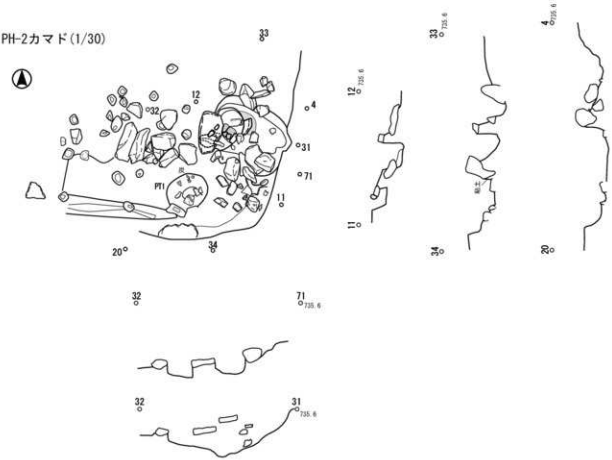


第 5 図　　1 工区 PH001 号住居

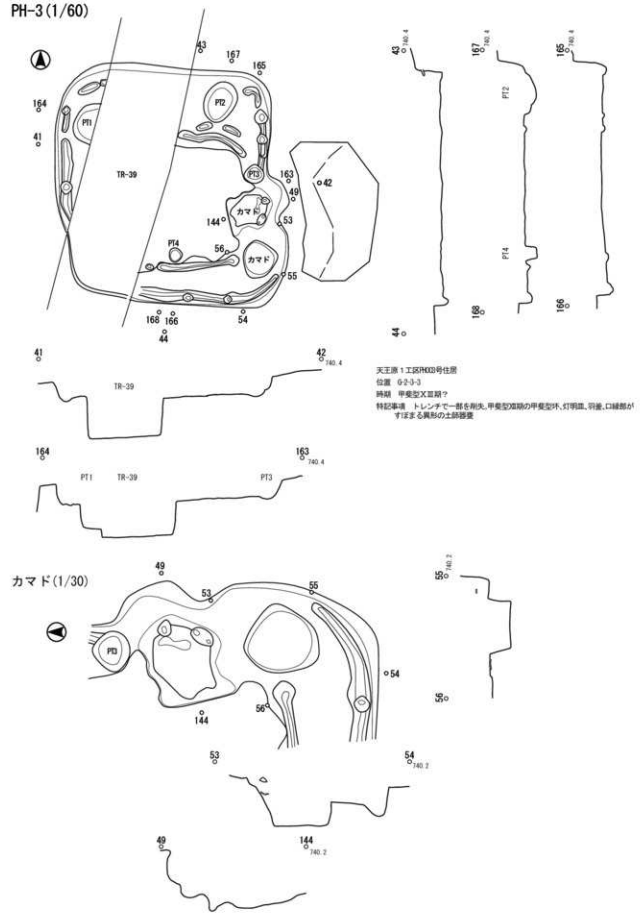
PH-2(1/60)



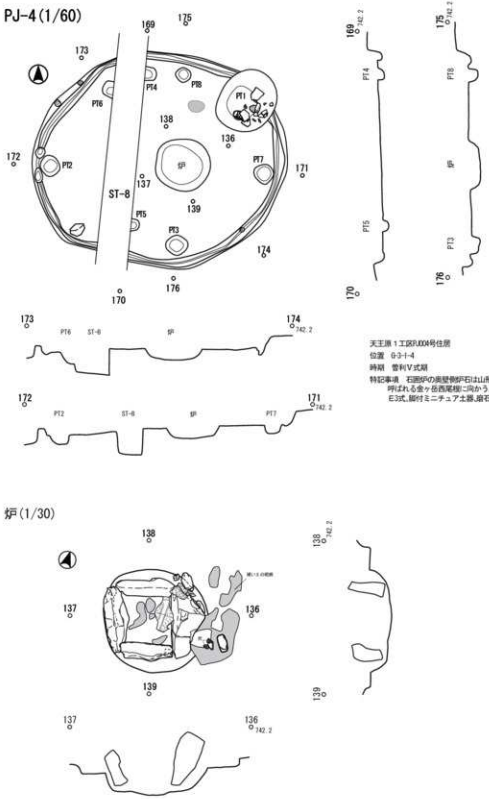
PH-2カマド(1/30)



第 6 図　　1工区 PH002 号住居



第 7 図　　1 工区 PH003 号住居



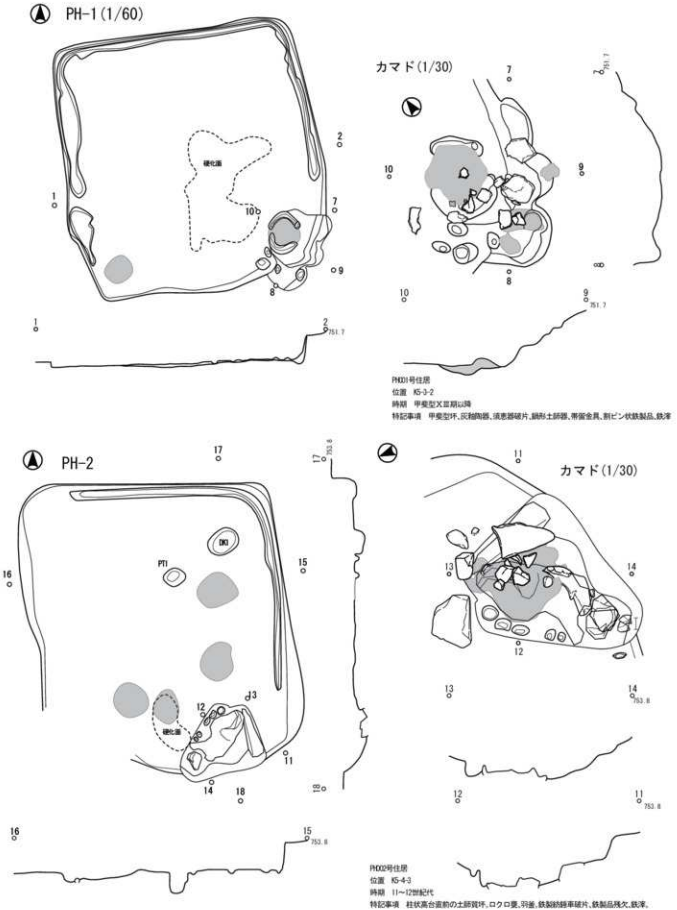
天王原１工区PJ004号住居

位置　6-3-f-4

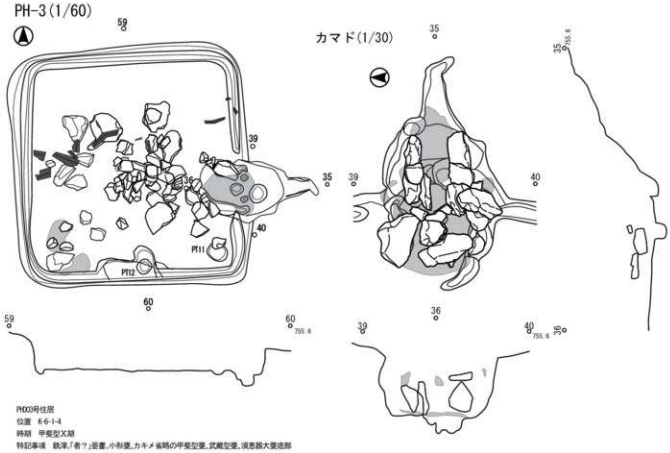
時期　雪利Ⅴ式期

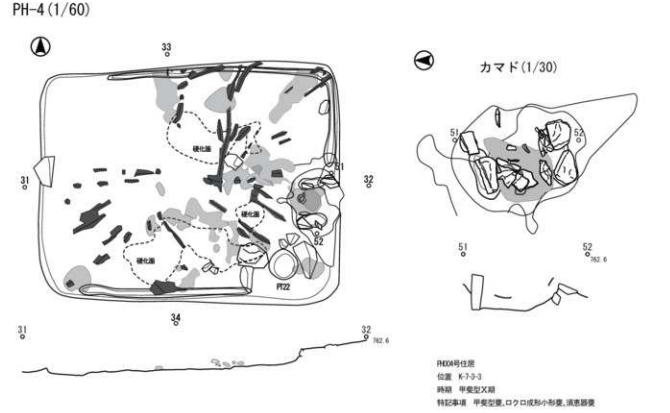
特記事項　石囲炉の周壁側炉石は山形で、出入り口側から見通すと、通称「鳥帽子」と呼ばれる金ヶ岳西尾根に向かう、出土土器は雪利Ⅴ式古段階～中段階、加曽利E3式、脚付ミニチュア土器、敲石類、多孔石、黒曜石剥片、珪質頁岩剥片

第 8 図　　1 工区 PJ004 号住居

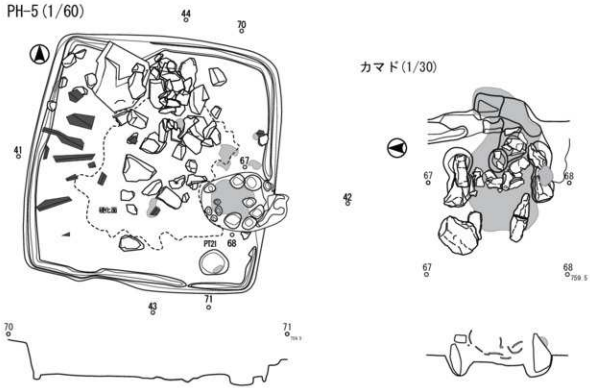


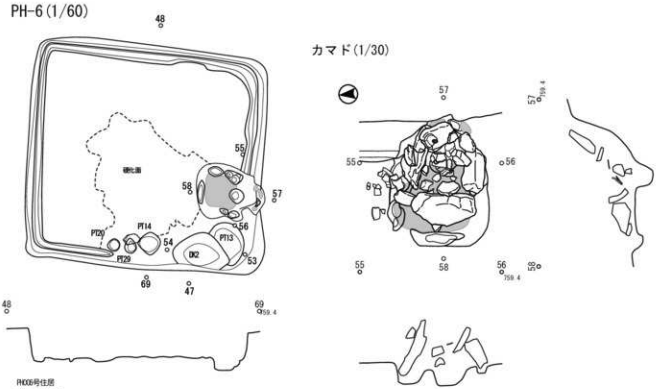
第 9 図　　2 工区（以下同じ）PH001 号住居・PH002 号住居



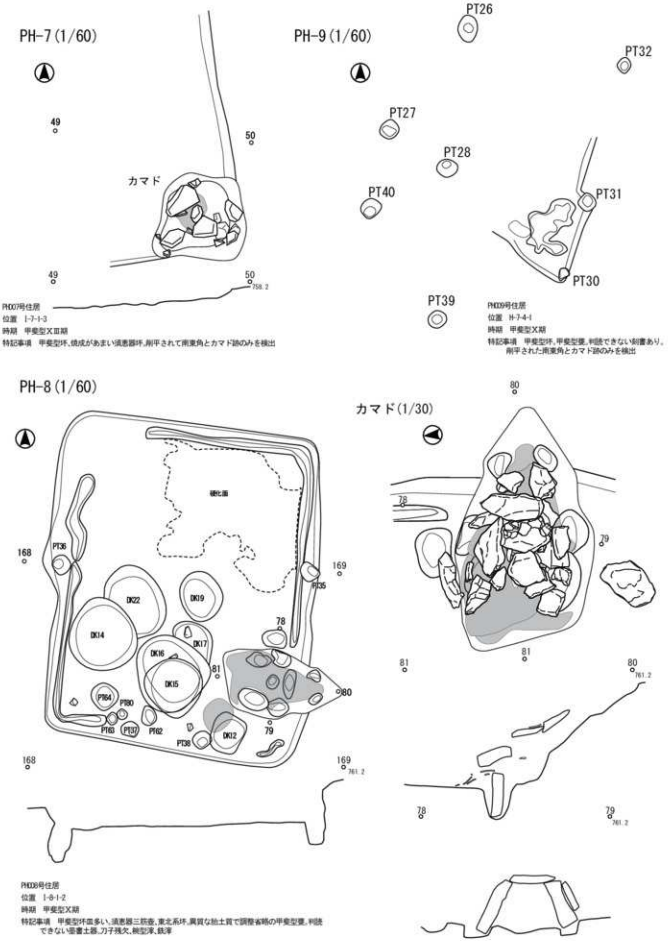


第 10 図　　PH003 号住居・PH004 号住居

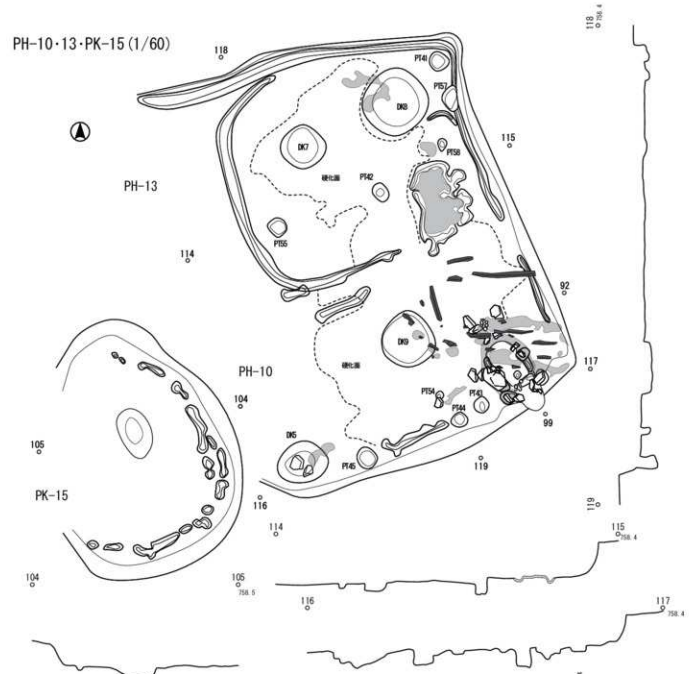


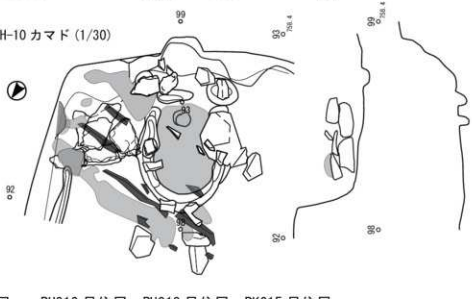


第 11 図　　PH005 号住居・PH006 号住居



第 12 図　　PH007 号住居・PH008 号住居



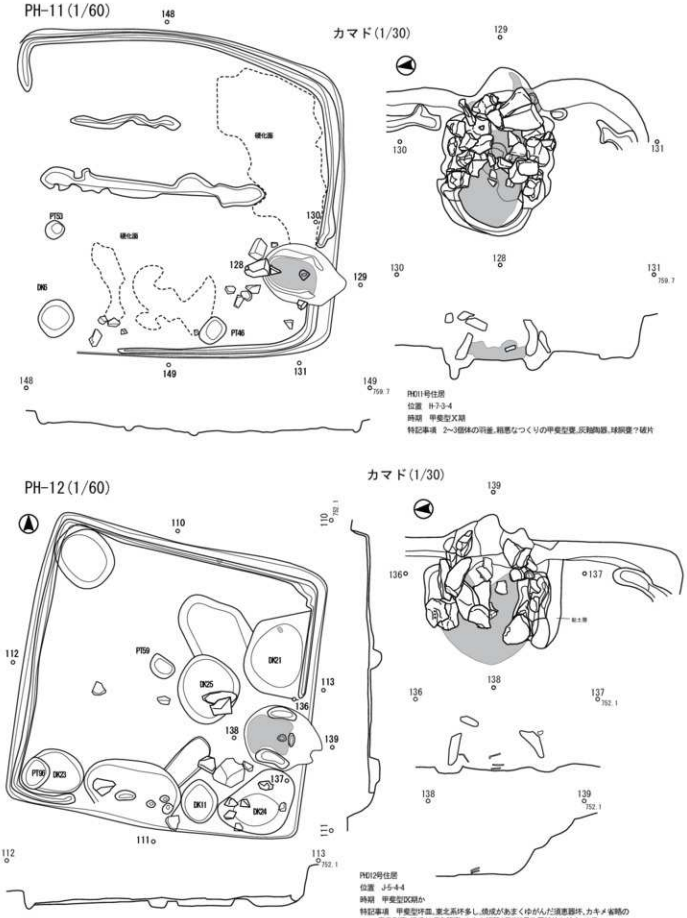


PH010号住居
位置　H-7-3-2
時期　甲瘤型X期
特記事項　PH013号住居、PK015号住居を切る。甲瘤型壺、灰釉陶器、羽釜、刀子、鉄製品残欠、鞍形滓

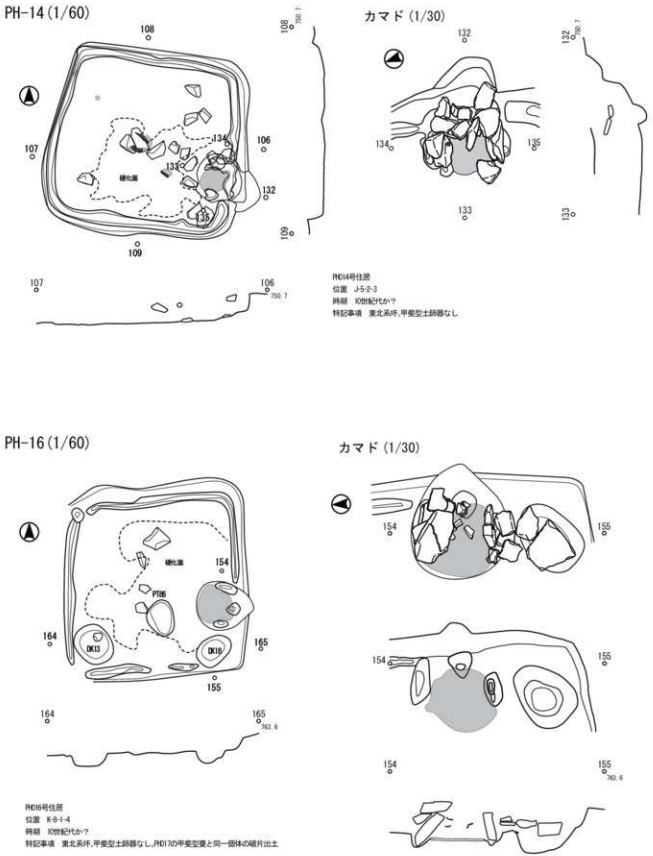
PH013号住居
位置　H-7-3-2
時期　甲瘤型IX期かX期
特記事項　PH010号住居に切られる。鉄滓

PK015号住居
位置　H-7-1-4
時期　古墳時代前期
特記事項　PH010号住居に切られる。鏃

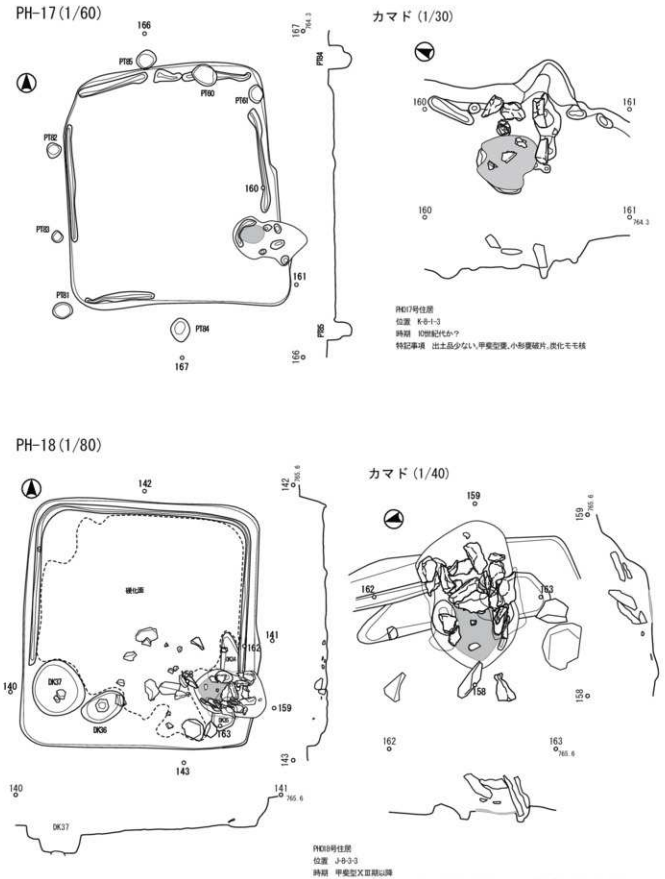
第 13 図　　PH010 号住居・PH013 号住居・PK015 号住居



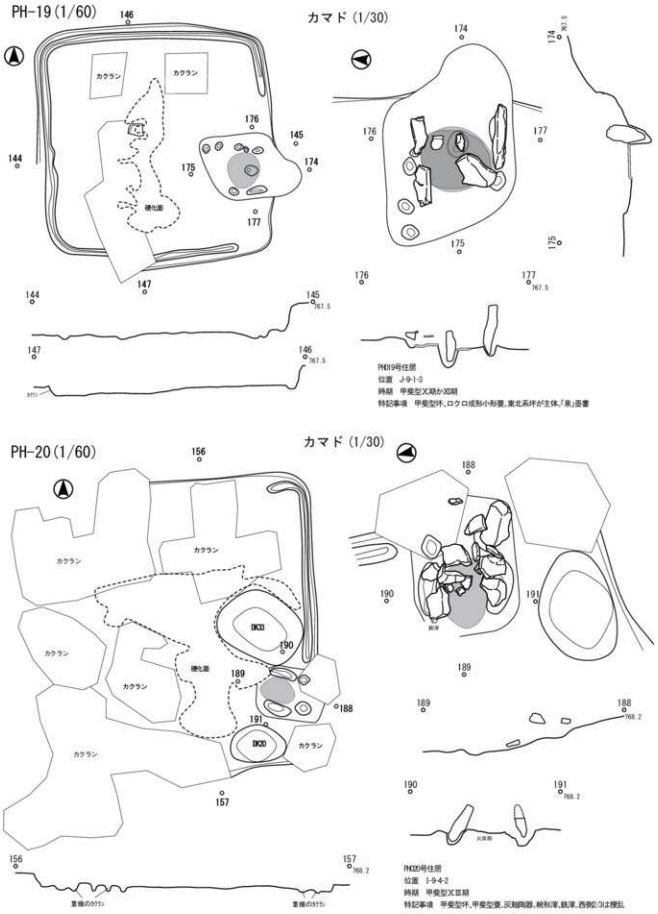
第 14 図　　PH011 号住居・PH012 号住居



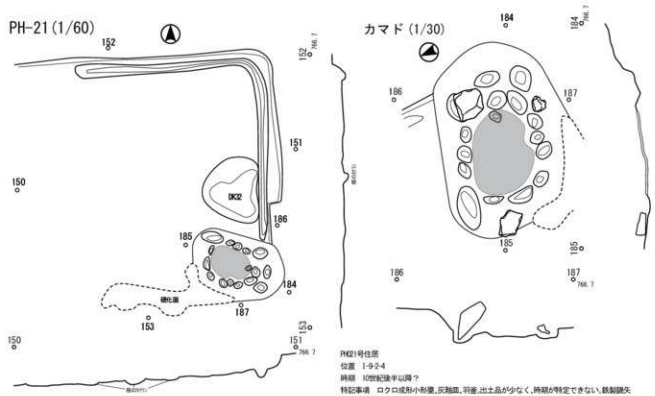
第 15 図　　PH014 号住居・PH016 号住居

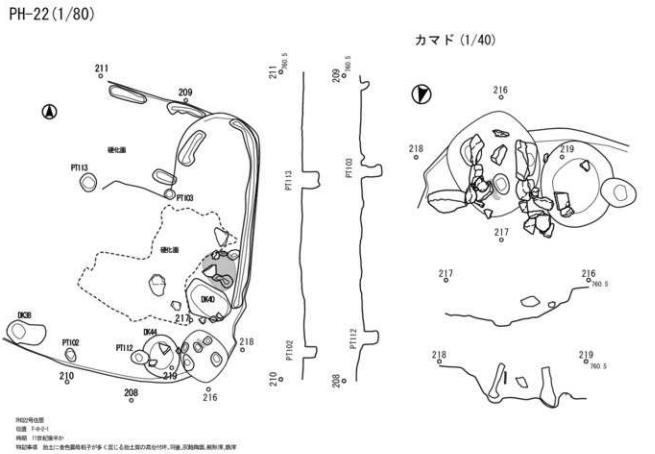


第 16 図　PH017 号住居・PH018 号住居

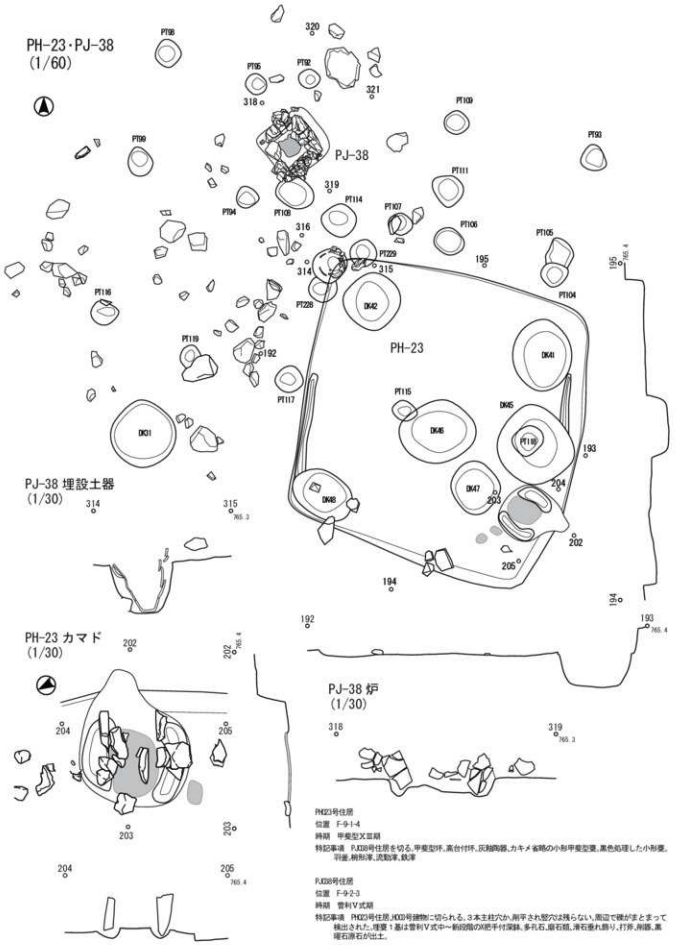


第 17 図　PH019 号住居・PH020 号住居

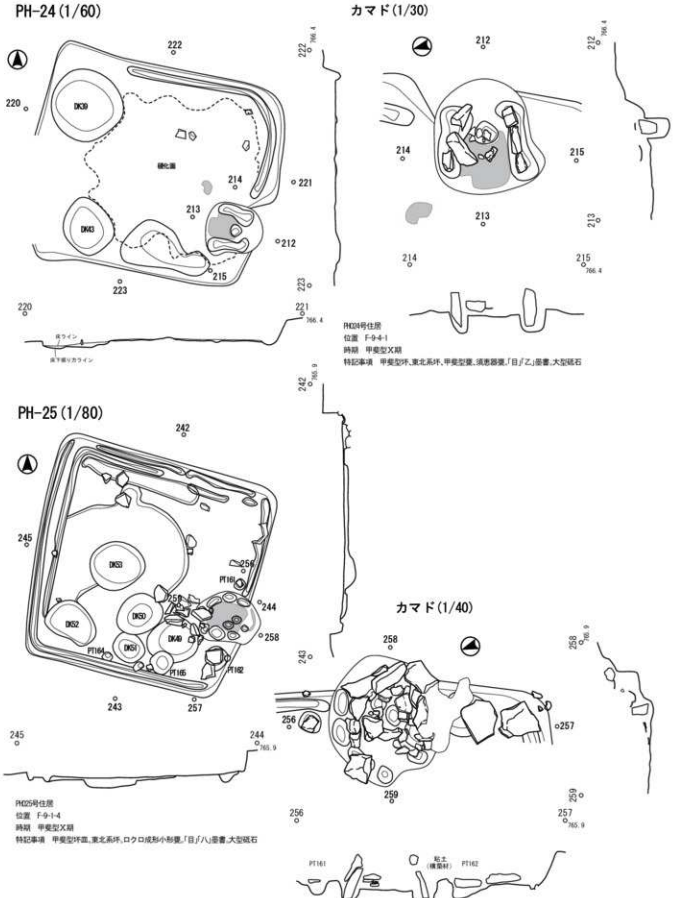




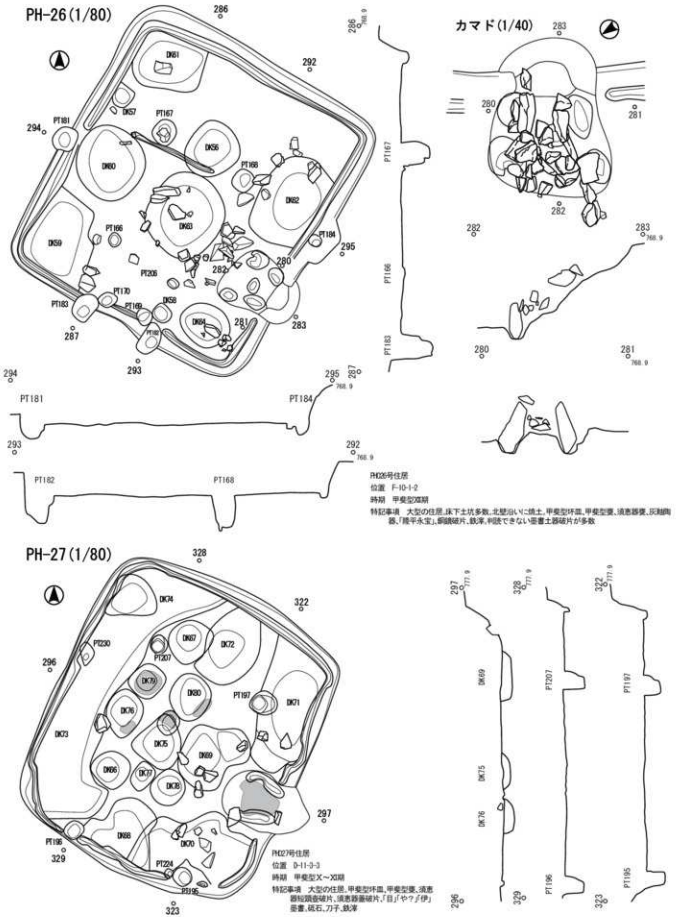
第 18 図　　PH021 号住居・PH022 号住居



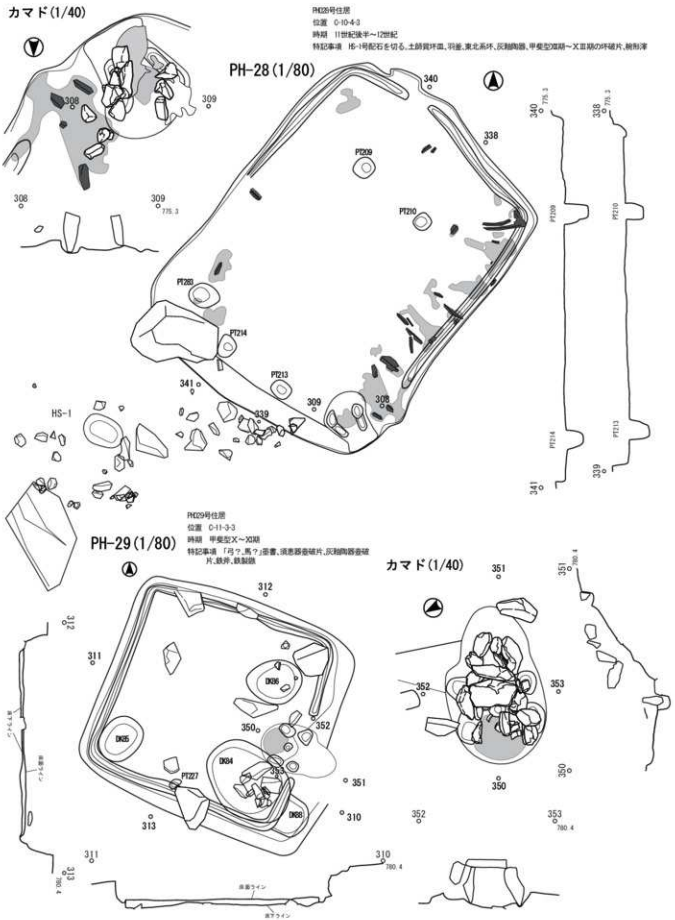
第 19 図　　PH023 号住居・PJ038 号住居



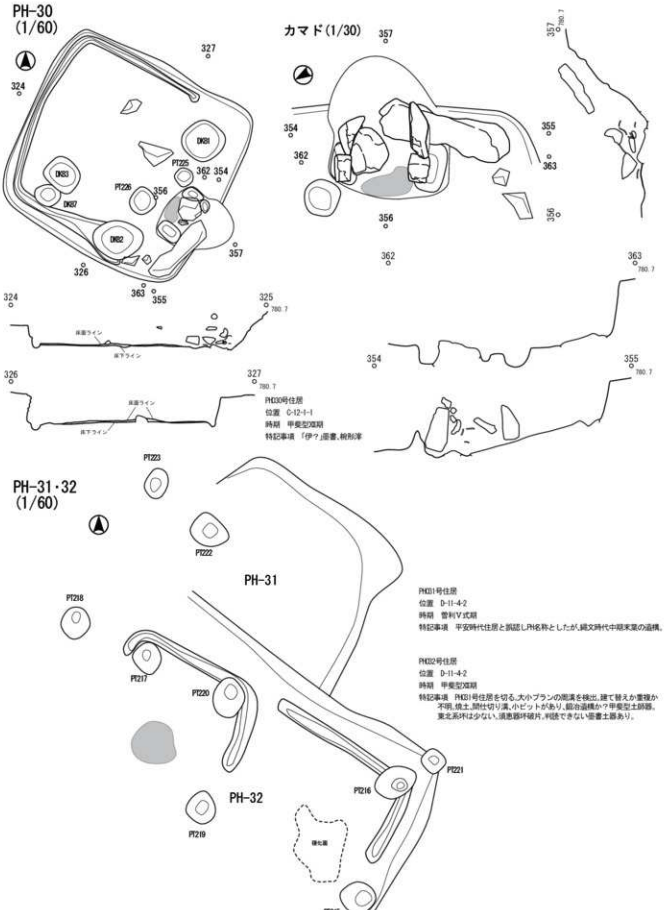
第 20 図　PH024 号住居・PH025 号住居



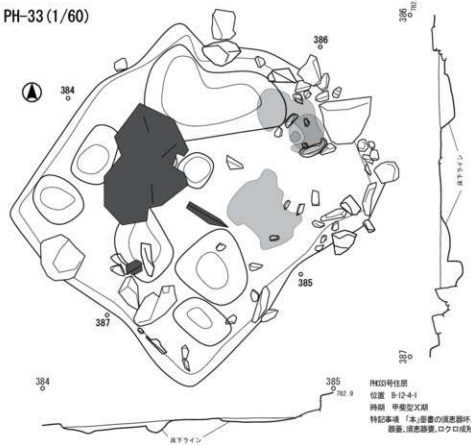
第 21 図　PH026 号住居・PH027 号住居



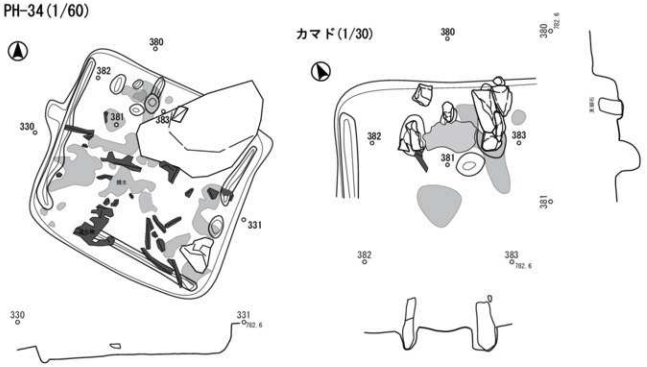
第 22 図　　PH028 号住居・PH029 号住居



第 23 図　　PH030 号住居・PH031 号住居・PH032 号住居

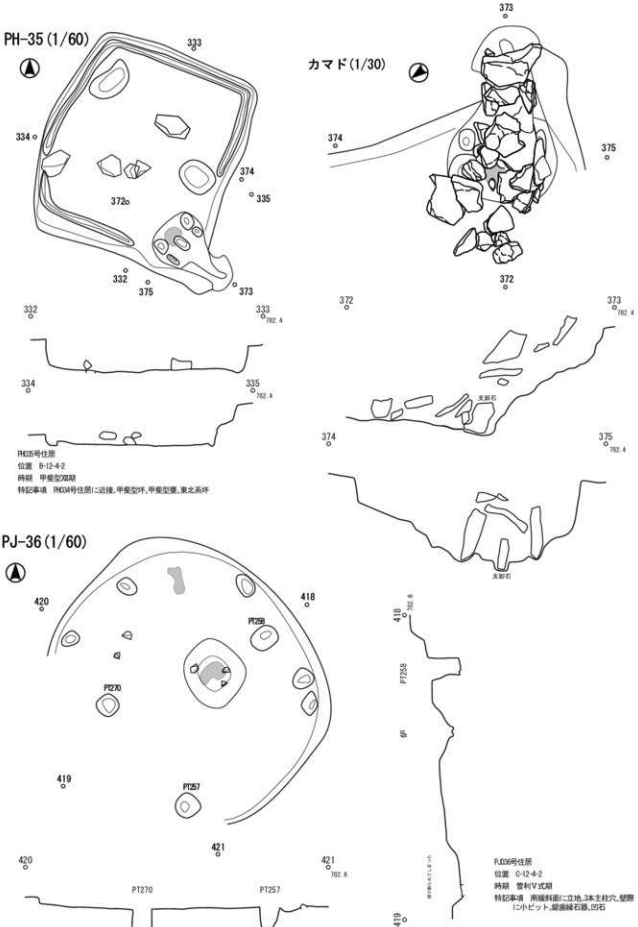


PH033号住居
位置　B-12-4-1
時期　甲斐型X期
特記事項　「本」墨書の須恵器坏F,PH034号住居出土品と接合する土師器,甲斐型坏,須恵器蓋,須恵器壺,ロクロ成形壺,黒色処理した甲斐型坏



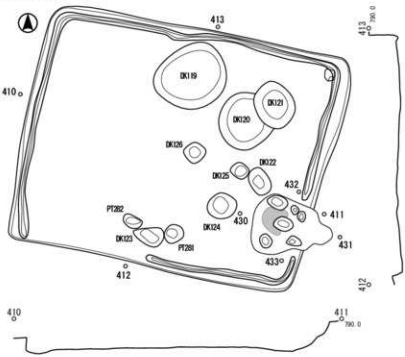
PH034号住居
位置　B-12-4-2
時期　甲斐型X期
特記事項　焼失住居,PH035号住居に近接,甲斐型坏,甲斐型壺,須恵器坏,須恵器蓋,須恵器壺破片,ロクロ成形壺破片は武蔵型壺か?

第 24 図　　PH033 号住居・PH034 号住居



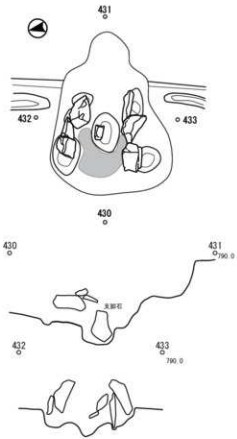
第 25 図　PH035 号住居・PJ036 号住居

PH-37(1/60)

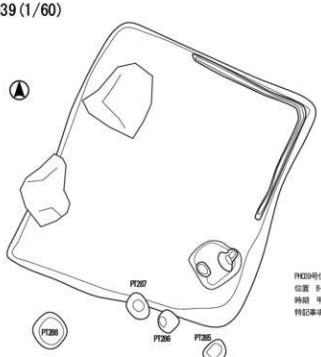


PH037号住居
位置　D-13-3-3
時期　甲斐型XO～XQ期
特記事項　甲斐型坏、甲斐型甕、東北系坏、須恵器甕破片、「伊」墨書土器

カマド(1/30)

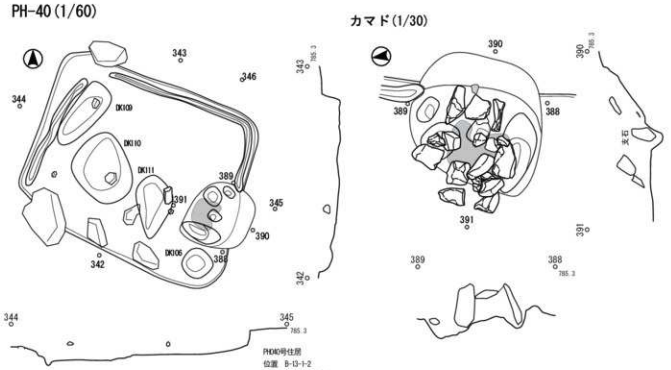


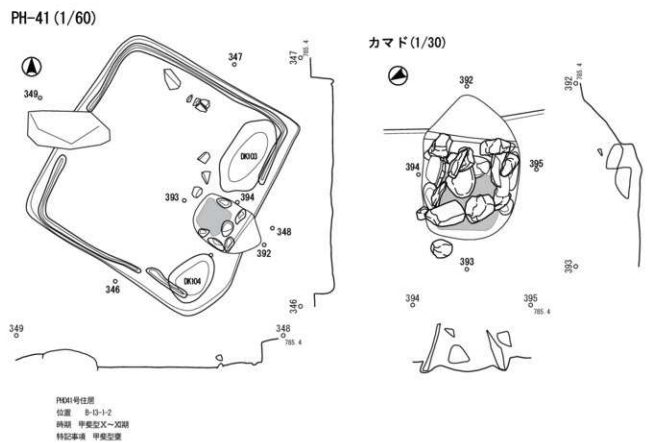
PH-39(1/60)



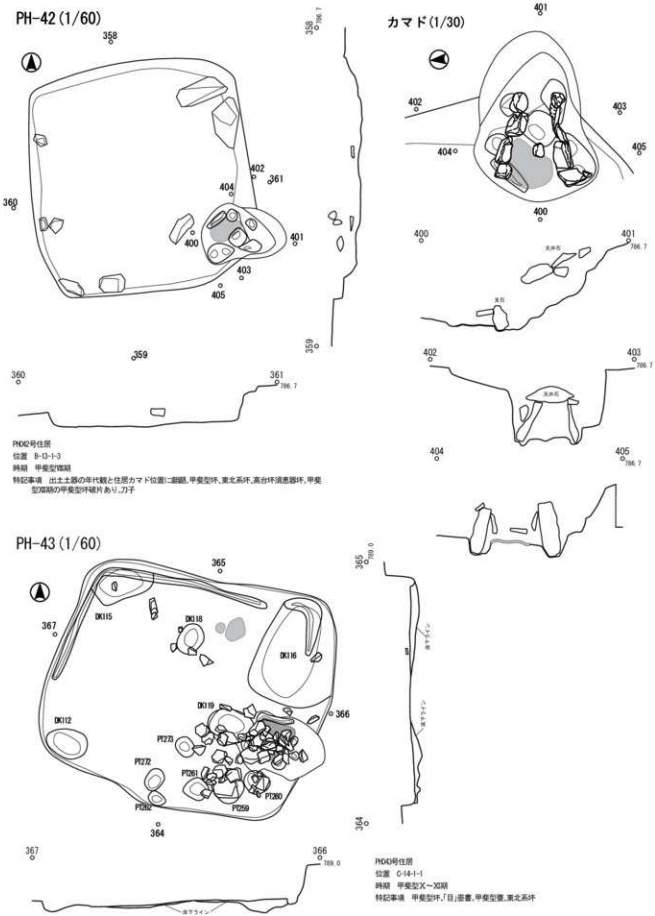
PH039号住居
位置　B-12-3-4
時期　甲斐型XM期
特記事項　甲斐型坏皿、「中人ヶ」墨書

第 26 図　　PH037 号住居・PH039 号住居



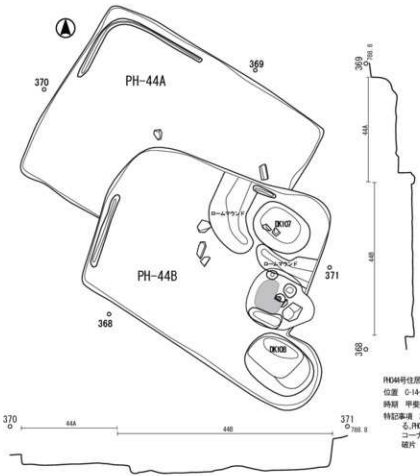


第 27 図　PH040 号住居・PH041 号住居



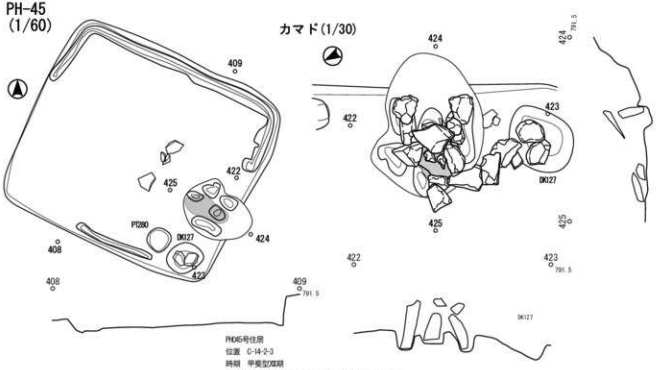
第 28 図　PH042 号住居・PH043 号住居

PH-44A・44B (1/60)



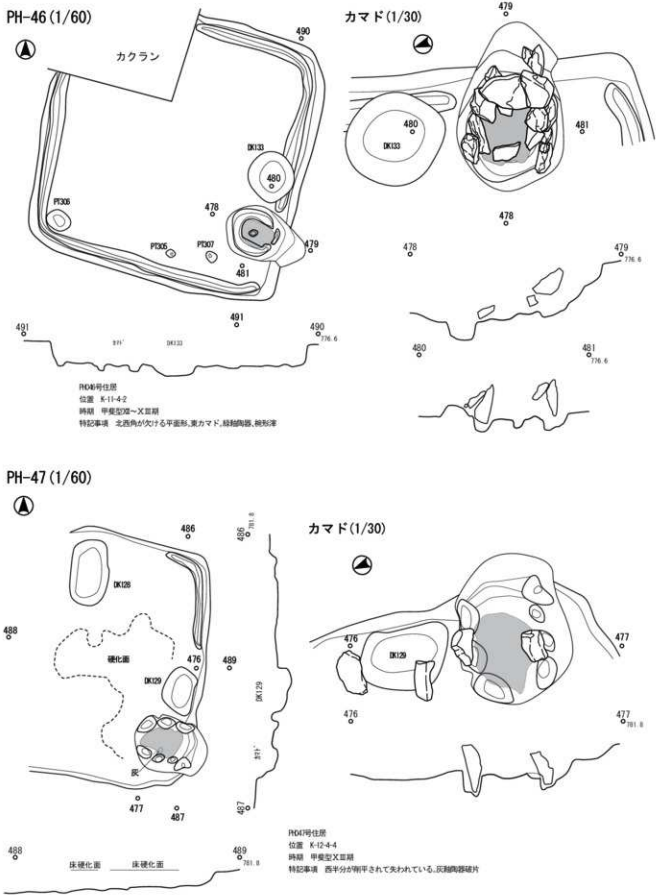
PH044号住居
位置　C-14-1-2
時期　甲類型期
特記事項　2基の住居の重複。西側住居をPH044A号、東側住居をPH044B号とする。PH044B号住居が新しいが、出土土器の時期差は認められない。南東コーナーに突出した土坑あり。焼成があまい須恵器蓋、須恵器系鍋底破片

PH-45
(1/60)

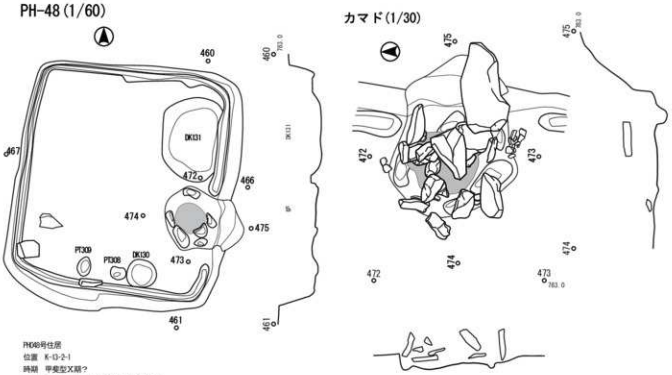


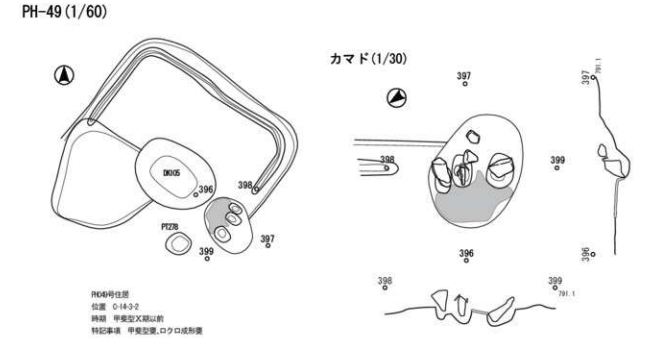
PH045号住居
位置　C-14-2-3
時期　甲類型期
特記事項　甲類型坏、甲類型甕、灰釉陶器、緑釉陶器破片

第 29 図　　PH044A 号住居・PH044B 号住居・PH045 号住居

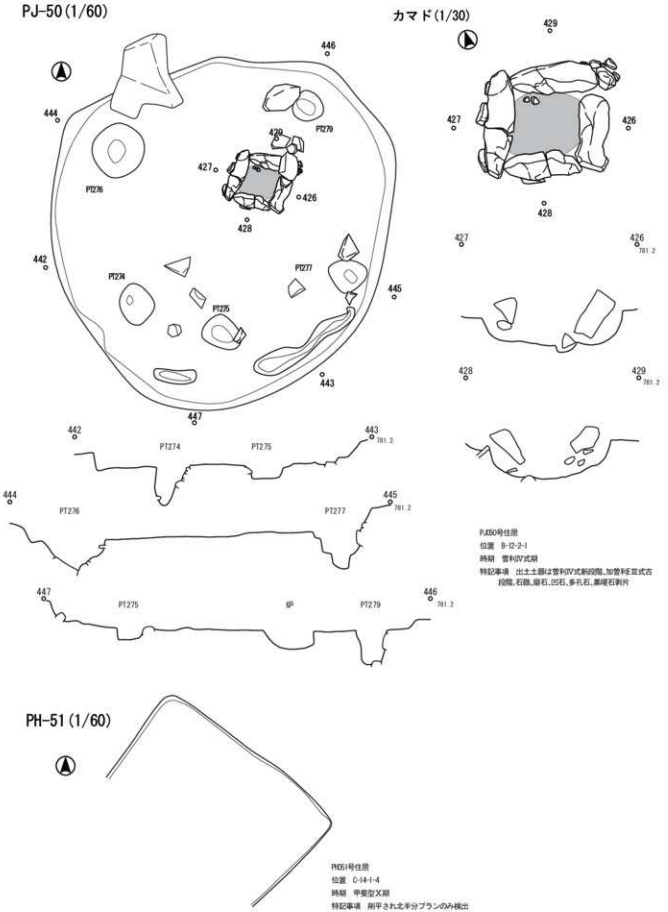


第 30 図　PH046 号住居・PH047 号住居

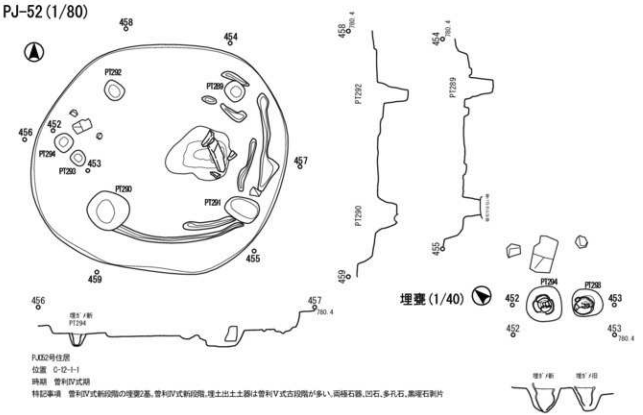




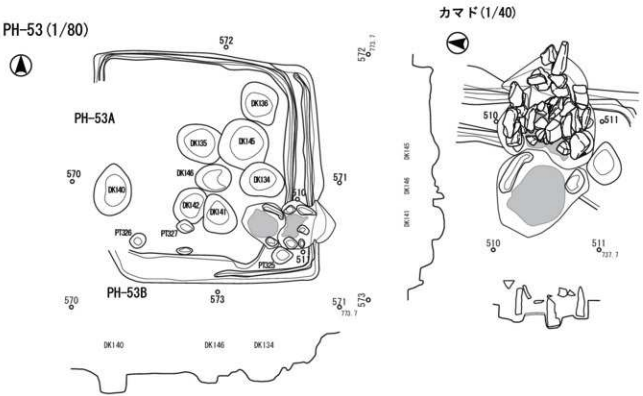
第 31 図　　PH048 号住居・PH049 号住居



第 32 図　PJ050 号住居・PH051 号住居

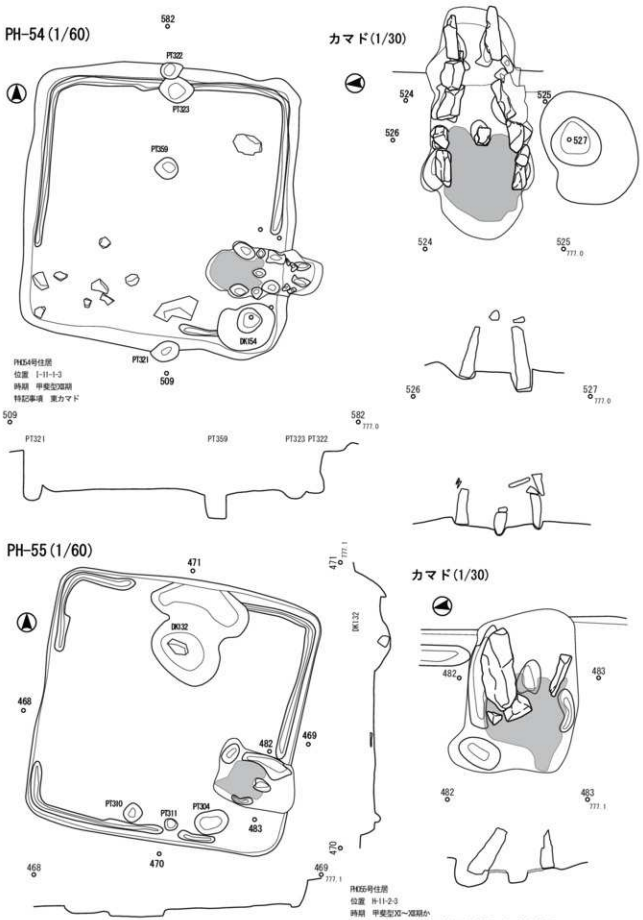


PJ052号住居
位置　C-12-1-1
時期　管利Ⅳ式期
特記事項　管利Ⅳ式新段階の埋甕2基、管利Ⅳ式新段階、埋土出土土器は管利Ⅴ式古段階が多い、両極石器、凹石、多孔石、黒曜石剥片

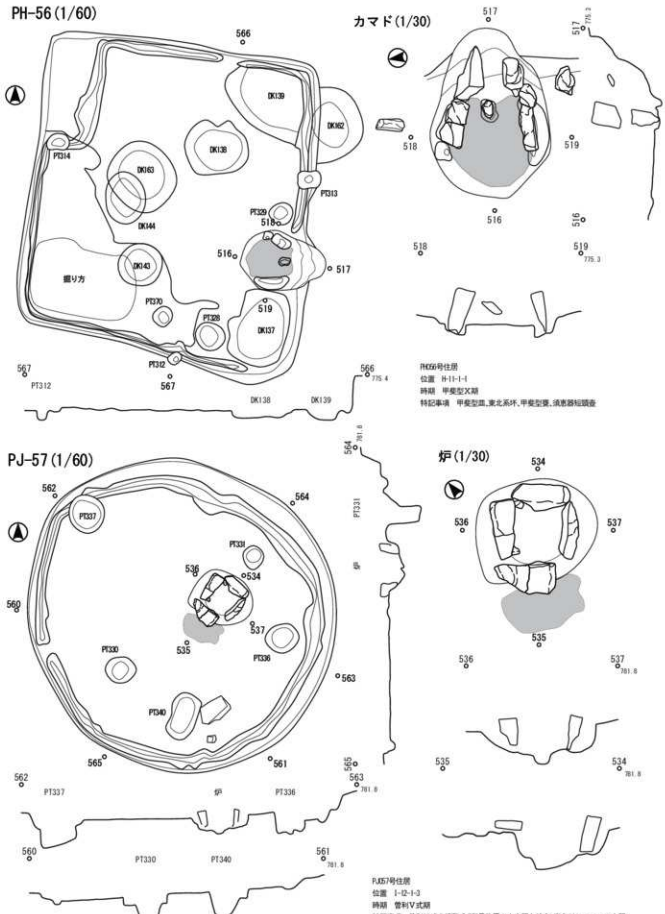


PH053号住居
位置　I-10-4-2
時期　甲類型期
特記事項　同一地点で建て替え、重複、床下土坑多数、甲類型坏、甲類型壺、東北系坏、灰釉陶器、須恵器蓋破片、「上？」「福？」墨書、釘？残欠

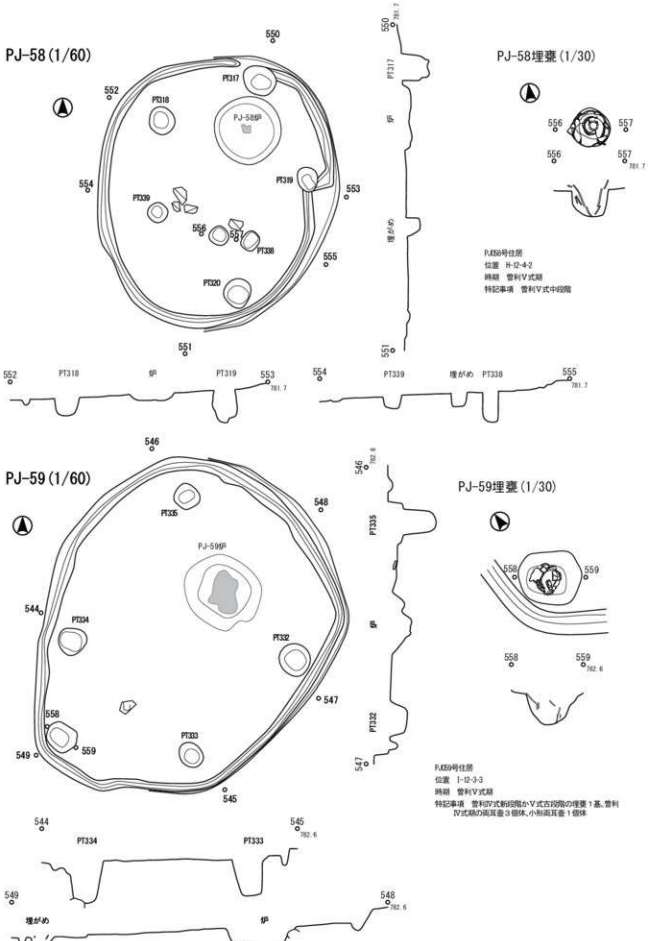
第 33 図　　PJ052 号住居・PH053 号住居



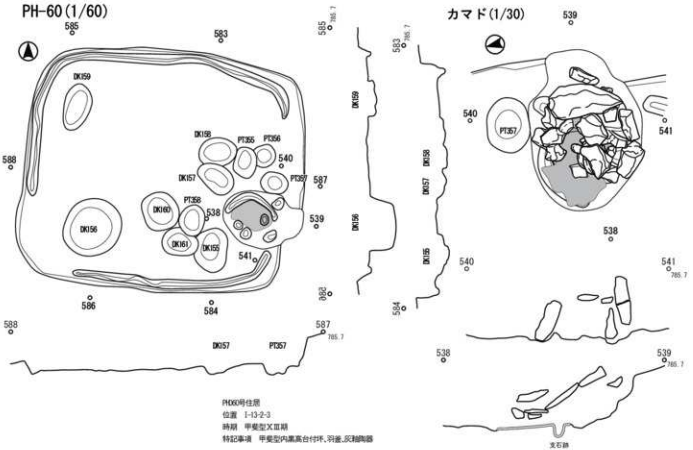
第 34 図　PH054 号住居・PH055 号住居

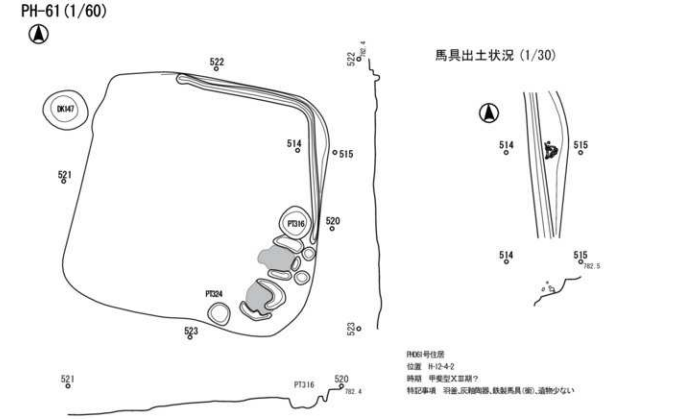


第 35 図　PH056 号住居・PJ057 号住居

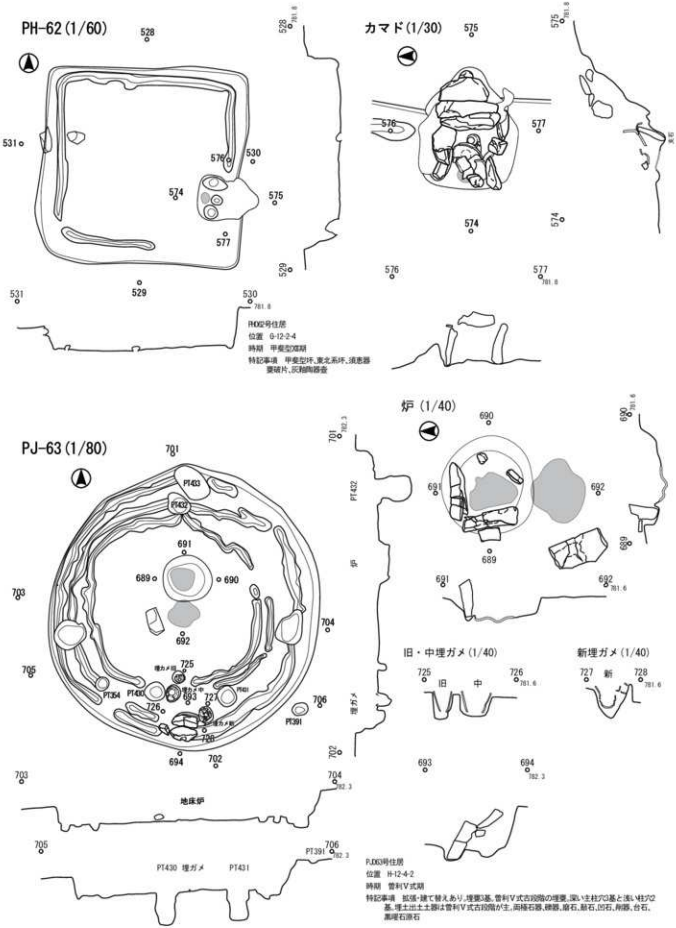


第 36 図　PJ058 号住居・PJ059 号住居

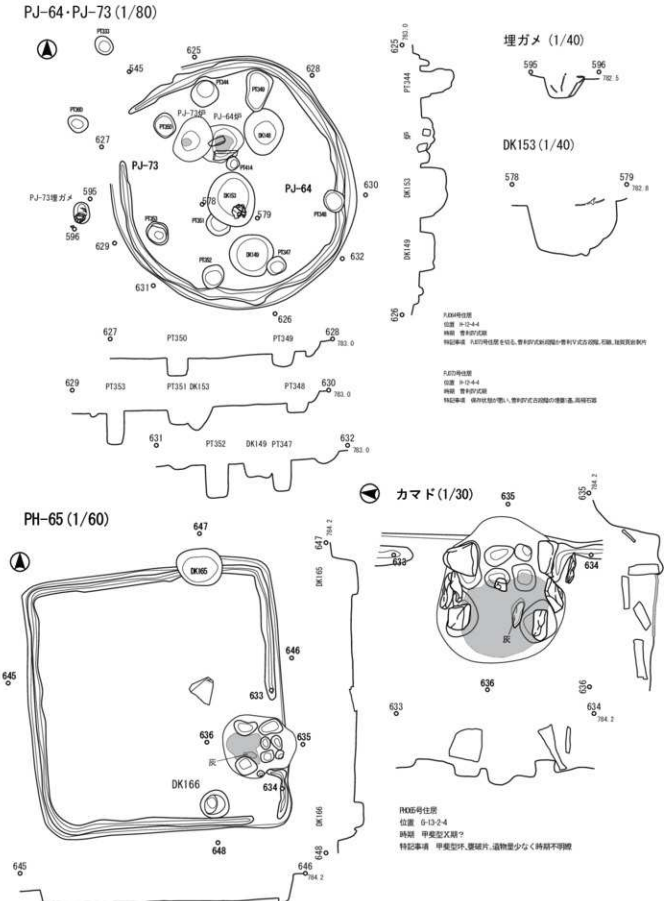




第 37 図　PH060 号住居・PH061 号住居

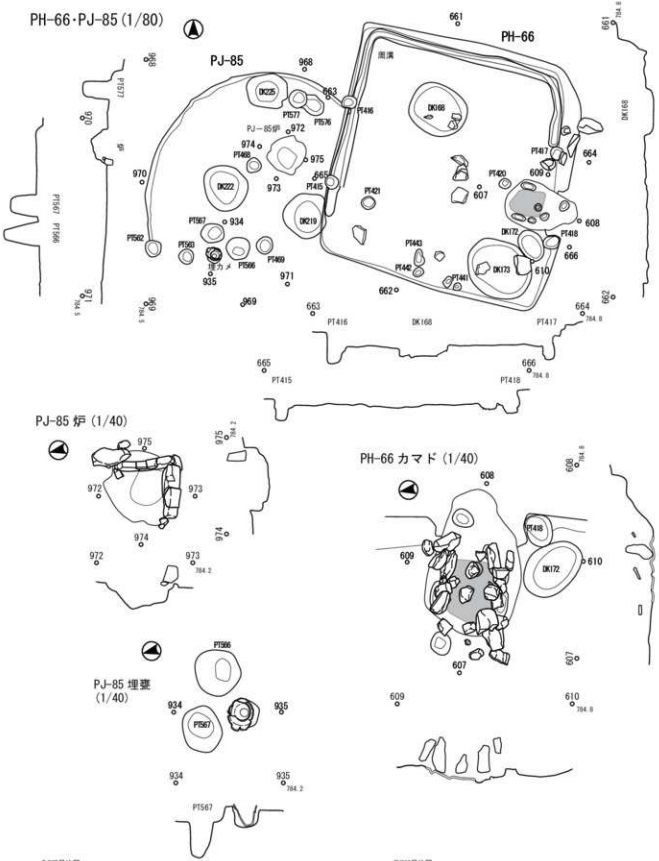


第 38 図　PH062 号住居・PJ063 号住居



第 39 図　PJ064 号住居・PH065 号住居・PJ073 号住居

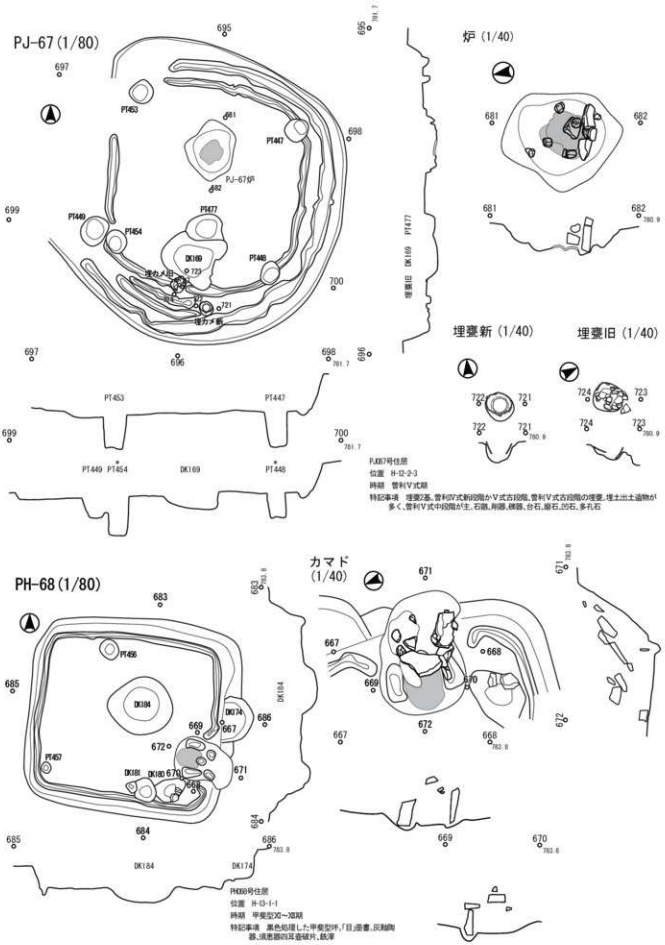
1/80



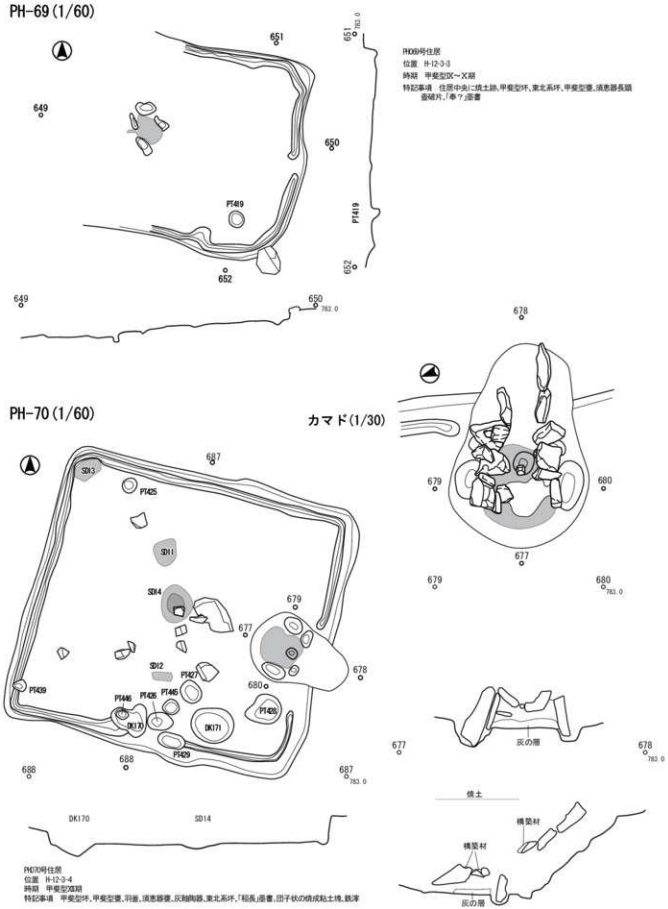
PJ085号住居
位置　G-13-2-4
時期　曽利Ⅴ式期
特記事項　PH066号住居に切られる。床側例矢、曽利Ⅴ式古段階の埋甕、3本主柱穴か、石鏃、扁石、ハンマー、刷器、打斧、黒曜石原石・石核

PH066号住居
位置　G-13-4-2
時期　甲斐型30～32期
特記事項　甲斐型杯、東北系杯、甲斐型甕、須恵器小型壺破片、胡桃率

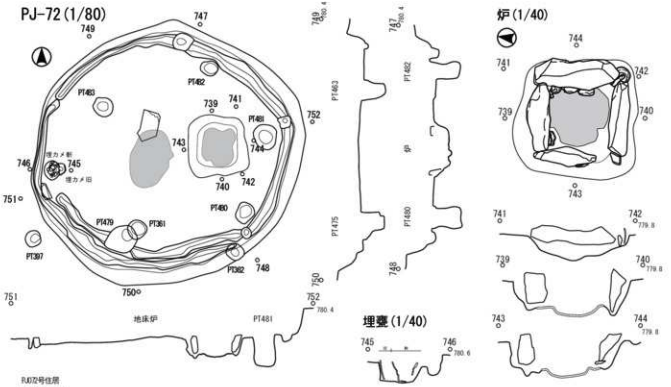
第 40 図　PH066 号住居・PJ085 号住居

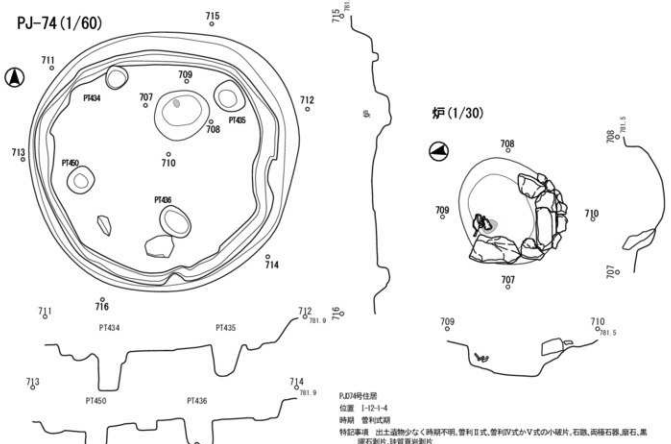


第 41 図　　PJ067 号住居・PH068 号住居

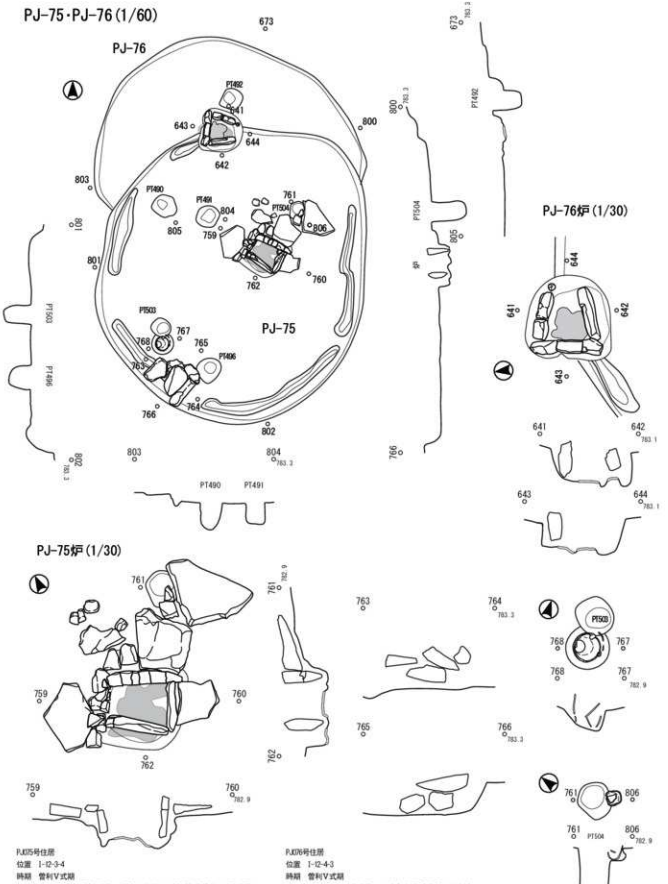


第 42 図　PH069 号住居・PH070 号住居

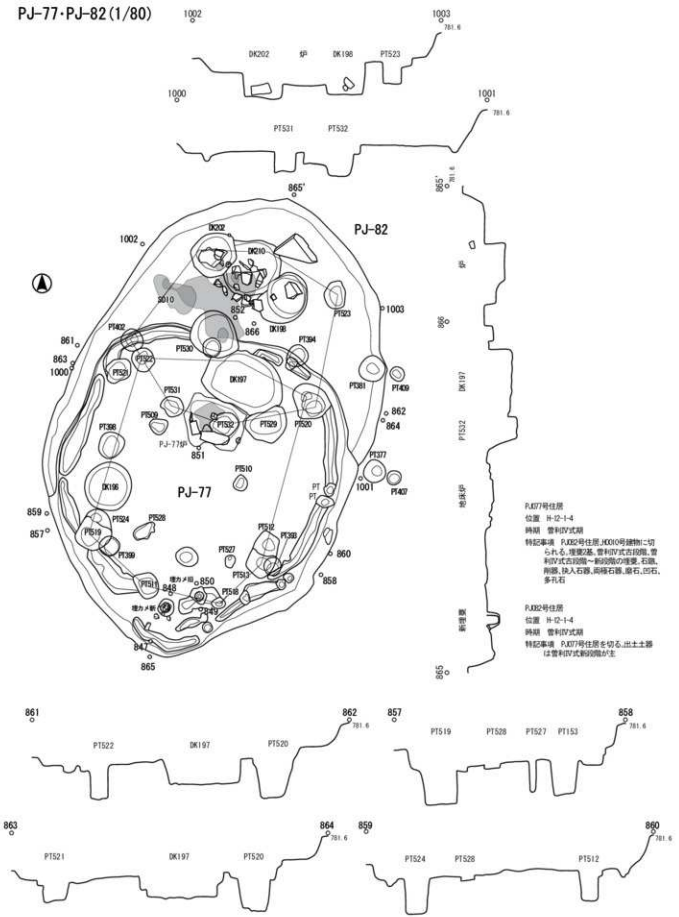




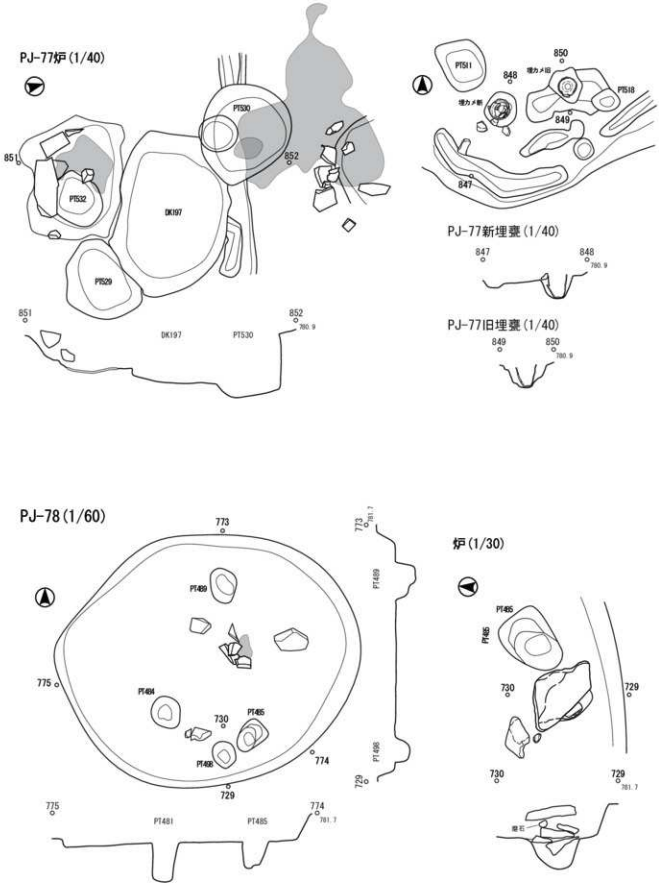
第 43 図　PJ072 号住居・PJ074 号住居



第 44 図　PJ075 号住居・PJ076 号住居



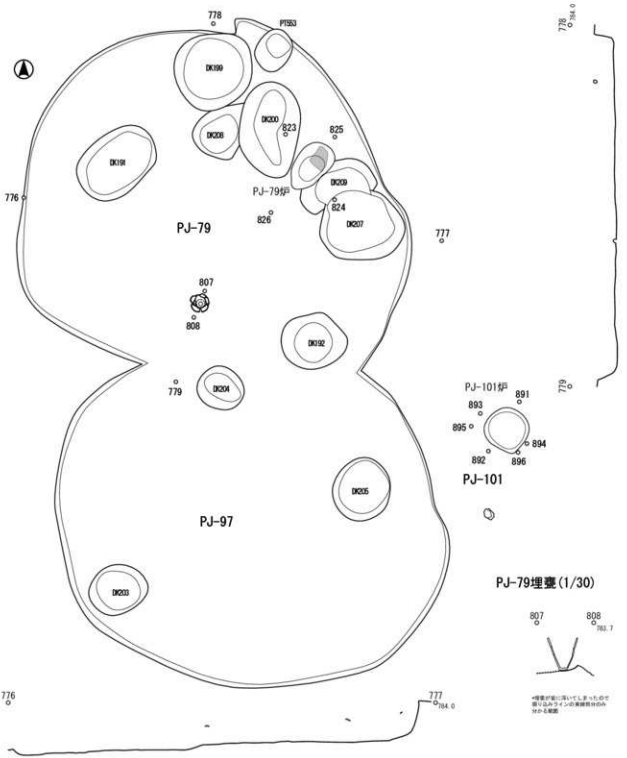
第 45 図　PJ077 号住居・PJ082 号住居



PJ078号住居
位置　I-12-2-3
時期　曽利Ⅳ式期
特記事項　埋甕2基、曽利Ⅳ式古段階と曽利Ⅳ式新段階、PJ082号住居に切られる、磨製石斧、磨石

第 46 図　PJ077 号住居・PJ078 号住居

PJ-79・PJ-97・PJ-101(1/60)

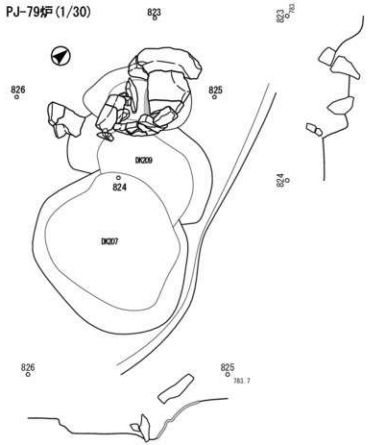


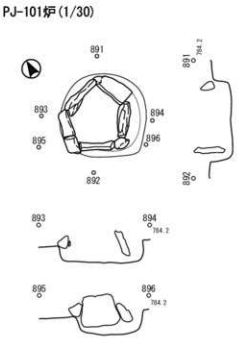
PJ079号住居
位置　I-12-9-4
時期　曽利V式期
特記事項　曽利V式中段階の土器多く、PJ057号住居出土土器と接合。保存状態悪く、炉、柱穴は検出されなかった。台石、磨弄、黒曜石剥片、独鈷頁岩剥片、砂岩剥片、土坑と重複。

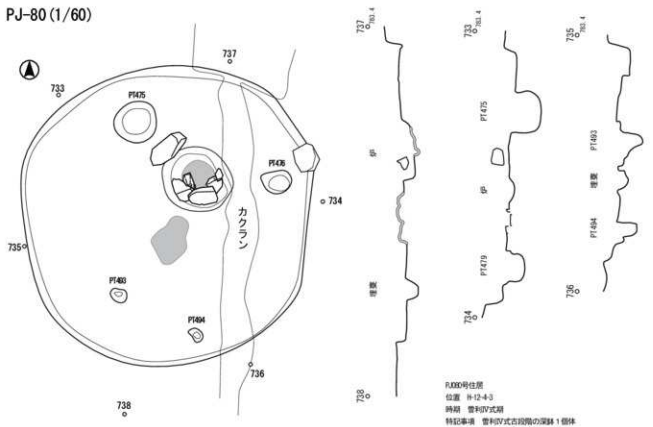
PJ097号住居
位置　I-12-9-4
時期　曽利V式期
特記事項　曽利V式中段階。保存状態悪く、炉、柱穴は検出されなかった。

PJ101号住居
位置　I-13-1-2
時期　曽利V式期
特記事項　PJ066号・PJ067号住居と重複。曽利V式中段階。保存状態が悪い。1区床で、炉のみを検出。本住居の遺物がPJ066号・PJ067号住居に混じってしまったと思われる。石鏃、磨石、石皿、台石、多孔石

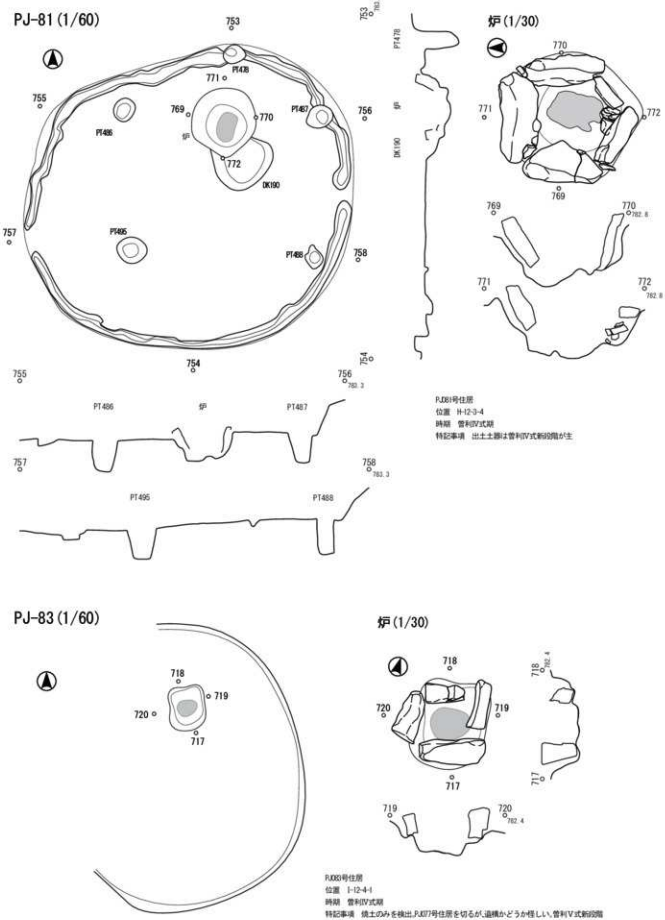
第 47 図　　PJ079 号住居・PJ097 号住居・PJ101 号住居



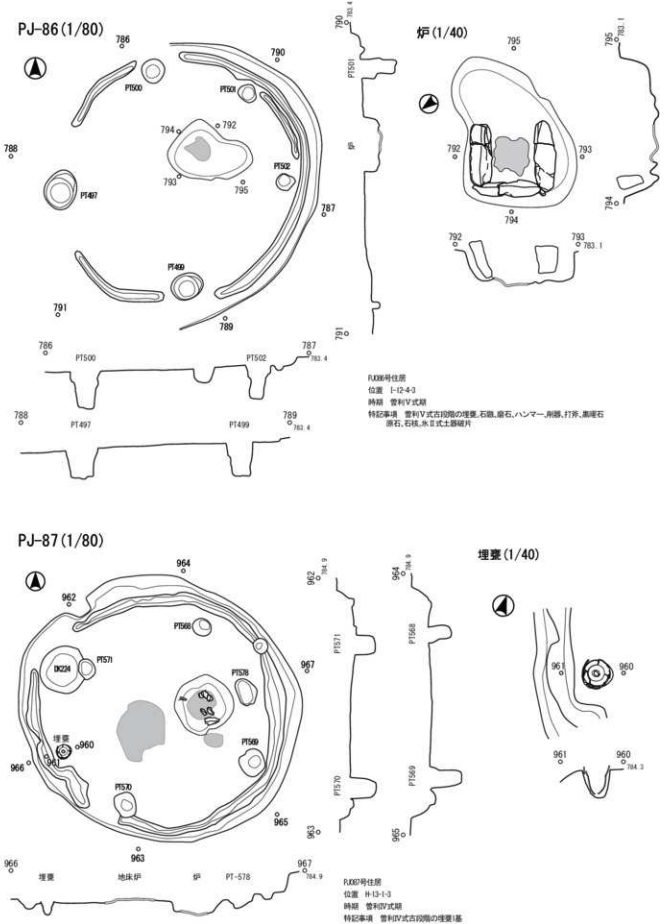




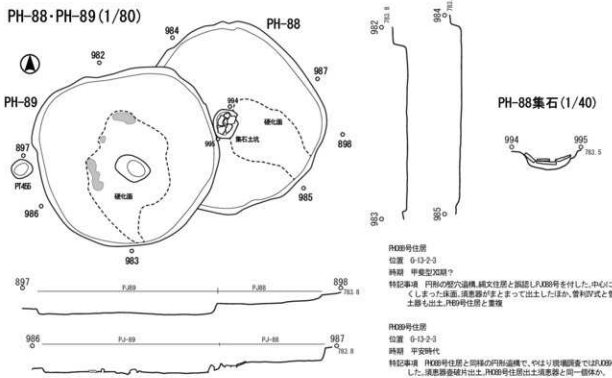
第 48 図　PJ079 号住居・PJ080 号住居・PJ101 号住居



第 49 図　PJ081 号住居・PJ083 号住居

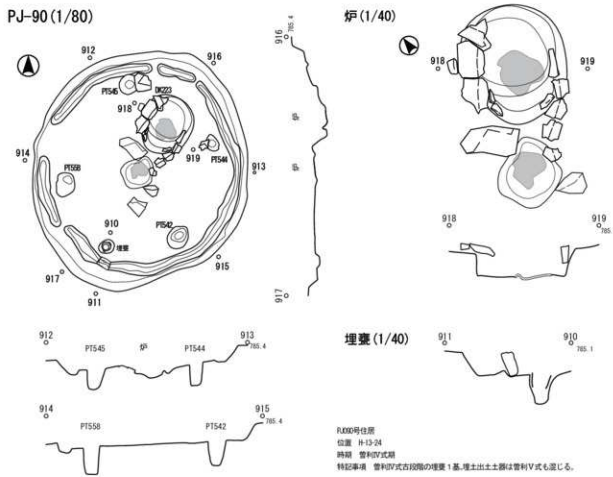


第 50 図　PJ086 号住居・PJ087 号住居

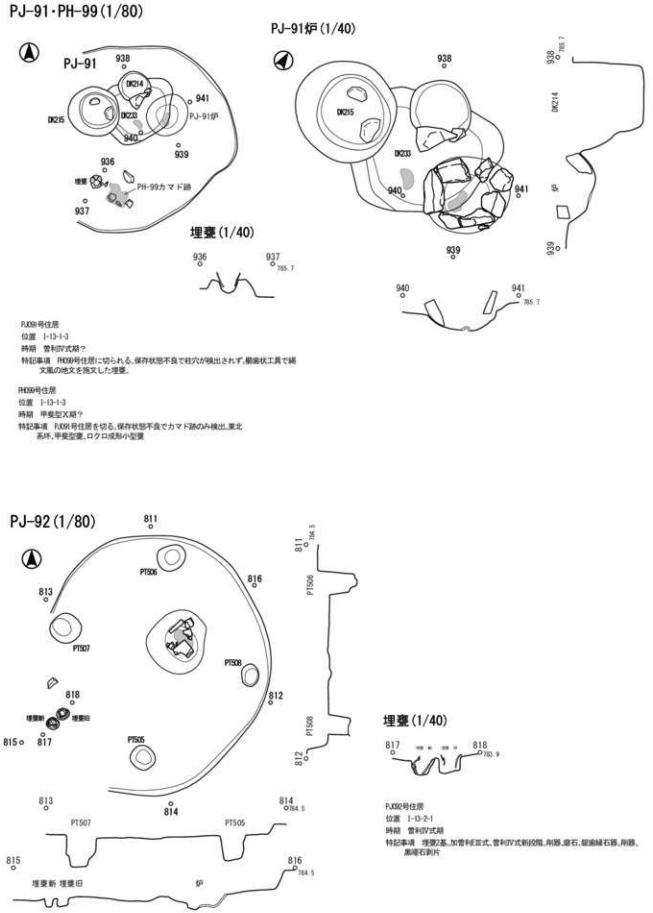


PH088号住居
位置　G-13-2-3
時期　平安中期？
特記事項　円形の壁穴遺構、縄文住居と誤認し、PJ088号を付した。中心に焼土、固くしまった床面、須恵器がまとまって出土したほか、管利Ⅳ式と管利Ⅴ式土器も出土。PH89号住居と重複

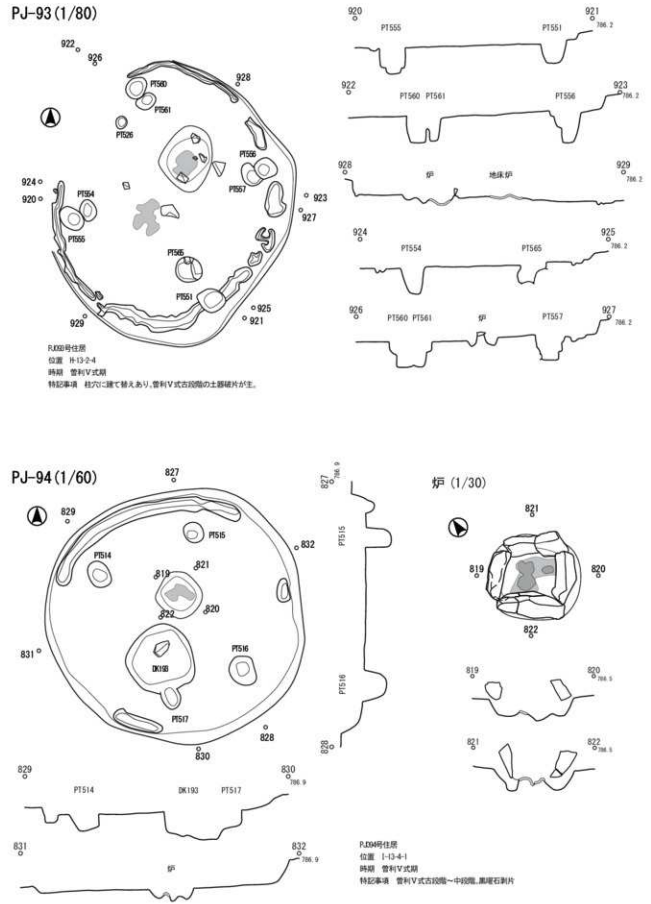
PH089号住居
位置　G-13-2-3
時期　平安時代
特記事項　PH088号住居と同様の円形遺構で、やはり現場調査ではPJ089号と命名した。須恵器壺破片出土。PH088号住居出土須恵器と同一個体か。



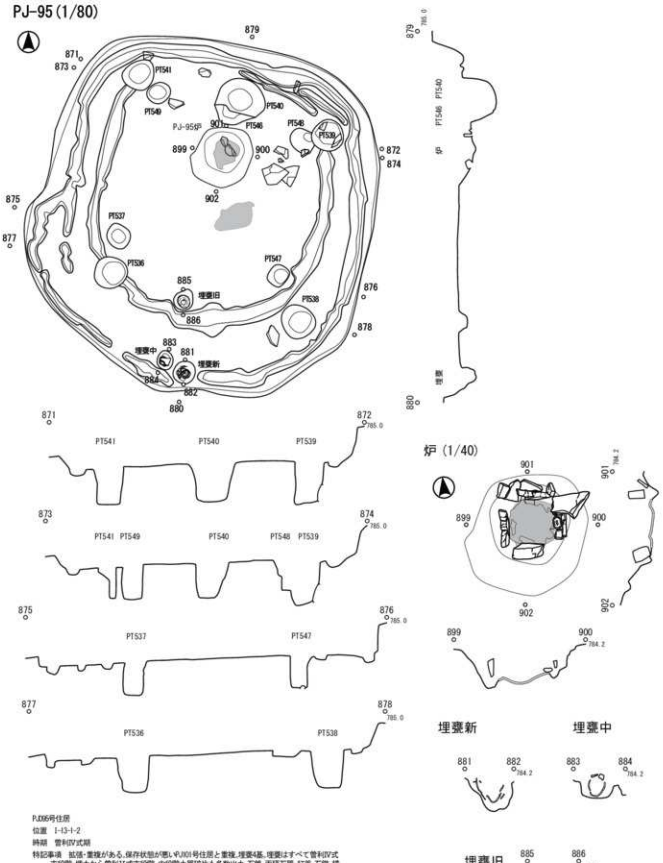
第 51 図　　PH088 号住居・PH089 号住居・PJ090 号住居



第 52 図　PJ091 号住居・PJ092 号住居・PH099 号住居

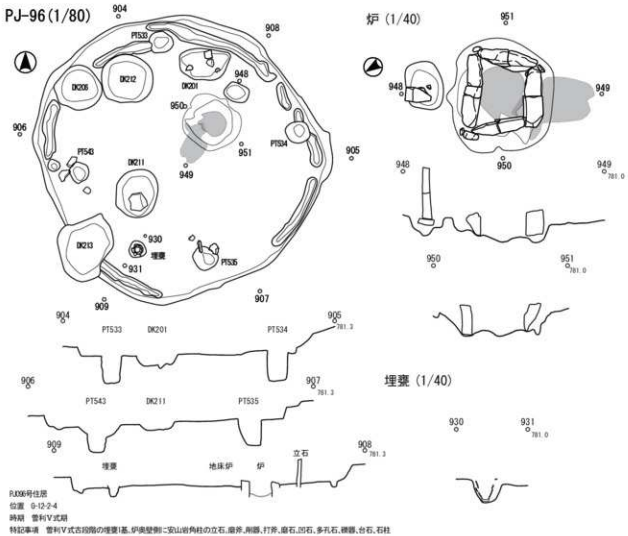


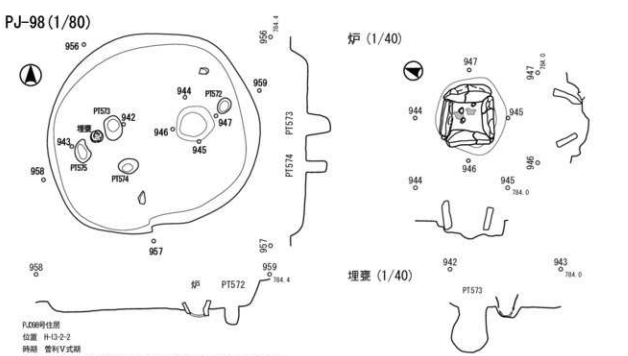
第 53 図　PJ093 号住居・PJ094 号住居



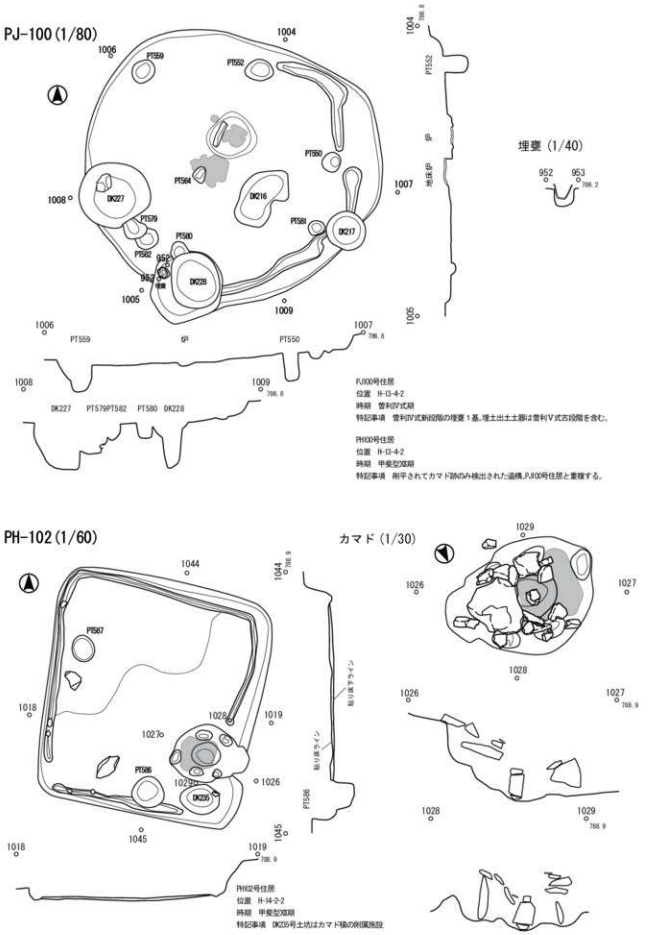
PJ095号住居
位置　I-13-1-2
時期　雪利Ⅳ式期
特記事項　拡張・重複がある。保存状態が悪い。PJ091号住居と重複。埋甕4基。埋甕はすべて雪利Ⅳ式
古段階。埋土から雪利Ⅴ式古段階、中段階土器破片も多数出土。石錐、両極石器、打斧、石匙、横
刃形石器、削器、敲石、台石、多孔石、黒曜石石核、剥片、チャート剥片、珪質頁岩剥片

第 54 図　　PJ095 号住居



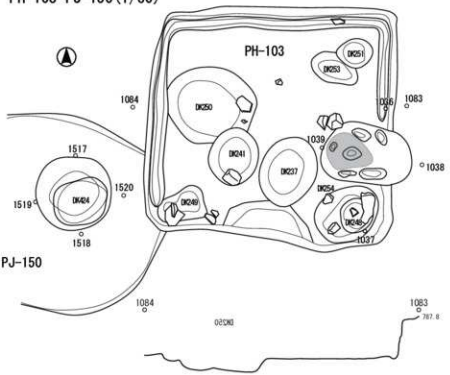


第 55 図　　PJ096 号住居・PJ098 号住居



第 56 図　　PJ100 号住居・PH102 号住居

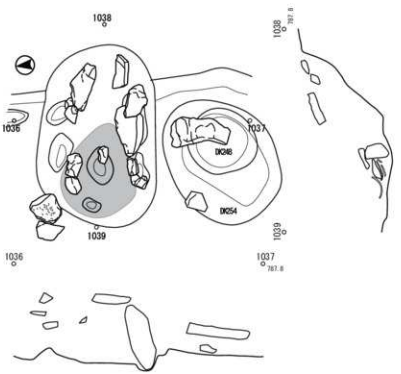
PH-103・PJ-150(1/60)



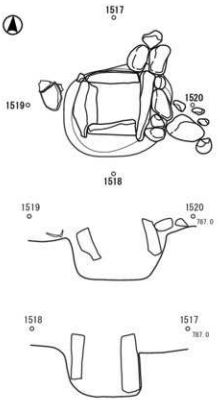
PH103号住居
位置　H-13-3-4
時期　甲類型X期
特記事項　南壁沿い出入口部に浅い切込みあり、甲類型中は少量、甲類型壁が多い、土師器墨書片

PJ150号住居
位置　H-13-3-4
時期　雪利V式期
特記事項　円形プランと炉跡のみを検出、両耳壺1個体、磨石、ハンマー

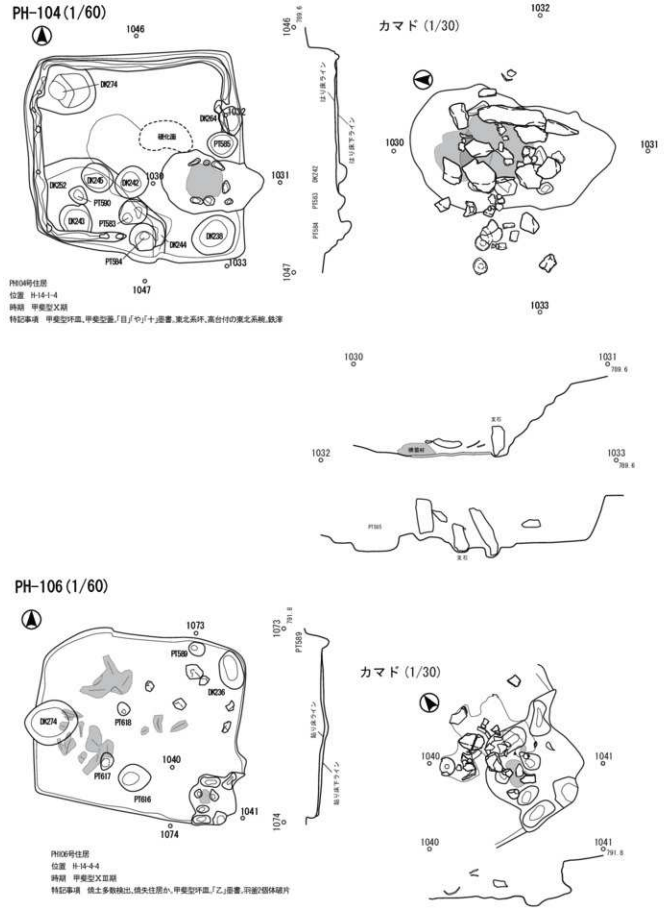
PH-103 カマド (1/30)



PJ-150 炉 (1/30)



第 57 図　　PH103 号住居・PJ150 号住居

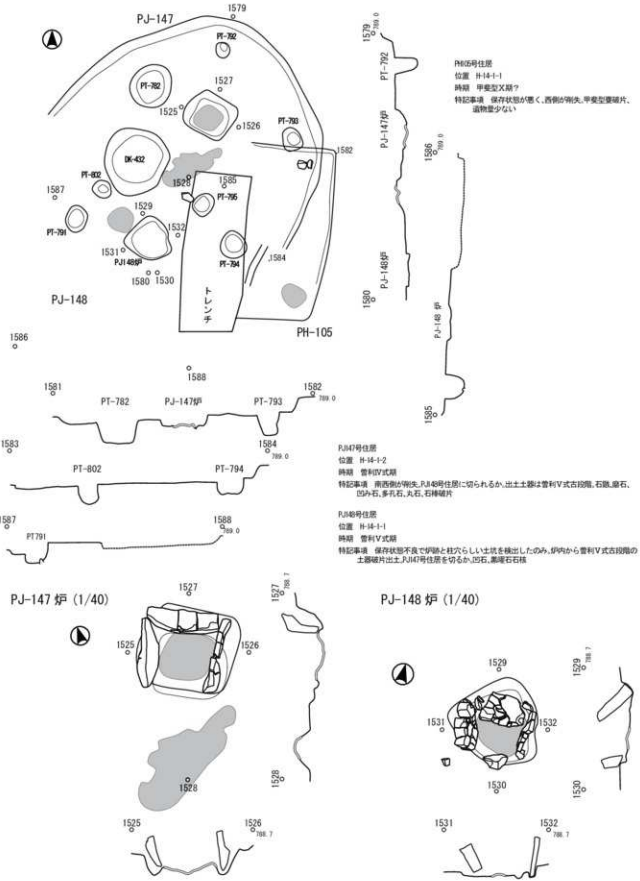


PH104号住居
位置　H-14-1-4
時期　甲類型X期
特記事項　甲類型坏皿、甲類型蓋、「目」「や」「十」墨書、東北系坏、高台付の東北系椀、鉄滓

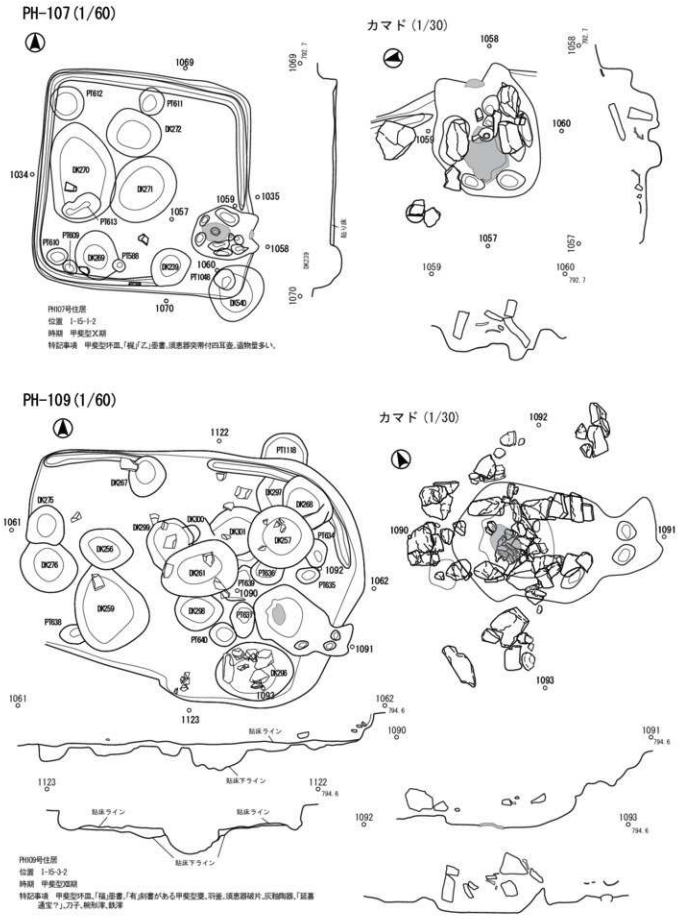
PH106号住居
位置　H-14-4-4
時期　甲類型X III期
特記事項　焼土多数検出、焼失住居か、甲類型坏皿、「乙」墨書、羽釜2個体破片

第 58 図　　PH104 号住居・PH106 号住居

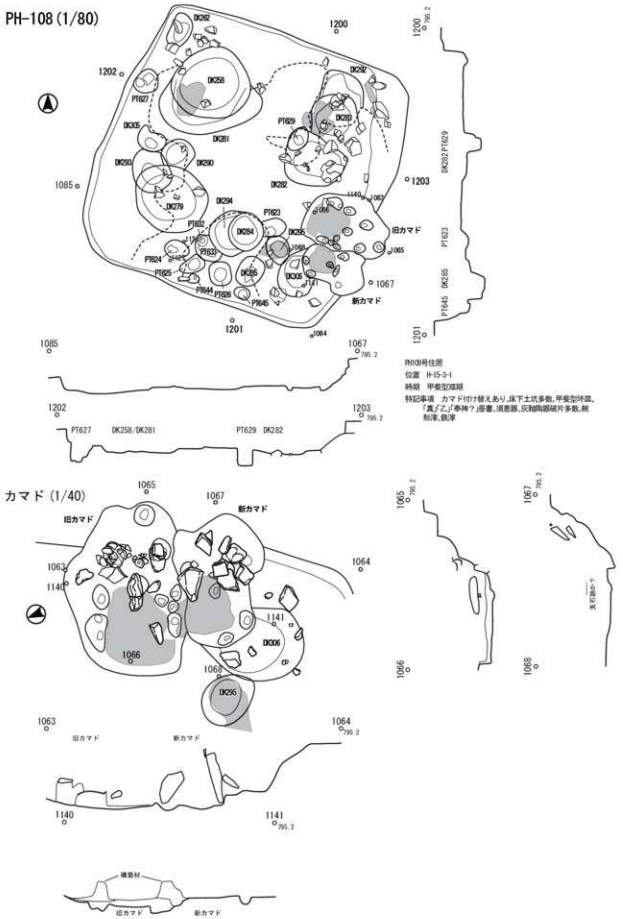
PH-105・PJ-147・PJ-148 (1/80)



第 59 図　PH105 号住居・PJ147 号住居・PJ148 号住居

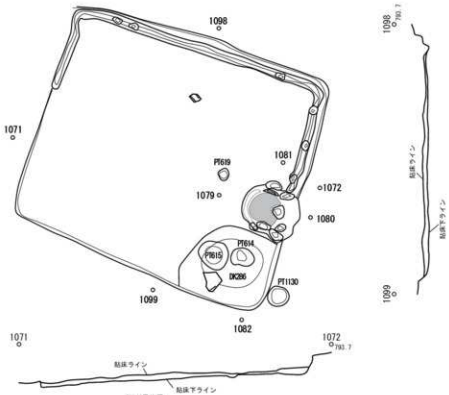


第 60 図　PH107 号住居・PH109 号住居

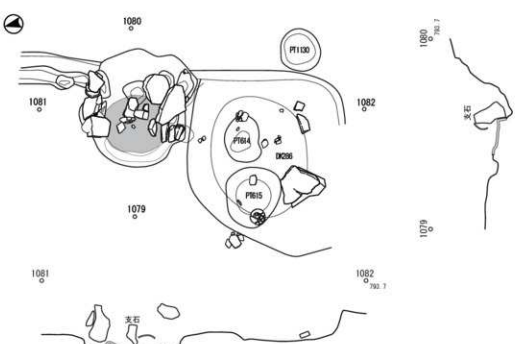


第 61 図　PH108 号住居

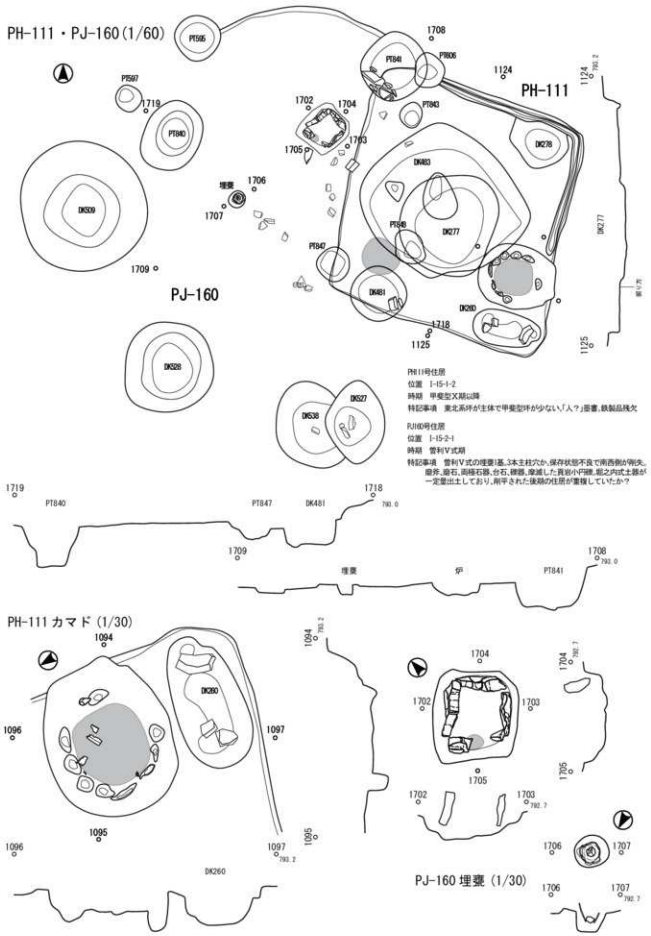
PH-110(1/60)



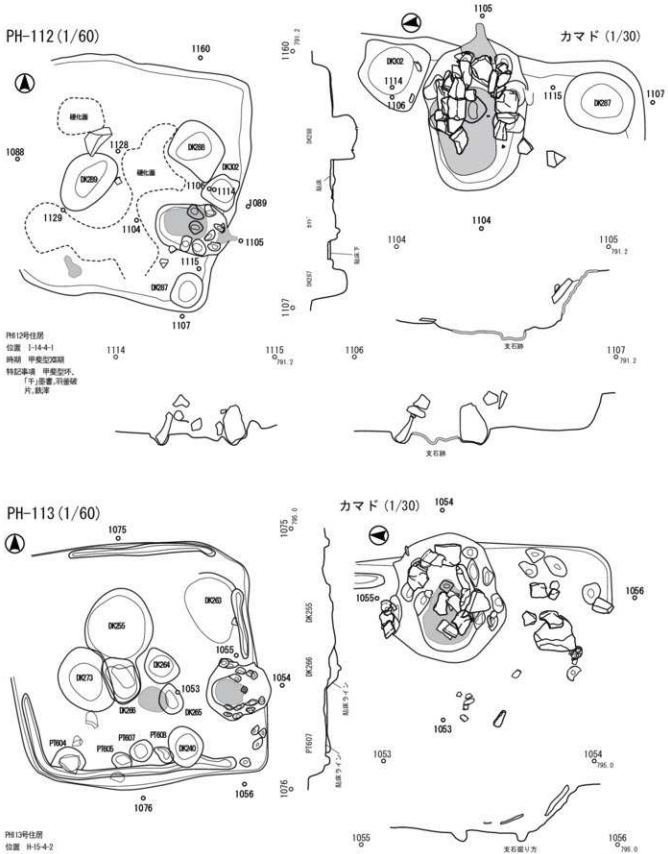
カマド(1/30)



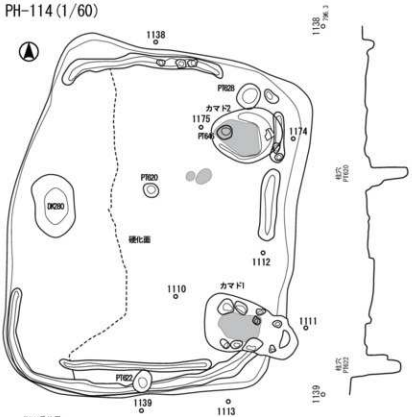
第 62 図　PH110 号住居



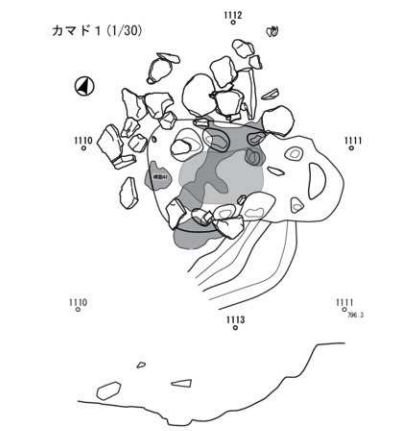
第 63 図　PH111 号住居・PJ160 号住居



第 64 図　PH112 号住居・PH113 号住居



PH114号住居
位置　H-15-4-3
時期　甲類型X期
特記事項　同一地点で建て替えか重複,カマド2ヵ所検出,甲類型坏多数,「乙」墨書,東北系土師器は高台付坏が多い,灰釉陶器,DK230から灰釉壺.

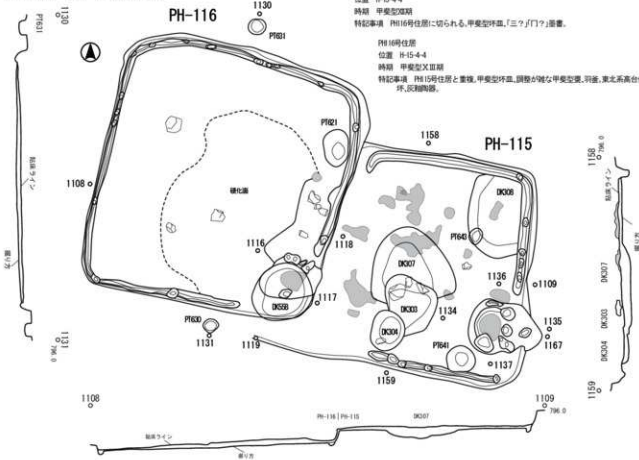


第 65 図　PH114 号住居

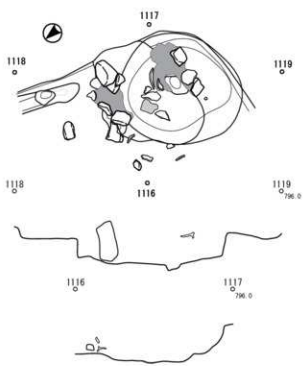
PH-115・PH-116(1/60)

PH115号住居
位置　H-15-4-4
時期　甲類型XXXII
特記事項　PH116号住居に切られる。甲類型坏底、「三ヶ」「口ヶ」墨書。

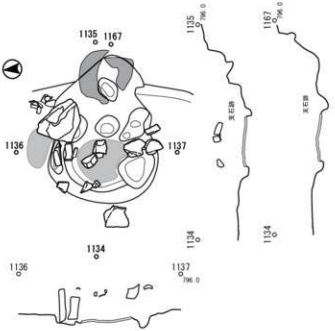
PH116号住居
位置　H-15-4-4
時期　甲類型XXIII
特記事項　PH115号住居と重複。甲類型坏皿、鉢類が雑な甲類型壺、羽釜、東北系高台付坏、灰釉陶器。



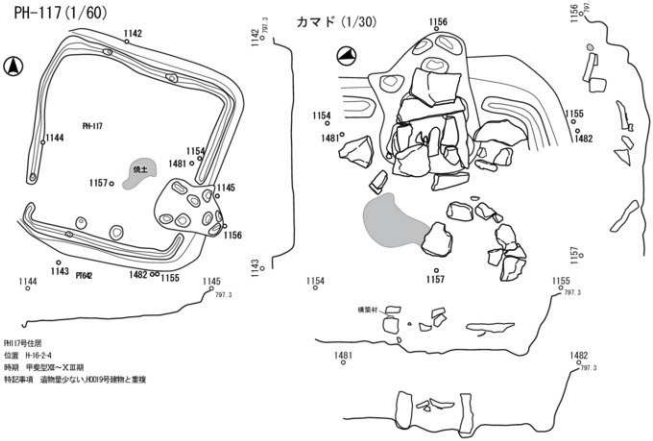
PH-116 カマド (1/30)



PH-115 カマド (1/30)

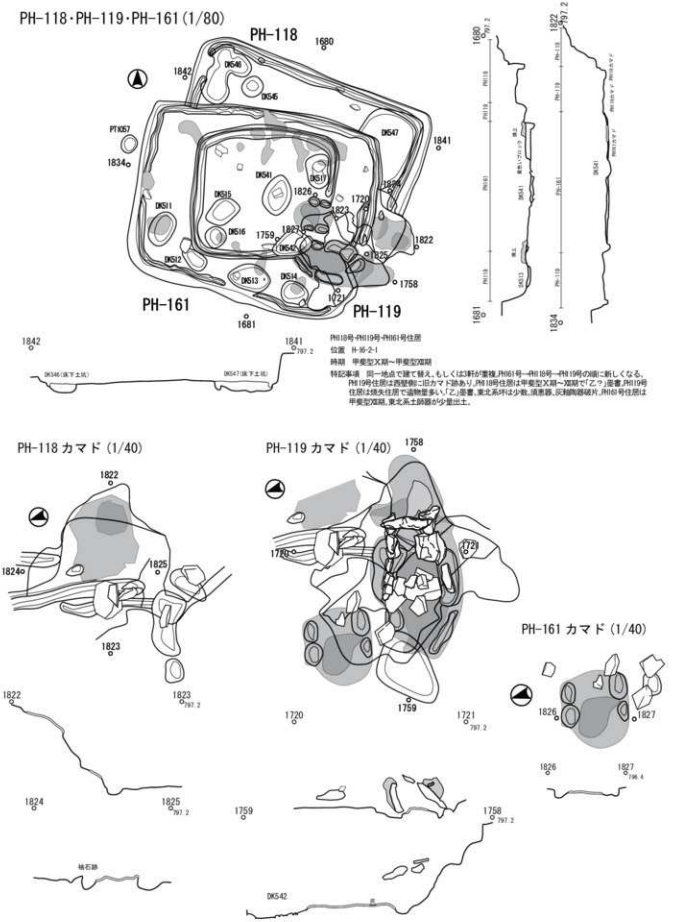


第 66 図　PH115 号住居・PH116 号住居

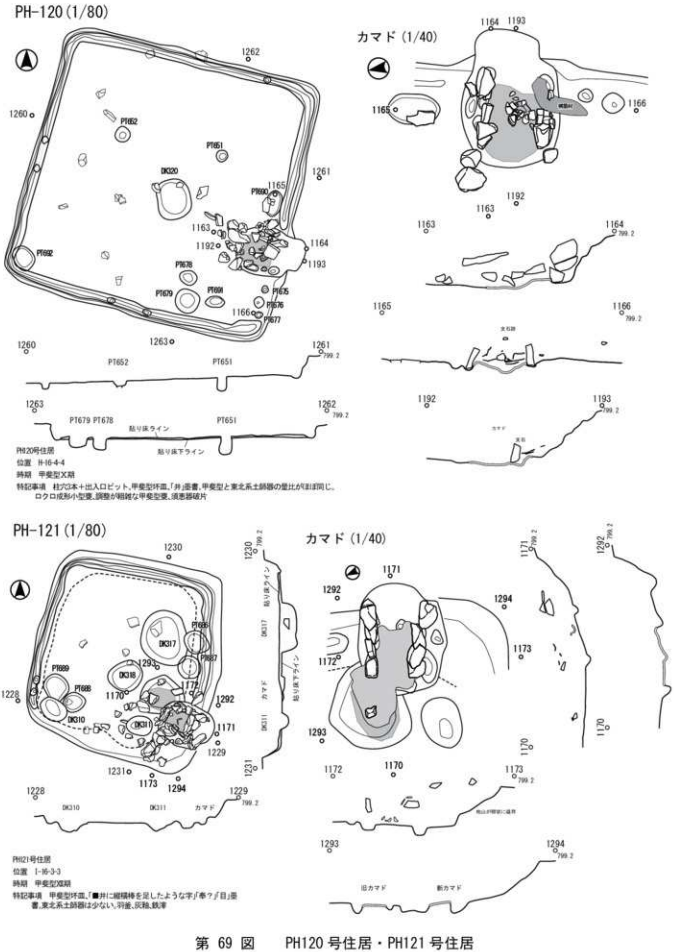


第 67 図　PH117 号住居

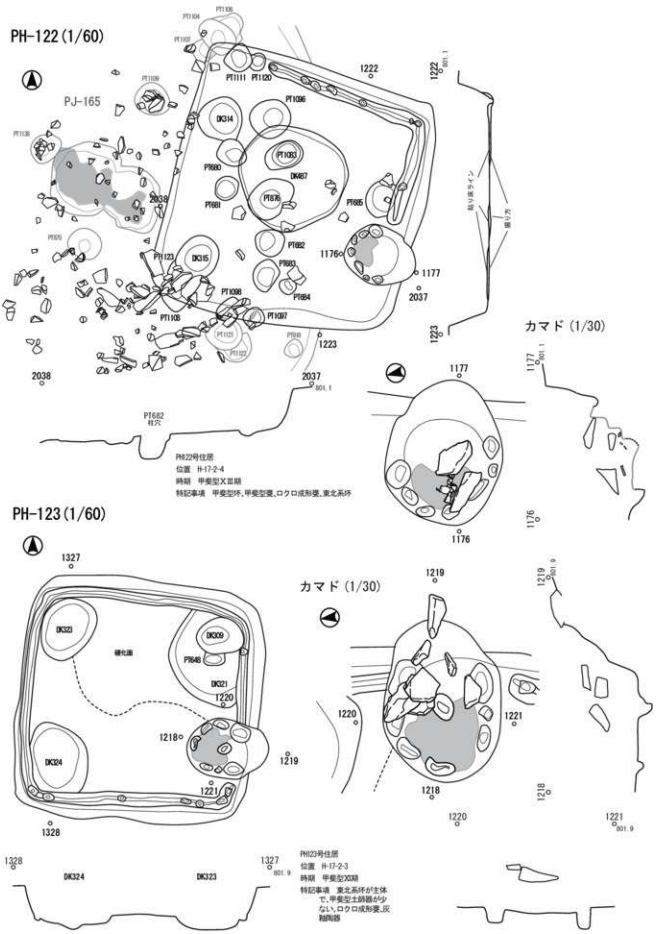
PH117 号住居カマド



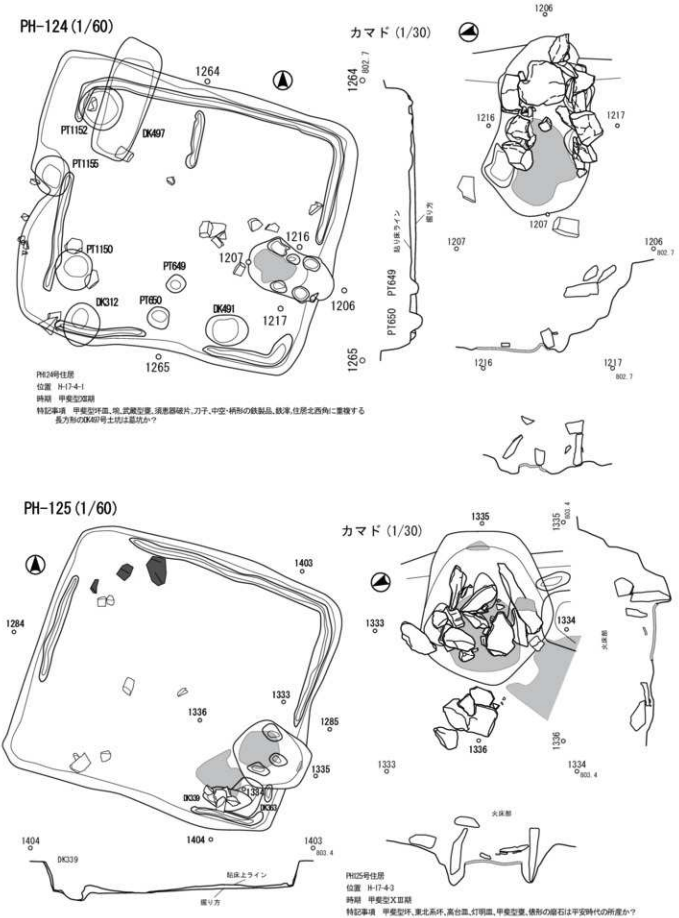
第 68 図　PH118 号住居・PH119 号住居・PH161 号住居



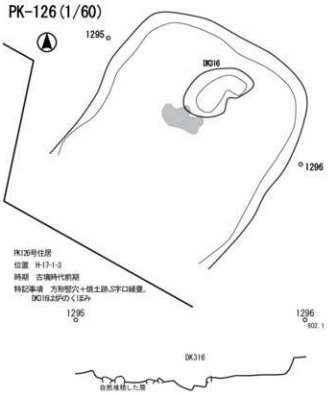
第 69 図　PH120 号住居・PH121 号住居

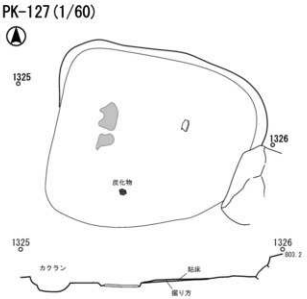


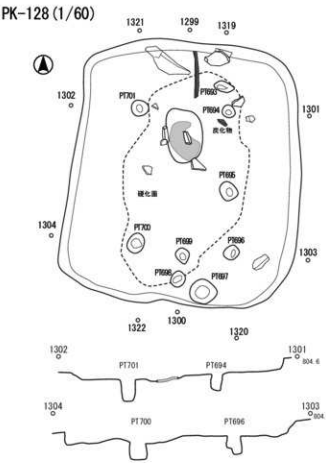
第 70 図　PH122 号住居・PH123 号住居

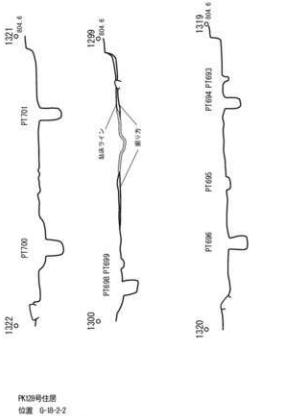


第 71 図　PH124 号住居・PH125 号住居



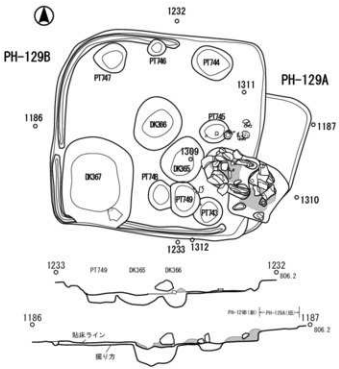




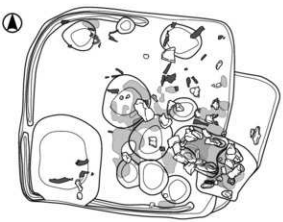


第 72 図　PK126 号住居・PK127 号住居・PK128 号住居

PH-129A・B(1/60)

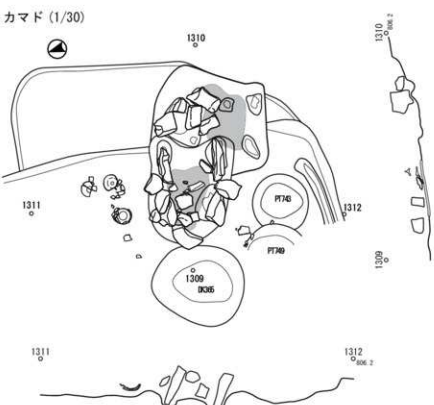


炭化材・焼土出土状況

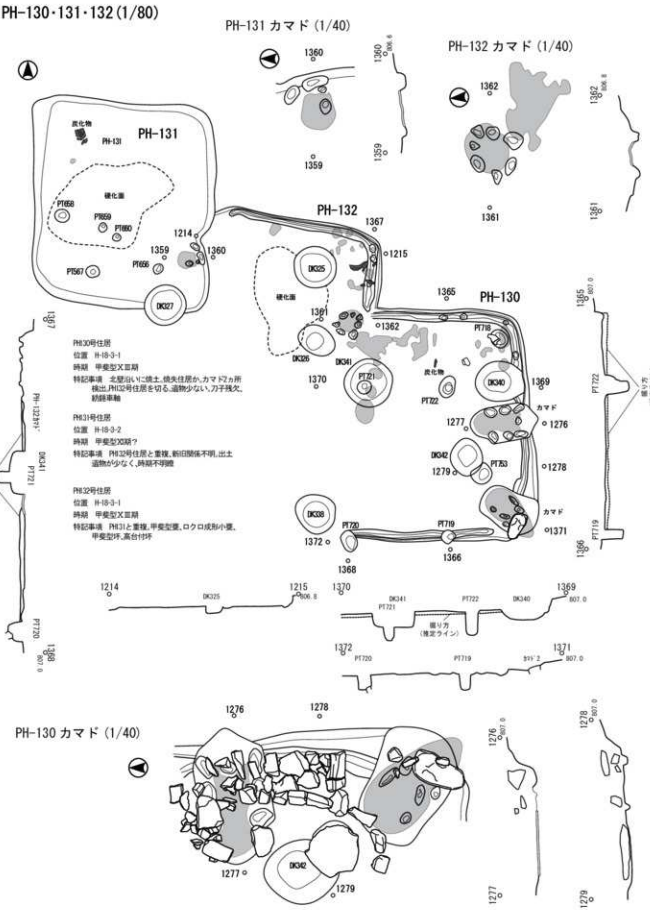


PH129号住居
位置　H-18-1-4
時期　甲斐型X期
特記事項　同一地点で建て替え、甲斐型吁が多い、羽釜、甲斐型の朝型から造営した小形竈、DK367号土坑から安山岩製の大形砥石

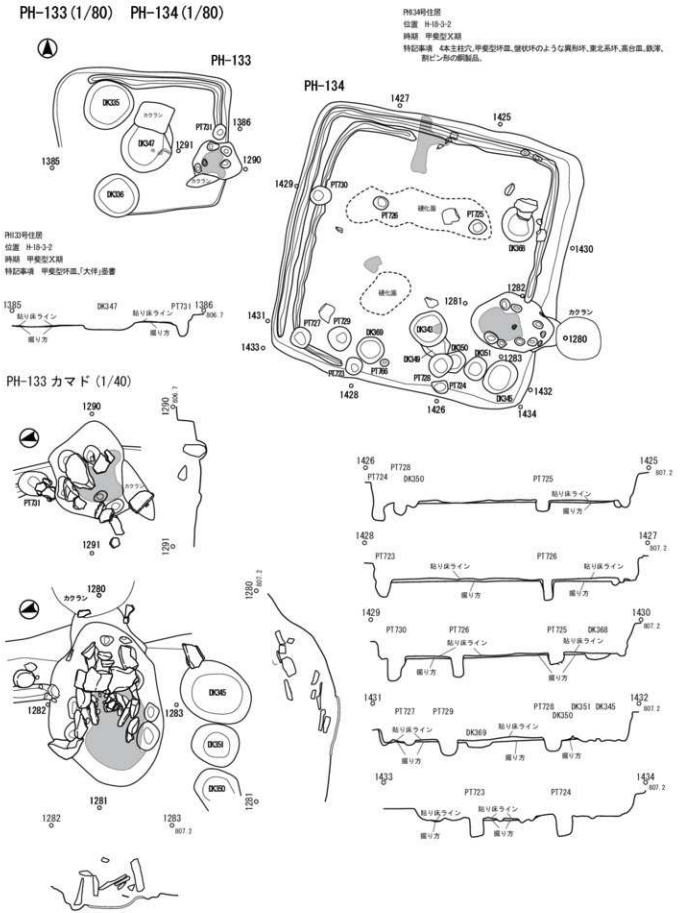
カマド(1/30)



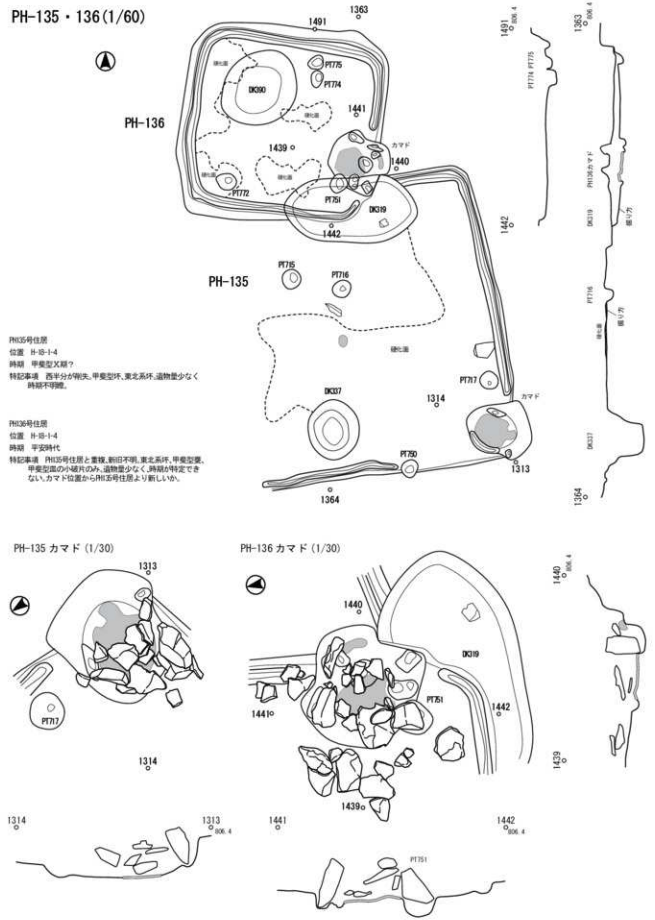
第 73 図　PH129A 号住居・PH129B 号住居



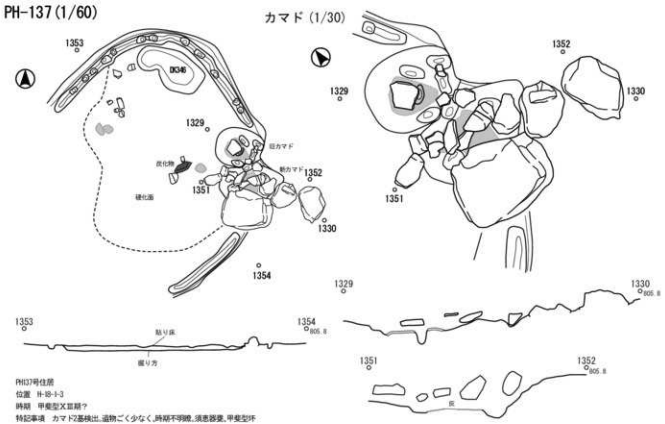
第 74 図　PH130 号住居・PH131 号住居・PH132 号住居



第 75 図　　PH133 号住居・PH134 号住居

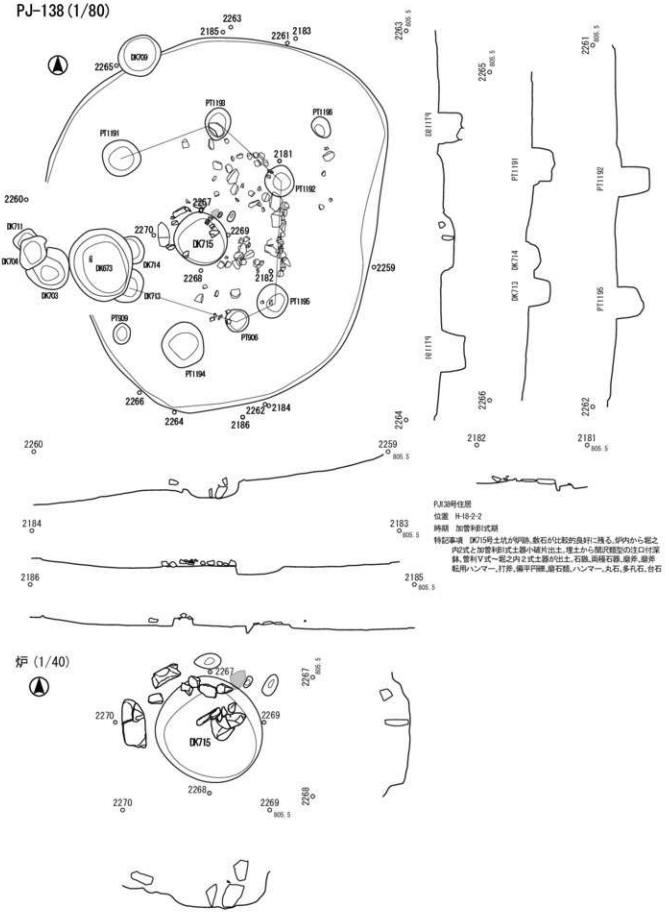


第 76 図　PH135 号住居・PH136 号住居

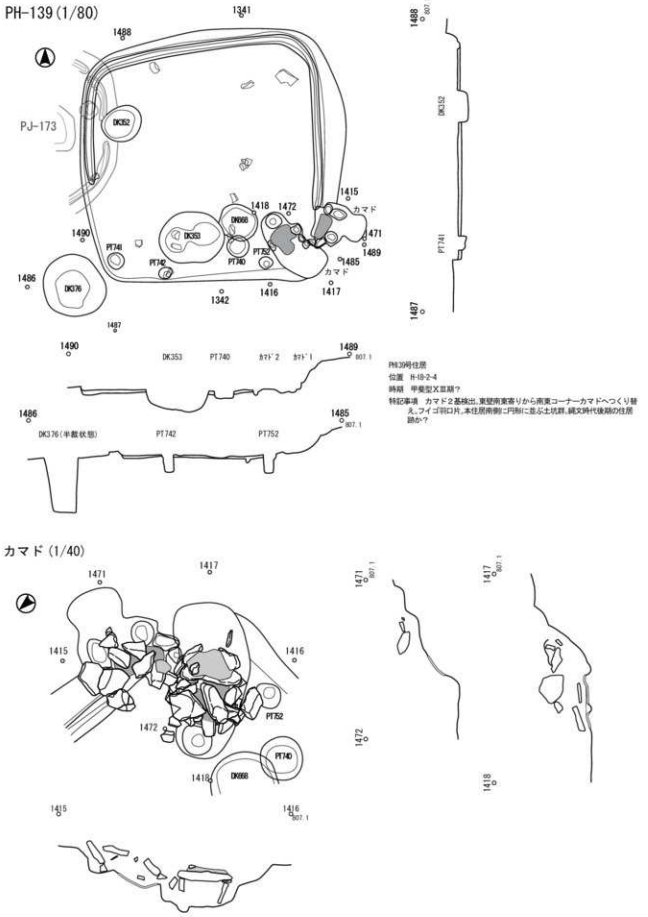


第 77 図　　PH137 号住居

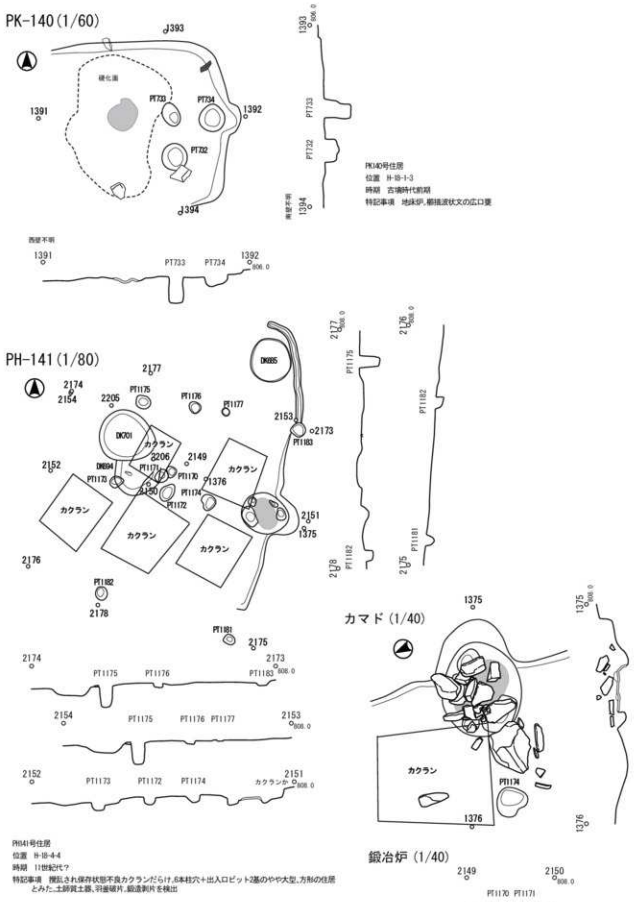
PH137 号住居カマド



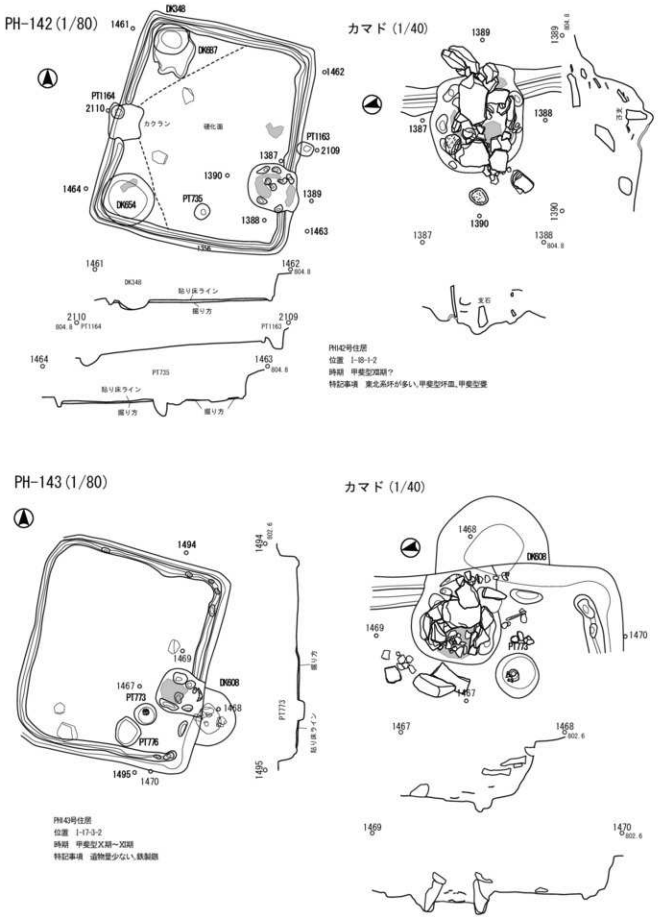
第 78 図　　PJ138 号住居



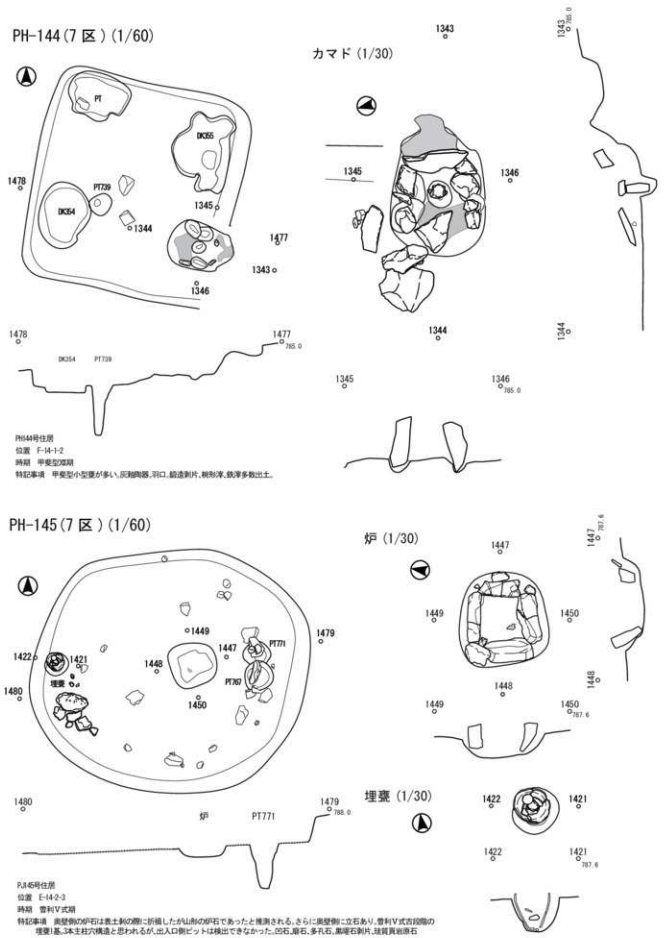
第 79 図　PH139 号住居



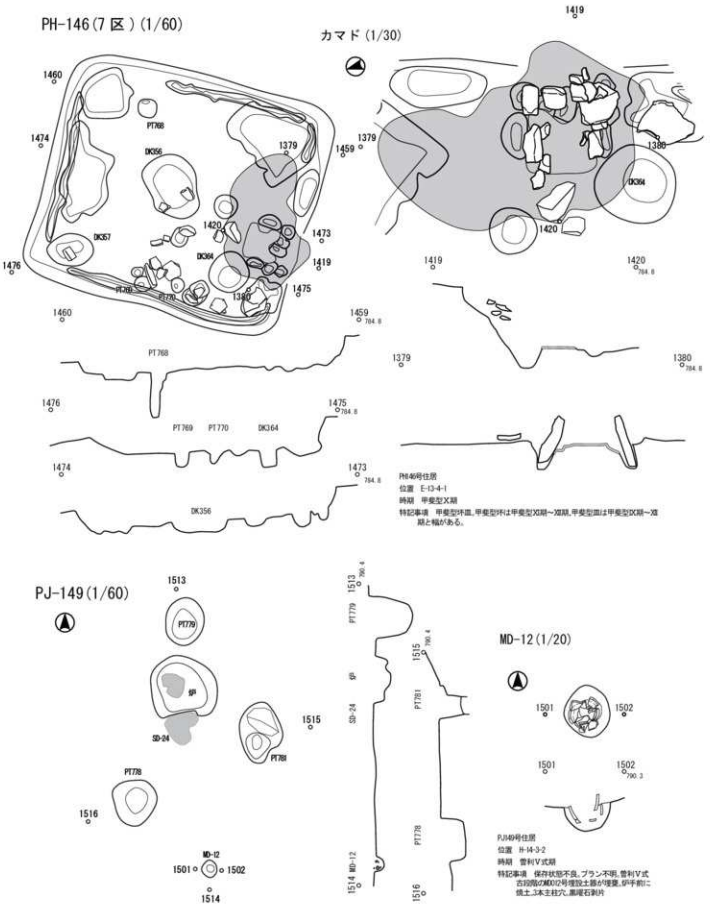
第 80 図　PK140 号住居・PH141 号住居



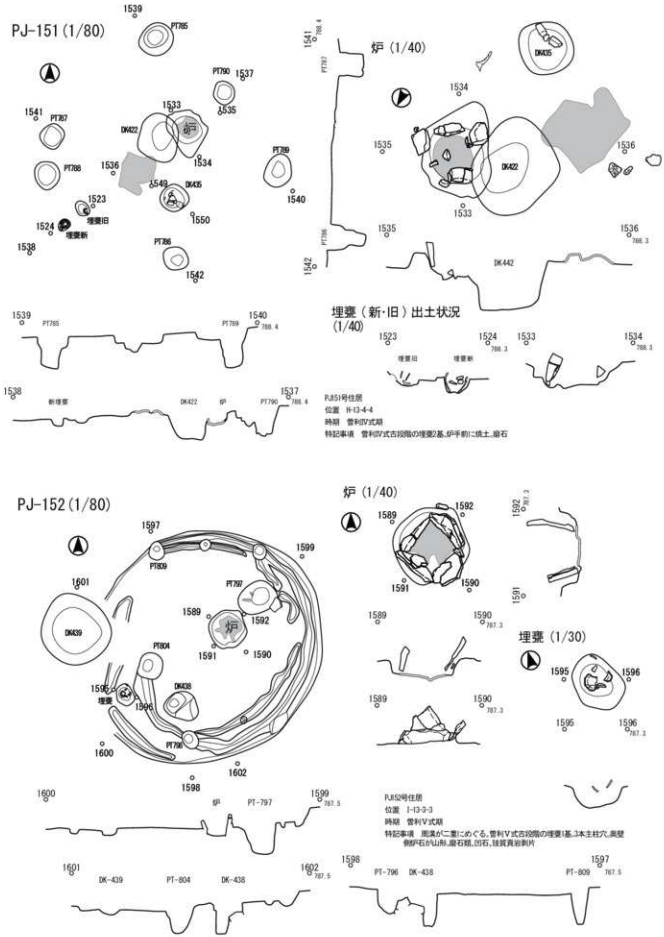
第 81 図　PH142 号住居・PH143 号住居



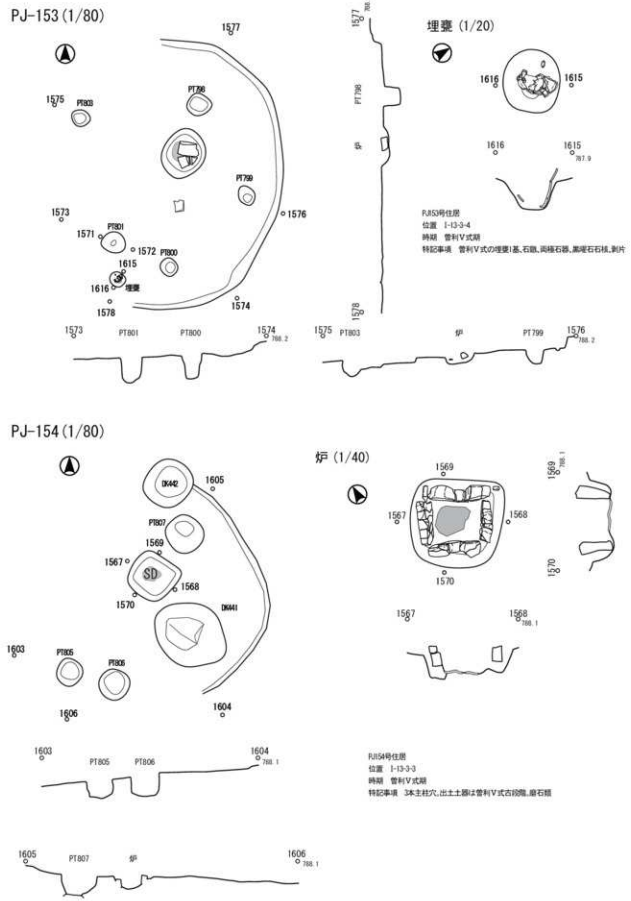
第 82 図　PH144 号住居・PH145 号住居



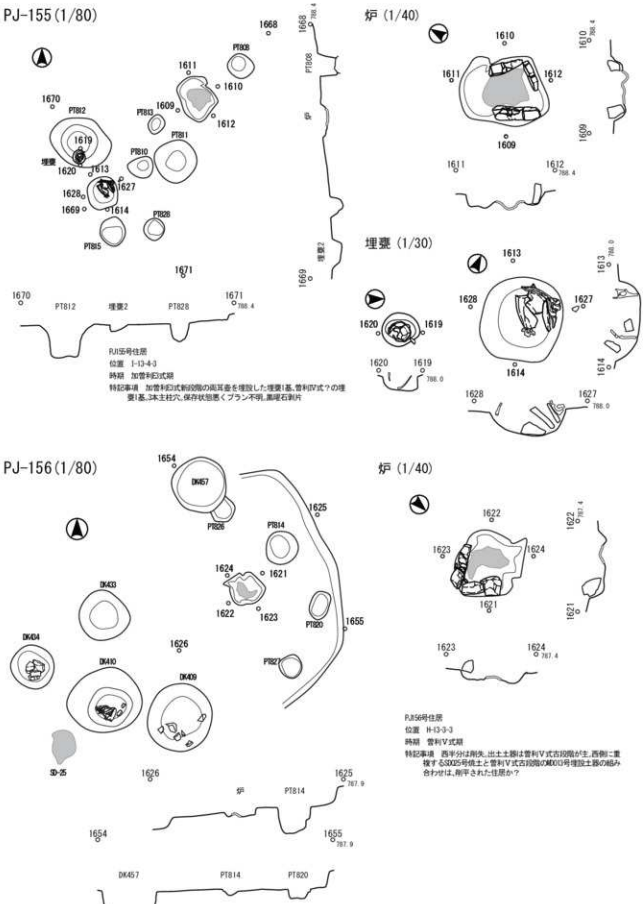
第 83 図　PH146 号住居・PJ149 号住居



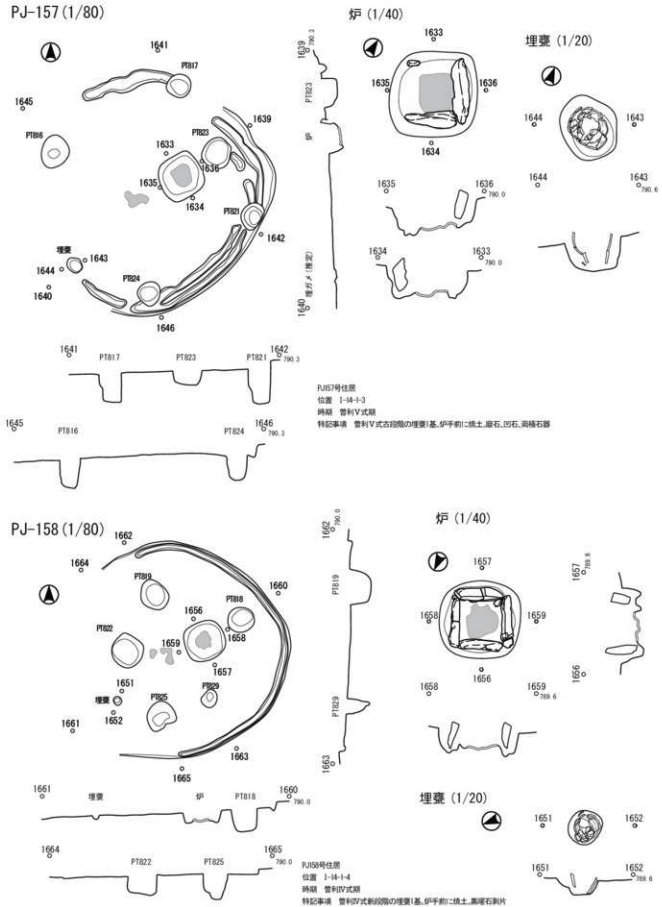
第 84 図　PJ151 号住居・PJ152 号住居



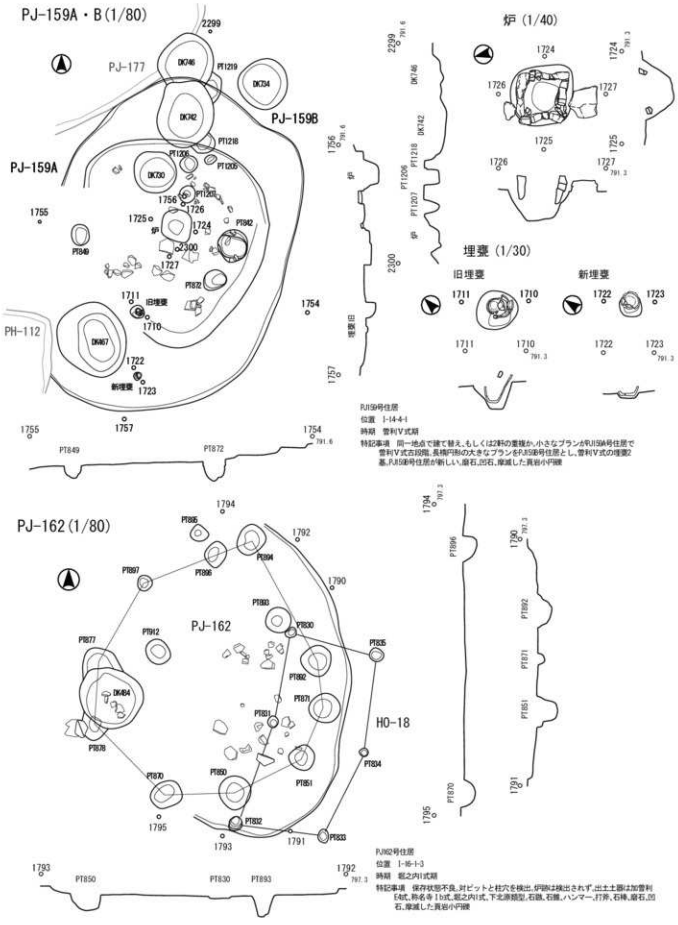
第 85 図　PJ153 号住居・PJ154 号住居



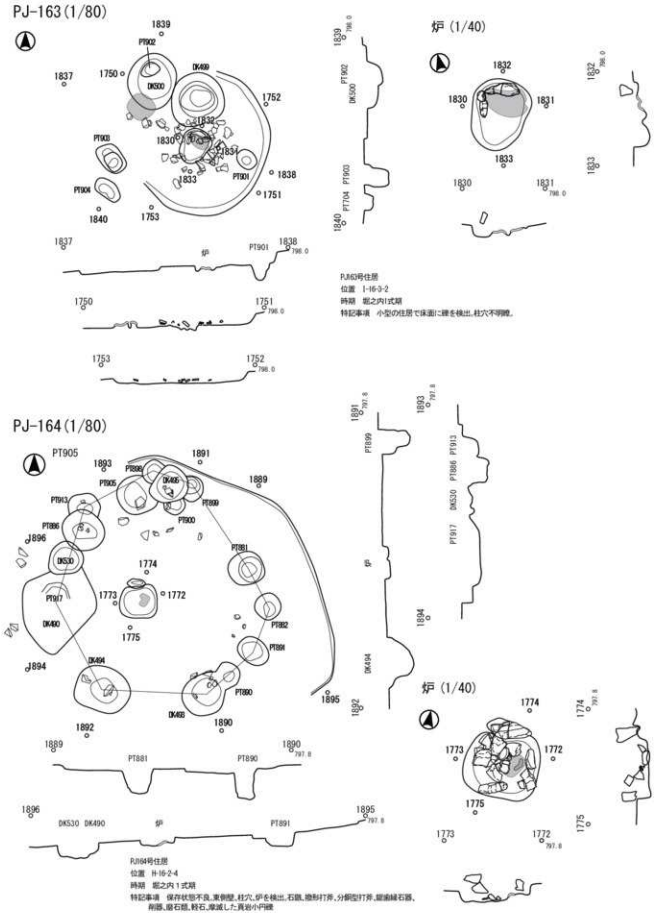
第 86 図　PJ155 号住居・PJ156 号住居



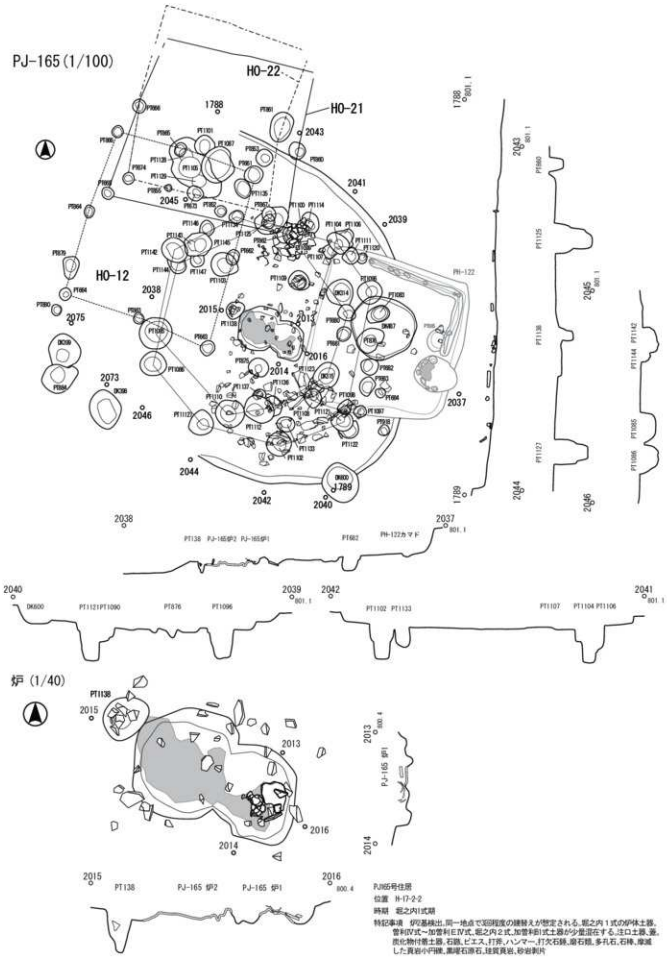
第 87 図　PJ157 号住居・PJ158 号住居



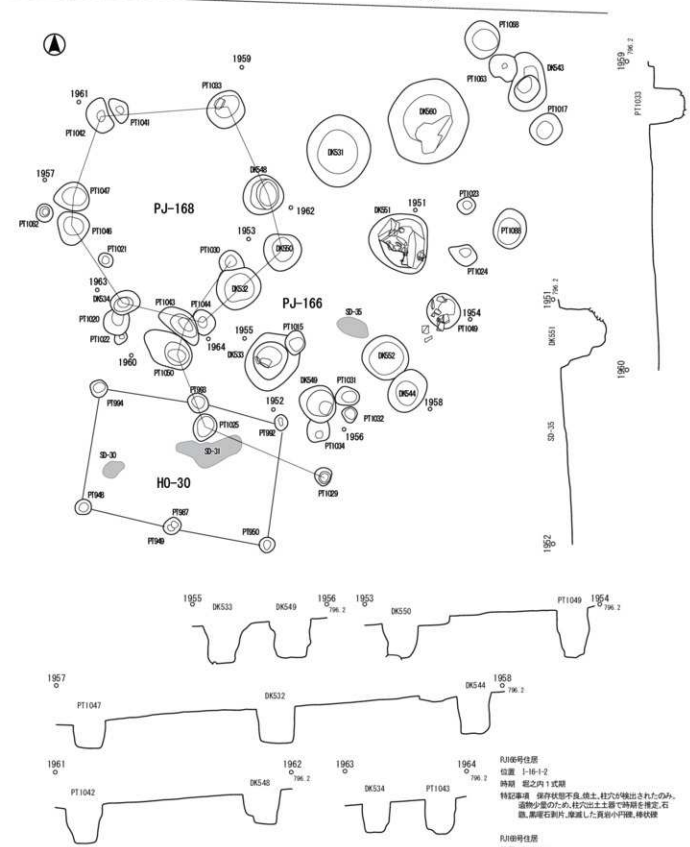
第 88 図　PJ159A 号住居・PJ159B 号住居・PJ162 号住居



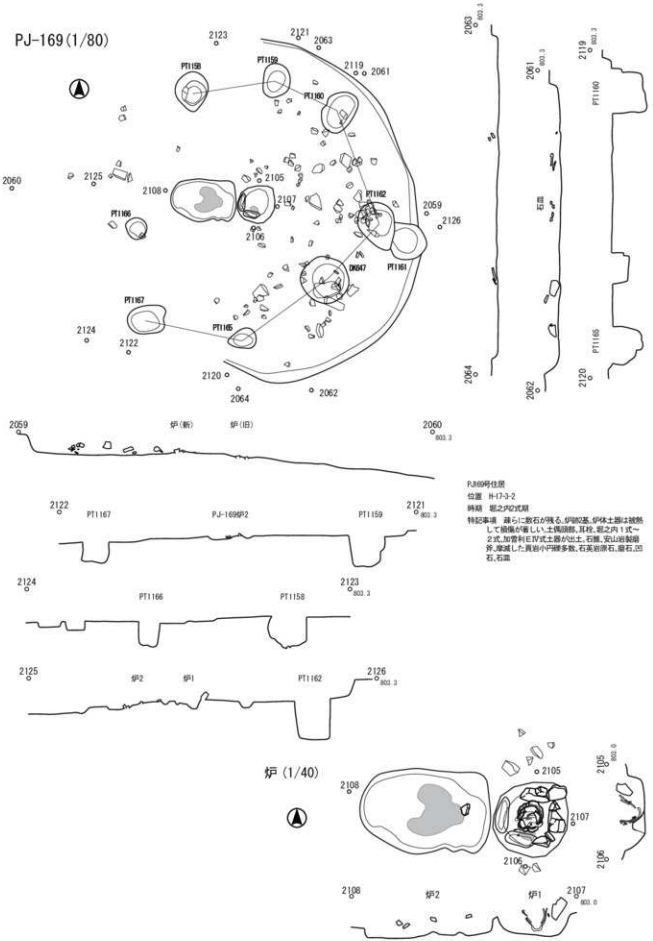
第 89 図　PJ163 号住居・PJ164 号住居



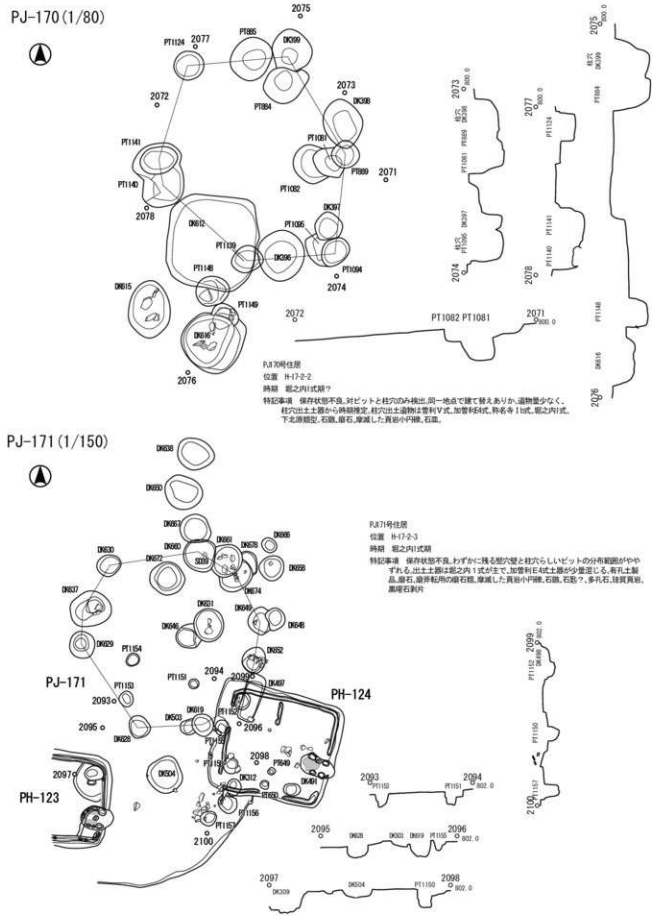
第 90 図　PJ165 号住居



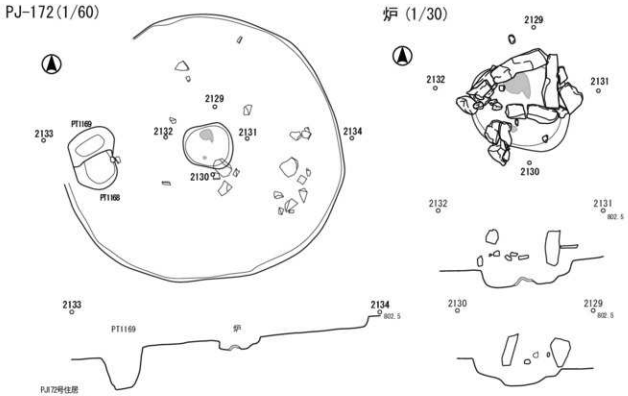
第 91 図　　PJ166 号住居・PJ168 号住居



第 92 図　　PJ169 号住居

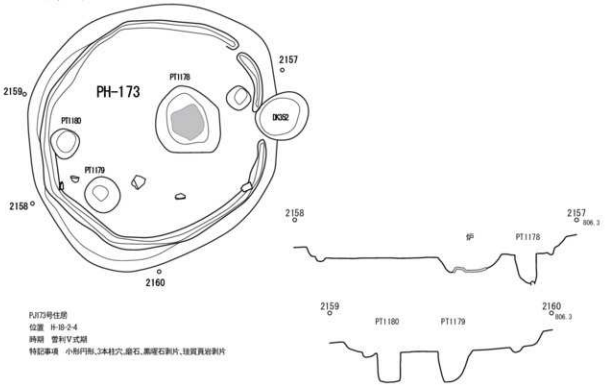


第 93 図　PJ170 号住居・PJ171 号住居



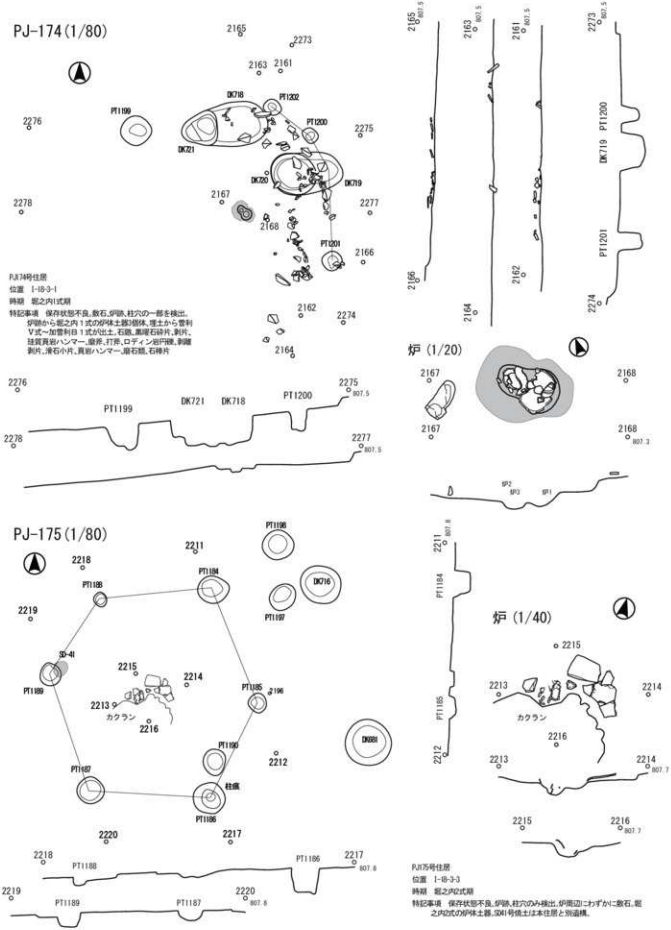
PJ172号住居
位置　I-17-3-1
時期　曽利Ⅴ式期
特記事項　小形円形住居。柱穴が検出されなかった。出土土器は、曽利Ⅴ式中段階～新段階、加曽利E式、打斧、磨石、ハンマー、摩滅した黄岩小礫多数、石英岩原石、黄岩、黒曜石剥片

PJ-173(1/60)



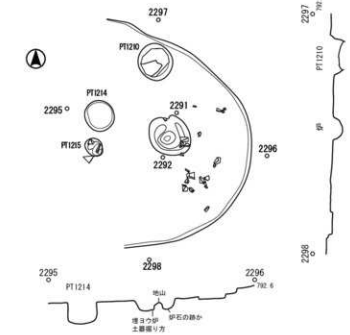
PJ173号住居
位置　H-10-2-4
時期　曽利Ⅴ式期
特記事項　小形円形。3本柱穴。磨石、黒曜石剥片、珪質頁岩剥片

第 94 図　　PJ172 号住居・PJ173 号住居

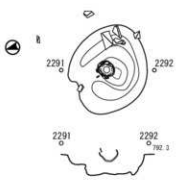


第 95 図　PJ174 号住居・PJ175 号住居

PJ-176(3 区拡張区)(1/80)

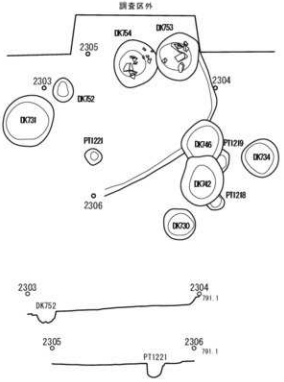


埋甕炉 (1/40)



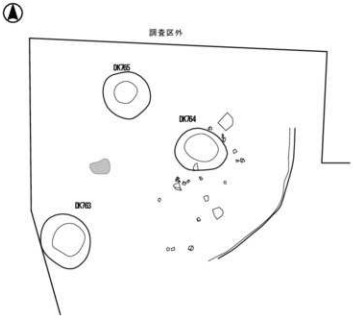
PJ176号住居
位置　I-5-2-2
時期　縄之内I式~2式
特記事項　保存状態不良で西半分削失,炉体土器あり,ハンマー,摩滅した頁岩小円礫

PJ-177(1/80)



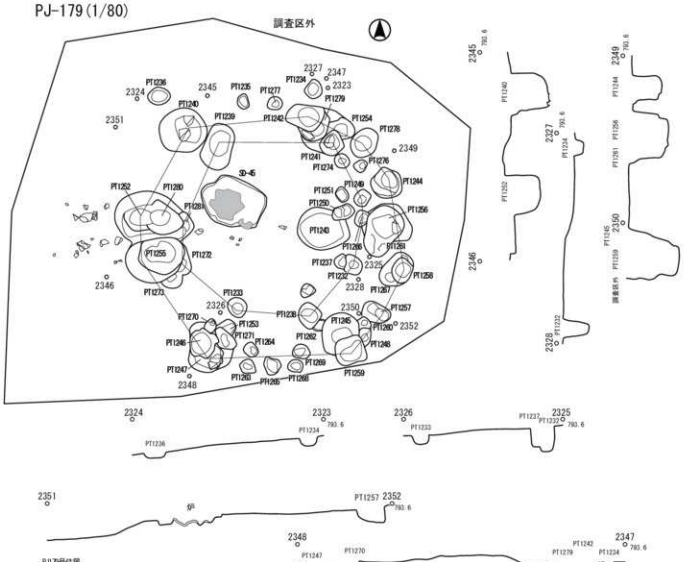
PJ177号住居
位置　I-14-4-2
時期　縄之内I式期
特記事項　保存状態不良で,住居かどうか不明瞭,縄之内I式土器小破片が出土,石器

PJ-178(1/100)



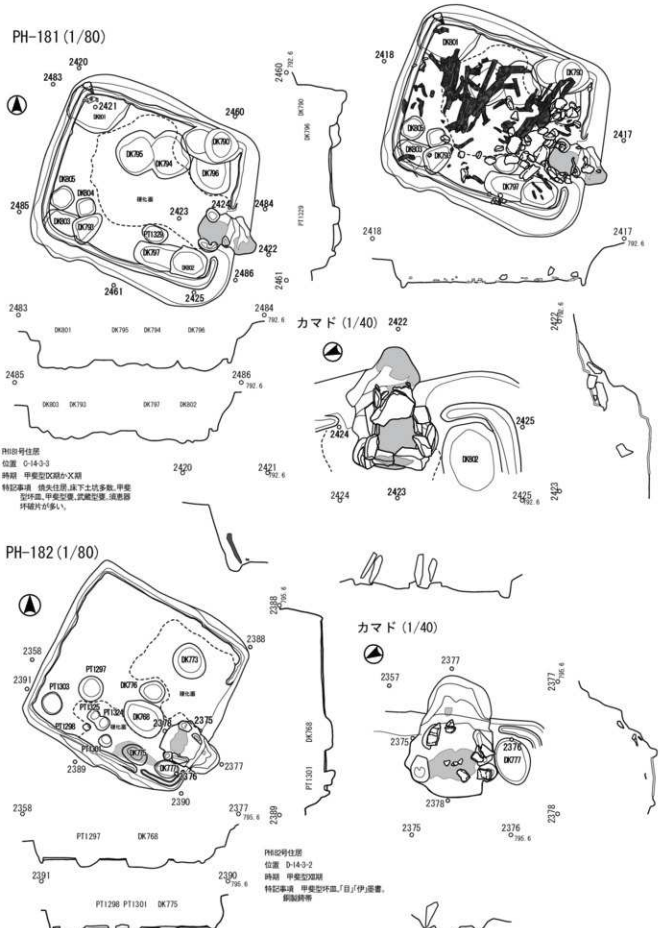
PJ178号住居
位置　K-14-4-1
時期　雪利V式期
特記事項　保存状態不良で,炉跡と思われる焼土を検出,3本主柱穴構造の住居かつ出土土器は加曽利E式土器が主で,称名寺式と縄之内式破片が混じる,敲石,黒曜石剥片

第 96 図　　PJ176 号住居・PJ177 号住居・PJ178 号住居



第 97 図　PJ179 号住居

PJ179 号住居炉



第 98 図　PH181 号住居・PH182 号住居

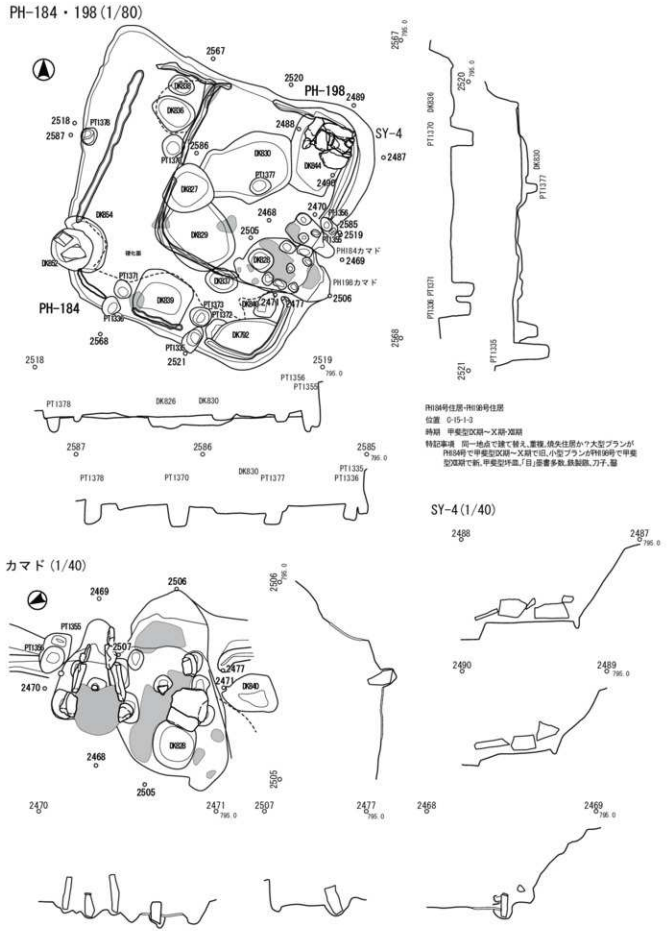
PH-183(1/80)

カマド(1/40)

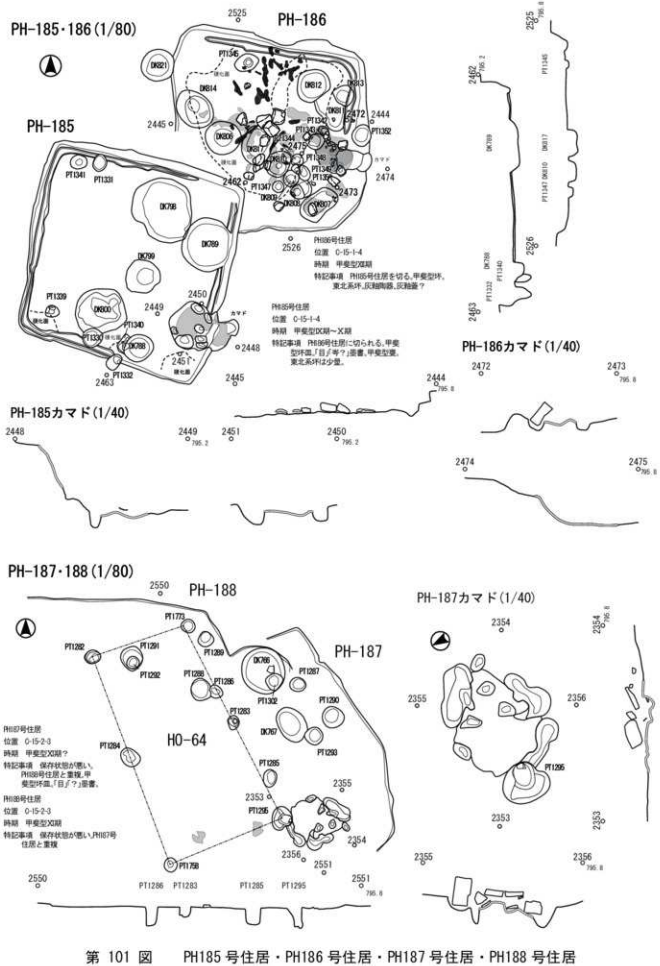
PH183号住居
位置　C-14-3-3
時期　平安時代
特記事項　4本主柱穴,厚手で独土質な甲斐型要,甲斐型X耳類
以降か？　鋼考

第 99 図　PH183 号住居

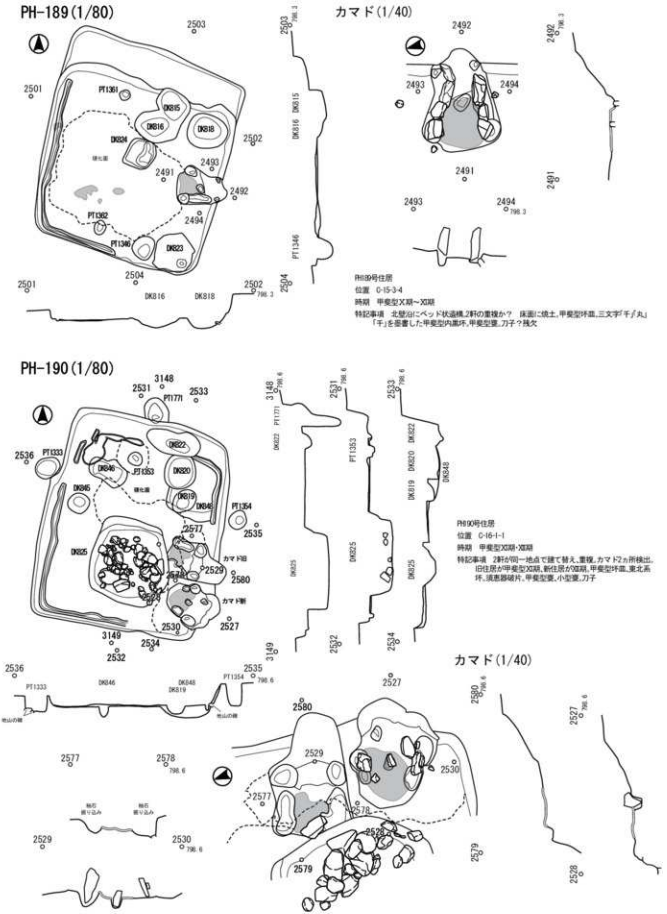
PH183 号住居



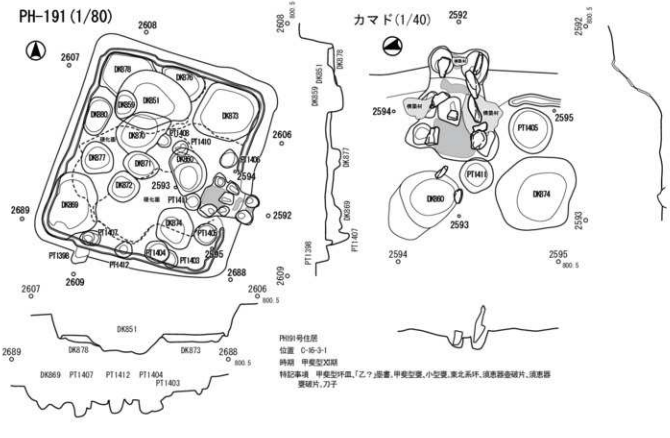
第 100 図　PH184 号住居・PH198 号住居

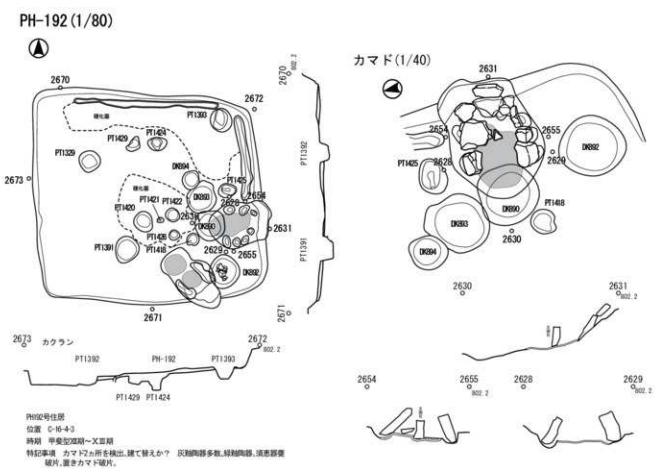


第 101 図　PH185 号住居・PH186 号住居・PH187 号住居・PH188 号住居



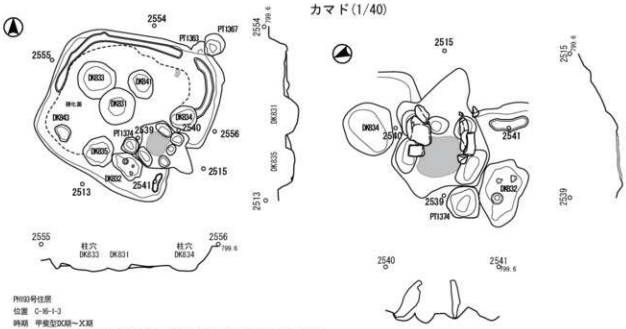
第 102 図　PH189 号住居・PH190 号住居





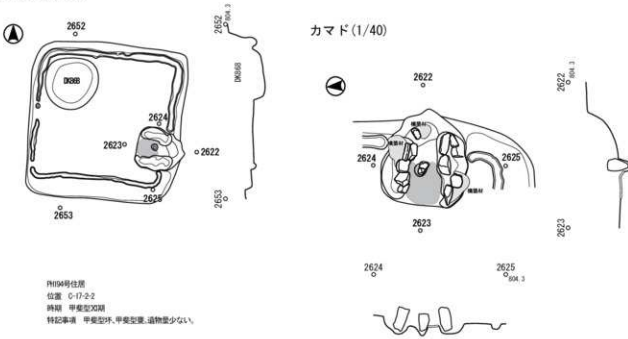
第 103 図　PH191 号住居・PH192 号住居

PH-193(1/80)



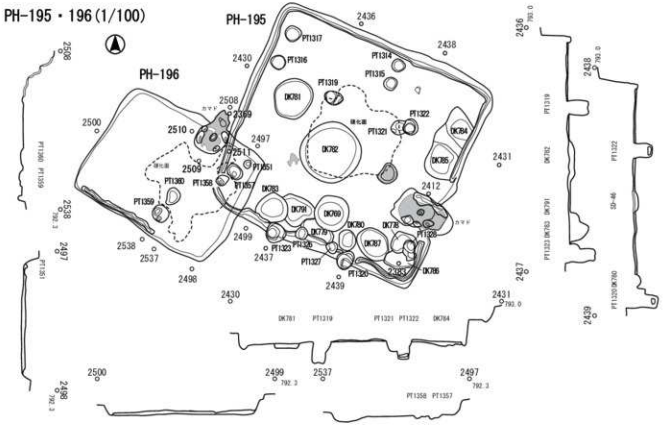
PH193号住居
位置　C-16-1-3
時期　甲類型XII期～X期
特記事項　甲類型坏類、甲類型壺、東北系坏、甲類型坏と同じ胎土質のロクロ成形壺、須恵器壺破片

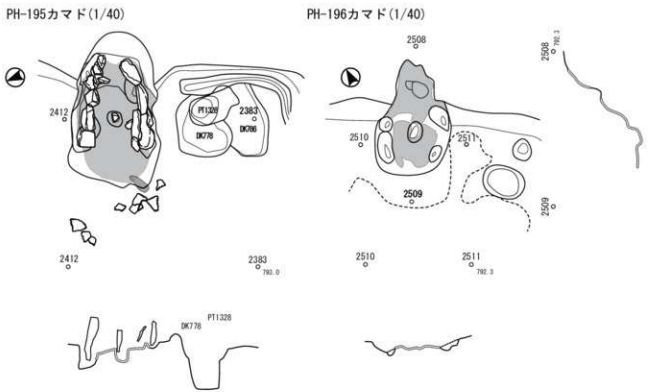
PH-194(1/80)



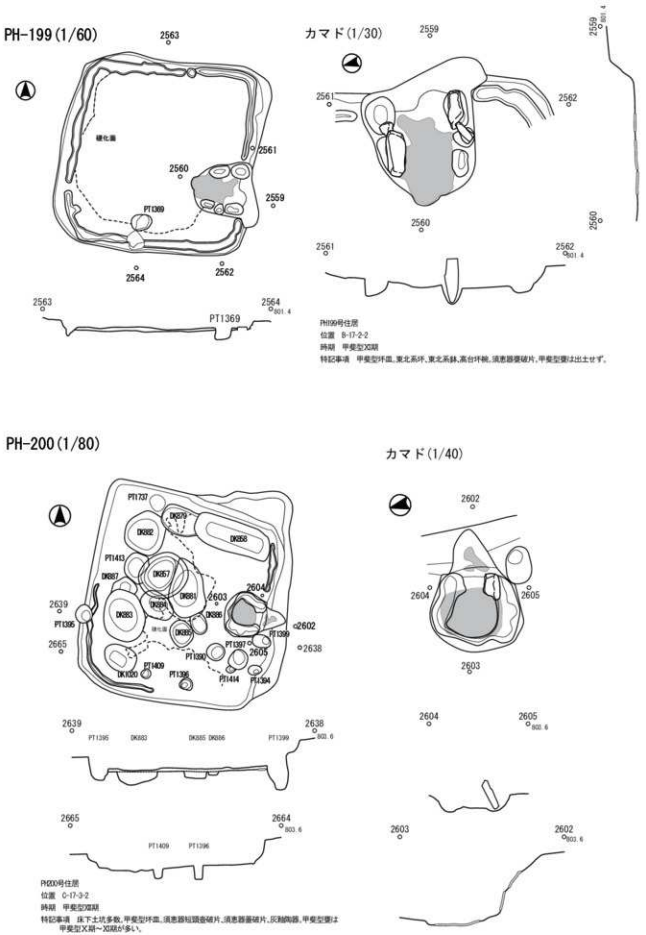
PH194号住居
位置　C-17-2-2
時期　甲類型XII期
特記事項　甲類型坏、甲類型壺、遺物量少ない。

第 104 図　PH193 号住居・PH194 号住居

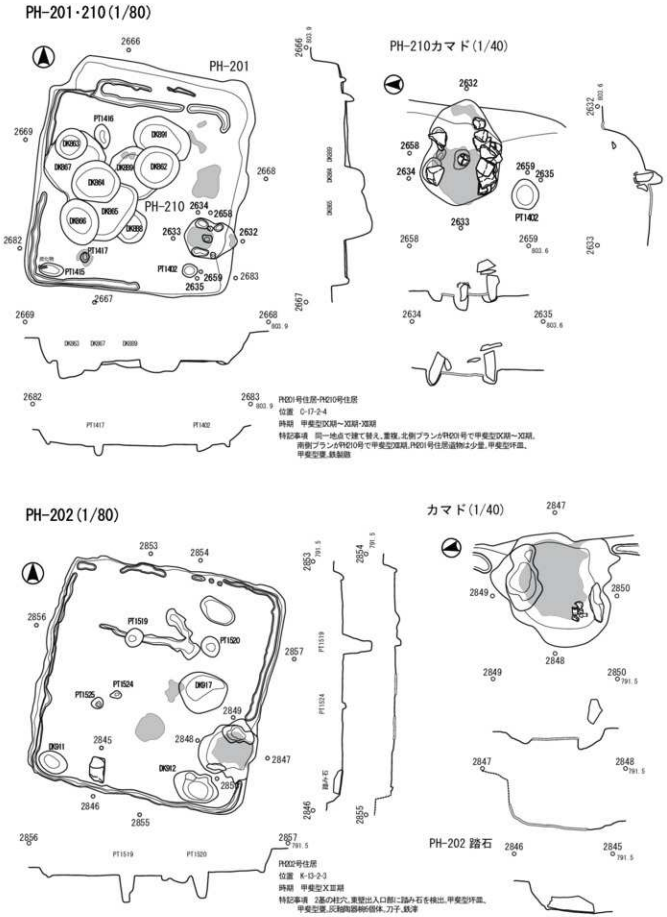




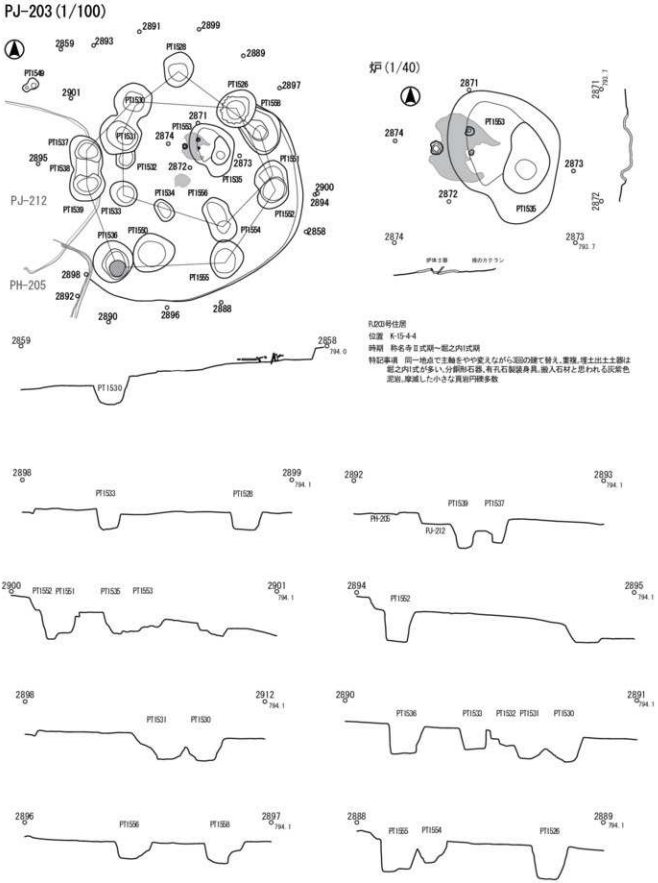
第 105 図　PH195 号住居・PH196 号住居



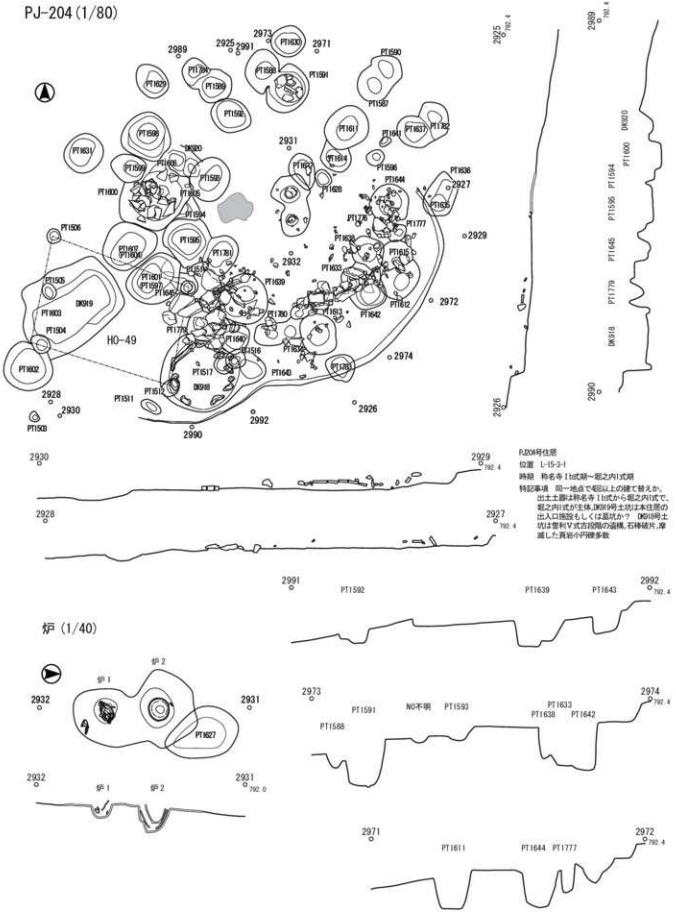
第 106 図　PH199 号住居・PH200 号住居



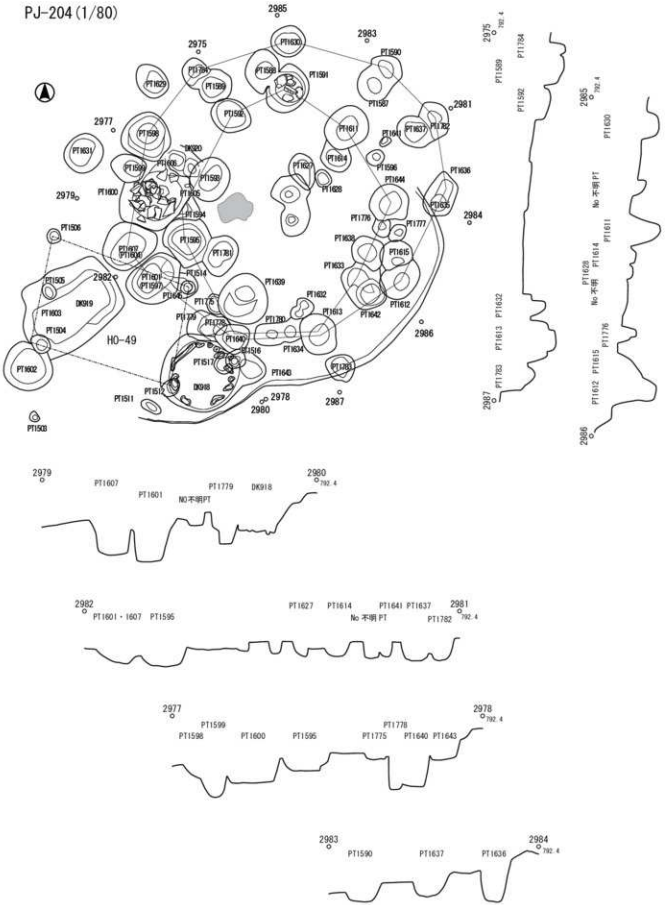
第 107 図　PH201 号住居・PH210 号住居・PH202 号住居



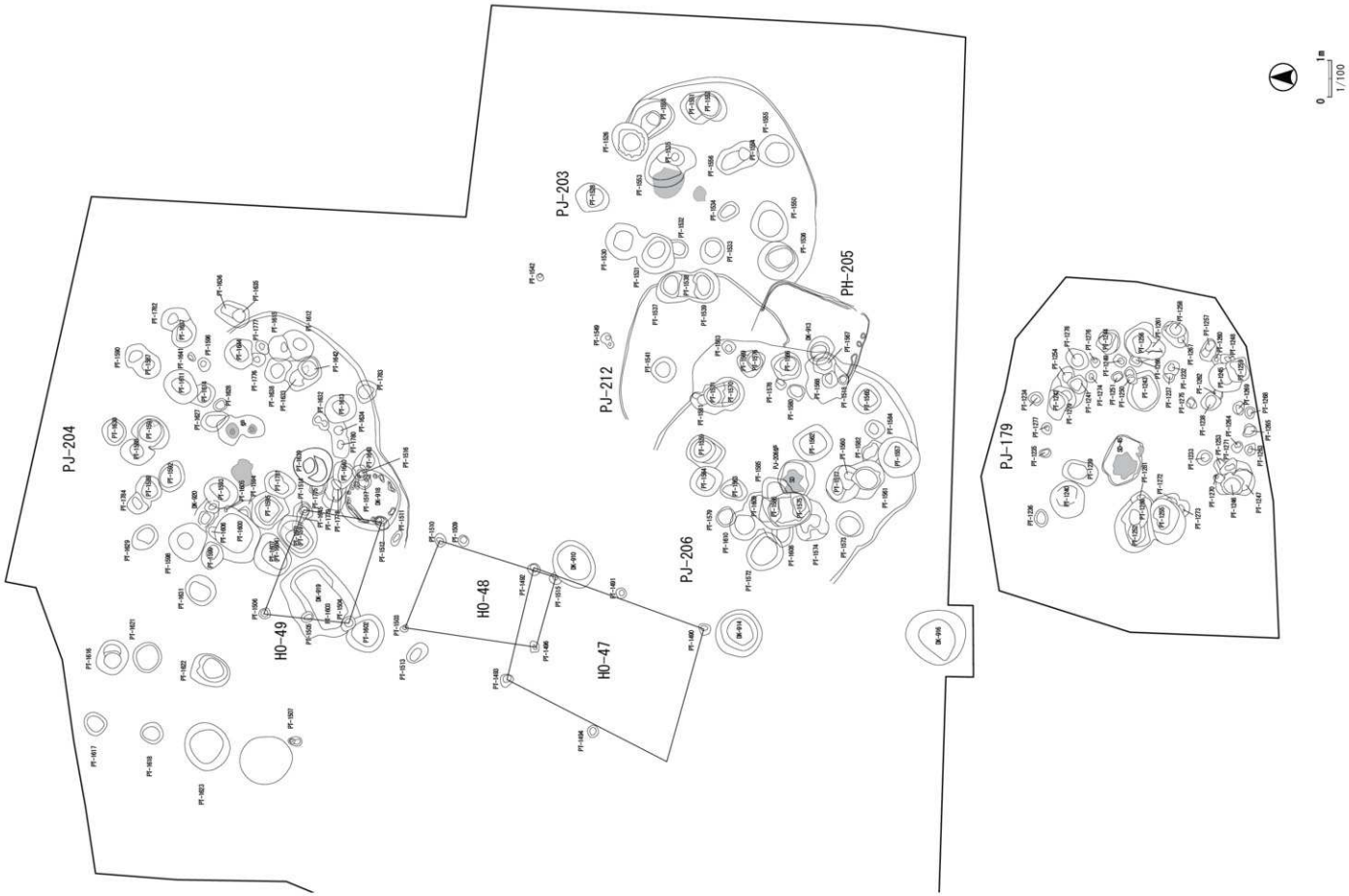
第 108 図　PJ203 号住居



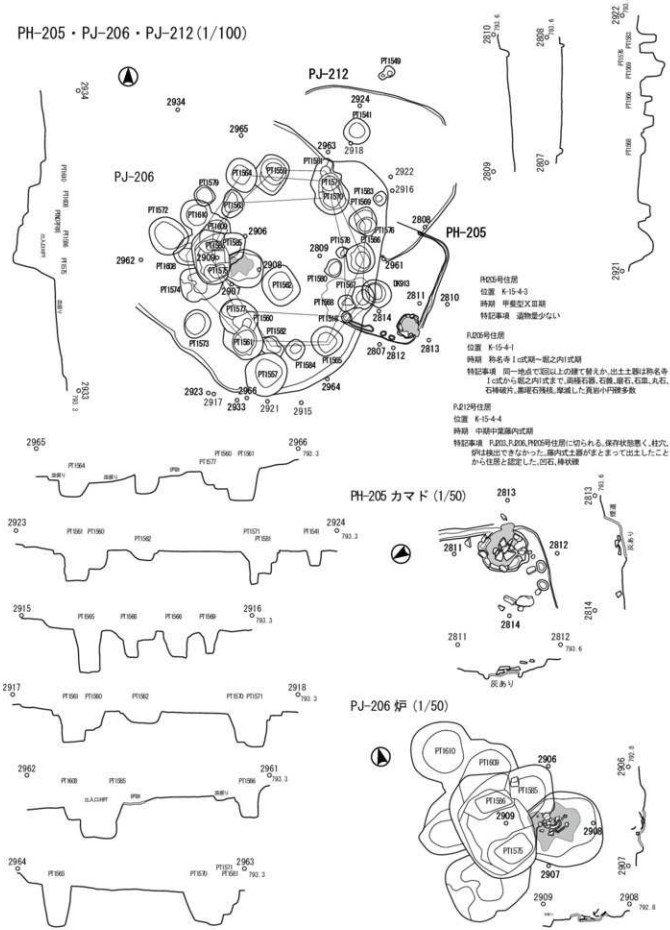
第 109 図　PJ204 号住居



第 110 図　　PJ204 号住居

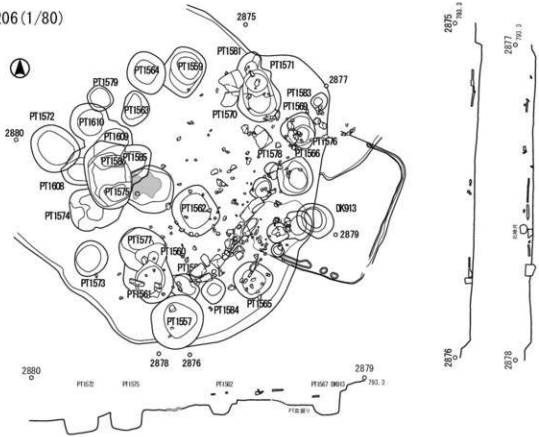


第 111 図　　後期住居の集中地点　PJ203 号住居周辺

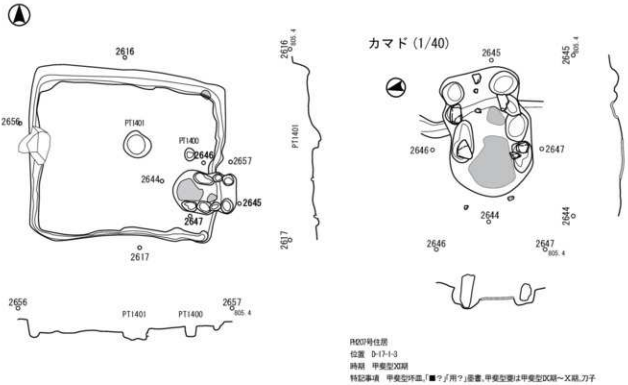


第 112 図　PH205 号住居・PJ206 号住居・PJ212 号住居

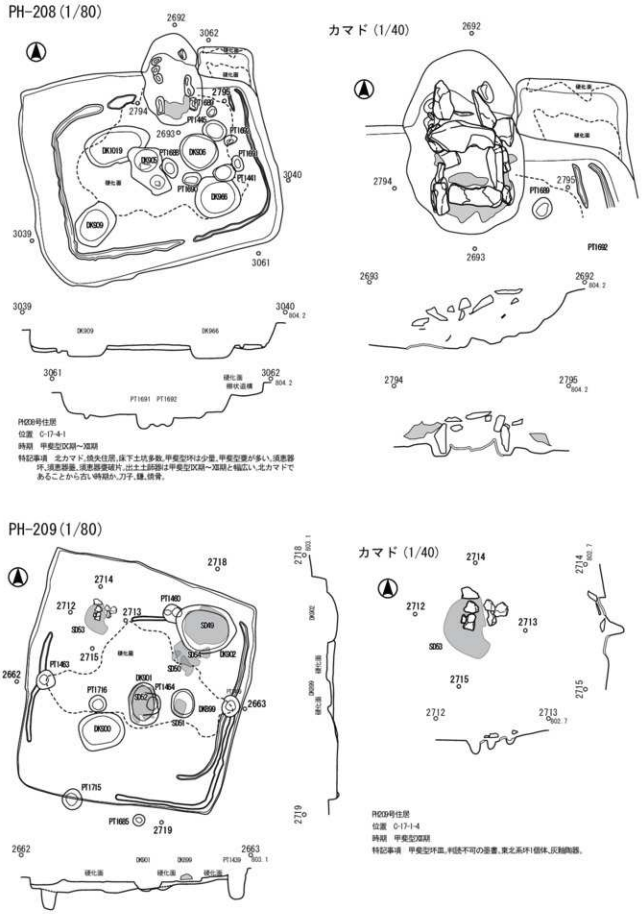
PJ-206(1/80)



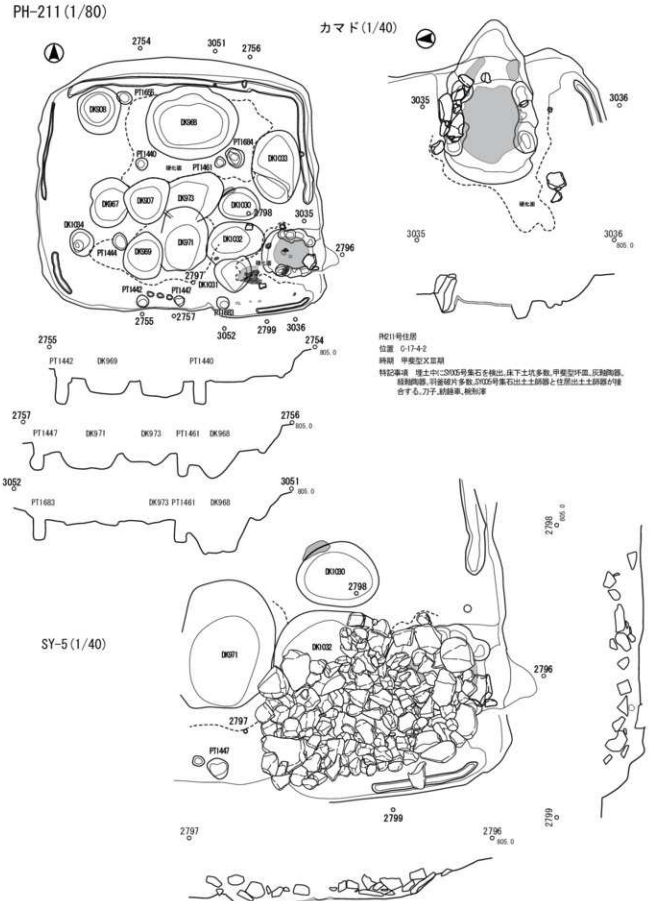
PH-207(1/80)



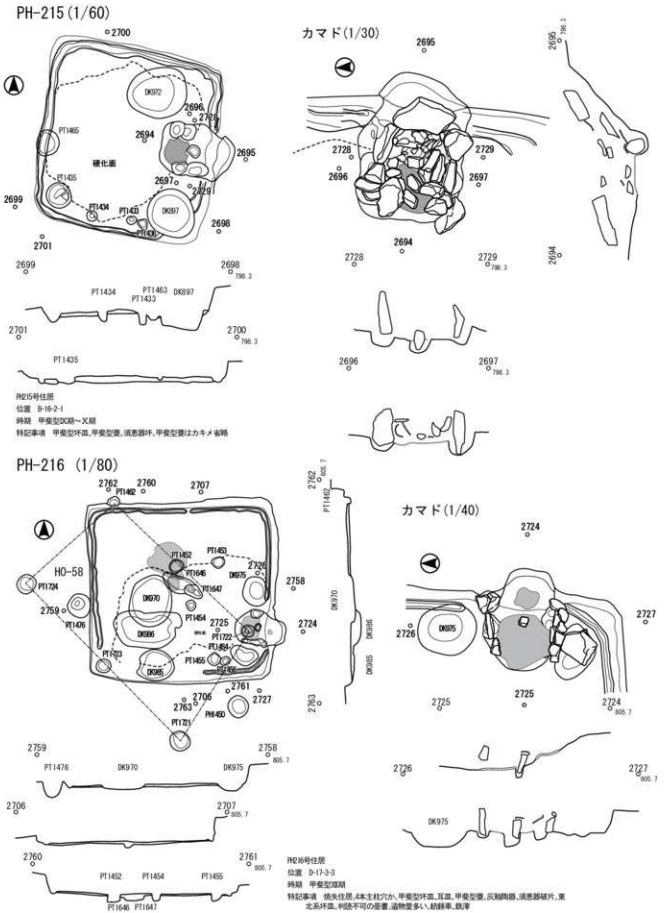
第 113 図　PJ206 号住居・PH207 号住居



第 114 図　PH208 号住居・PH209 号住居

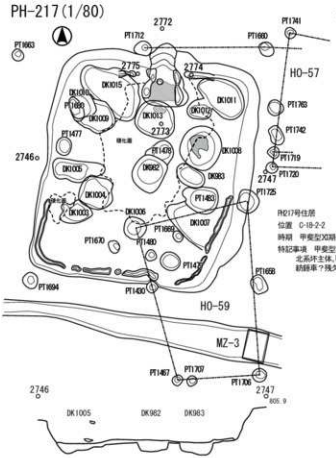


第 115 図　PH211 号住居・SY005 号集石

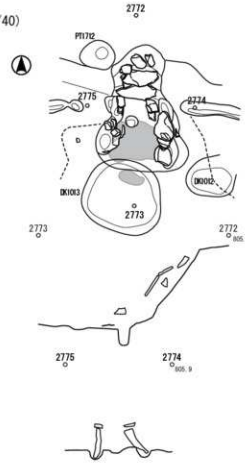


第 116 図　PH215 号住居・PH216 号住居

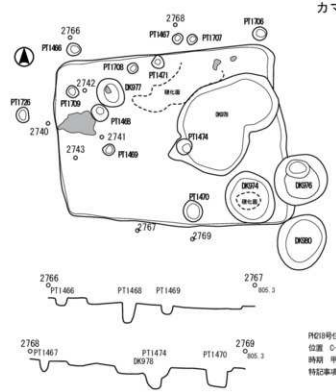
PH-217(1/80)



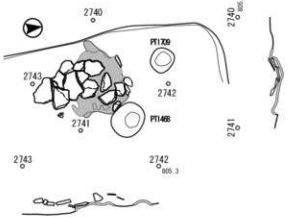
カマド(1/40)



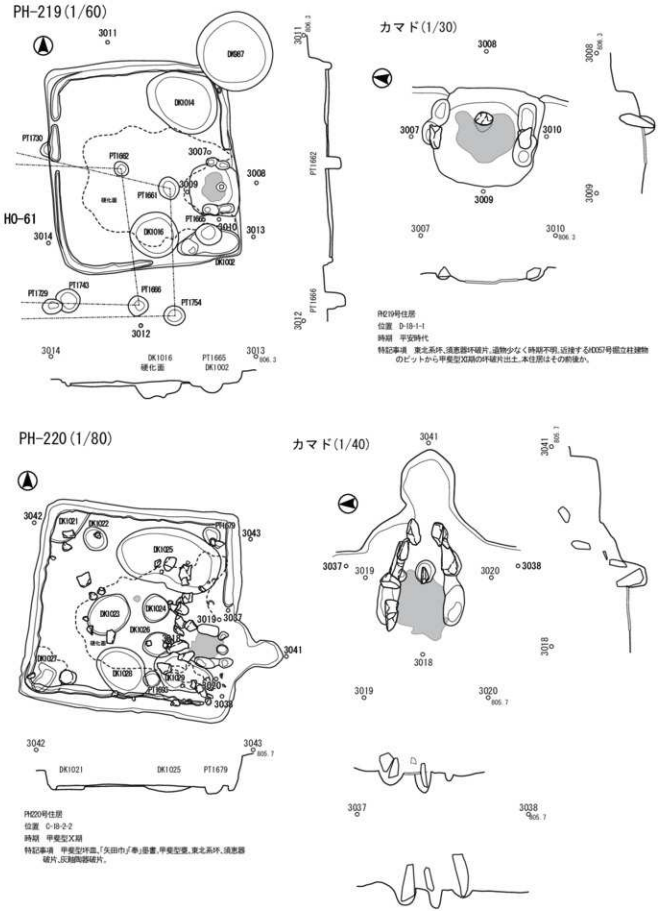
PH-218(1/80)



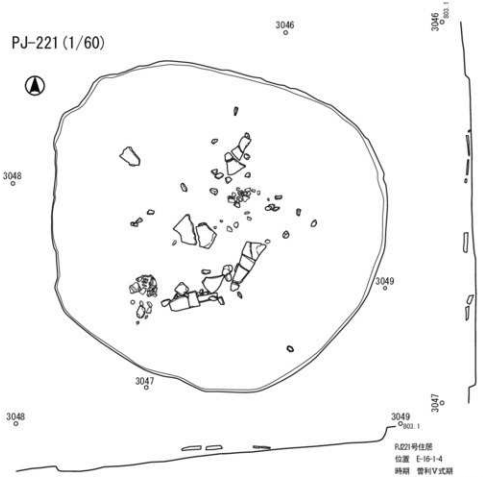
カマド(1/40)

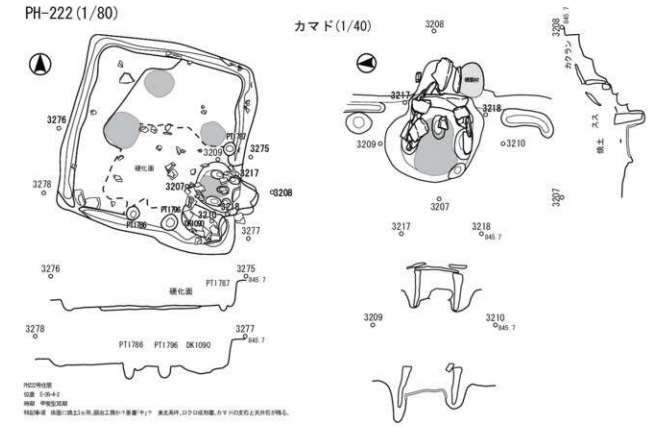


第 117 図　PH217 号住居・PH218 号住居

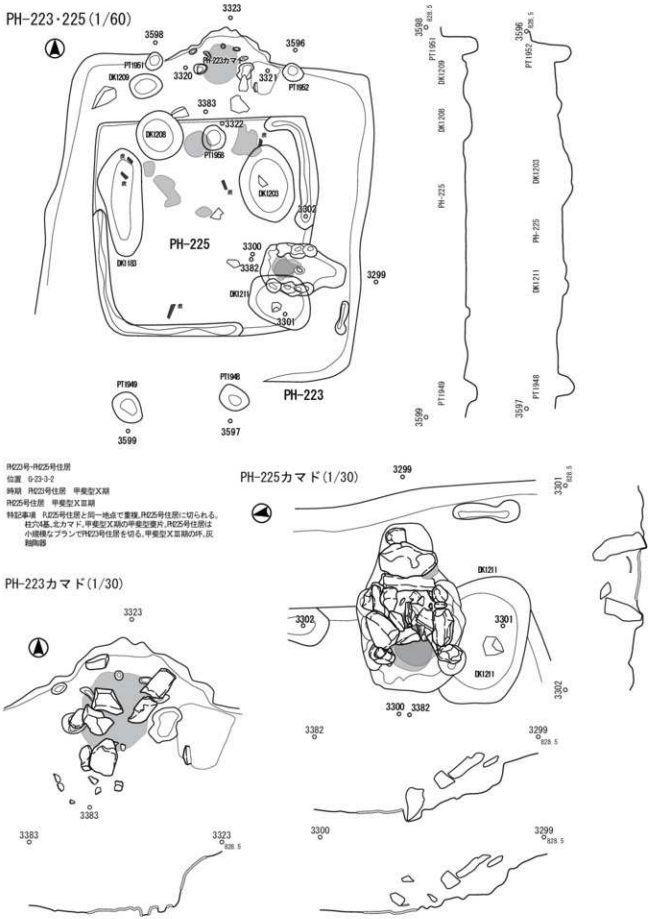


第 118 図　PH219 号住居・PH220 号住居

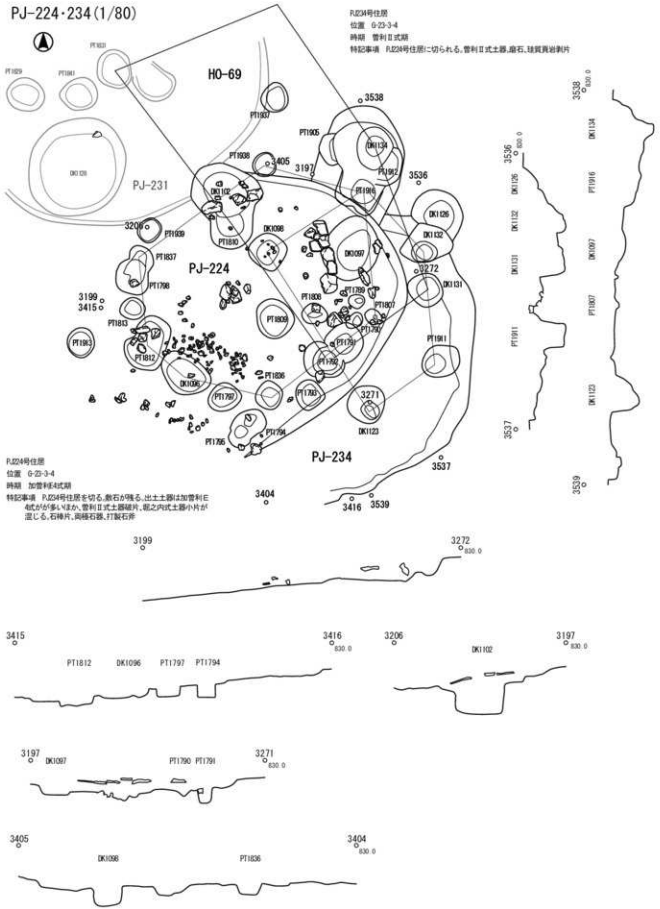




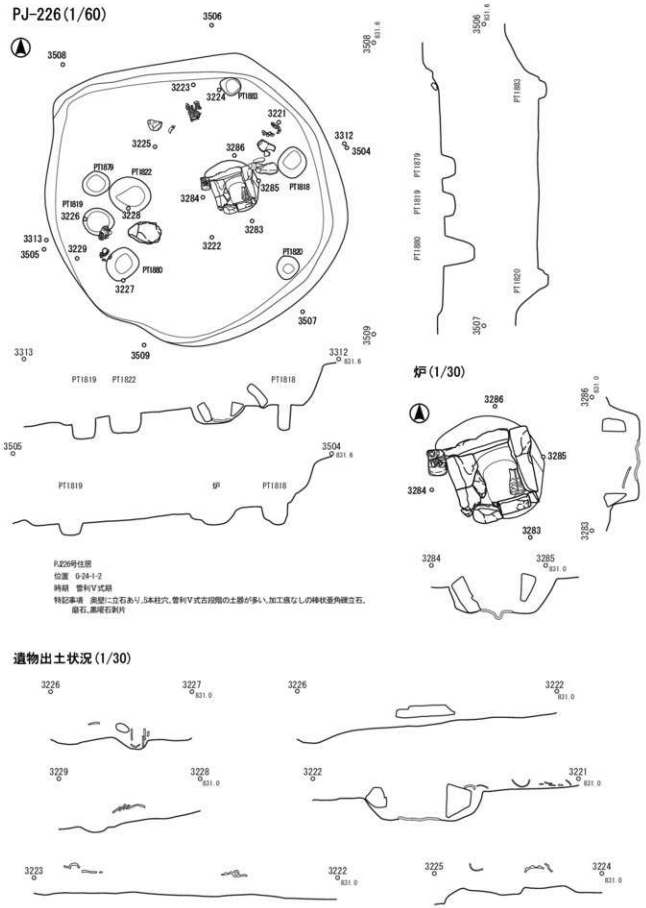
第 119 図　PJ221 号住居・PH222 号住居



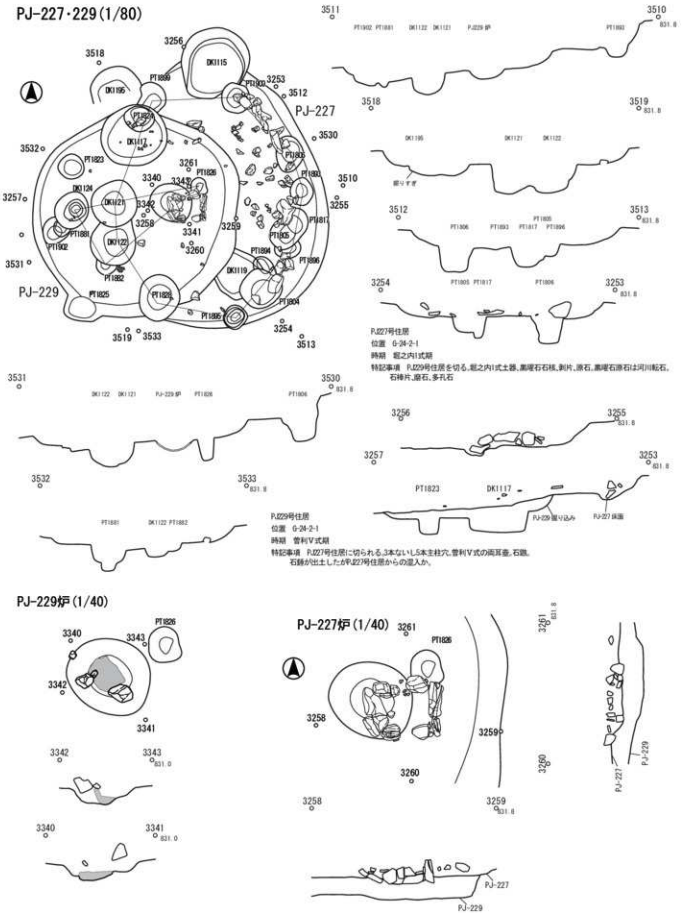
第 120 図　PH223 号住居・PH225 号住居



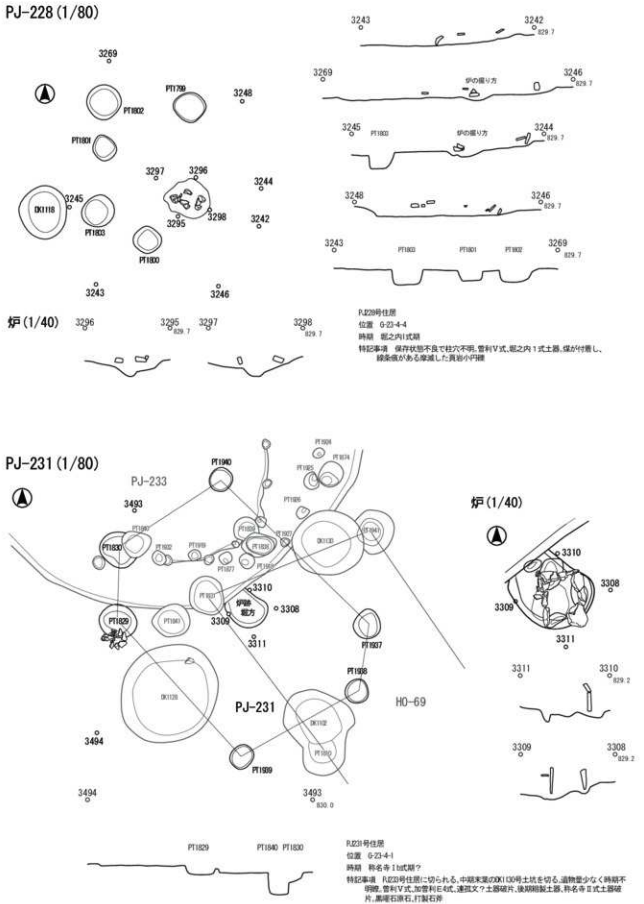
第 121 図　PJ224 号住居・PJ234 号住居



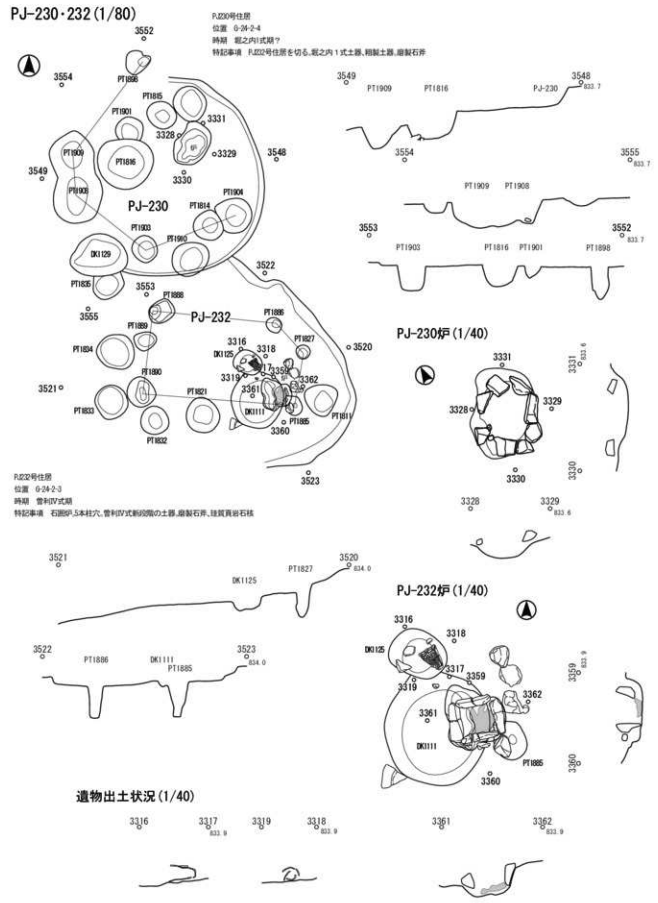
第 122 図　PJ226 号住居



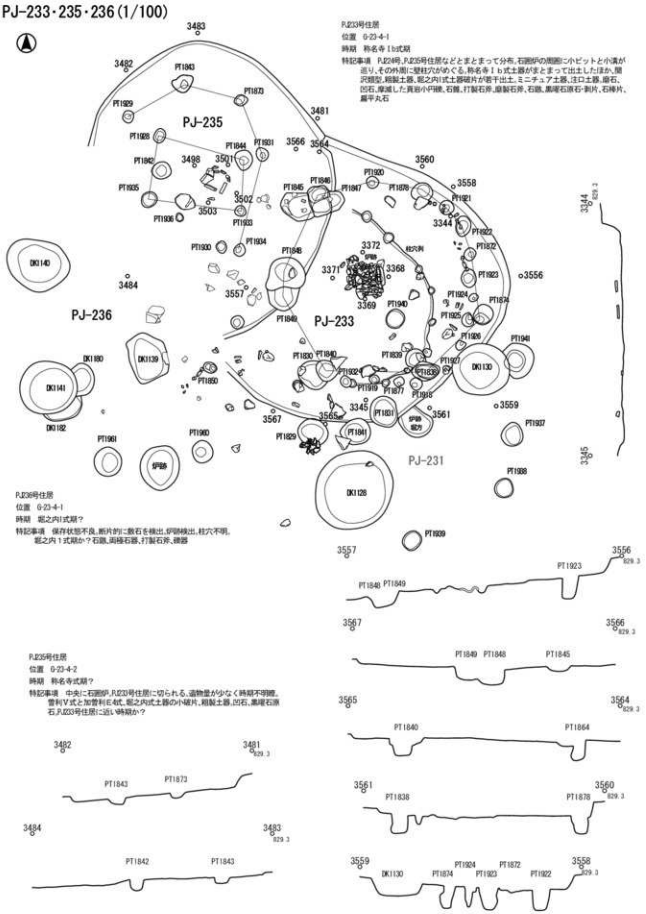
第 123 図　PJ227 号住居・PJ229 号住居



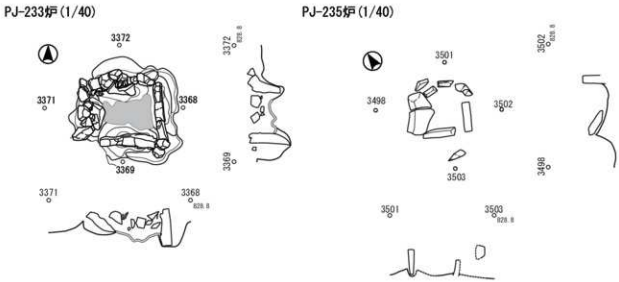
第 124 図　PJ228 号住居・PJ231 号住居



第 125 図　PJ230 号住居・PJ232 号住居

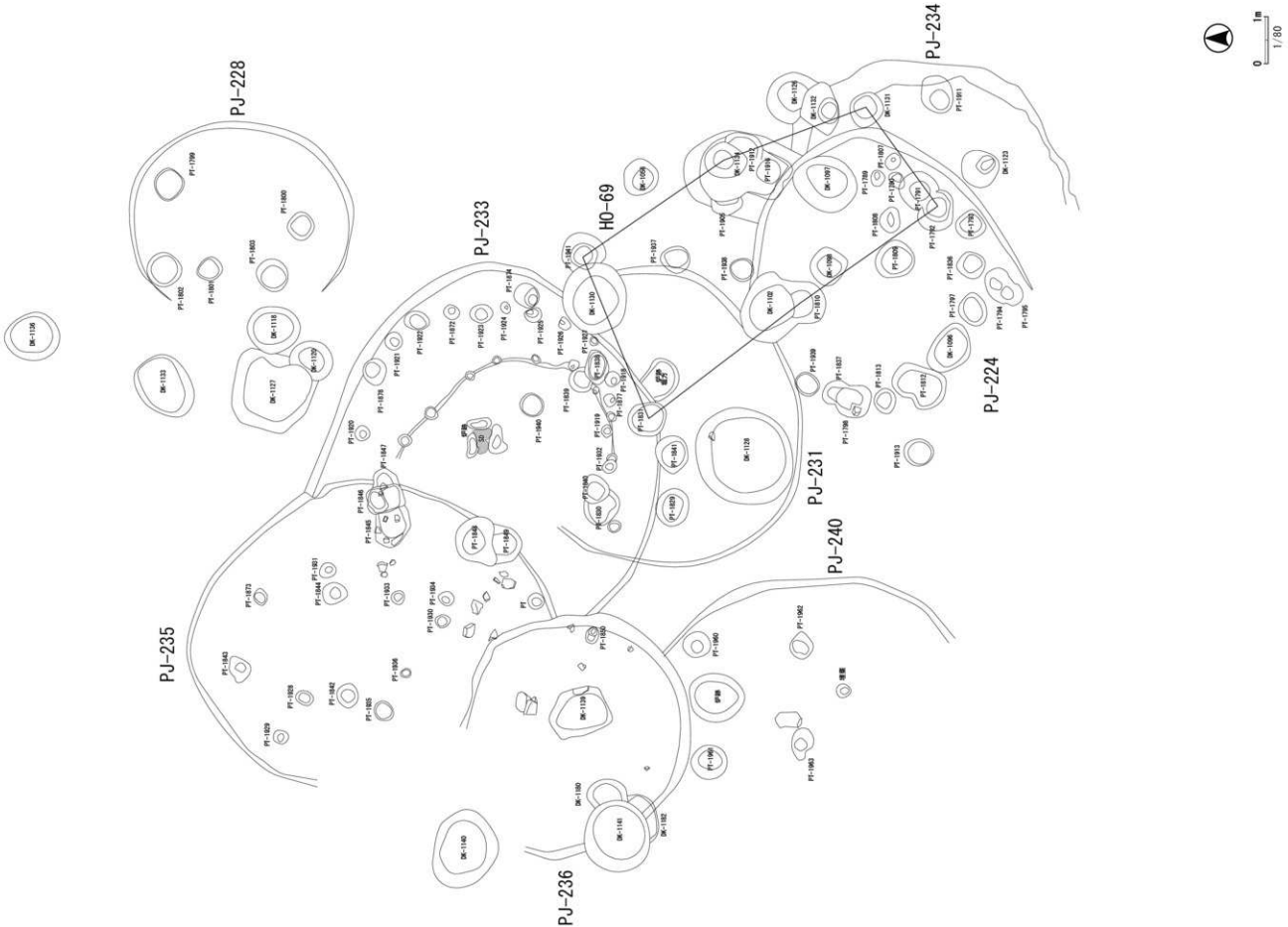


第 126 図　　PJ233 号住居・PJ235 号住居・PJ236 号住居

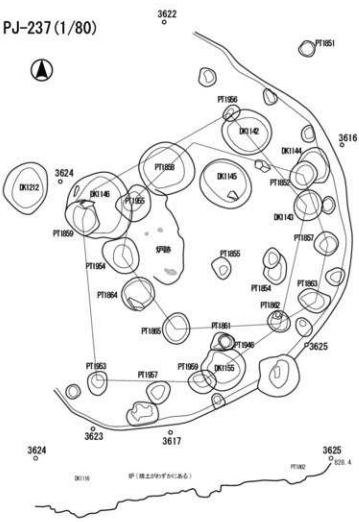


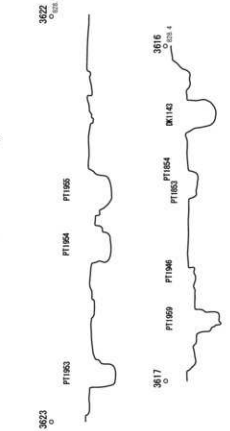
第 127 図　PJ233 号住居・PJ235 号住居

PJ236・235・233 号住居

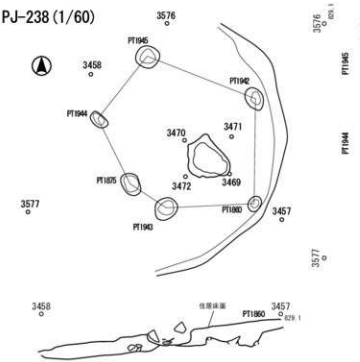


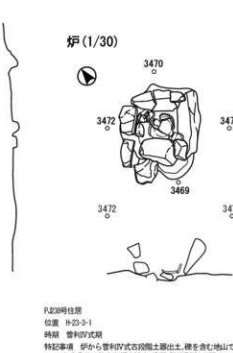
第128図　後期住居の集中地点　PJ233号住居周辺





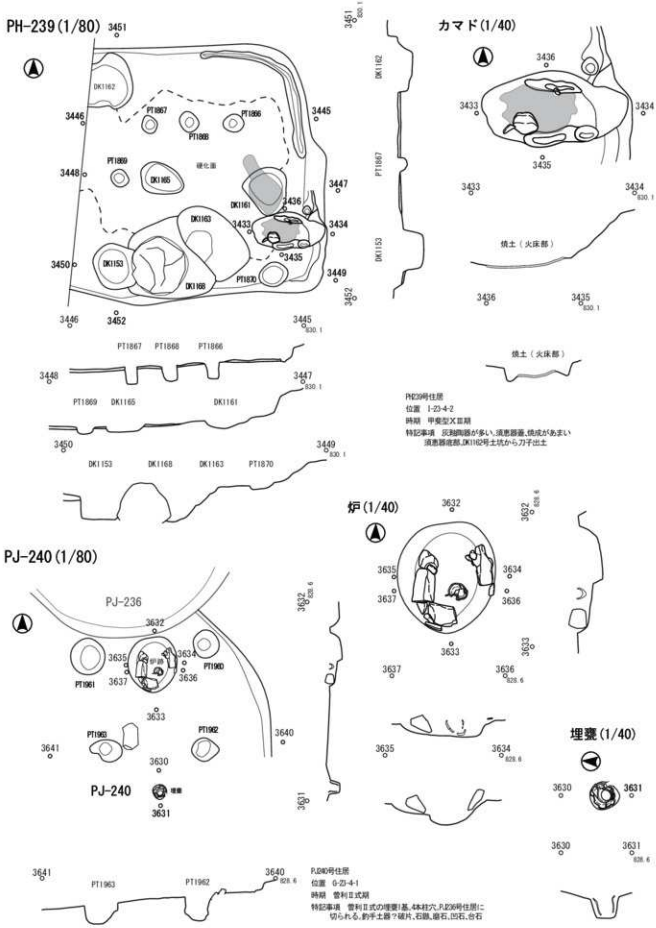
PJ237号住居
位置　H-23-3-1
時期　称名寺Ⅰb式期
特記事項　保存状態不良、建て替えあり、樹木根のため対ピットは1基のみ検出、壁柱穴、曽利Ⅳ式、加曽利E式、称名寺Ⅰb式、甕之内1式、加曽利B1式土器、中津式土器、土偶破片、石鏃、磨製石斧、石錐、黒曜石原石、砥石、多孔石、柱穴出土土器が称名寺Ⅰb式にまとまることから当該時期の遺構と推定。



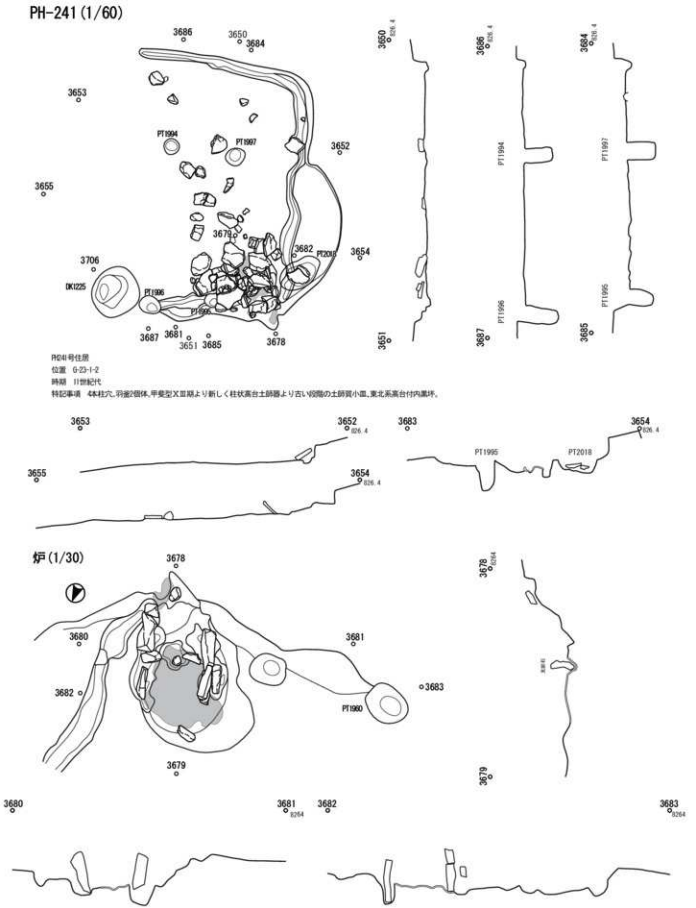


PJ238号住居
位置　H-23-3-1
時期　曽利Ⅳ式期
特記事項　炉から曽利Ⅳ式古段階土器出土、礫を含む地山でかろうじて柱穴と炉を検出、磨石、砥岩剥片、丸石

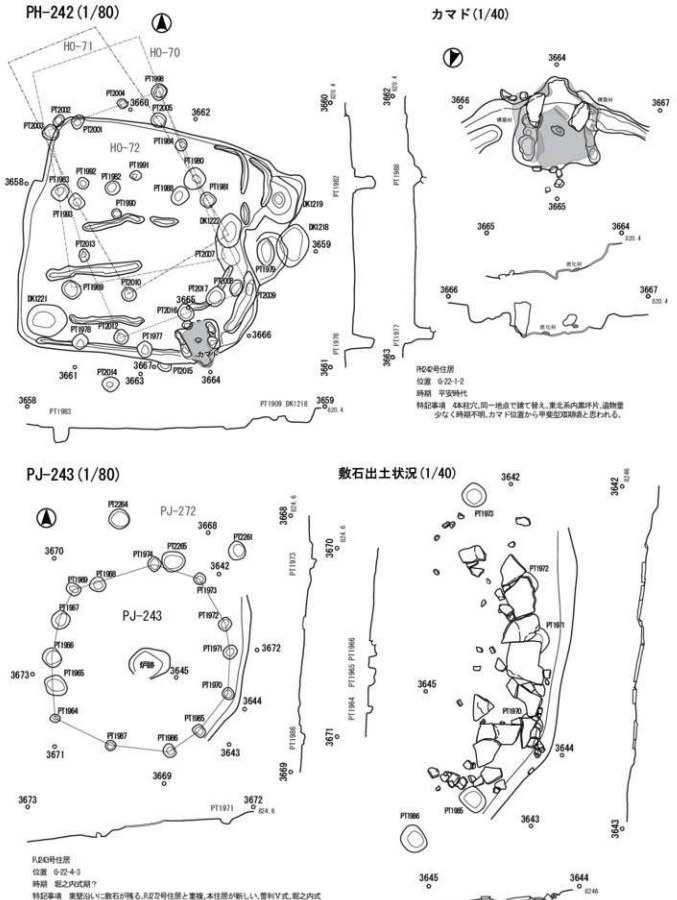
第 129 図　　PJ237 号住居・PJ238 号住居



第 130 図　PH239 号住居・PJ240 号住居

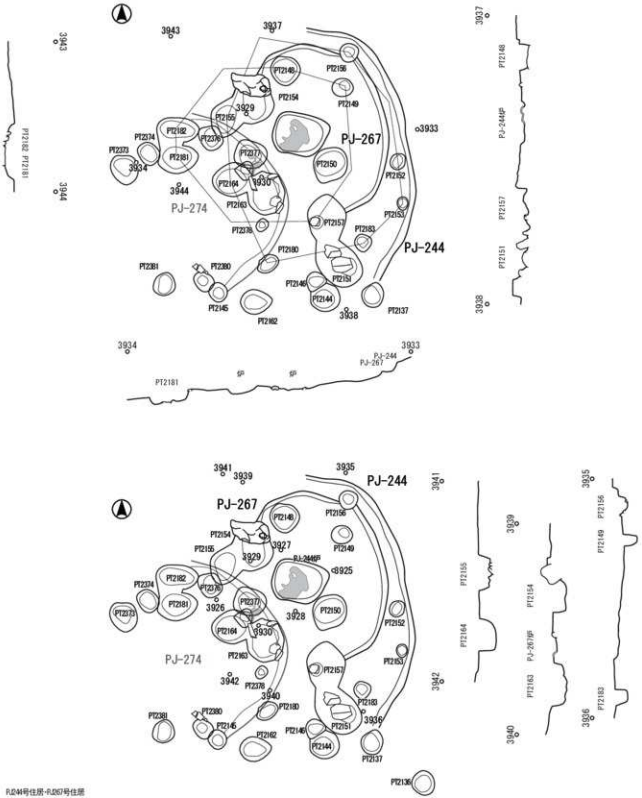


第 131 図　PH241 号住居



第 132 図　PH242 号住居・PJ243 号住居

PJ-244・267(1/80)



PJ244号住居・PJ267号住居

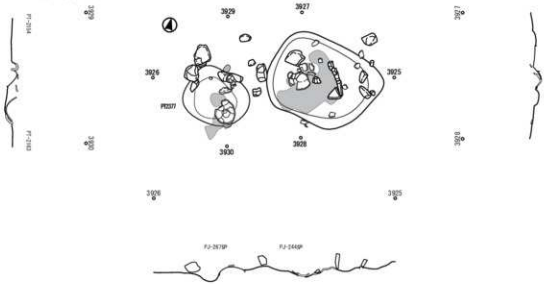
位置　H-23-1-4

時期　祖之内式期

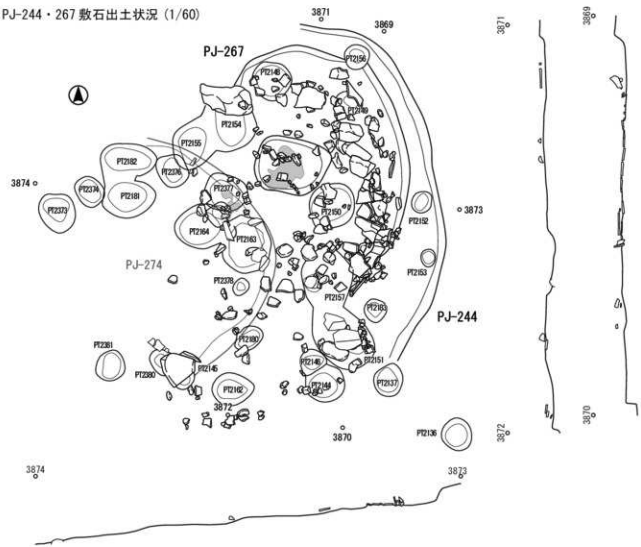
特記事項　PJ244号住居とPJ267号住居は建て替え関係にあると推測される。小規模なプランがPJ244号、一回り大きなプランがPJ267号。PJ274号住居を切る。PJ244号住居の東壁に敷石が残ることから、PJ267号→PJ244号の順に建て替えたと推測。PJ244号住居炉に後期初頭の炉体土器。PJ267号住居の炉から祖之内I式の炉体土器。下北原類型、関沢類型、摩滅した貫頭小円棒、敲石、石棒、磨製石斧、石皿。

第 133 図　PJ244 号住居・PJ267 号住居

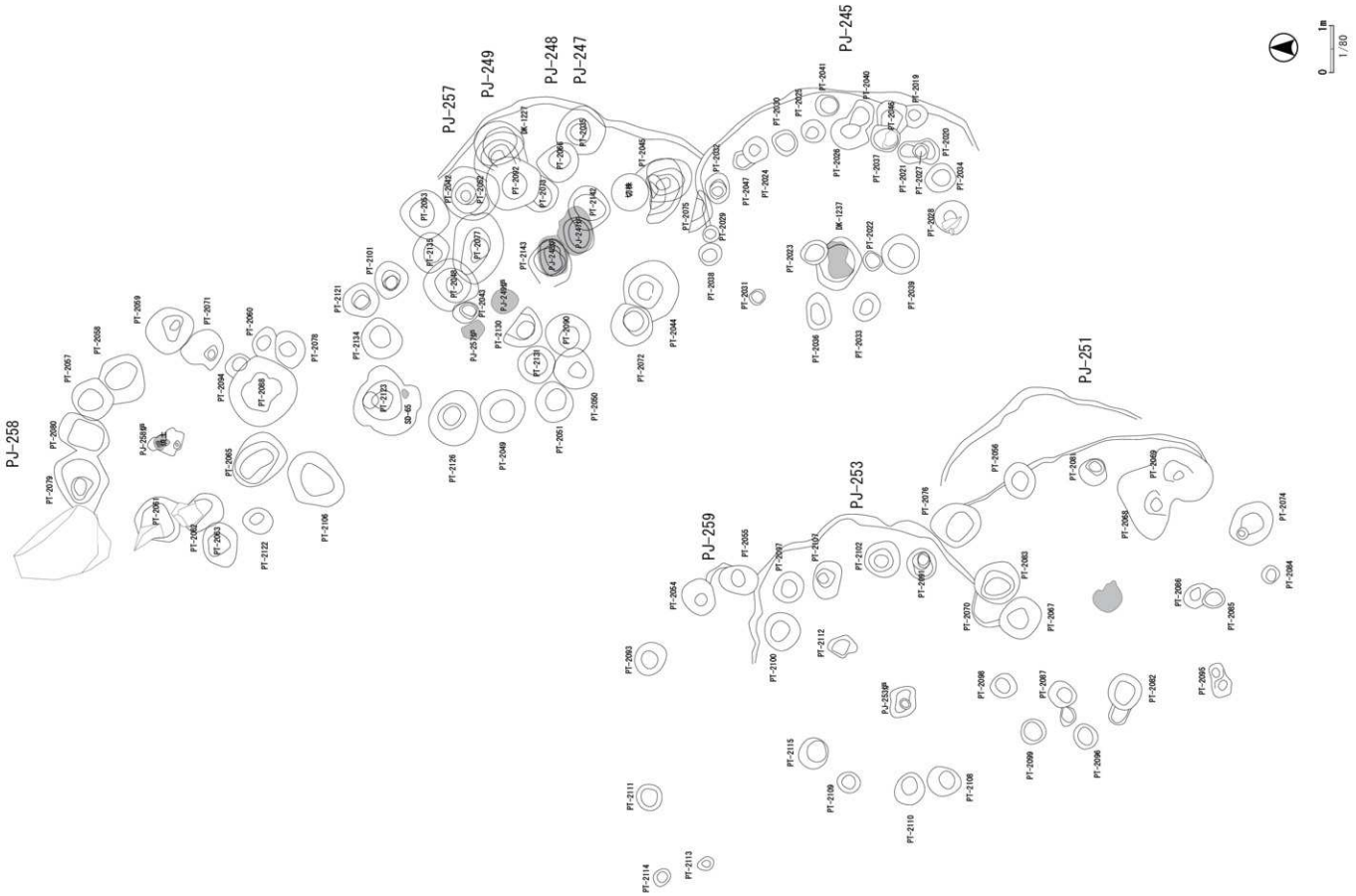
PJ-244・267 炉 (1/40)



PJ-244・267 敷石出土状況 (1/60)

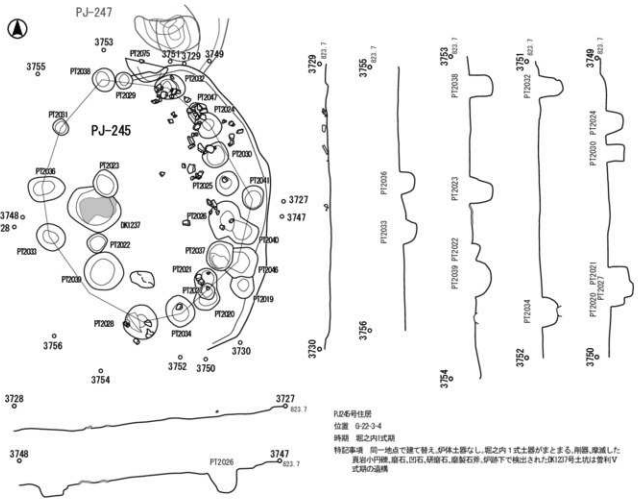


第 134 図　PJ244 号住居・PJ267 号住居



第135図　後期住居の集中地点　PJ245号住居周辺

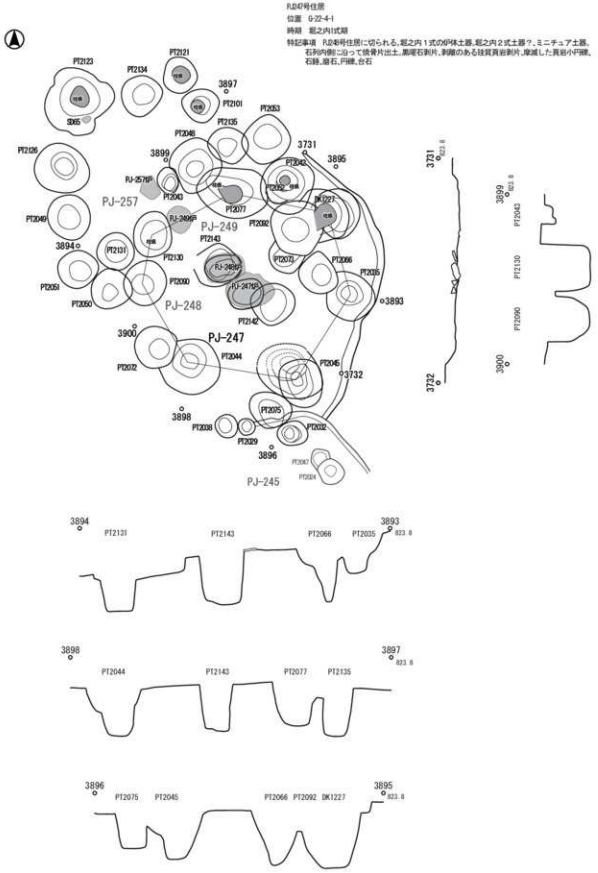
PJ-245 (1/80)



第 136 図　PJ245 号住居

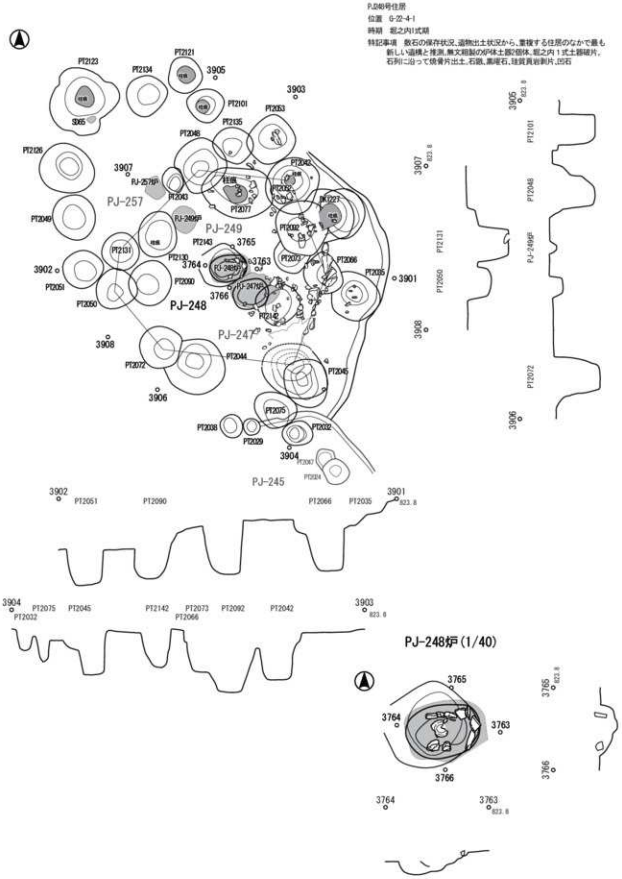
PJ245 号住居

PJ-247(1/80)



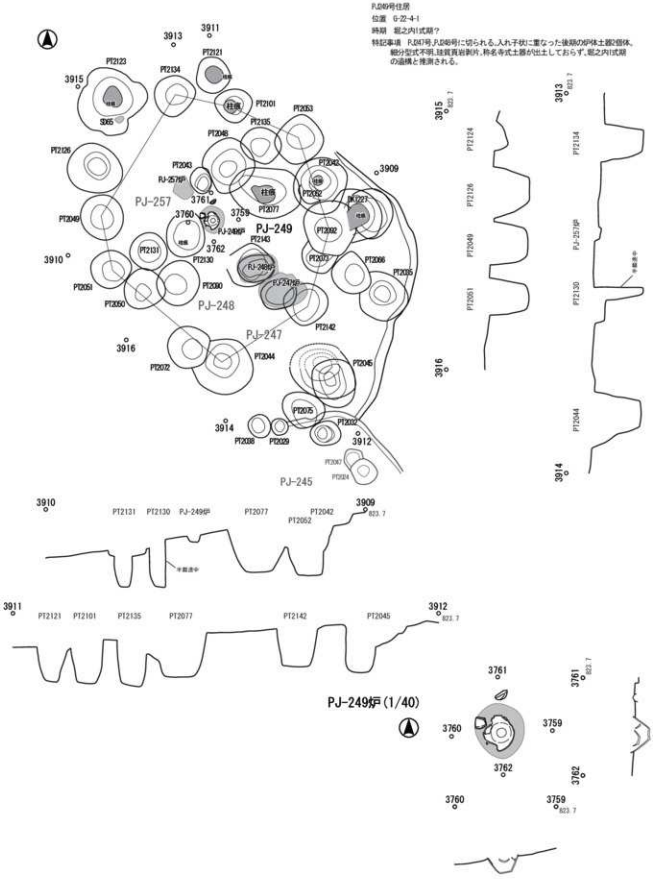
第 137 図　PJ247 号住居

PJ-248(1/80)



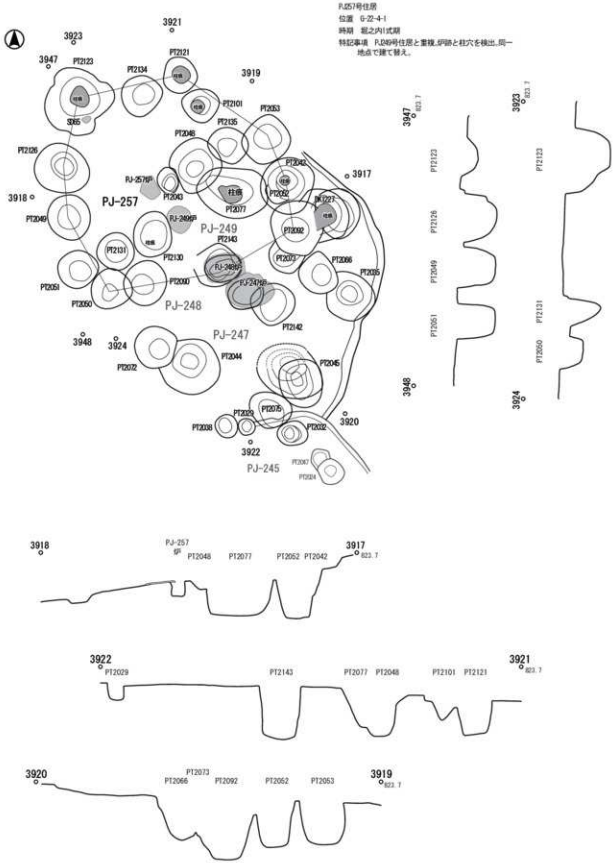
第 138 図　PJ248 号住居

PJ-249(1/80)



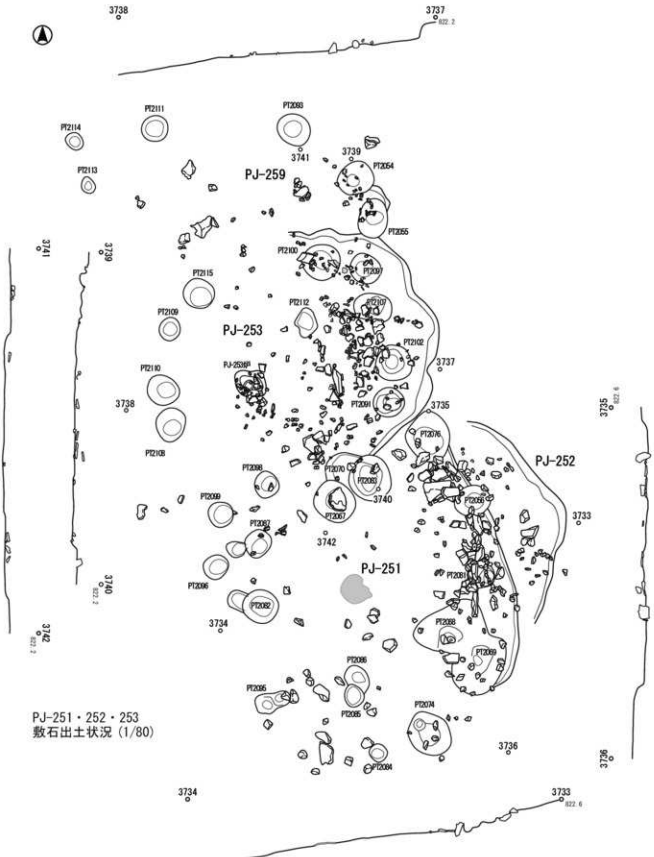
第 139 図　PJ249 号住居

PJ-257(1/80)

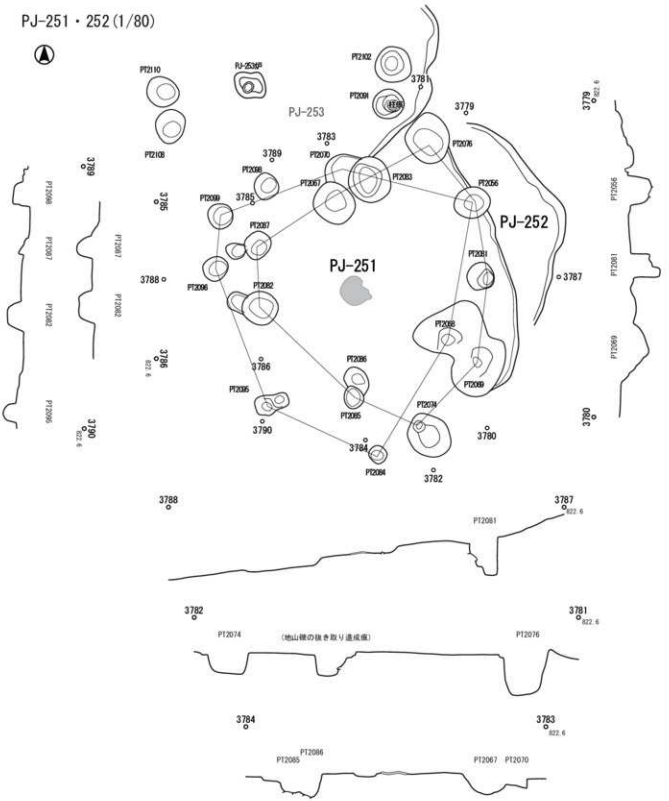


第 140 図　PJ257 号住居

PJ-251・252・253・259(1/80)



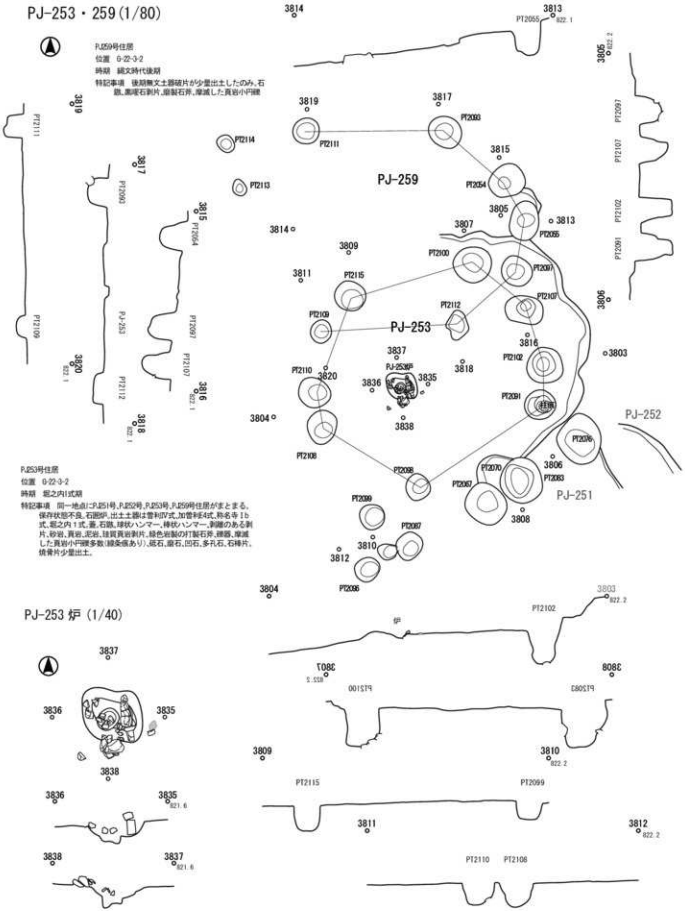
第 141 図　PJ251・252・253・259 号住居



PJ251号住居
位置　G-22-3-1
時期　堀之内1式期
特記事項　同一地点で1回の建て替え。堀之内1式土器、黒曜石、珪質頁岩剥片、打製石斧、摩滅した頁岩小円礫、ハンマー、磨石、凹石、切り目石錘、丸石。PJ251号住居がPJ252号住居よりも古いことから、PJ252号住居が旧い。

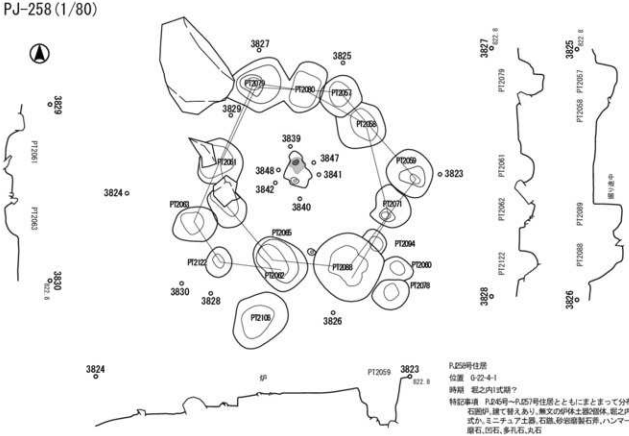
PJ252号住居
位置　G-22-3-1
時期　堀之内1式期
特記事項　PJ251号住居に切られる。堀之内1式土器、珪質頁岩剥片。PJ251号住居と別名称を付したが、PJ251号住居の建て替えに伴う旧居住段階かも。

第 142 図　PJ251 号住居・PJ252 号住居



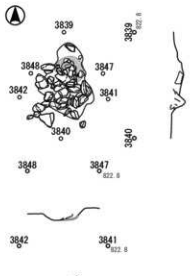
第 143 図　PJ253 号住居・PJ259 号住居

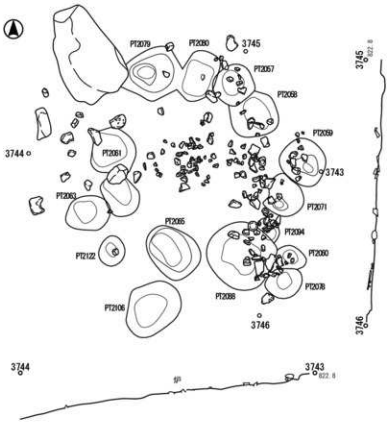
PJ-258 (1/80)



PJ-258 敷石出土状況 (1/80)

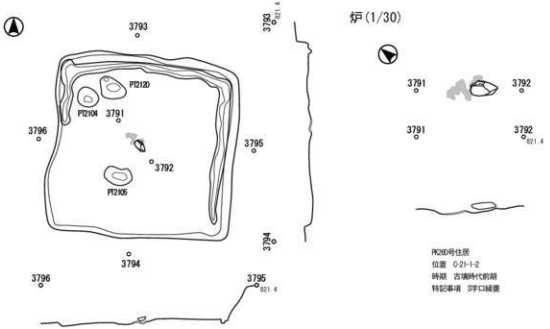
PJ-258 炉 (1/40)



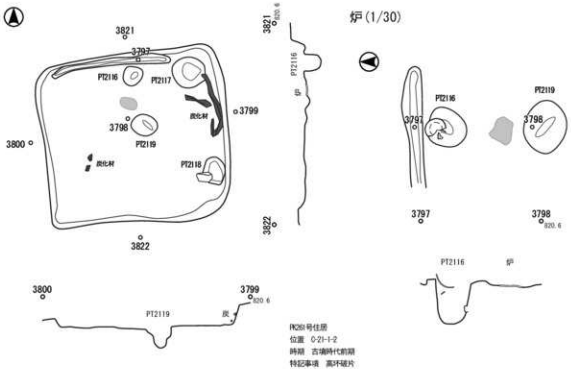


第 144 図　PJ258 号住居

PK-260 (1/60)

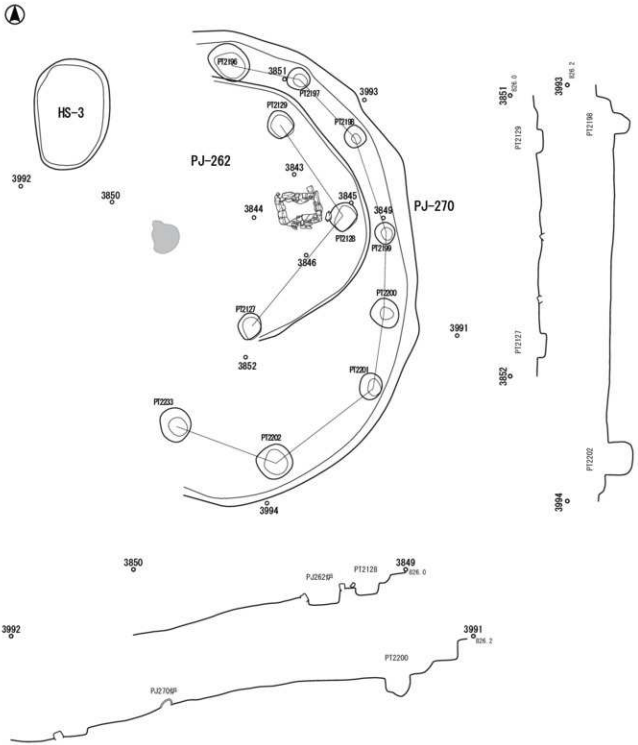


PK-261 (1/60)



第 145 図　PK260 号住居・PK261 号住居

PJ-262・270(1/60)



PJ262号住居・PJ270号住居

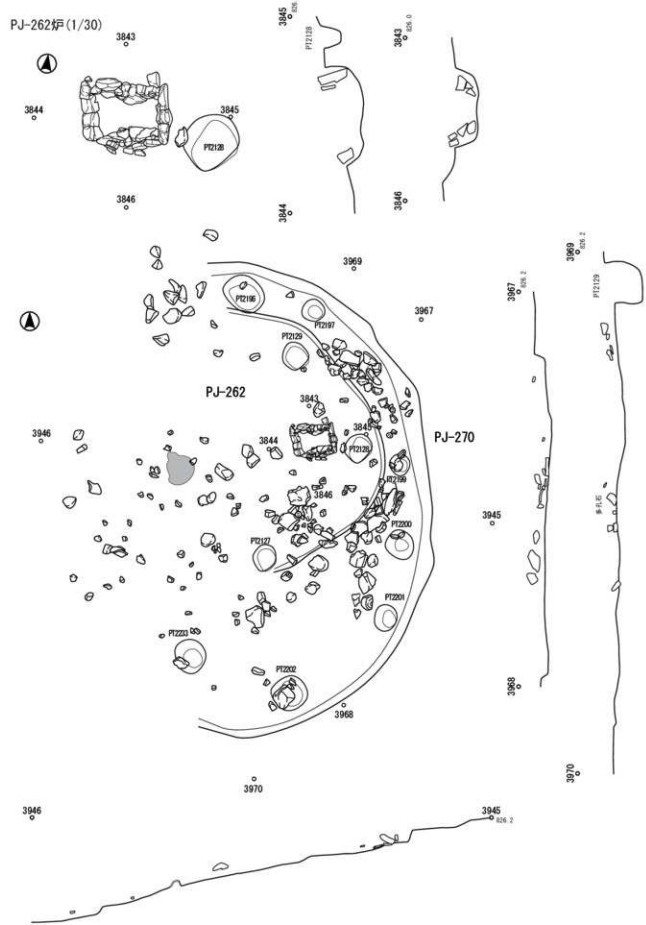
位置　9-23-2-2

時期　PJ262 弥利V式期　PJ270 鬼之内式期とする

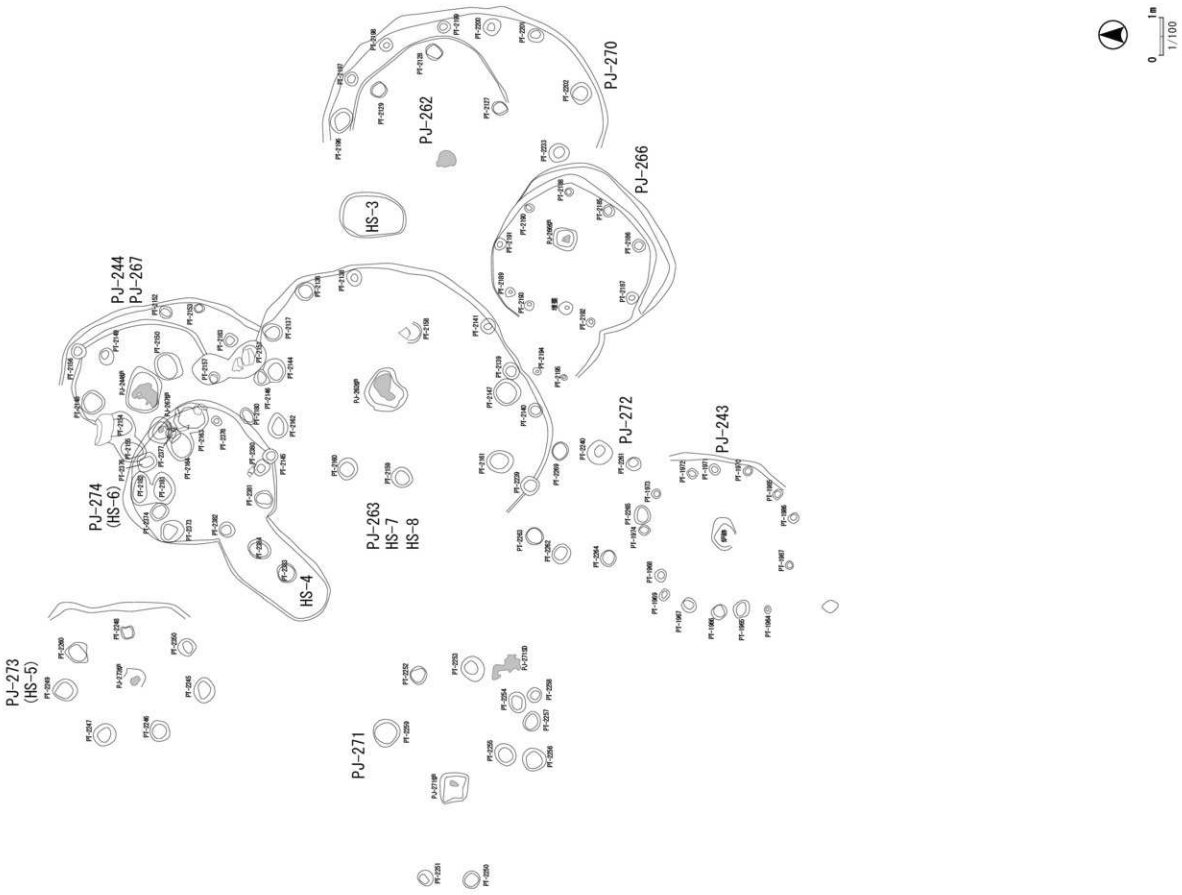
特記事項　PJ262号住居とPJ270号住居が重複,建て替え関係か？ PJ262号住居の炉内から加曽利E3式ないしE4式土器が出土,出土遺物に弥利V式,鬼沢類型,称名寺式土器破片が混じる,磨製石斧,磨石,凹石,ハンマー,加工した球状礫,石鏃,台石片。

PJ270号住居炉から中期末葉土器破片,出土土器は弥利V式古段階が多いほか,称名寺式,鬼之内式土器破片が出土,摩滅した貝殻小円礫,研磨具？,磨石,凹石,砥石,楕磨石,剥器,石鏃,礫器,多孔石,打製石斧,ハンマー,石錘。

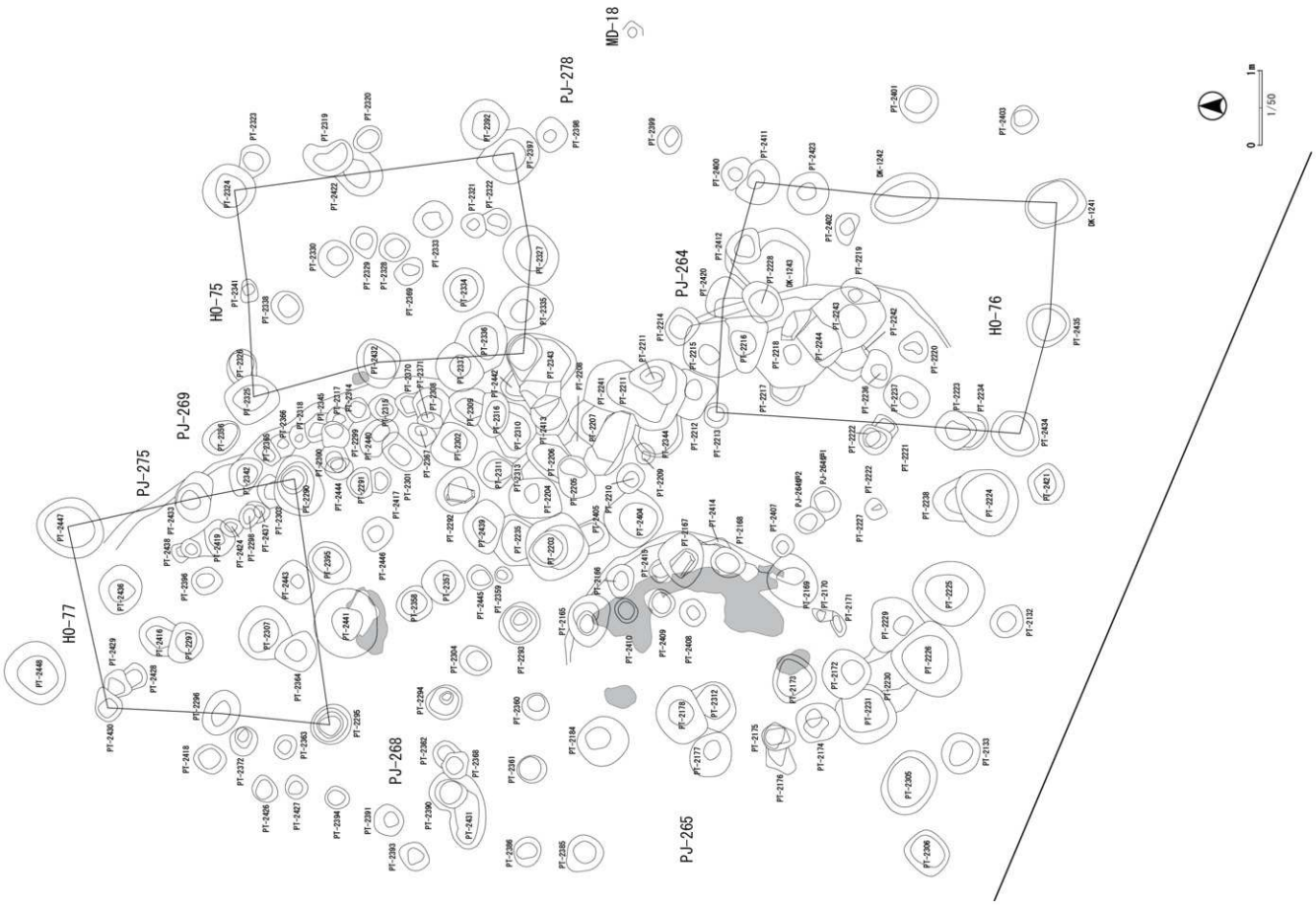
第 146 図　PJ262 号住居・PJ270 号住居



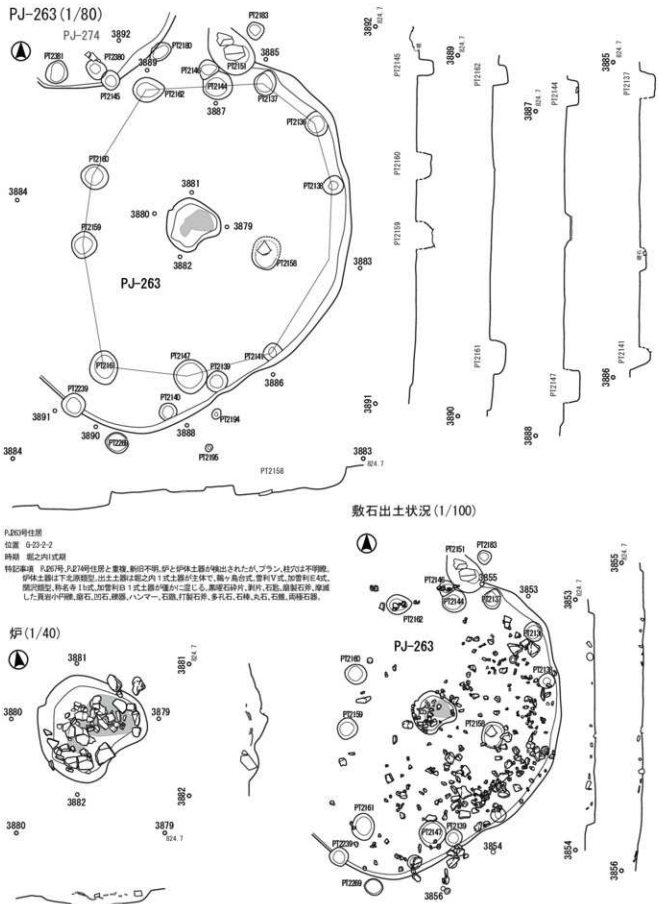
第 147 図　PJ262 号住居・PJ270 号住居



第 148 図　　後期住居の集中地点　PJ263 号住居周辺



第 149 図　　後期住居の集中地点　PJ264 号住居周辺

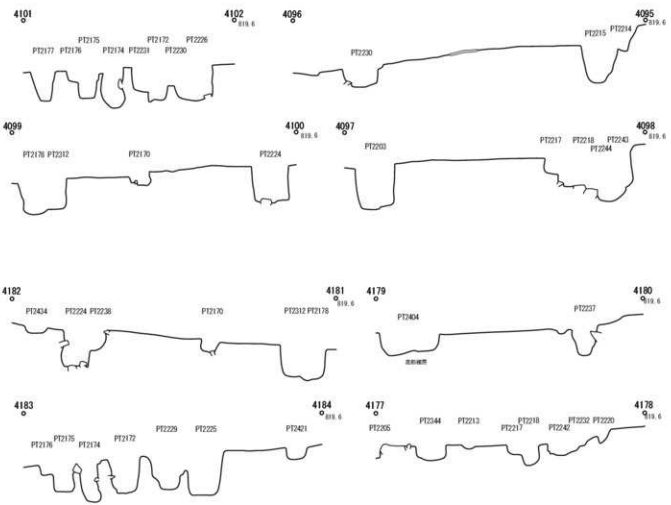


PJ263号住居
位置 G-23-2-2
時期 縄之内1式期
特記事項 PJ261号、PJ274号住居と重複。新旧不明。炉と炉味土器が検出されたが、プラン、柱穴は不明瞭。
炉味土器は下北原類型。出土土器は縄之内1式土器が主体で、鶴ヶ島台式、雪利V式、加曽利E4式、関沢類型、称名寺Ⅰb式、加曽利B1式土器が僅かに混じる。黒曜石砕片、剥片、石匙、磨製石斧、摩滅した貫岩小円礫、磨石、凹石、礫器、ハンマー、石鏃、打製石斧、多孔石、石棒、丸石、石皿、両極石器。

第 150 図　PJ263 号住居

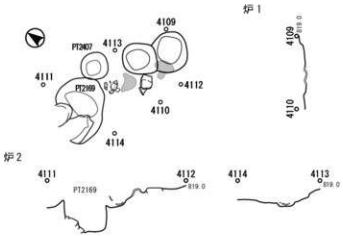
PJ-264 (1/80)

PJ264号住居
位置 G-21-3-4
時期 称名寺Ⅱ式～堀之内Ⅰ式期
特記事項 PJ254号、PJ255号、PJ256号、PJ259号、PJ275号、PJ276号住居、掘立柱建物が同一地点にまとまって位置する。複数回の建替えが想定される。出土土器は称名寺Ⅱ式、堀之内Ⅰ式、加曽利B1式に称名寺Ⅱ式が多い。土製円盤、石錘、敲磨石剥片多数、珪質頁岩剥片、砂岩、頁岩剥片、打製石斧片、擦減した頁岩小円礫多数、頁岩、砂岩の剥片石器、磨石、凹石

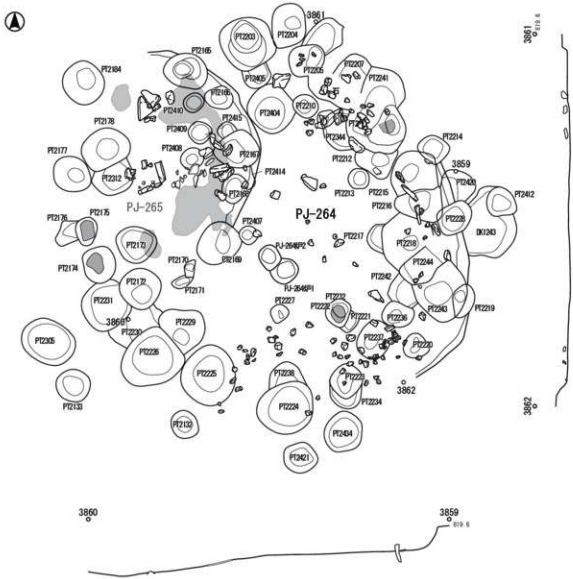


第 151 図　PJ264 号住居

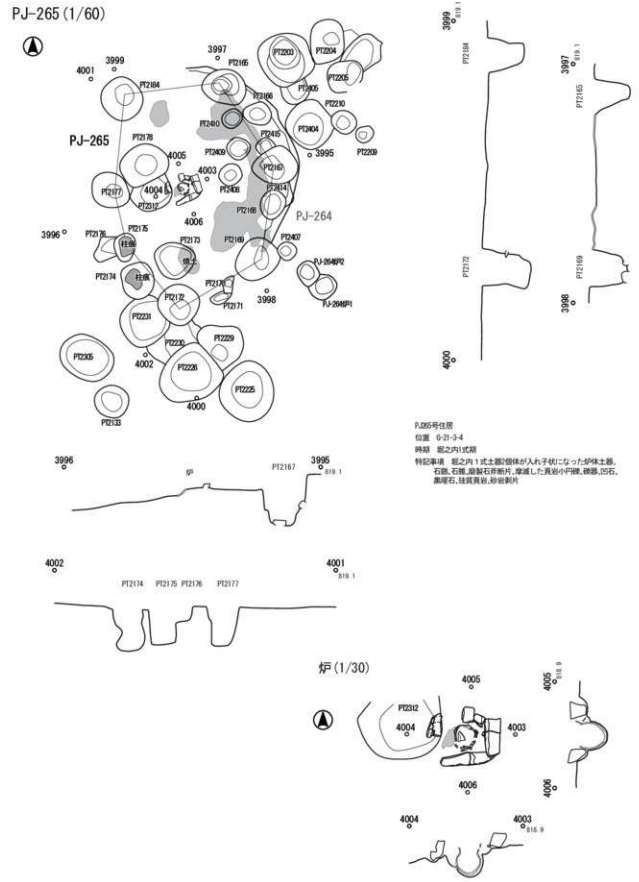
PJ264炉(1/40)



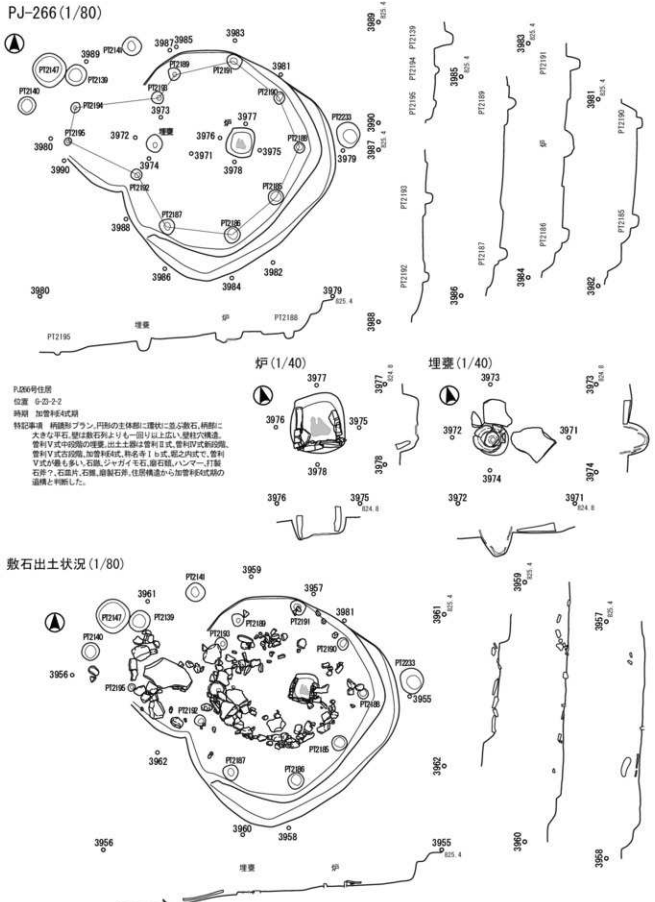
敷石出土状況(1/60)



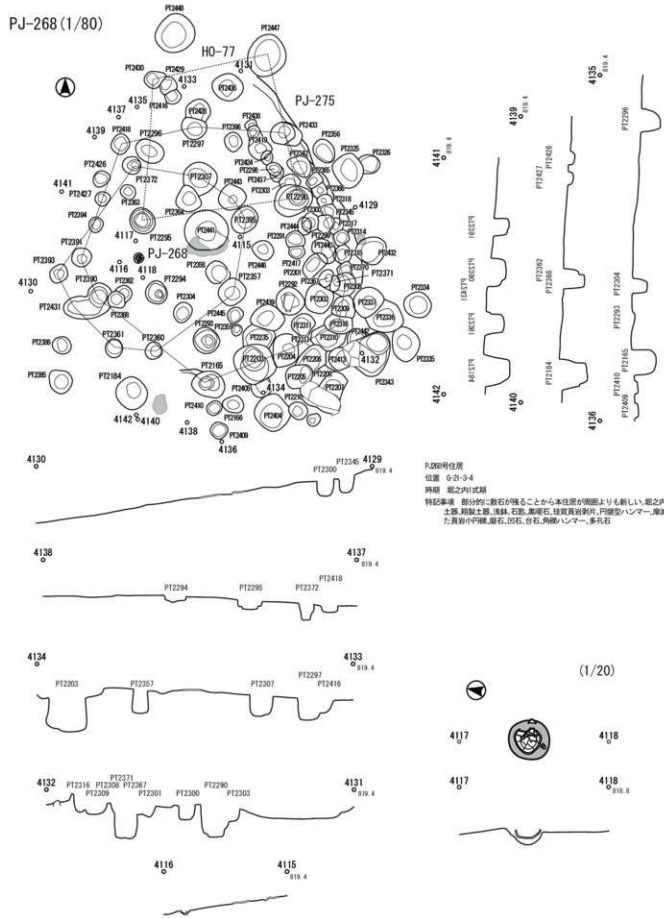
第 152 図　　PJ264 号住居



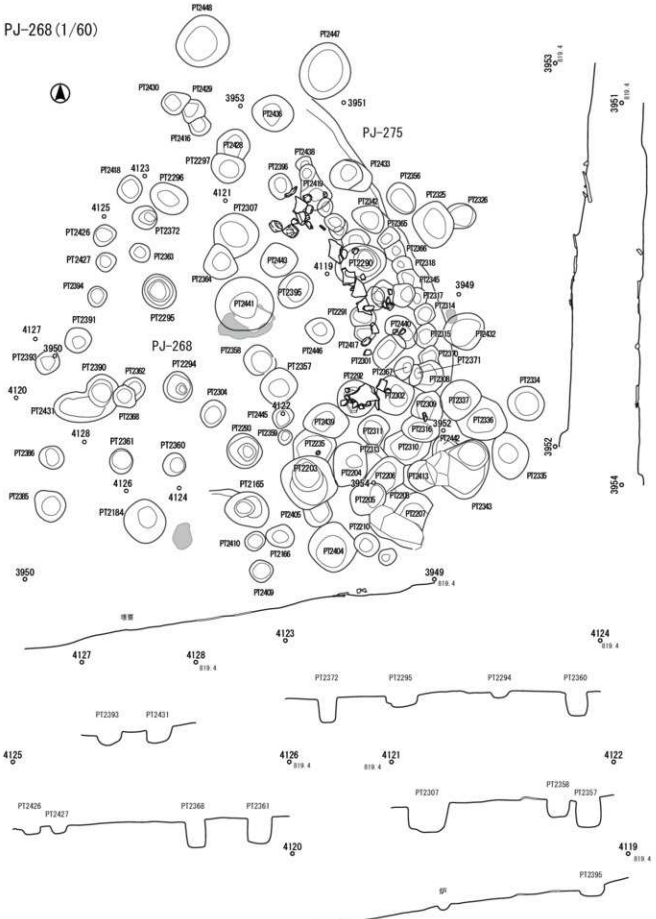
第 153 図　PJ265 号住居



第 154 図　　PJ266 号住居

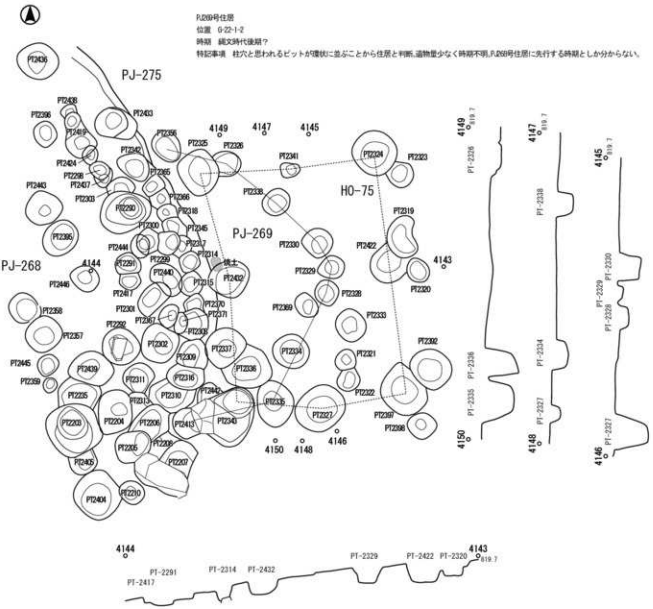


第 155 図　PJ268 号住居

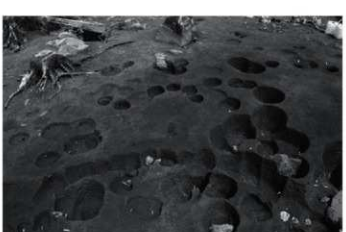


第 156 図　PJ268 号住居

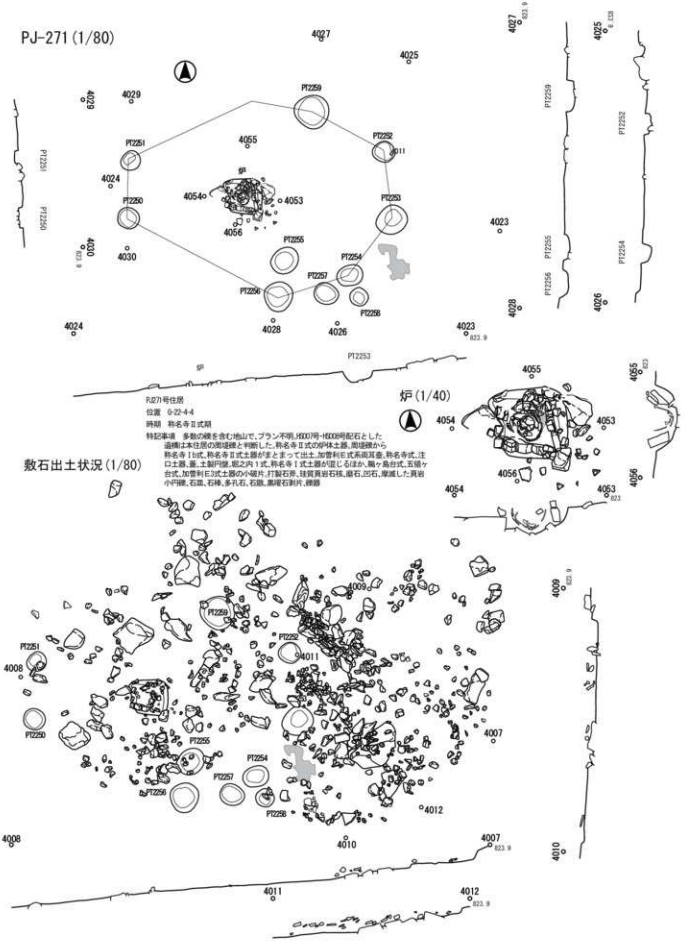
PJ-269 (1/60)



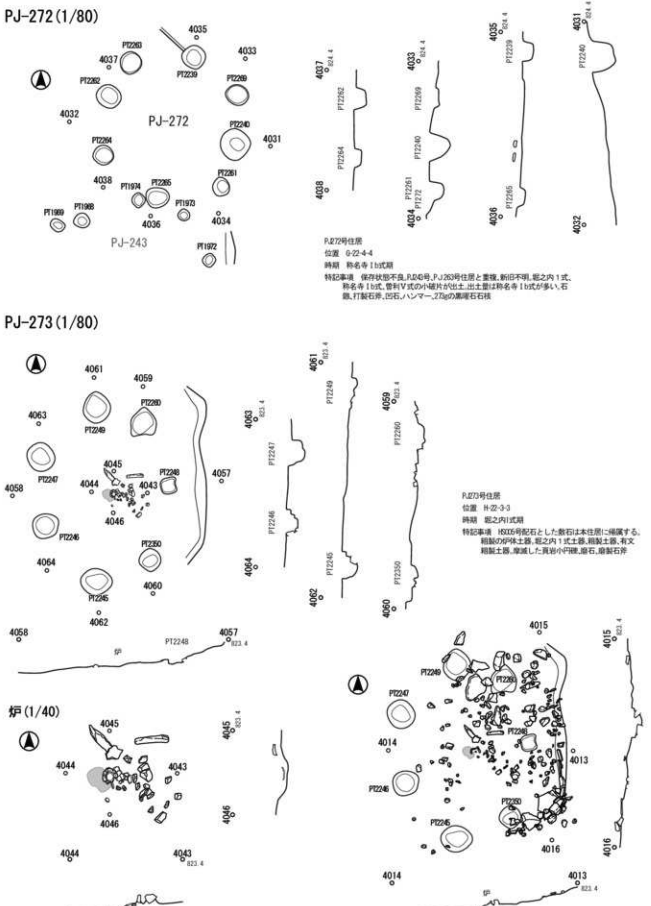
第 157 図　PJ269 号住居



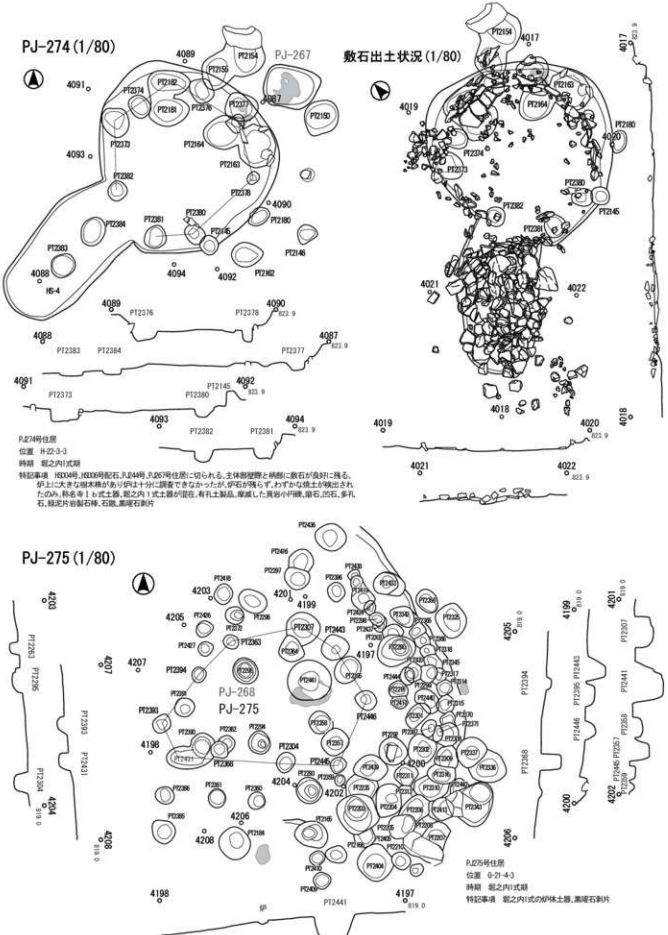
PJ269 号住居



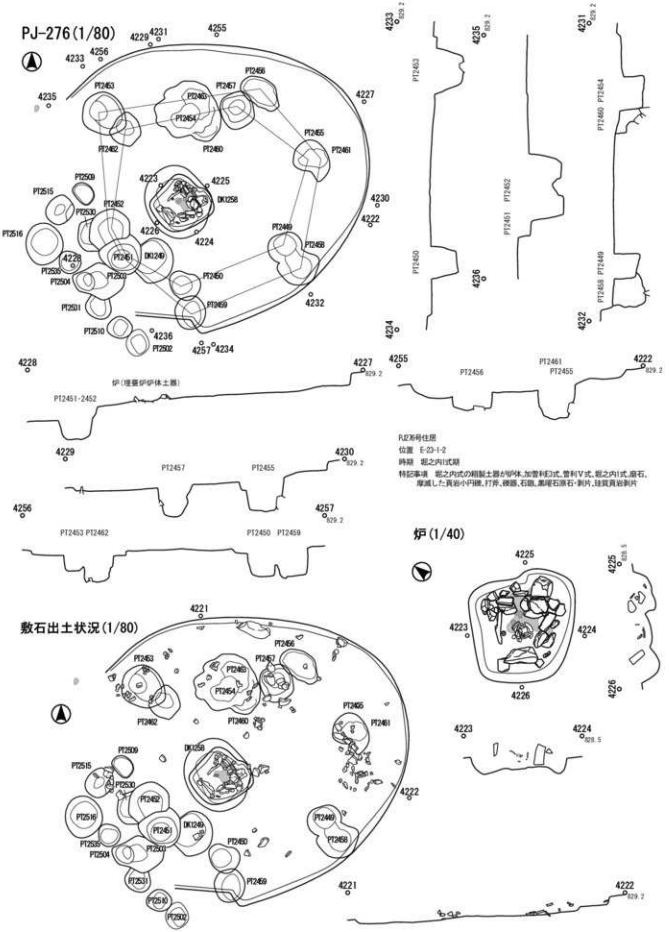
第 158 図　PJ271 号住居



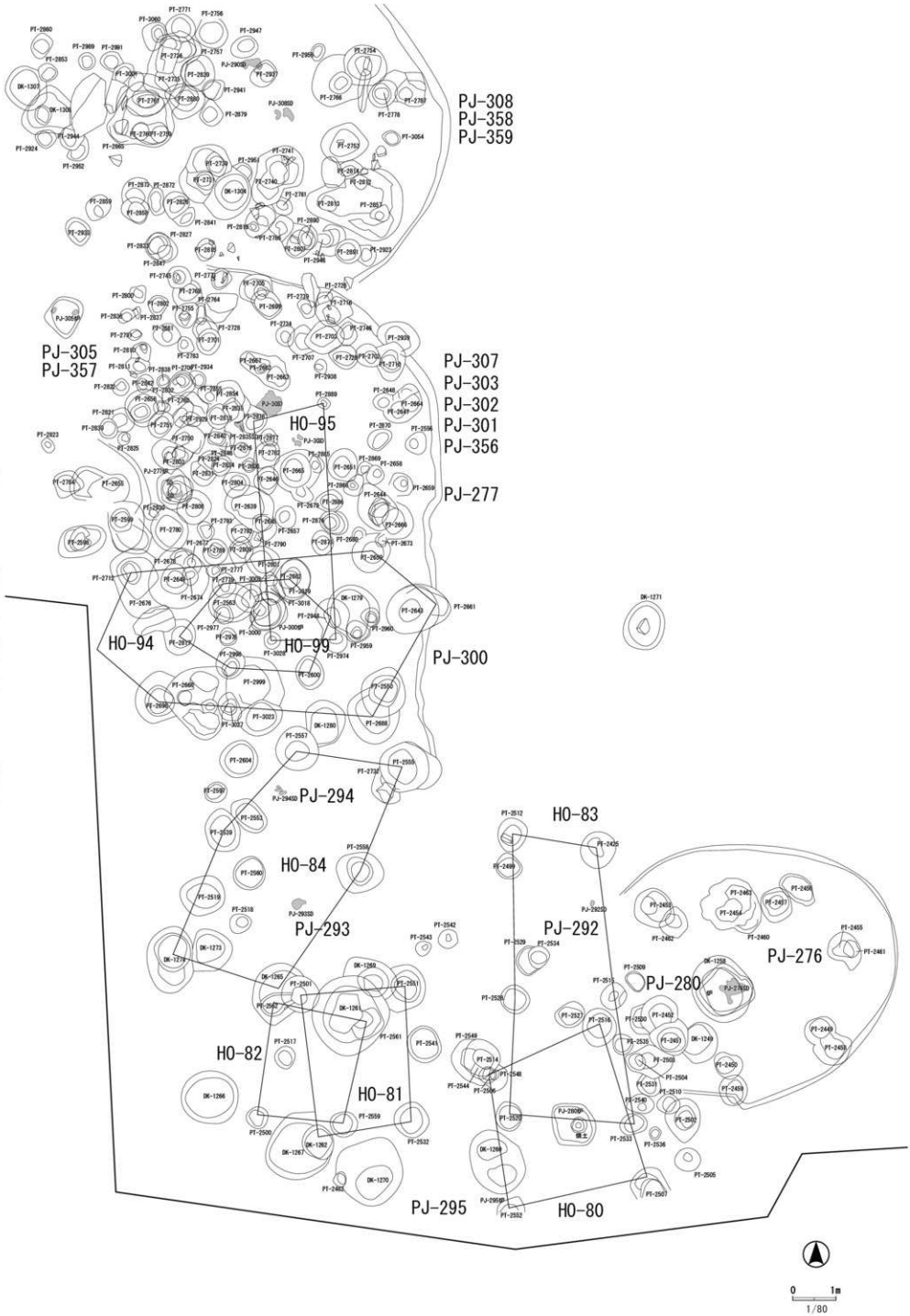
第 159 図　PH272 号住居・PJ273 号住居



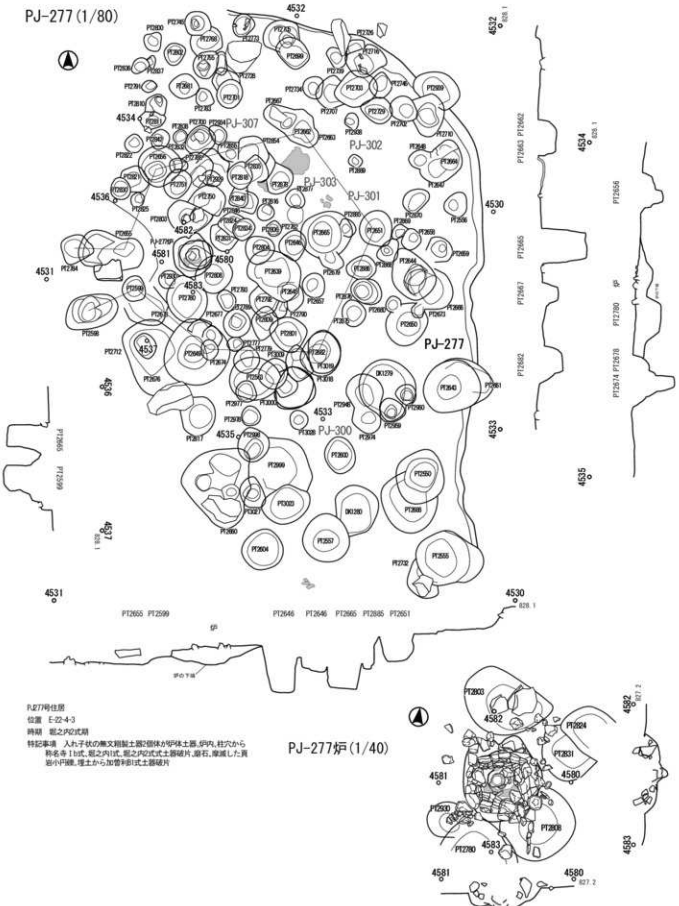
第 160 図　PJ274 号住居・PJ275 号住居



第 161 図　PJ276 号住居



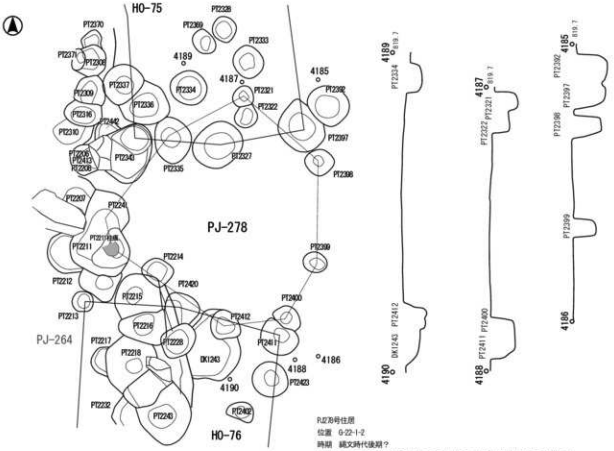
第162図　後期住居の集中地点　PJ277号住居周辺



第 163 図　PJ277 号住居

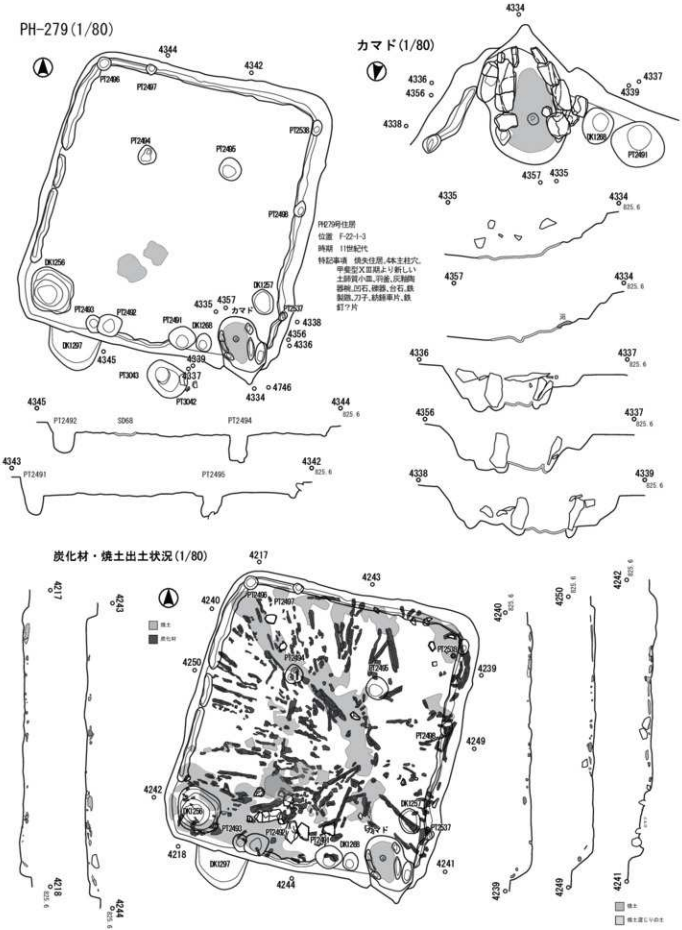
PJ-277
敷石出土状況(1/80)

第 164 図　PJ277 号住居

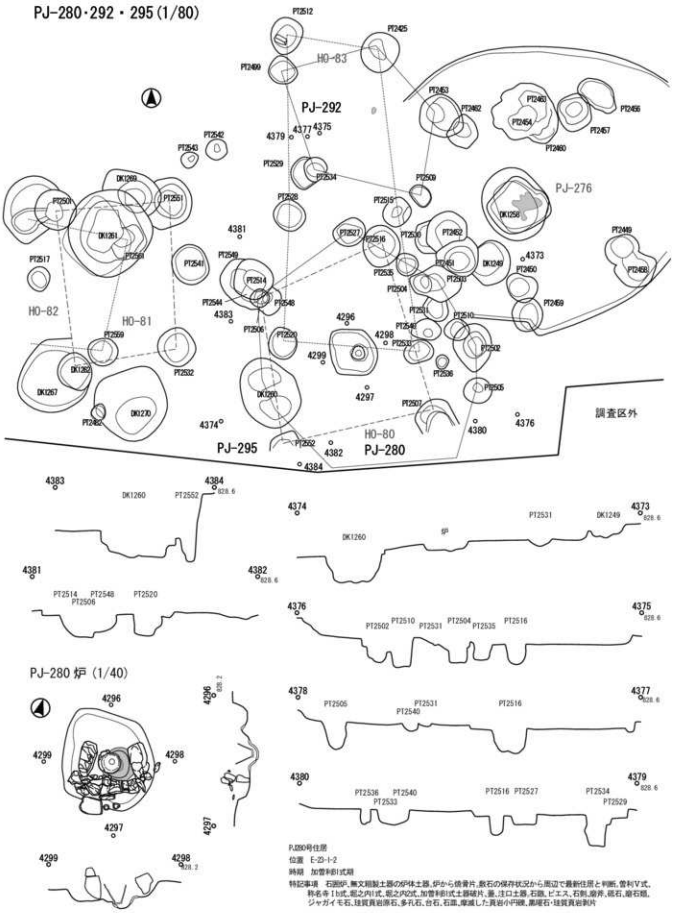


第 165 図　PJ278 号住居

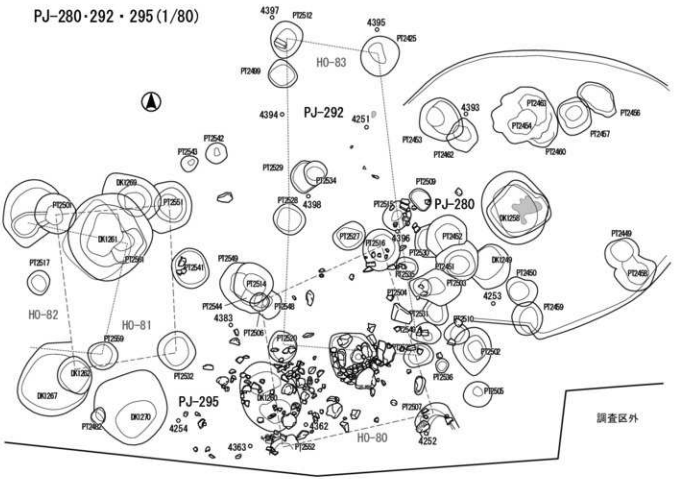
PJ278 号住居周辺

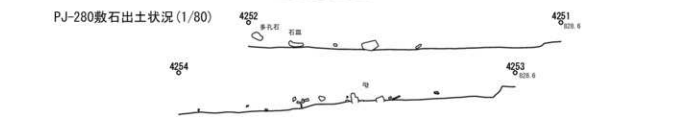


第 166 図　PH279 号住居



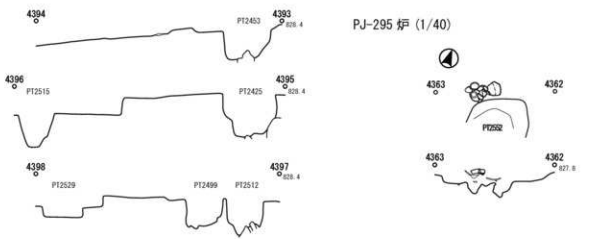
第 167 図　PJ280 号住居・PJ292 号住居・PJ295 号住居





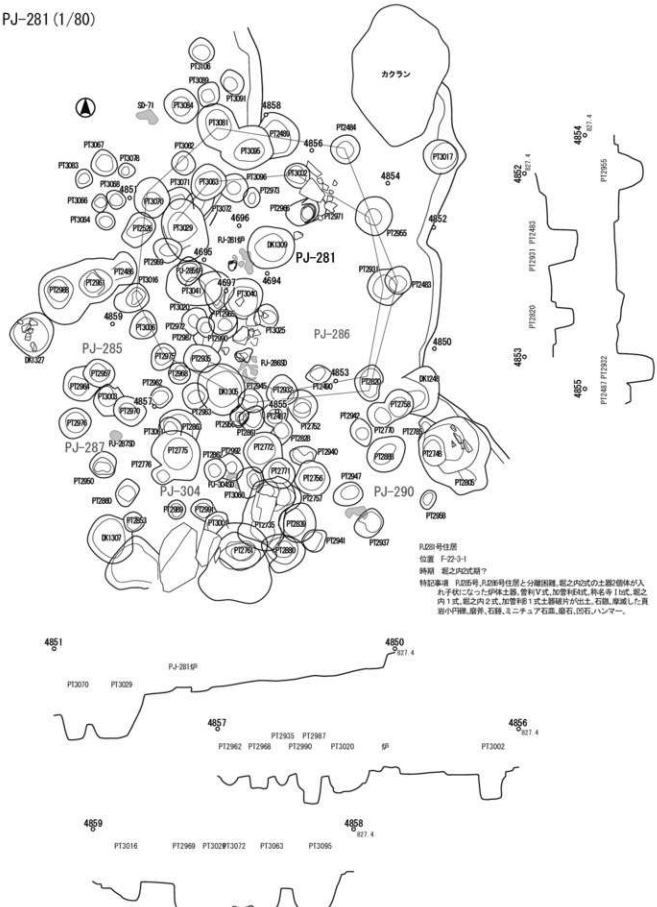
PJ292号住居
位置　E-22-3-4
時期　堀之内式期？
特記事項　ピット配置から住居と想定した遺構.柱穴から磨利V式.堀之内式土器破片

PJ295号住居
位置　E-22-3-4
時期　後期前半
特記事項　炉のみ検出.炉床土器は後期初頭.柱穴不明.
PJ280号住居床下で検出.摩滅した貫岩小円礫



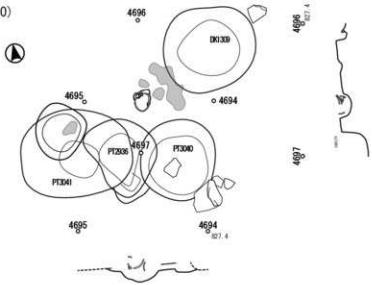
第 168 図　PJ280 号住居・PJ292 号住居・PJ295 号住居

PJ-281 (1/80)

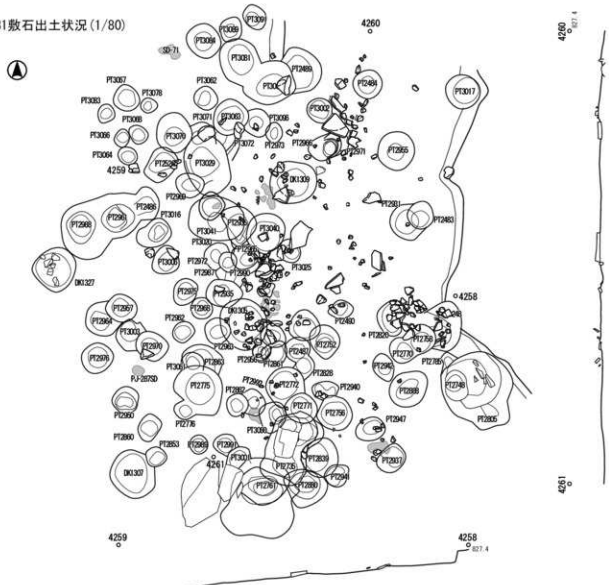


第 169 図　PJ281 号住居

PJ-281 炉 (1/40)

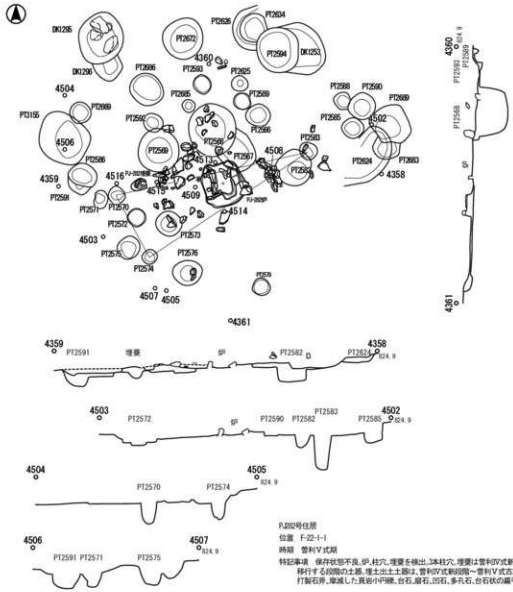


PJ-281敷石出土状況 (1/80)

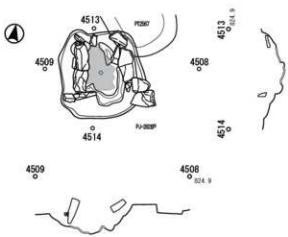


第 170 図　　PJ281 号住居

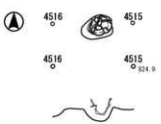
PJ-282(1/80)



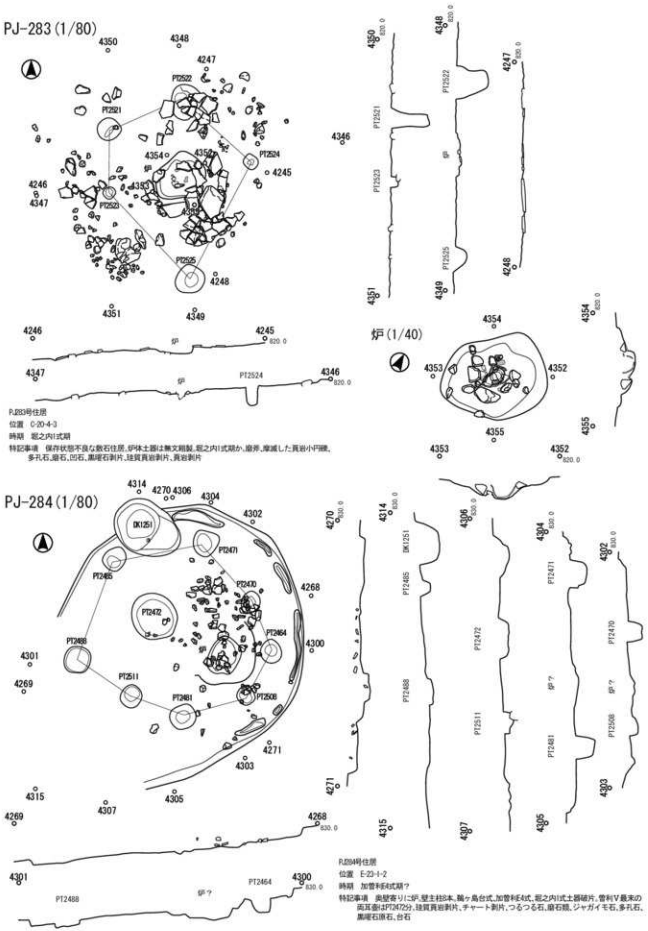
炉(1/40)



埋甕(1/40)



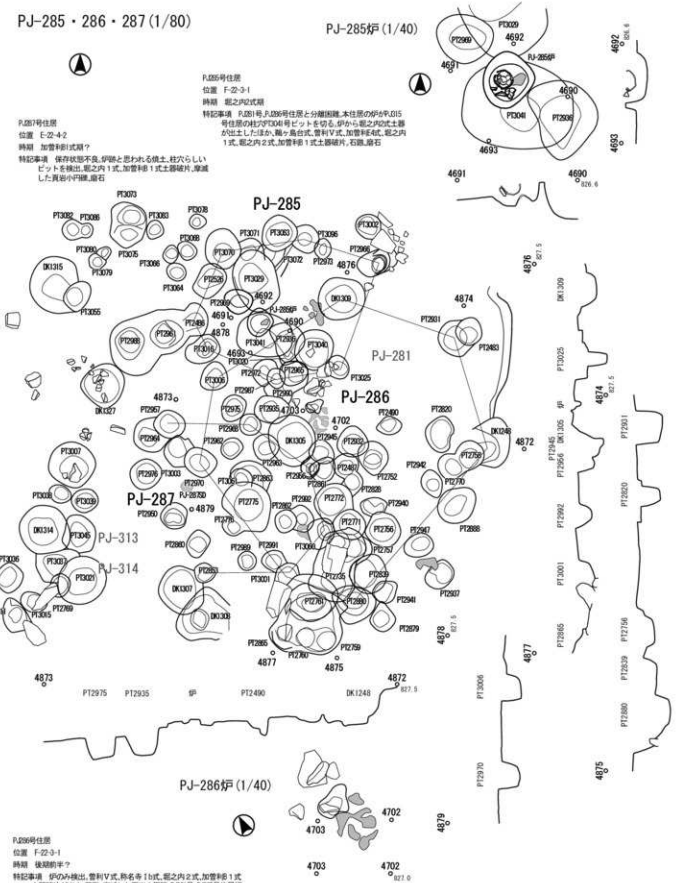
第 171 図　PJ282 号住居



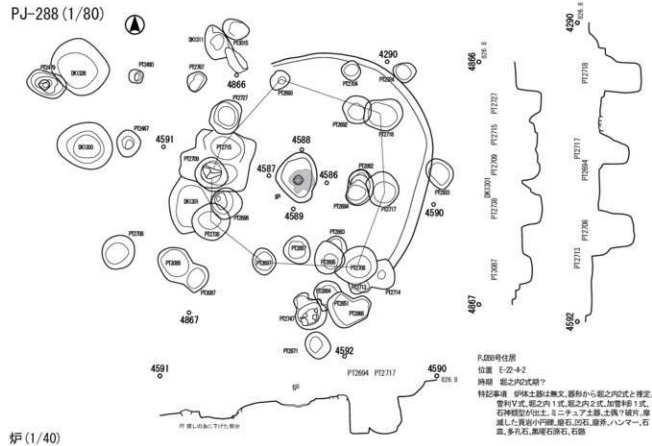
PJ283号住居
位置　C-20-4-3
時期　堀之内I式期
特記事項　保存状態不良な敷石住居。炉体土器は無文期製。堀之内I式期か、廃棄、摩滅した異岩小P跡。多孔石、磨石、凹石、黒曜石剥片、珪質頁岩剥片、異岩剥片

PJ284号住居
位置　E-23-1-2
時期　加曽利E式期？
特記事項　奥壁寄りに炉。壁主柱8本。鵜ヶ島台式、加曽利E式、堀之内I式土器破片。曽利V最来の両耳壺は(PJ2472)分。珪質頁岩剥片、チャート剥片、つるつる石、磨石類、ジャガイモ石、多孔石、黒曜石原石、台石

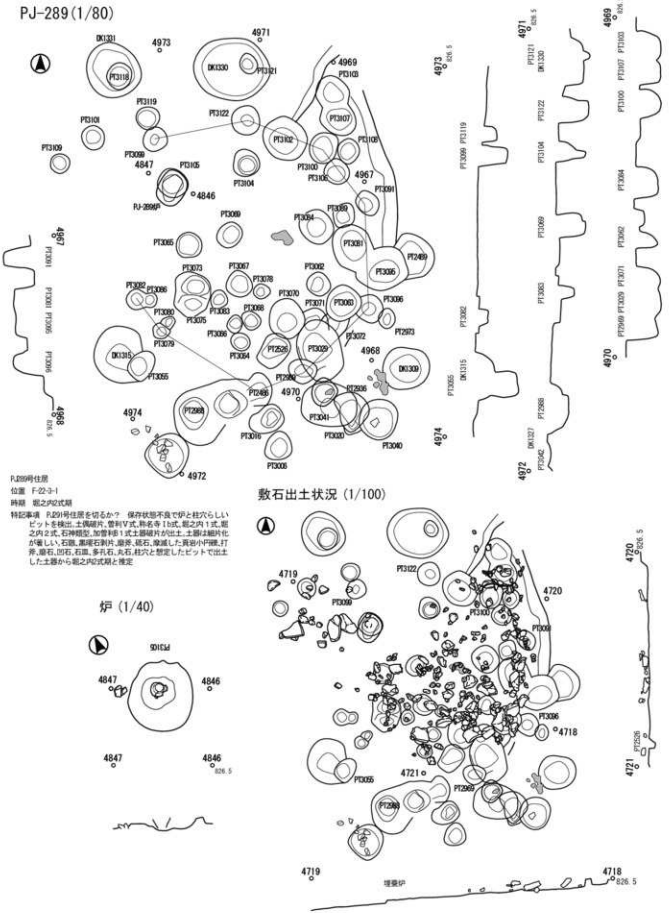
第 172 図　　PJ283 号住居・PJ284 号住居



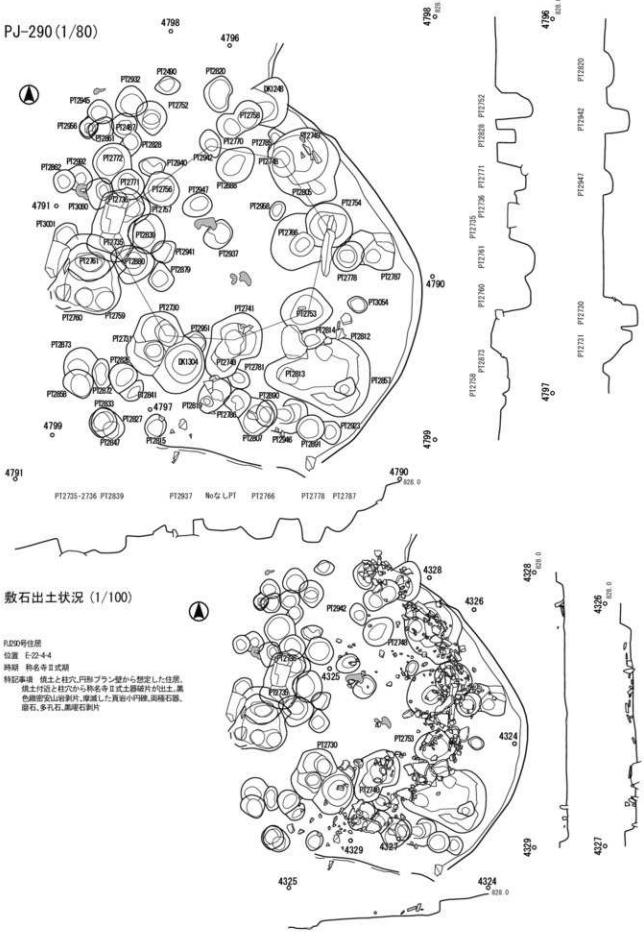
第 173 図　PJ285 号住居・PJ286 号住居・PJ287 号住居



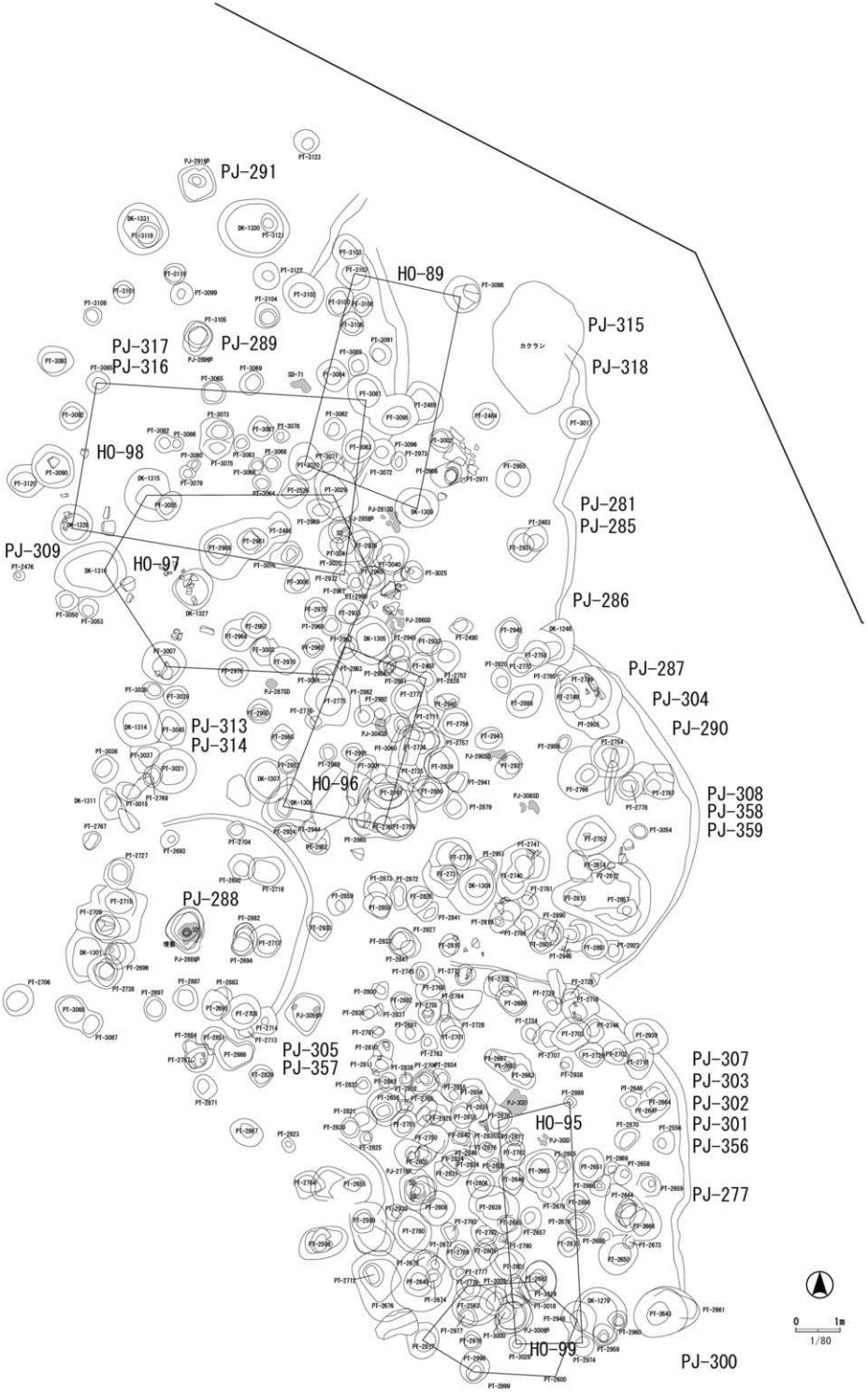
第 174 図　PJ288 号住居



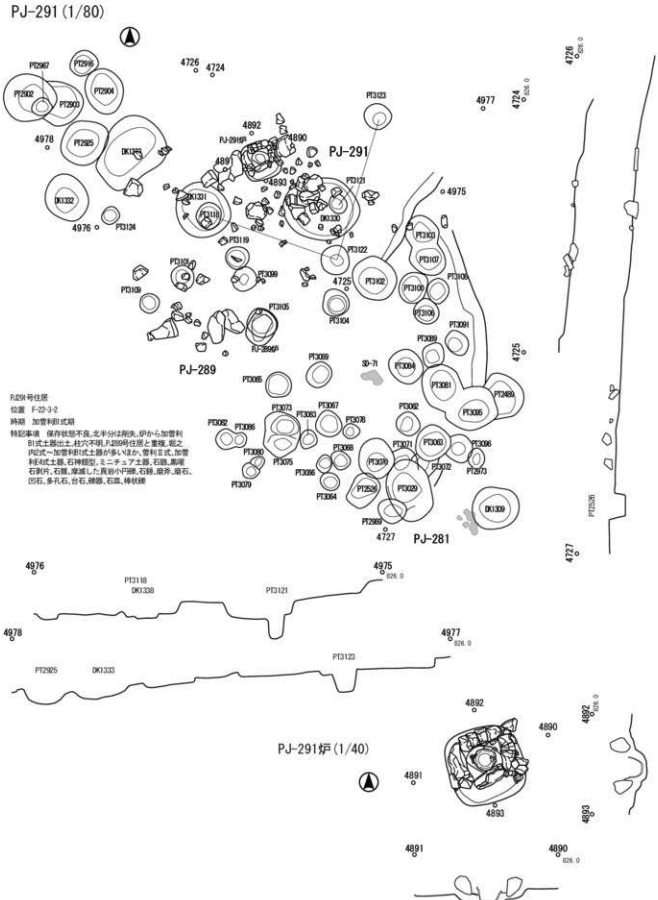
第 175 図　　PJ289 号住居



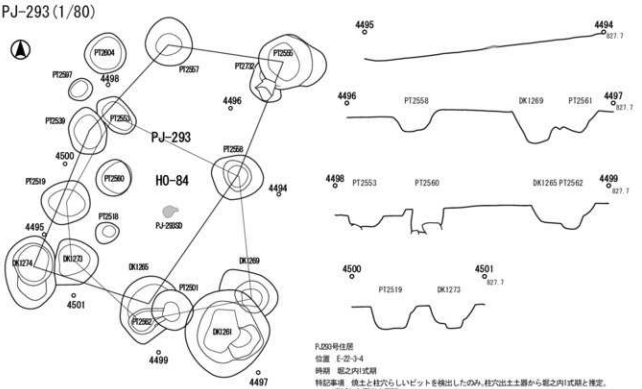
第 176 図　PJ290 号住居

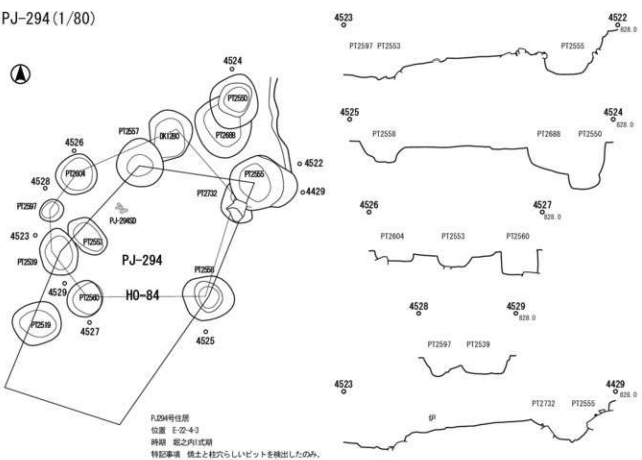


第177図　後期住居の集中地点　PJ290号住居周辺

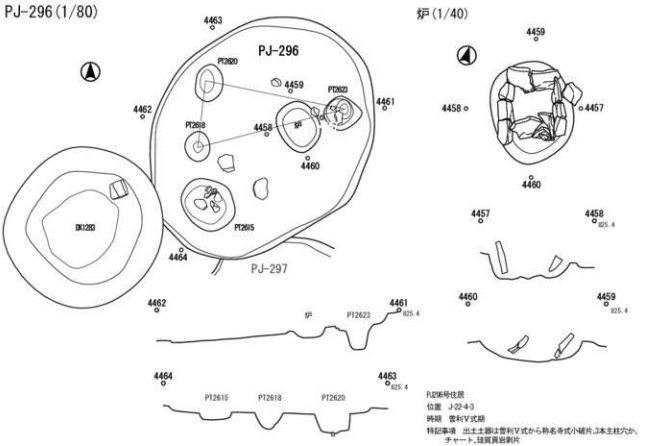


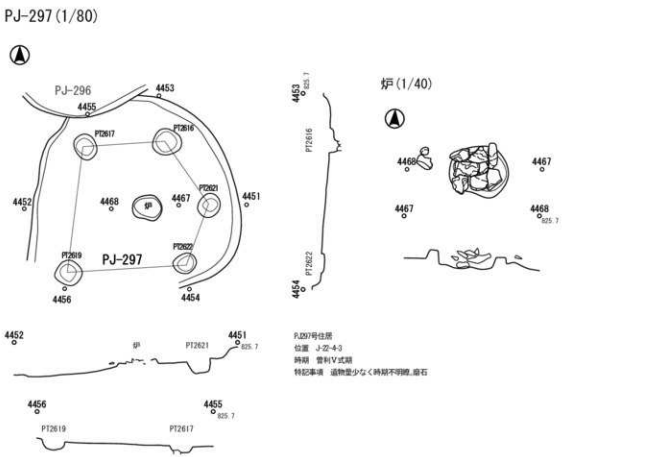
第 178 図　PJ291 号住居





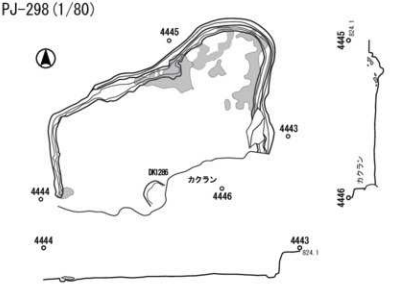
第 179 図　PJ293 号住居・PJ294 号住居





第 180 図　PJ296 号住居・PJ297 号住居

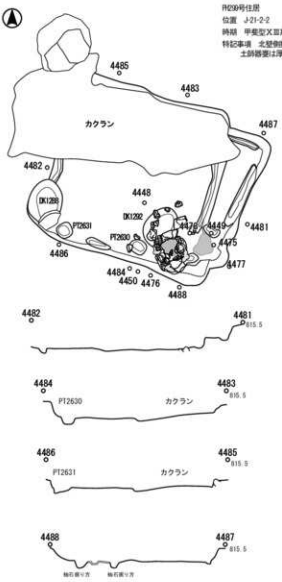
PJ-298 (1/80)



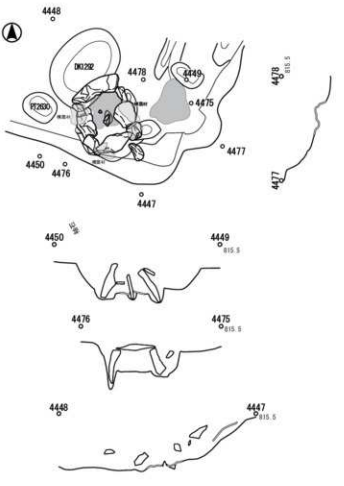
PJ259号住居
位置　J-22-2-3
時期　平安時代
特記事項　南半分が撹乱され削失。遺物が少なく時期不明。PJ259号住居と同じ時期と推測される。北壁沿いに焼土、須恵器壺破片

PJ-299 (1/80)

PJ299号住居
位置　J-21-2-2
時期　甲類型又は期以降
特記事項　北壁側撹乱、削失。建て替えあり。土師質で小皇風の杯は柱状高台ではない。
土師器壺は厚手で調整が粗雑

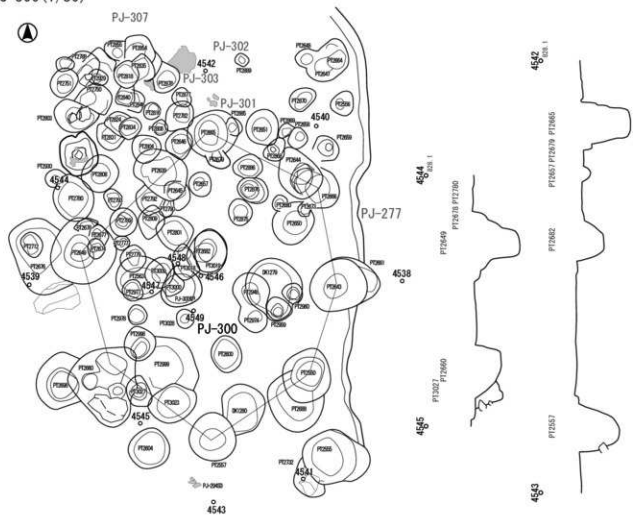


炉 (1/40)



第 181 図　PJ298 号住居・PJ299 号住居

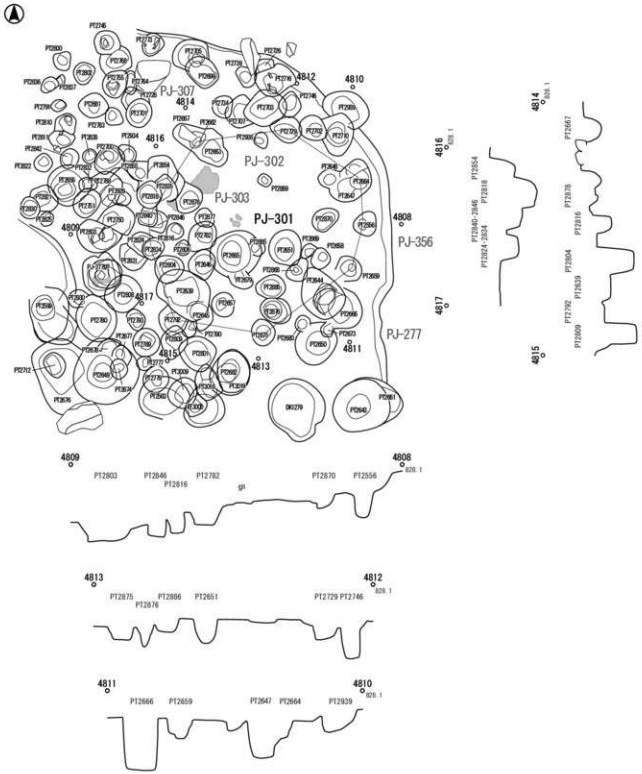
PJ-300(1/80)



PJ300号住居
位置 E-22-4-3
時期 縄之内I式期
特記事項 炉と柱穴を検出。無文の砲体土器、柱穴出土土器は管利V式、加曽利E式、縄之内I式。
最石、石鏃、摩滅した黄岩小円礫、埋土から加曽利B式土器破片。

第 182 図　PJ300 号住居

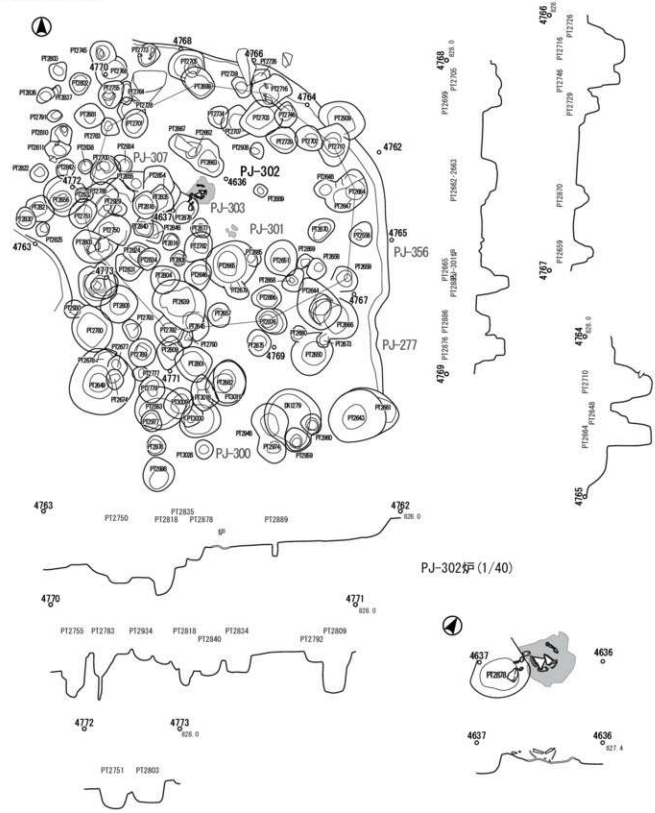
PJ-301(1/80)



PJ301号住居
位置 E-22-4-4
時期 縄之内II式期
特記事項 PJ302号、PJ303号住居などとともに同一地点で重複する。炉焼土を検出。柱穴から縄之内I式土器破片、摩滅した異形小円礫。同一地点で重複する住居に分別できないが石器多数出土。石鏃、磨製石斧、石錐、石匙、砥石、磨石、ハンマー、摩滅した異形小円礫、黒曜石原石など。

第 183 図　PJ301 号住居

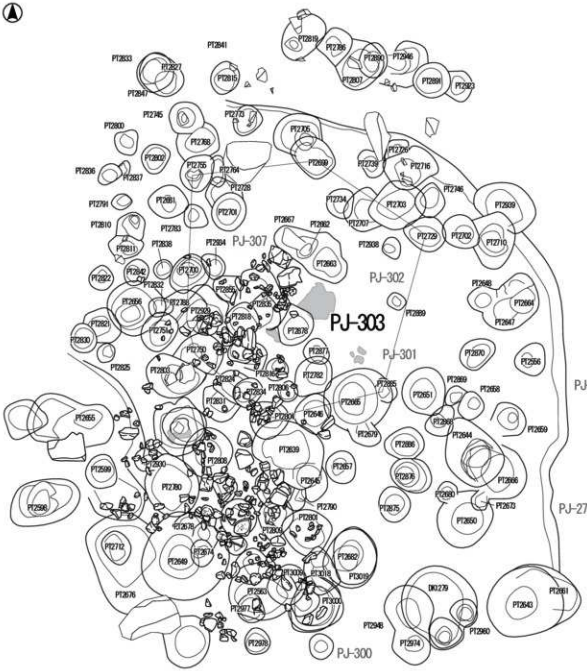
PJ-302(1/80)



PJ302号住居
位置　E-22-4-4
時期　縄之内式期？
特記事項　PJ301号,PJ303号住居などとともに同一地点で重複する。炉体土器と焼土を検出。柱穴から称名寺Ⅱ式、縄之内Ⅰ式、縄之内Ⅱ式土器破片、薄焼した貝殻や甲類、埋土から縄之内Ⅱ式、加曽利B式土器破片

第 184 図　　PJ302 号住居

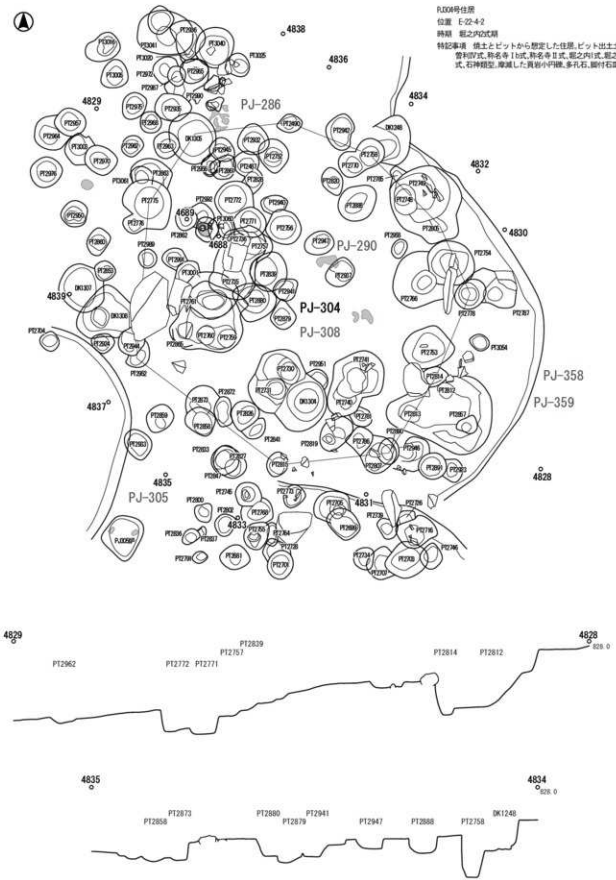
PJ-303(1/60)



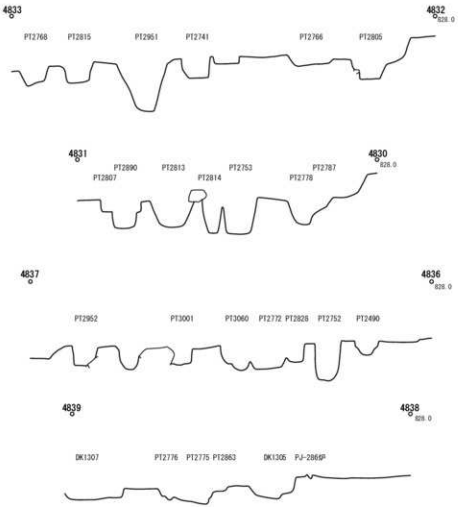
PJ003 号住居
位置 E-22-4-4
時期 堀之内1式期～堀之内2式期
特記事項 PJ003号,PJ002号住居などとともに同一地点で重複する.炉焼土を検出.柱穴から堀之内1式か2式土器破片,土製円盤出土.埋土から堀之内1式土器の大きな破片,堀之内2式,加曽利B式土器破片出土.

第 185 図　PJ303 号住居

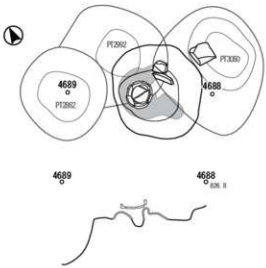
PJ-304(1/80)



第 186 図　　PJ304 号住居



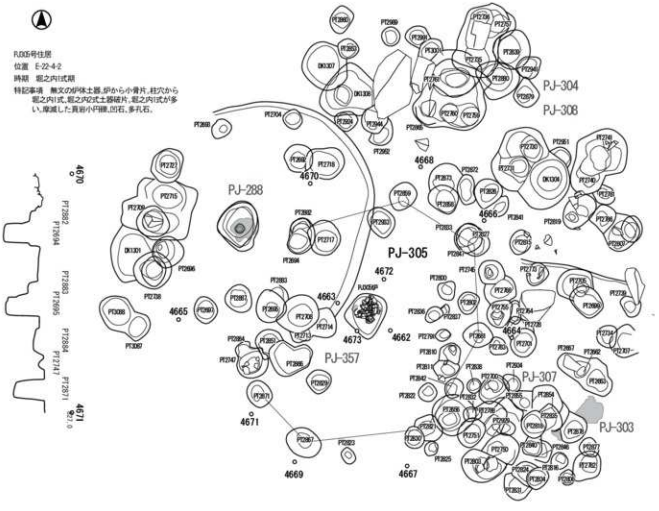
PJ-304炉(1/20)



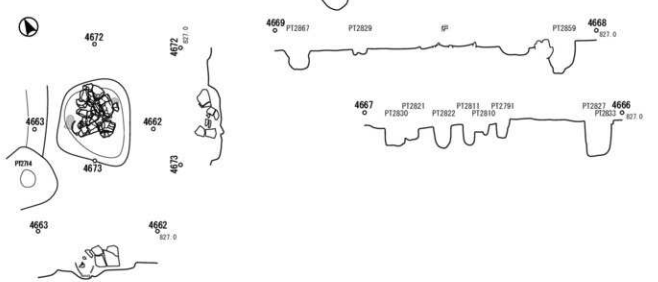
第 187 図　　PJ304 号住居

PJ-305(1/80)

PJ005号住居
位置　E-22-4-2
時期　堀之内式期
特記事項　無文の炉床土器,炉から小骨片,柱穴から堀之内式,堀之内式土器破片,堀之内式が多い,摩滅した頁岩小円礫,凹石,多孔石.

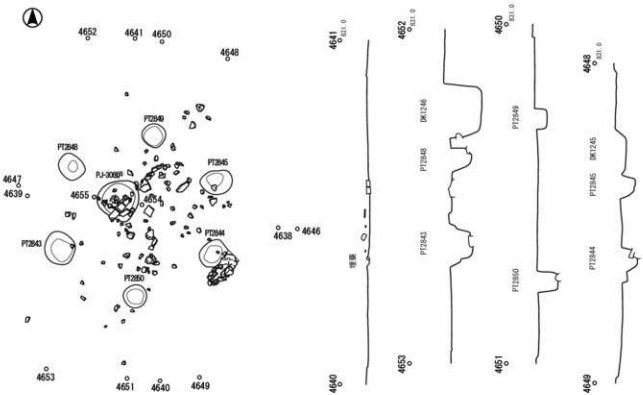


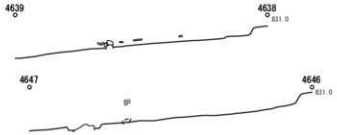
PJ-305炉(1/40)



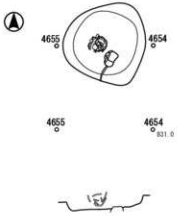
第 188 図　　PJ305 号住居

PJ-306(1/80)





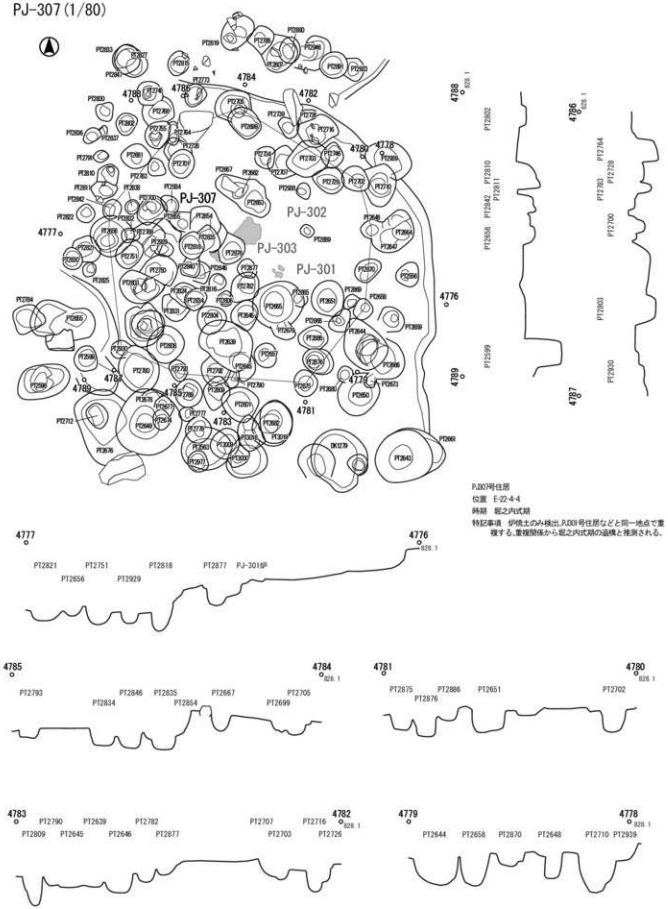
PJ-306炉(1/40)



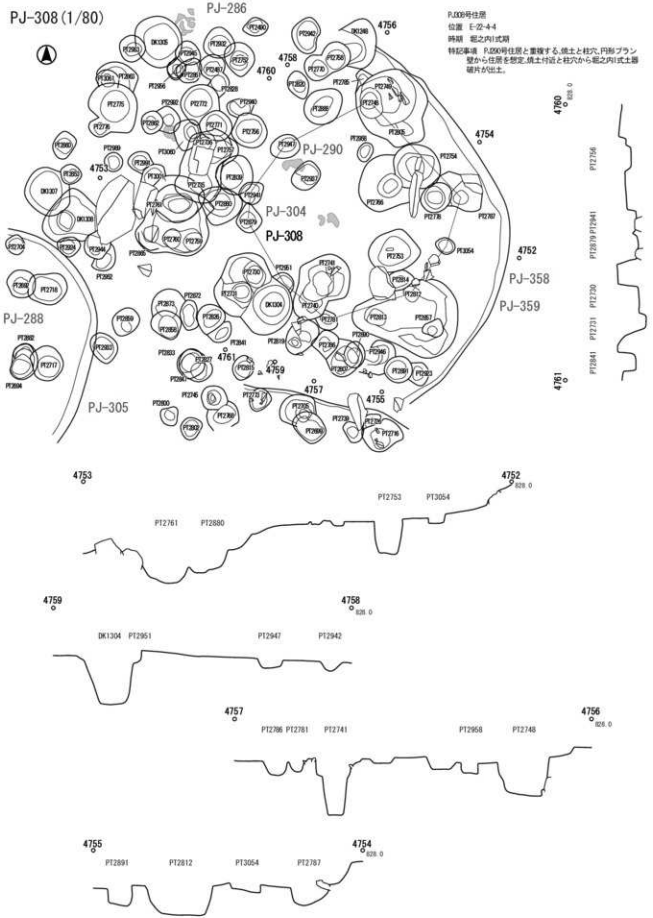
PJ306号住居
位置　E-22-2-4
時期　堀之内1式期？
特記事項　保存状態不良。疎らな敷石,6本柱穴,炉を検出,無文細裂の炉体土器,加曽利E4式、曽利V式,堀之内1式土器破片,厚減した真岩小円礫,ハンマー,敲製石斧,珪質真岩剥片,扁石,剥離のある剥片,石鏃。

第 189 図　　PJ306 号住居

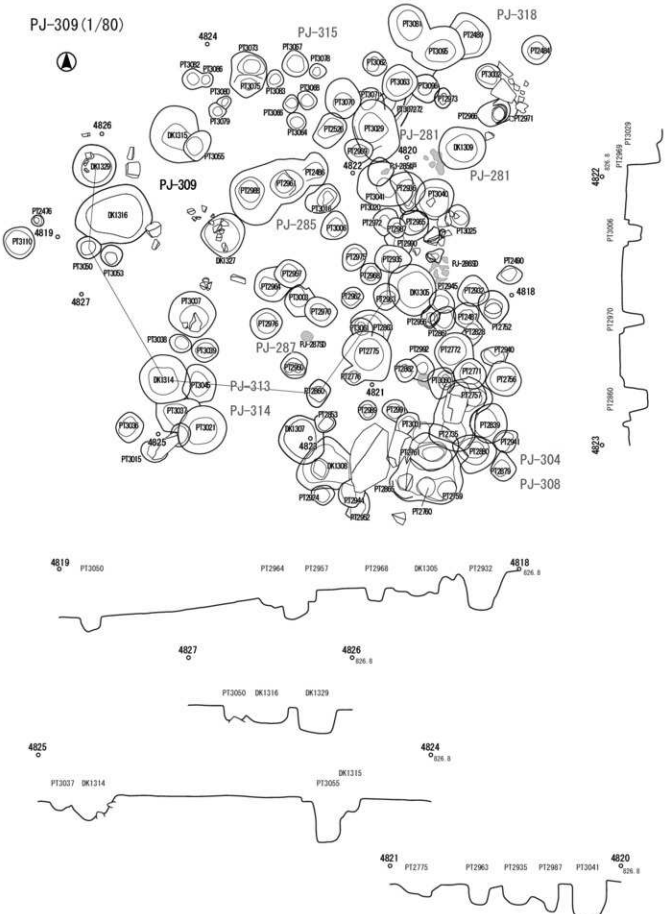
PJ-307 (1/80)



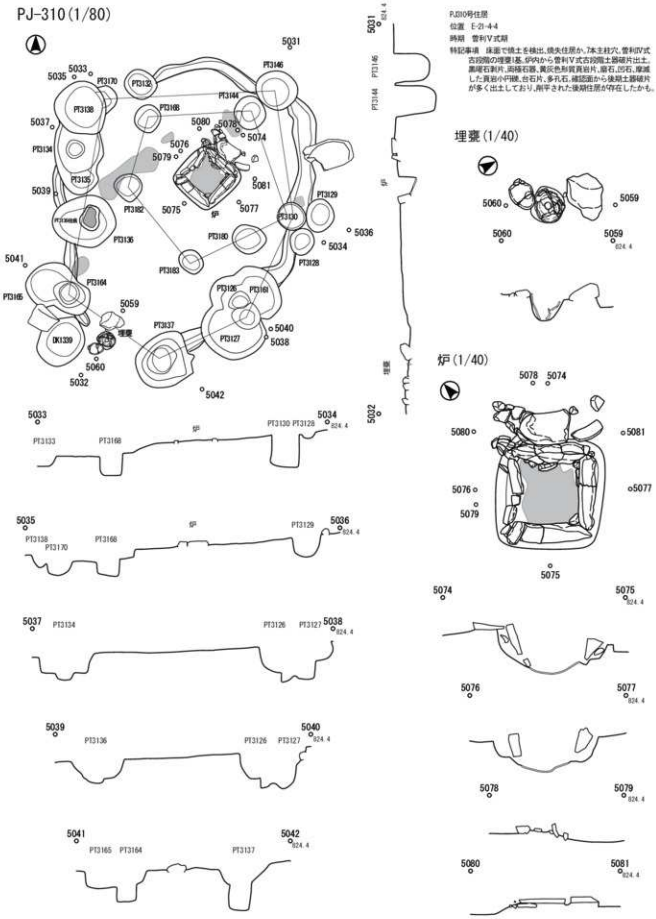
第 190 図　PJ307 号住居



第 191 図　PJ308 号住居



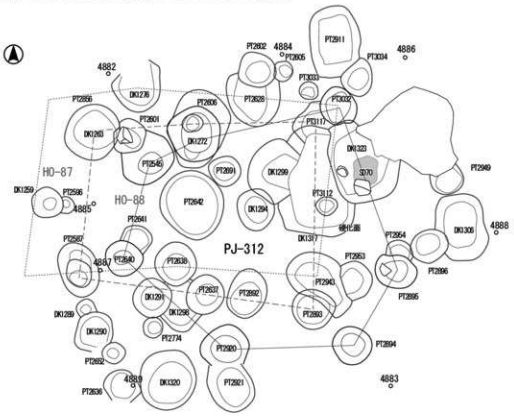
第 192 図　PJ309 号住居

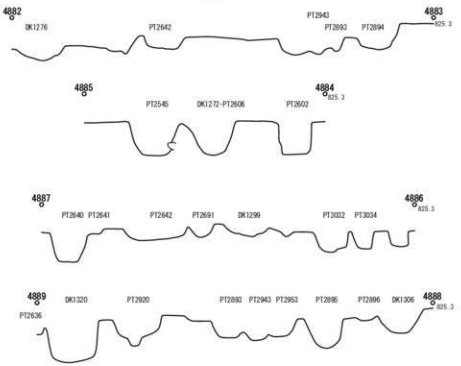


第 193 図　PJ310 号住居

PJ-312(1/80)

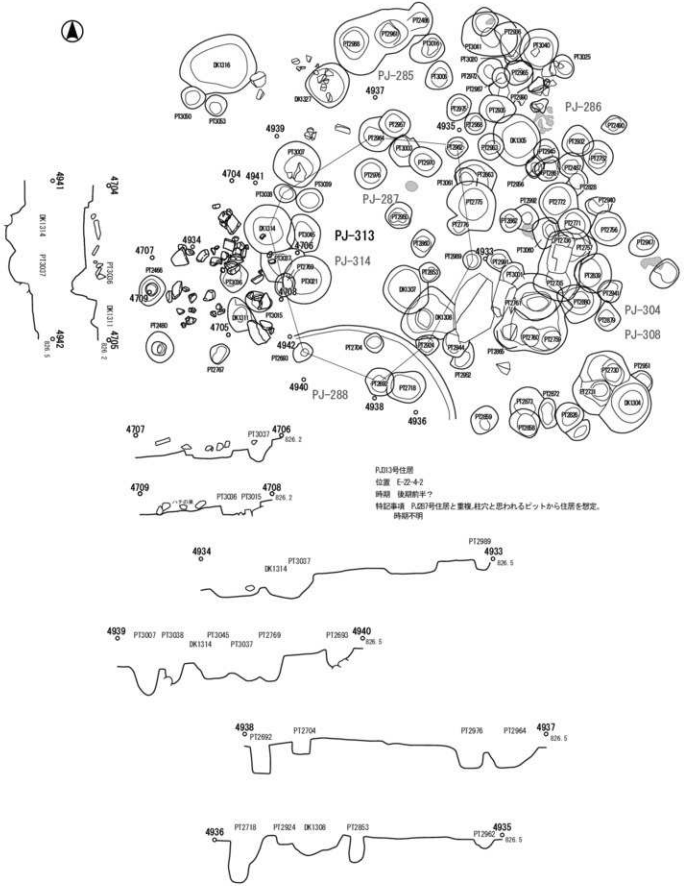
PJ312号住居
位置　F-22-1-4
時期　祖之内I式期？
特記事項　保存状態不良。対ピットと5本柱穴を検出。祖之内I式土器破片から当該時期と推定。





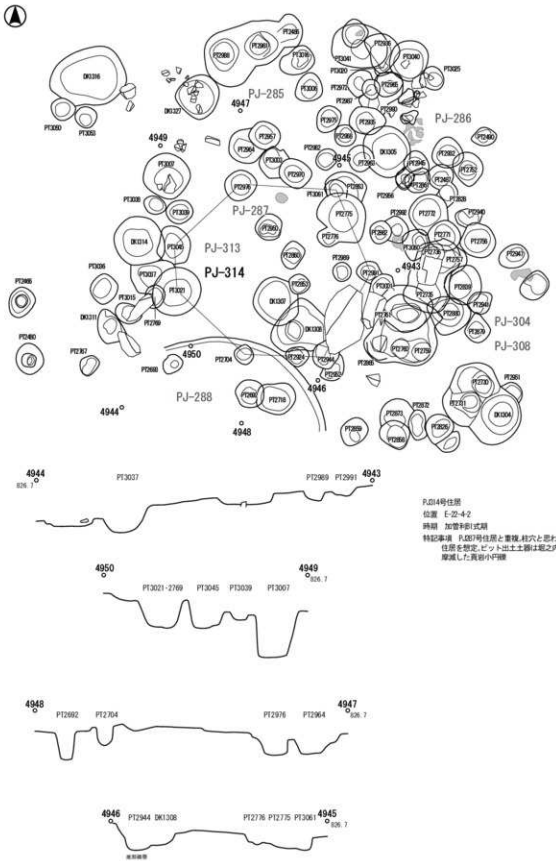
第 194 図　　PJ312 号住居

PJ-313・PJ-314 (1/80)



第 195 図　PJ313 号住居・PJ314 号住居

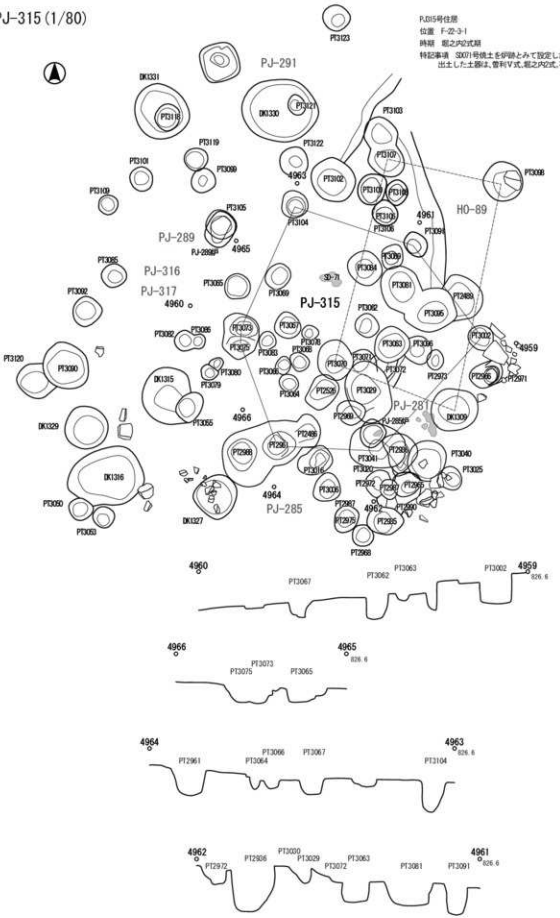
PJ-313・PJ-314 (1/80)



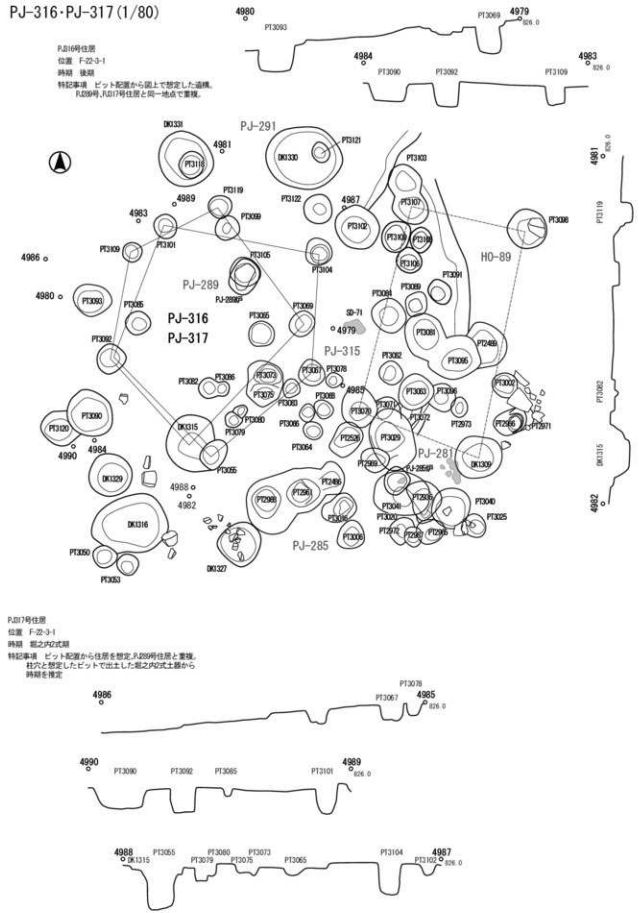
第 196 図　PJ313 号住居・PJ314 号住居

PJ-315 (1/80)

PJ315号住居
位置 F-22-3-I
時期 縄之内式期
特記事項 SX01号焼土を炉跡とみて設定した柱穴と想定したピットで出土した土器は、巻貝V式、縄之内式、石器、黒曜石剥片

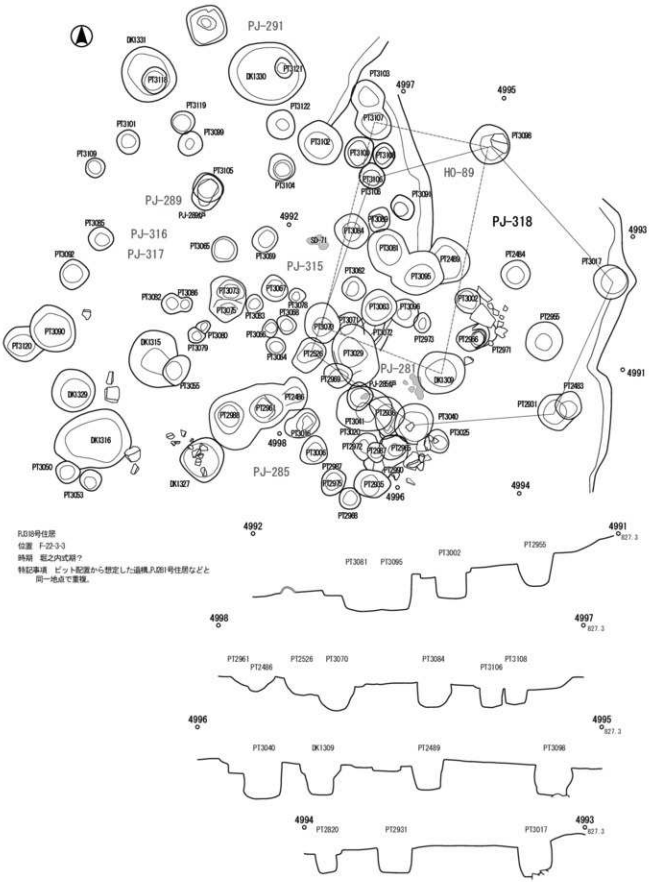


第 197 図　PJ315 号住居

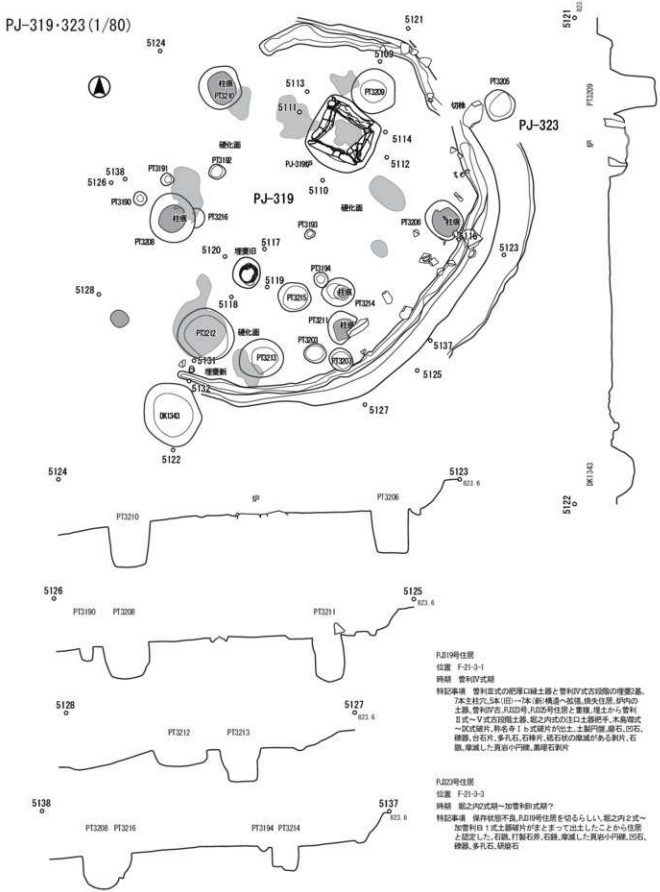


第 198 図　PJ316 号住居・PJ317 号住居

PJ-318 (1/80)

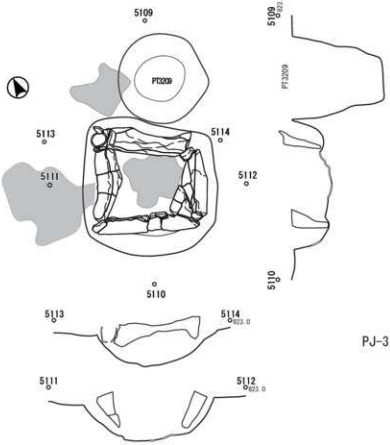


第 199 図　PJ318 号住居

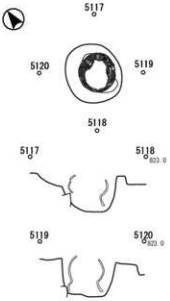


第 200 図　PJ319 号住居・PJ323 号住居

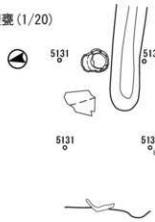
PJ-319炉(1/40)



PJ-319旧埋甕(1/40)

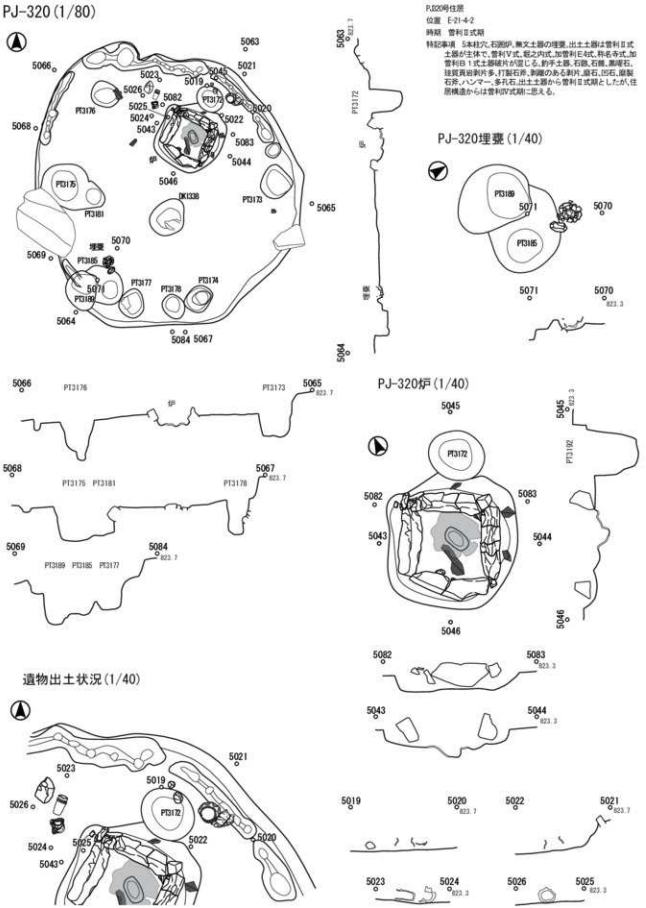


PJ-319新埋甕(1/20)

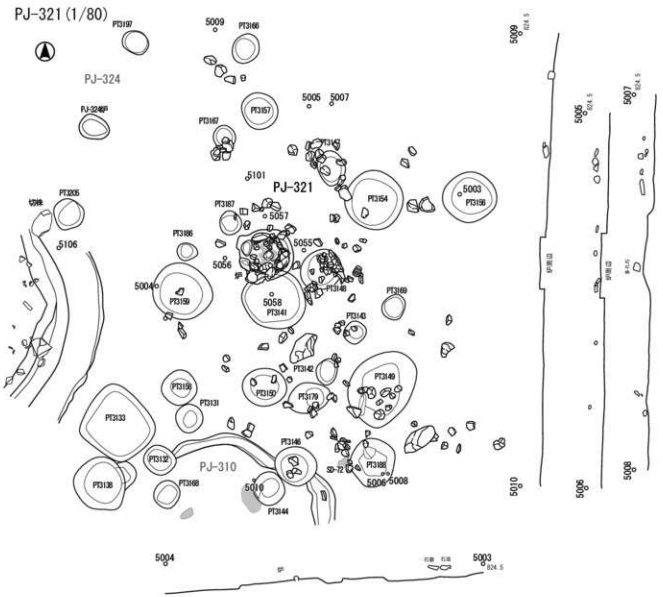


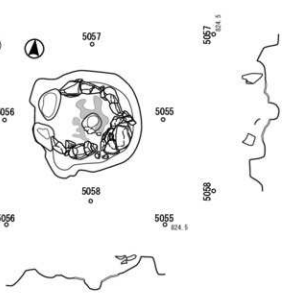
第 201 図　PJ319 号住居

PJ323 号住居



第 202 図　PJ320 号住居

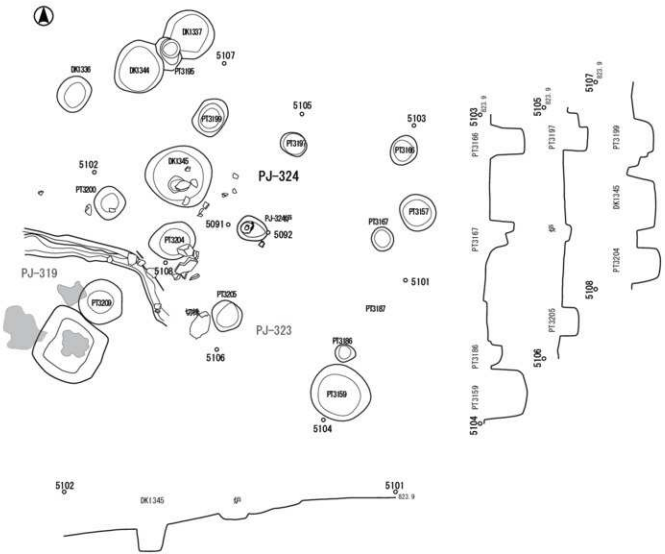




PJ321号住居
位置　F-21-3-3
時期　縄之内式期
特記事項　保存状態不良で石囲炉のみ検出。炉内から縄之内１式土器破片が出土。
　チャート剥片、黒曜石剥片、黒曜石原石、台石、石神転用の多孔石、石皿片、摩滅した貫岩小円礫、磨石、凹石、石錐、両極石器、多孔石、ハンマー、砂岩礫器。

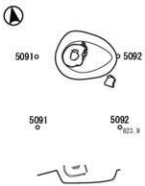
第 203 図　　PJ321 号住居

PJ-324 (1/80)

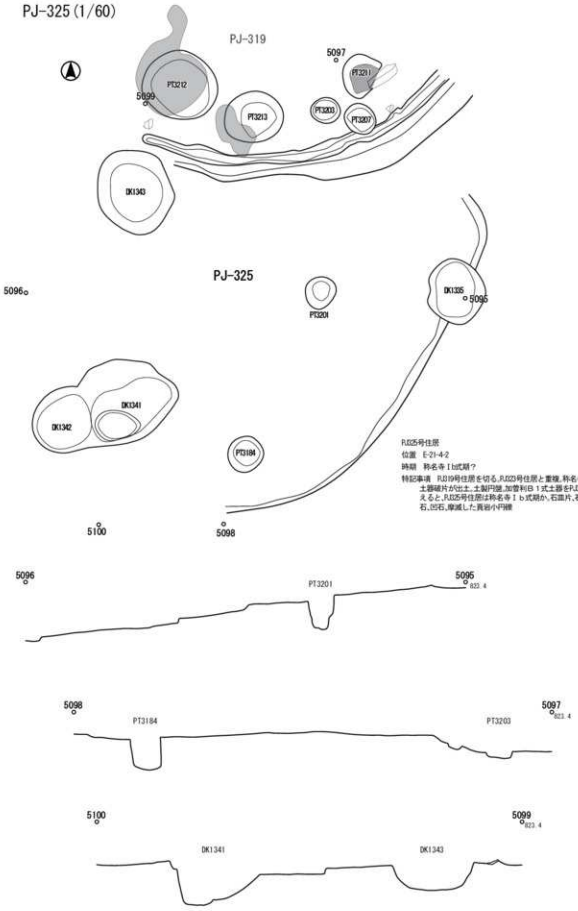


RJ324号住居
位置　F-21-0-4
時期　堀之内式期？
特記事項　保存状態不良で炉跡と柱穴のみを検出.床柱穴,雪利V式,加曽利E4式,称名寺Ⅰb式,堀之内Ⅰ式土器破片が混在し,堀之内Ⅰ式が最も多い.黒曜土製品,打製石斧,磨石,凹石,摩滅した頁岩小円礫,石錘,多孔石,珪質頁岩石核,両極石核,ハンマー

PJ-324炉 (1/40)



第 204 図　　PJ324 号住居



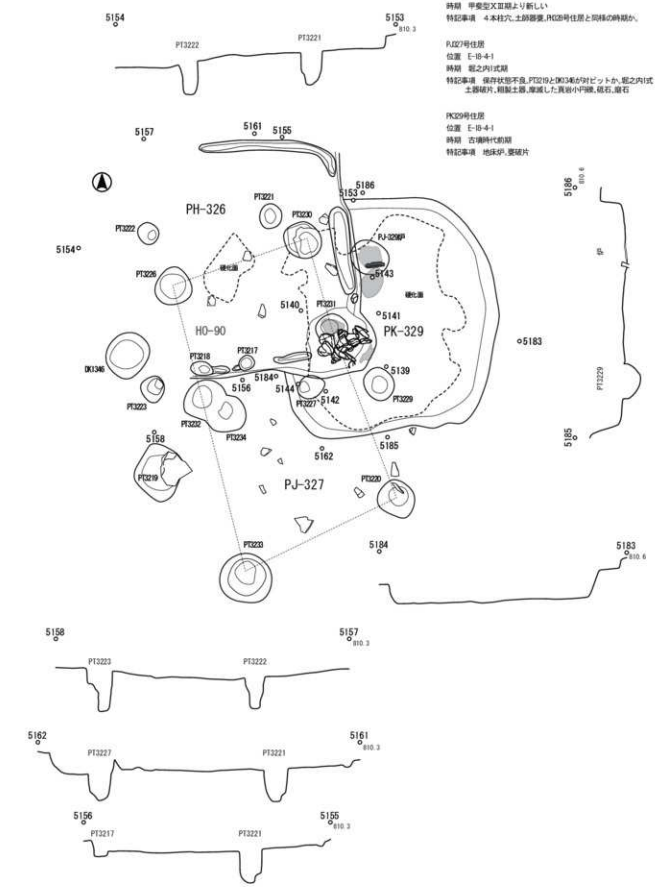
第 205 図　PJ325 号住居

PH-326・PK-329(1/60)

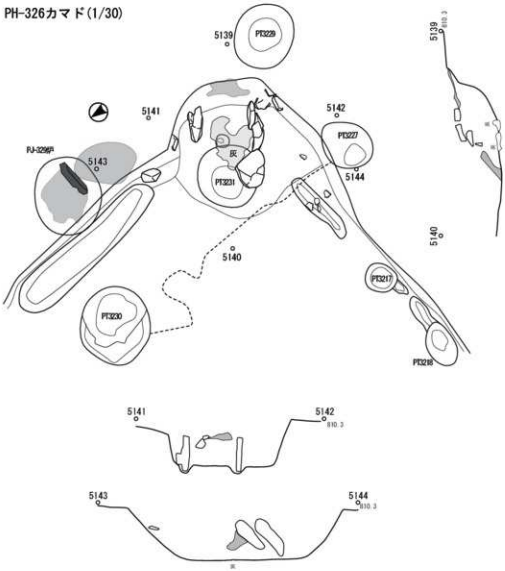
PH326号住居
位置　E-18-4-1
時期　甲類型X期以前より新しい
特記事項　４本柱穴,土師器壺,PH328号住居と同様の時期か。

PJ327号住居
位置　E-18-4-1
時期　縄文内付式期
特記事項　保存状態不良,PT219とDK346が対ピットか,縄文内付式土器破片,粗製土器,摩滅した貝殻(ハマグリ),砥石,敲石

PK329号住居
位置　E-18-4-1
時期　古墳時代前期
特記事項　地床炉,要破片



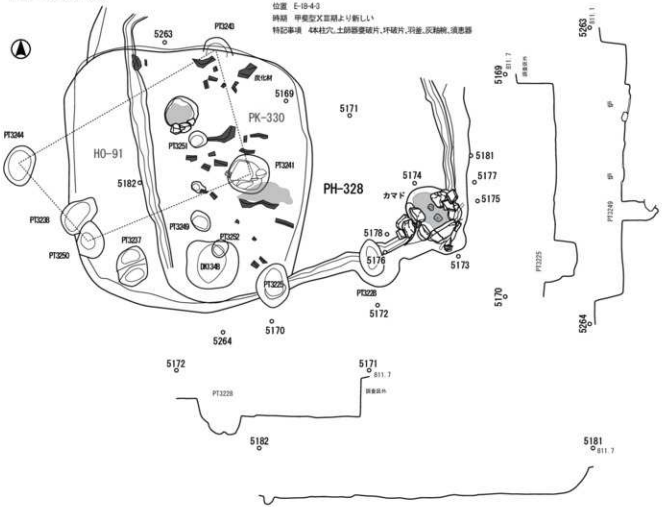
第 206 図　PH326 号住居・PK329 号住居



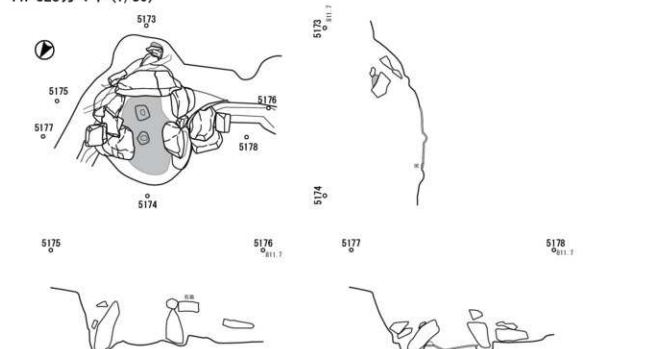
第 207 図　PH326 号住居

PH-328 (1/60)

PH328号住居
位置　E-18-4-3
時期　甲類型X期より新しい
特記事項　4本柱穴、土師器要破片、坏破片、羽釜、灰釉椀、須恵器



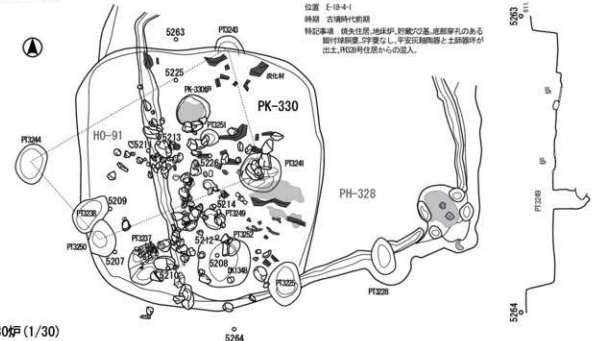
PH-328カマド (1/30)



第 208 図　PH328 号住居

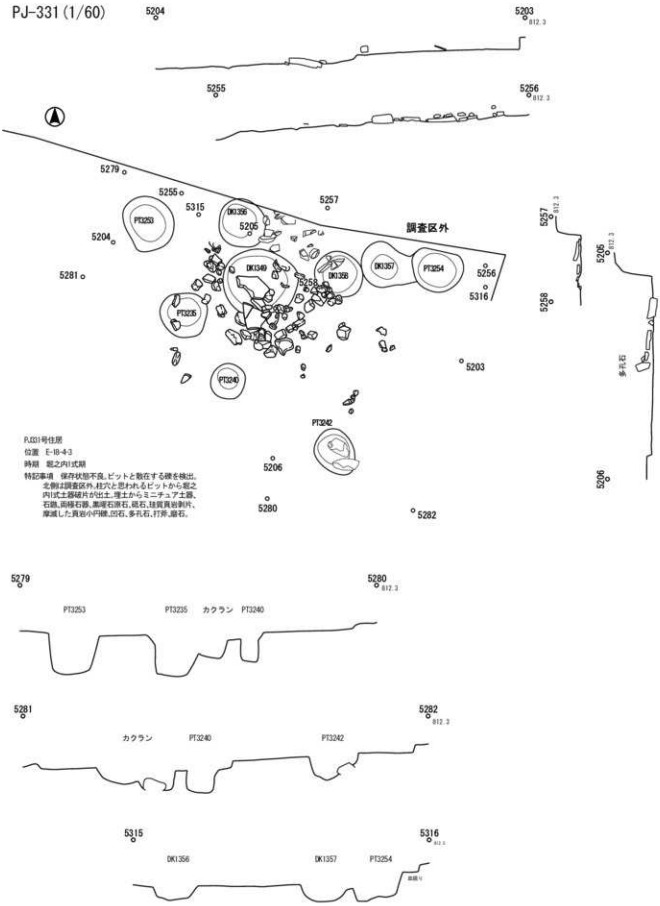
PK-330 (1/60)

PK330号住居
位置　E-19-4-I
時期　古墳時代前期
特記事項　焼失住居,地床炉,貯蔵穴2基,底部穿孔のある脚付球胴甕,3字窓なし,平安弘法陶器と土師器坏が出土,PK326号住居からの混入.

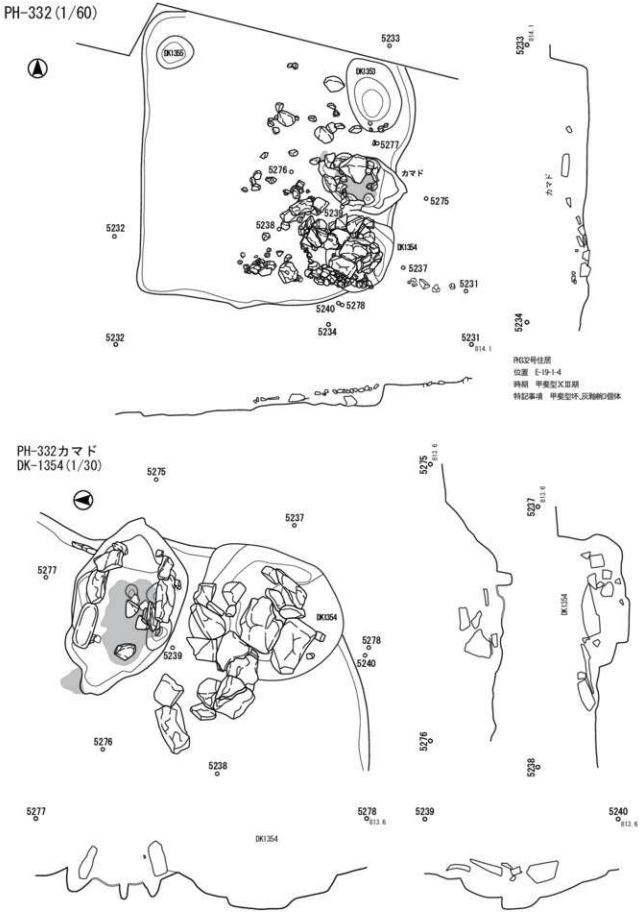


PK-330炉 (1/30)

第 209 図　　PK330 号住居

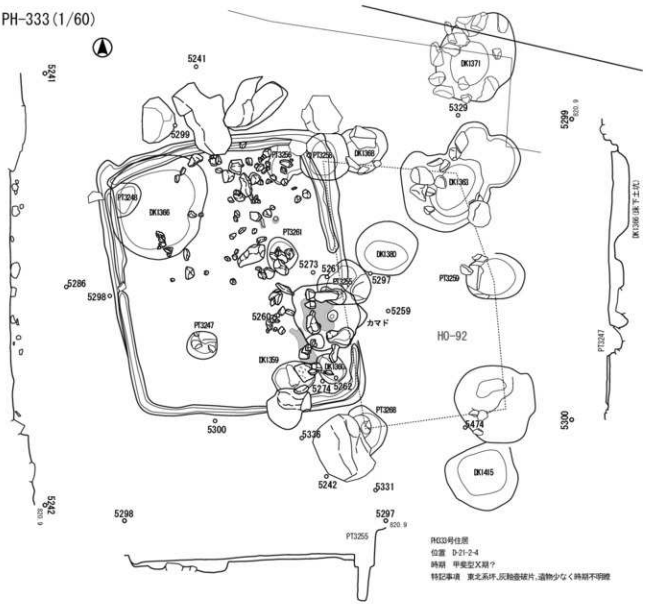


第 210 図　PJ331 号住居

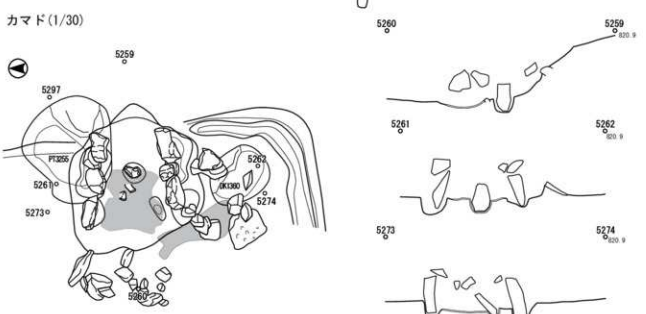


第 211 図　PH332 号住居

PH-333(1/60)

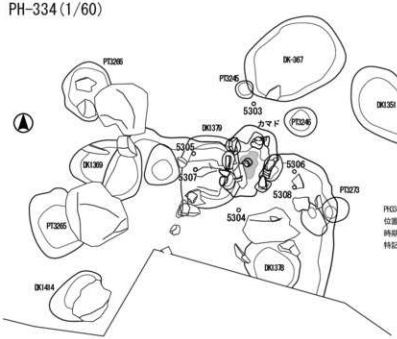


カマド(1/30)



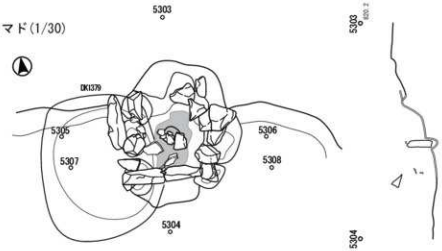
第 212 図　PH333 号住居

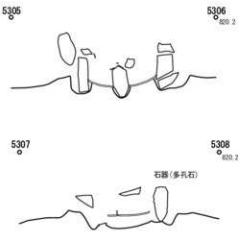
PH-334(1/60)



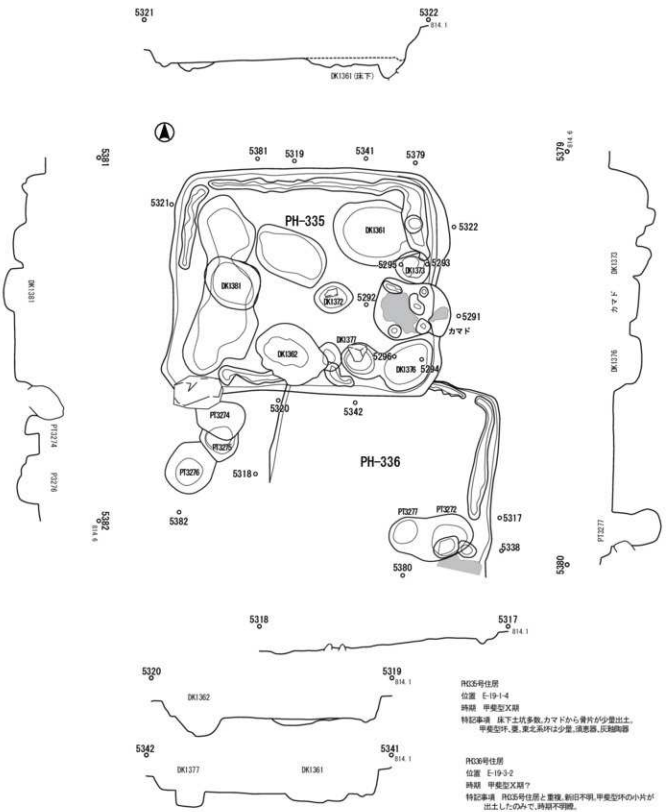
PH334号住居
位置　D-21-2-2
時期　甲類型期期～DK期
特記事項　本調査では最古段階の住居,甲類型坏,皿,壺,須恵器坏

カマド(1/30)

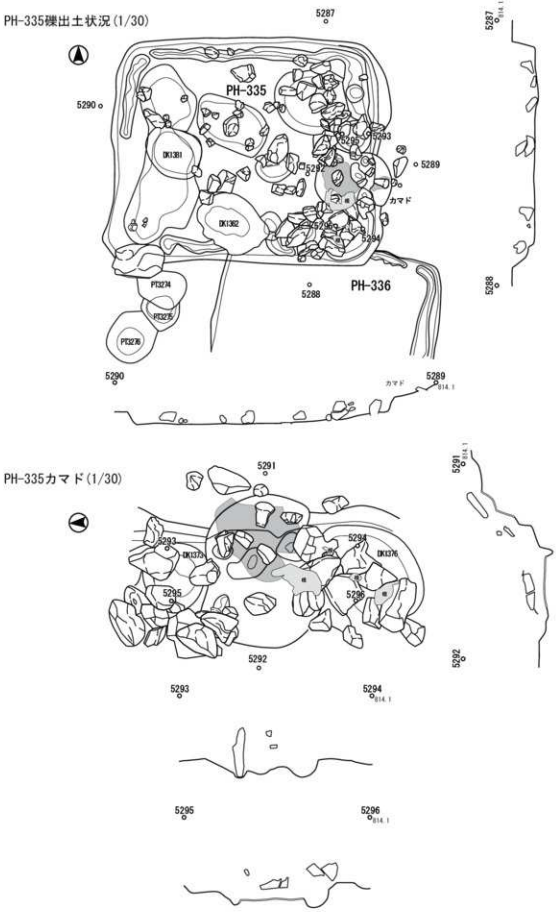




第 213 図　　PH334 号住居



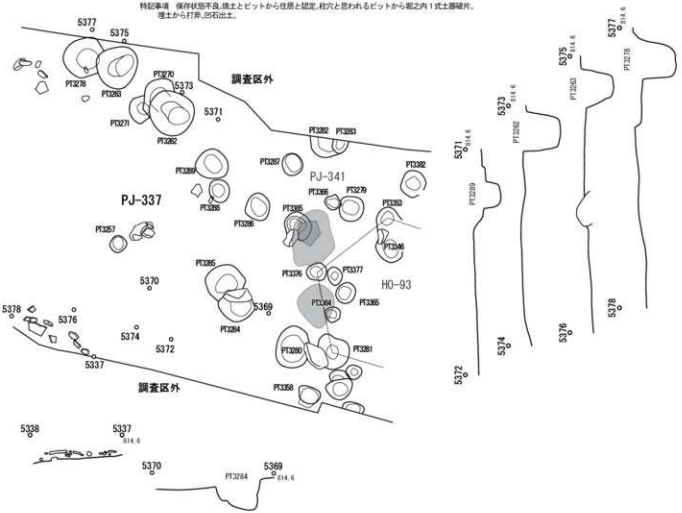
第 214 図　PH335 号住居・PH336 号住居



第 215 図　PH335 号住居

PJ-337(1/80)

PJ337号住居
位置　E-19-3-2
時期　堀之内1式期
特記事項　保存状態不良,焼土とピットから住居と認定,柱穴と思われるピットから堀之内1式土器破片,埋土から打斧,凹石出土。

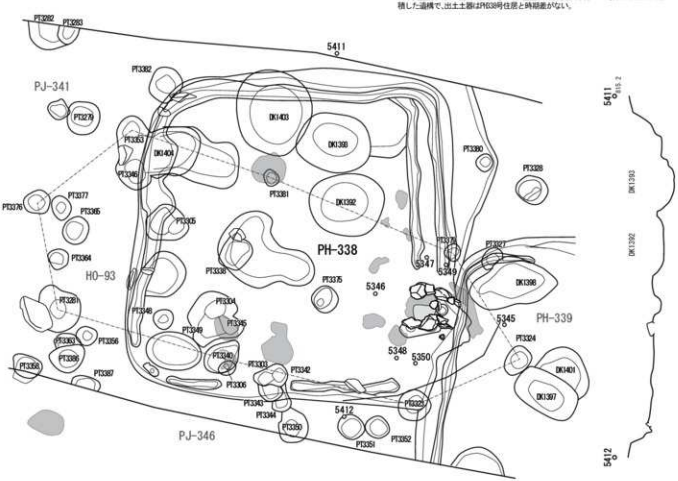


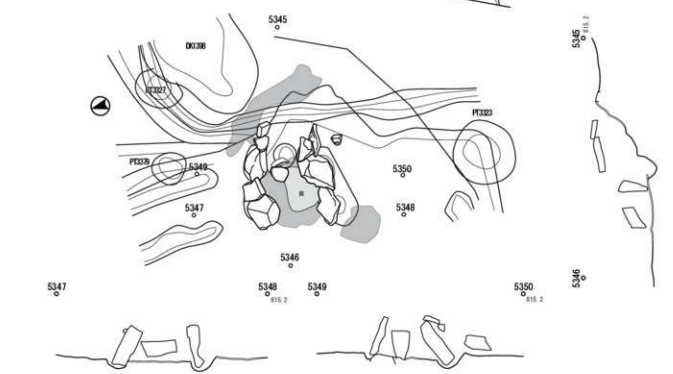
第 216 図　　PJ337 号住居

PJ337 号住居

PH-338 (1/60)

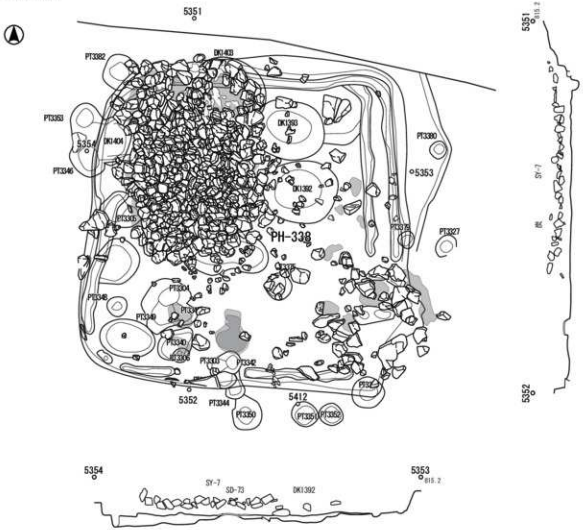
PH338号住居
位置　E-19-3-4
時期　甲類型Ⅹ期期
特記事項　貫で壁とあり、埋土中でSX07号集石を検出。甲類型Ⅹ期期の土師器坏多数。甲類型Ⅹ期期の坏１点、器臺「有舌ウ」、鉄滓、東北系土師器坏、甲類型壺、カキメを省略した甲類型壺、ロクロ壺、灰釉やや多い、小型壺、皿、須恵器破片。SX07号集石は焼礫が集積した遺構で、出土土器はPH338号住居と時期差がない。





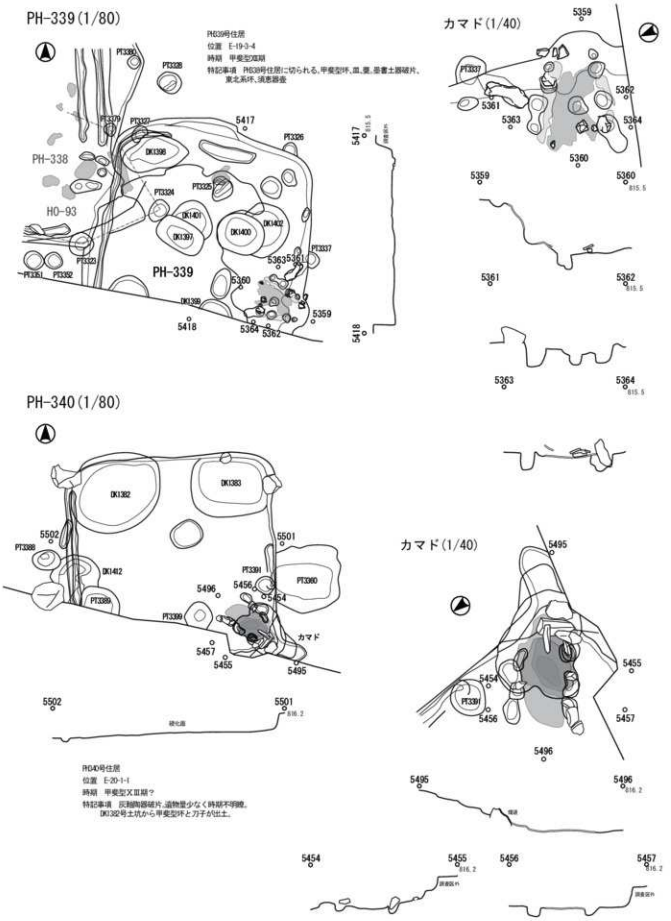
第 217 図　　PH338 号住居

SY-7(1/60)



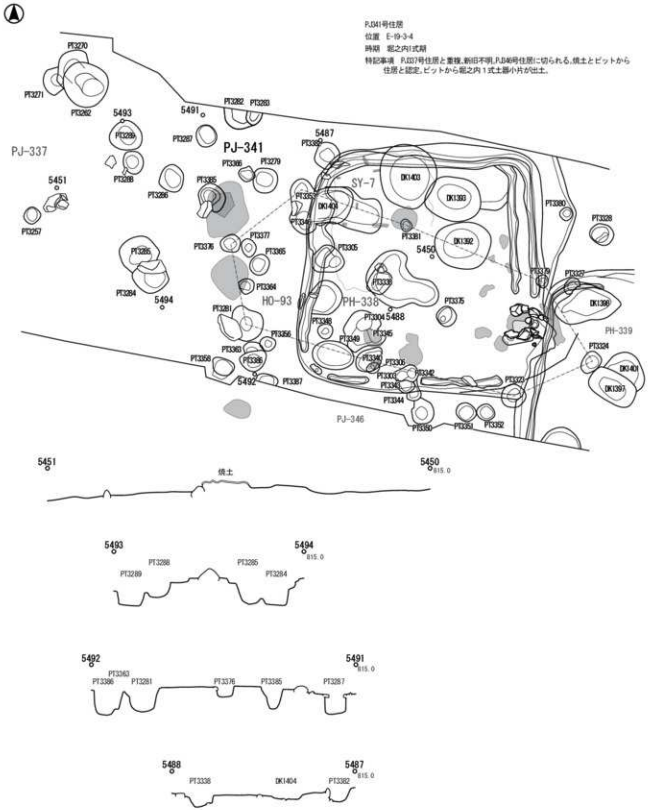
第 218 図　PH338 号住居・SY007 号集石

SY007 号集石

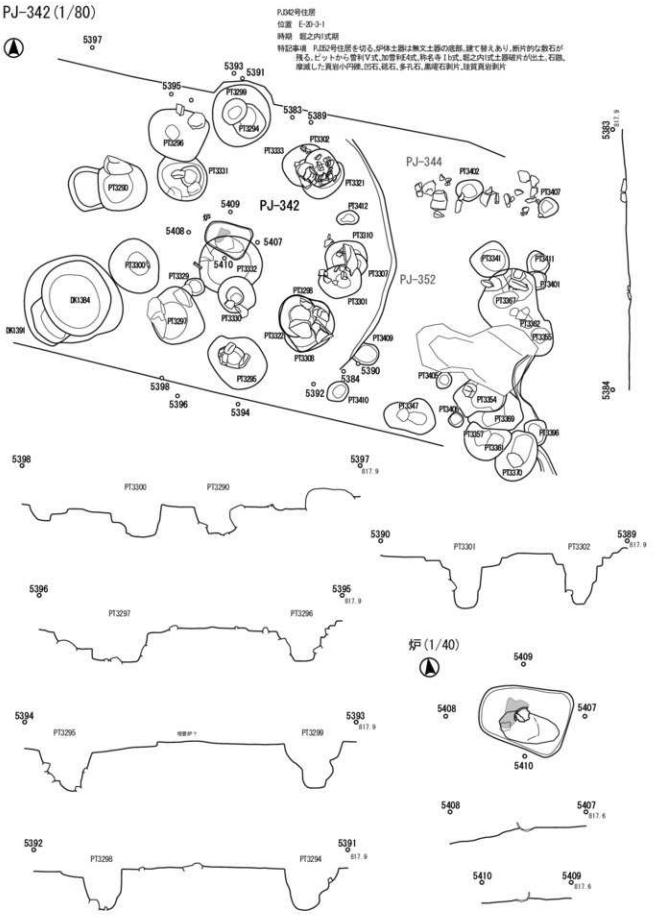


第 219 図　PH339 号住居・PH340 号住居

PJ-341 (1/80)



第 220 図　PH341 号住居

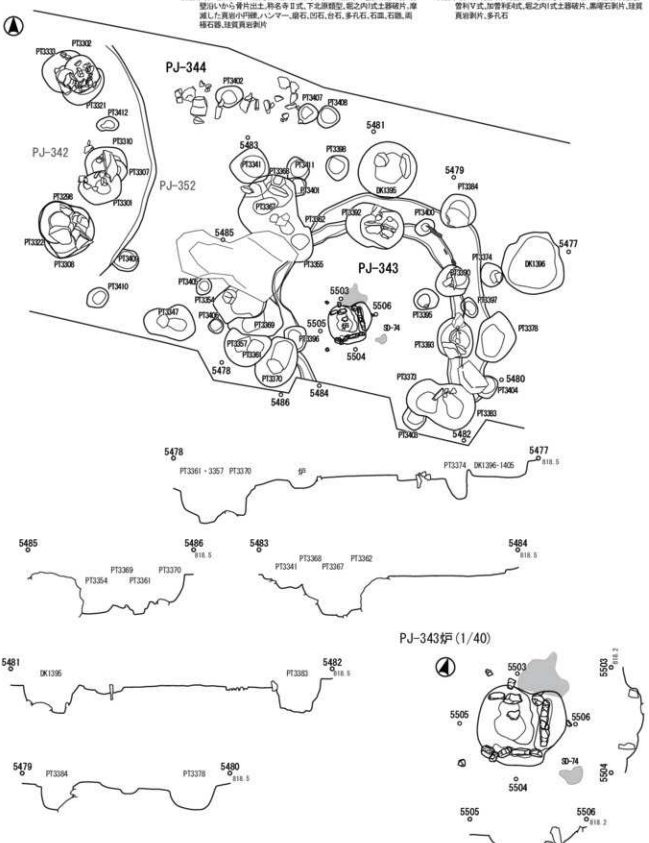


第 221 図　PH342 号住居

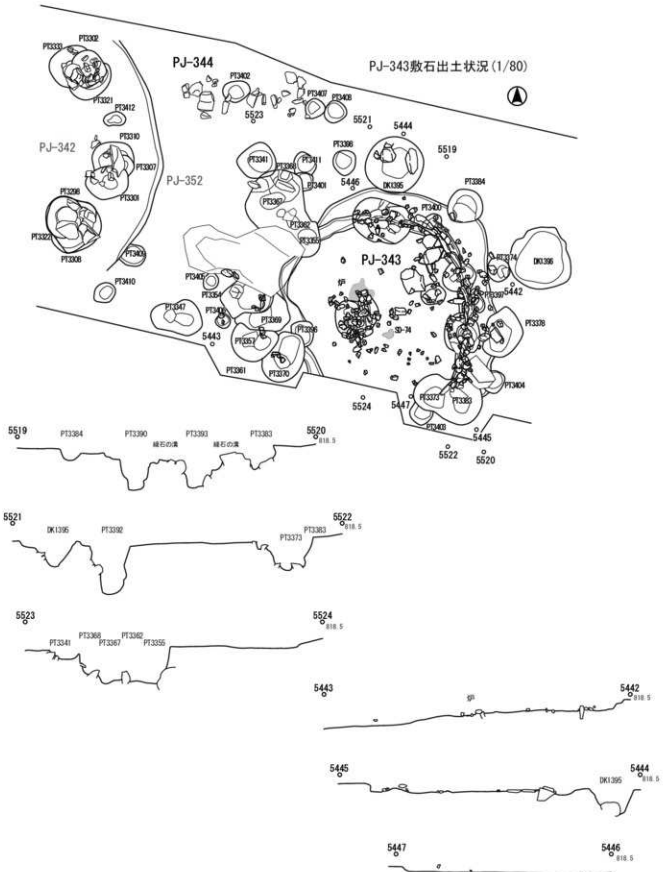
PJ-343・344 (1/80)

PJ343号住居
位置　E-20-3-i
時期　堀之内Ⅰ式期
特記事項　敷石がよく残る。炉跡2ヵ所、対ピット2組、同一地点で建て替え。壁沿いから骨片出土。熱各々Ⅱ式、下北原類型。堀之内Ⅰ式土器破片、磨滅した異岩小円礫、ハンマー、敲石、凹石、台石、多孔石、石皿、石鏃、周堀石器、珪質頁岩剥片

PJ344号住居
位置　E-20-3-i
時期　堀之内Ⅰ式期
特記事項　炉、柱穴不明。敷石が検出されたことから住居と認定。壁斜下式、加曽利E式、堀之内Ⅰ式土器破片、黒曜石剥片、珪質頁岩剥片、多孔石

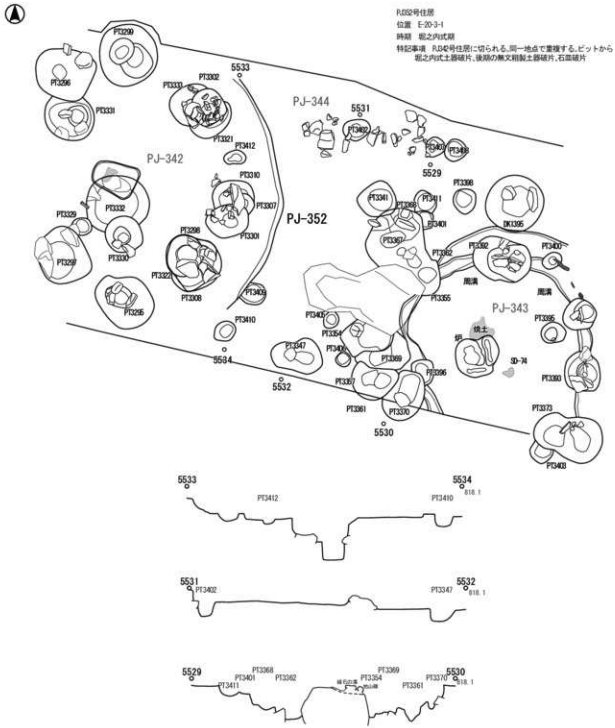


第 222 図　PJ343 号住居・PJ344 号住居

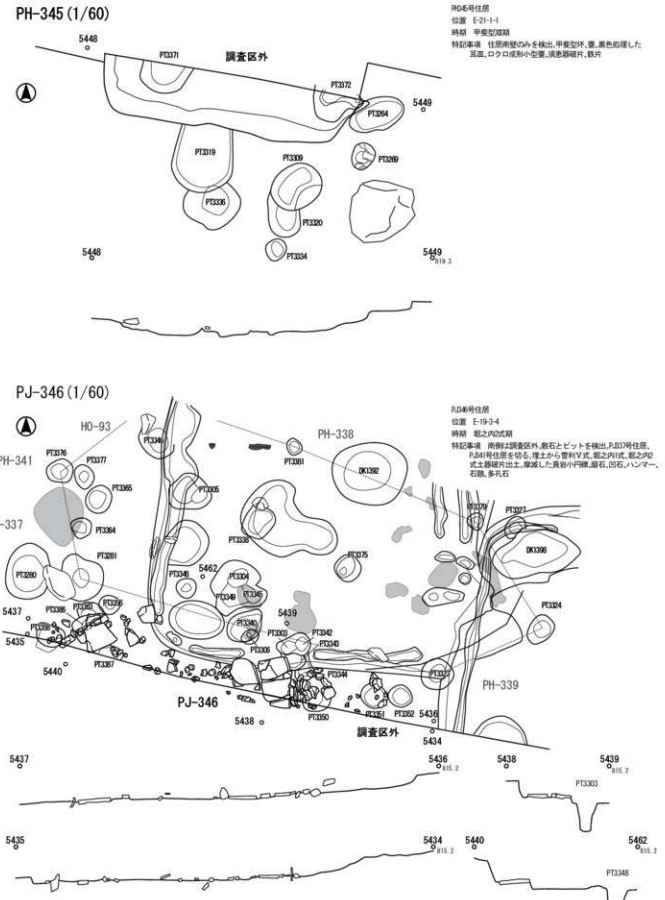


第 223 図　PJ343 号住居・PJ344 号住居

PJ-352(1/80)

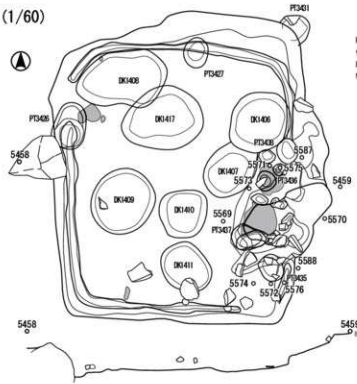


第 224 図　PJ352 号住居

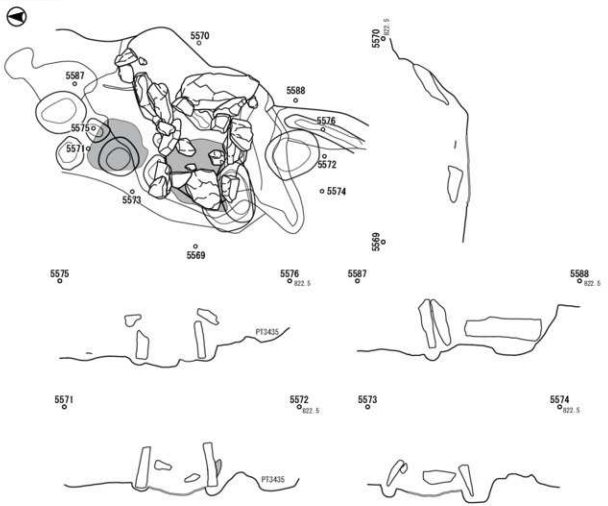


第 225 図　PJ345 号住居・PJ346 号住居

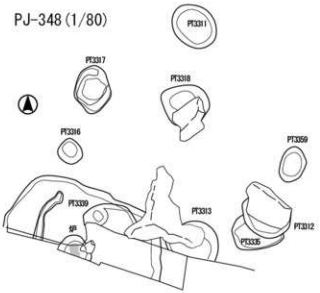
PH-347(1/60)



カマド(1/30)

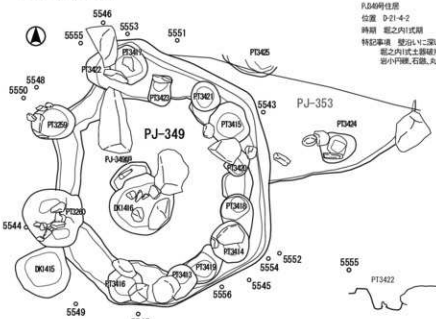


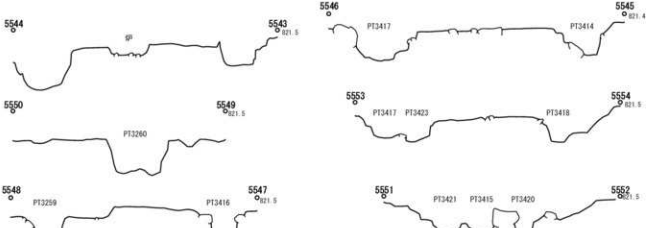
第 226 図　PH347 号住居



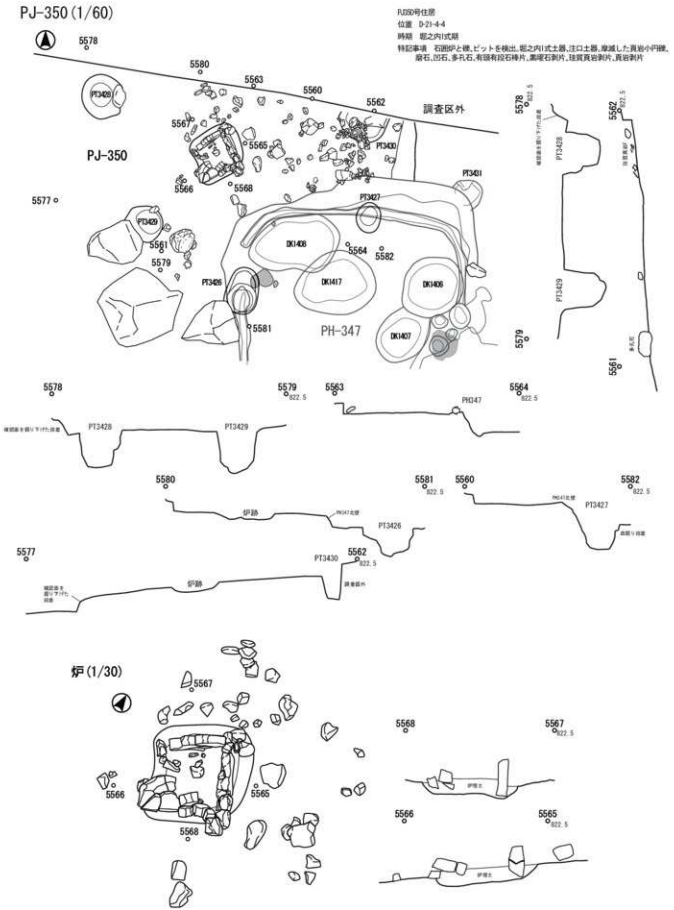
PJ48号住居
位置　E-20-3-3
時期　曽利Ⅴ式期
特記事項　調査区域で竪穴と炉のみ検出。曽利Ⅴ式土器3個体、曽利Ⅴ式土器破片、多孔石、黒曜石剥片

PJ48B号住居
位置　E-20-3-3
時期　堀之内Ⅰ式期
特記事項　PJ48号住居を切る。ピット配置から図上で想定した遺構。経穴と思われるピットから称名寺Ⅰ1式、称名寺Ⅱ式、下北原類型、堀之内Ⅰ式土器破片、石鏃が出土。

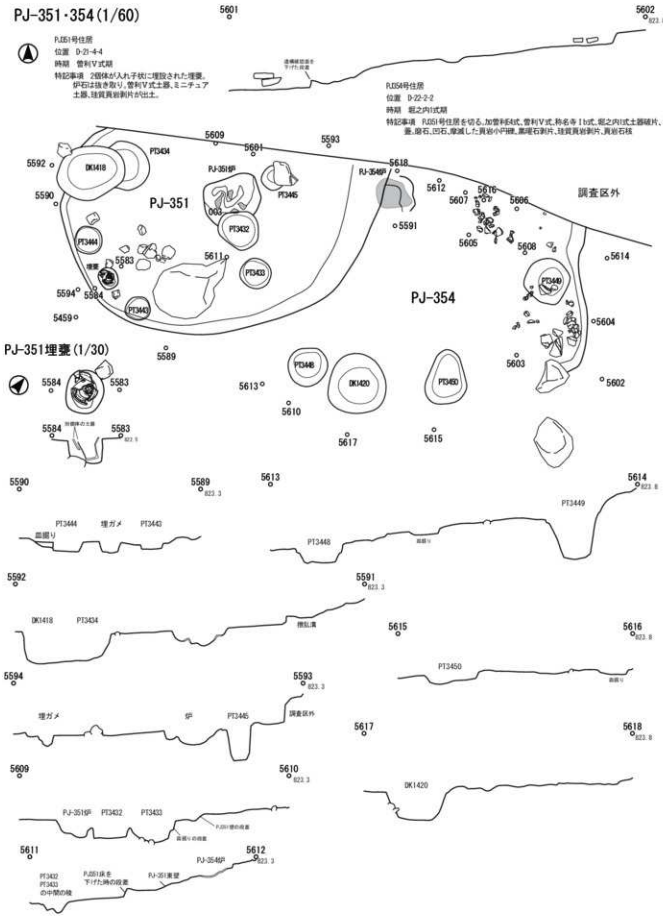




第 227 図　　PJ348 号住居・PJ349 号住居

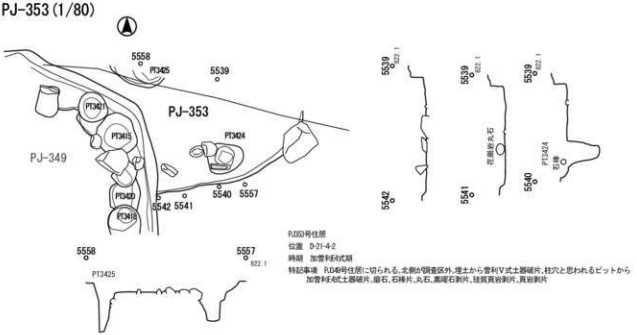


第 228 図　PJ350 号住居



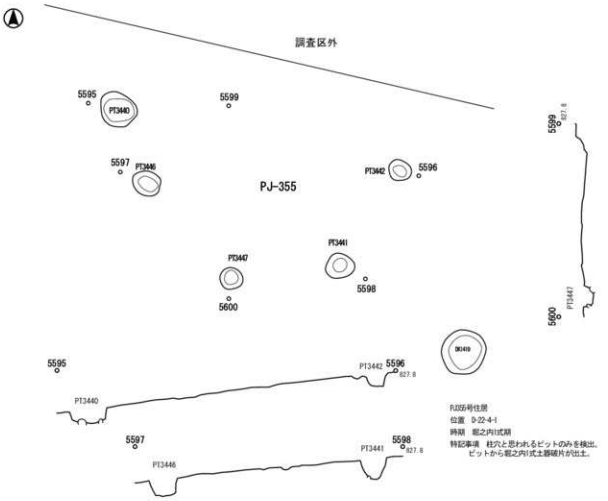
第 229 図　PJ351 号住居・PJ354 号住居

PJ-353 (1/80)



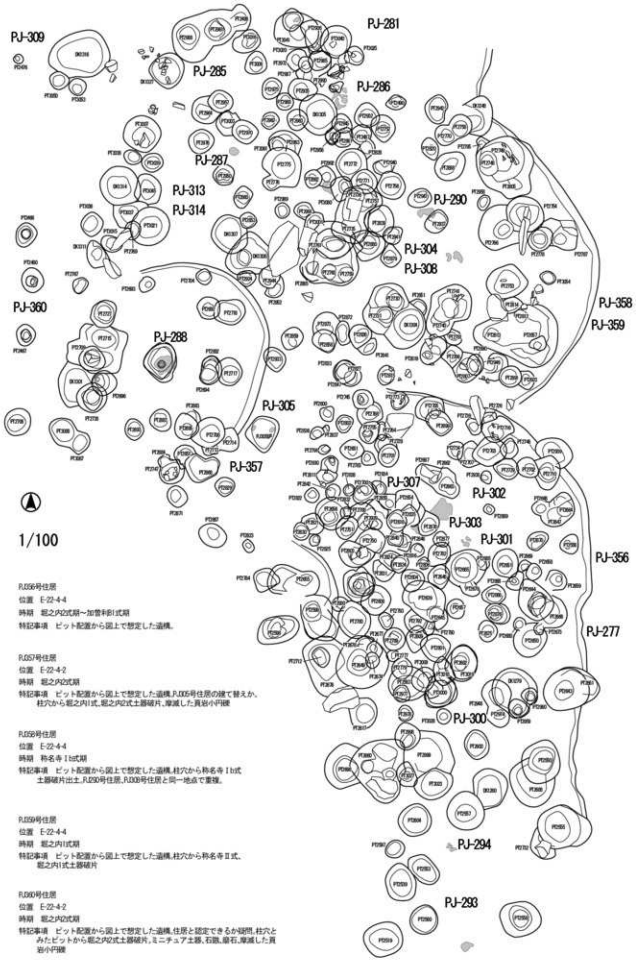
PJ353号住居
位置　D-21-4-2
時期　加曽利E式期
特記事項　PJ34号住居に切られる。北側が調査区外。埋土から曽利V式土器破片、柱穴と思われるピットから加曽利E式土器破片、磨石、石棒片、丸石、黒曜石剥片、珪質頁岩剥片、頁岩剥片

PJ-355 (1/80)



PJ355号住居
位置　D-22-4-1
時期　堀之内I式期
特記事項　柱穴と思われるピットのみを検出。ピットから堀之内I式土器破片が出土。

第 230 図　PJ353 号住居・PJ355 号住居



PJ356号住居
位置　E-22-4-4
時期　鬼之内2式期～加曽利B1式期
特記事項　ピット配置から図上で想定した道構。

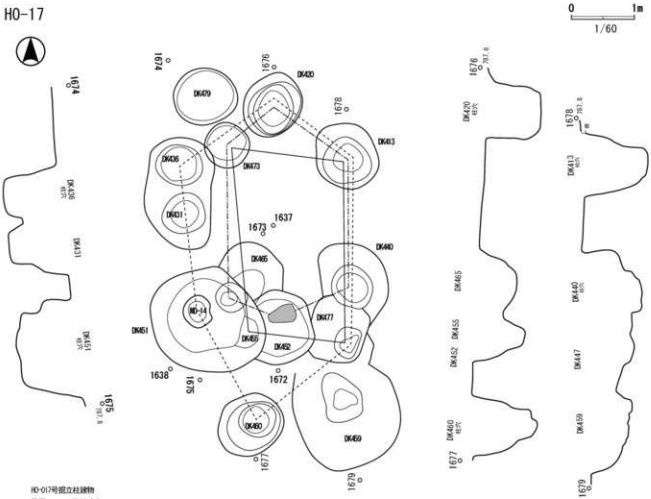
PJ357号住居
位置　E-22-4-2
時期　鬼之内2式期
特記事項　ピット配置から図上で想定した道構,PJ05号住居の建て替えか。
柱穴から鬼之内1式,鬼之内2式土器破片,摩滅した頁岩小円錐

PJ358号住居
位置　E-22-4-4
時期　称名寺Ⅰ式期
特記事項　ピット配置から図上で想定した道構,柱穴から称名寺Ⅰ式
土器破片出土,PJ50号住居,PJ08号住居と同一地点で重複。

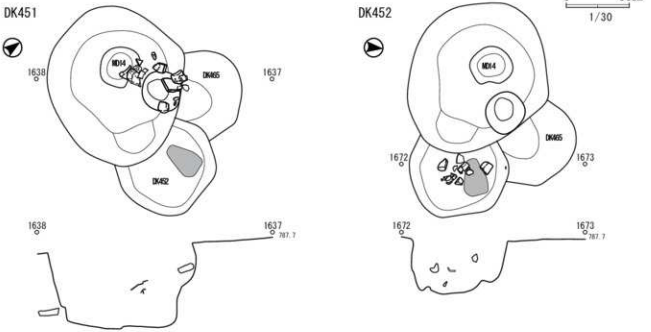
PJ359号住居
位置　E-22-4-4
時期　鬼之内1式期
特記事項　ピット配置から図上で想定した道構,柱穴から称名寺Ⅱ式、
鬼之内1式土器破片

PJ360号住居
位置　E-22-4-2
時期　鬼之内2式期
特記事項　ピット配置から図上で想定した道構,住居と認定できるか疑問,柱穴と
みたピットから鬼之内2式土器破片,ミニチュア土器,石匙,磨石,摩滅した頁
岩小円錐

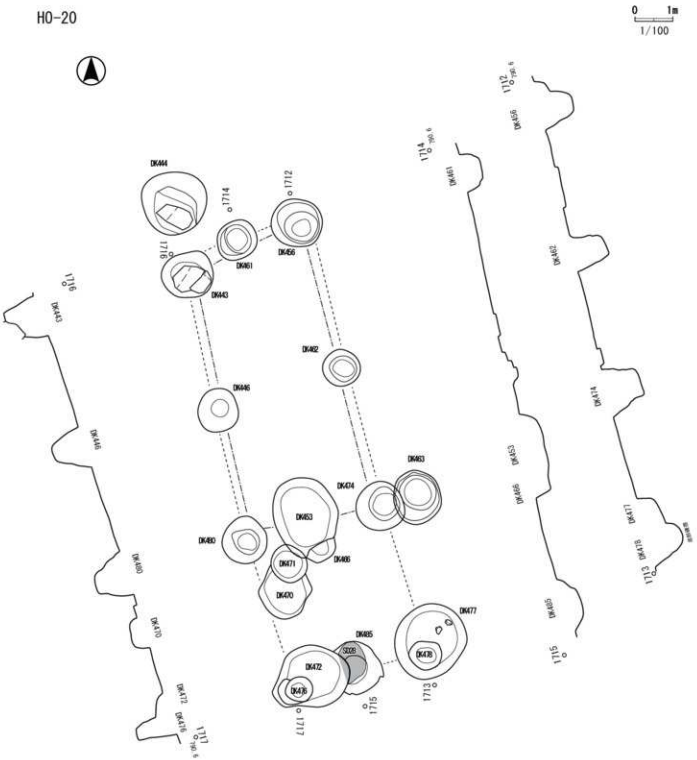
第 231 図　PJ356 号・357 号・358 号・359 号・360 号住居

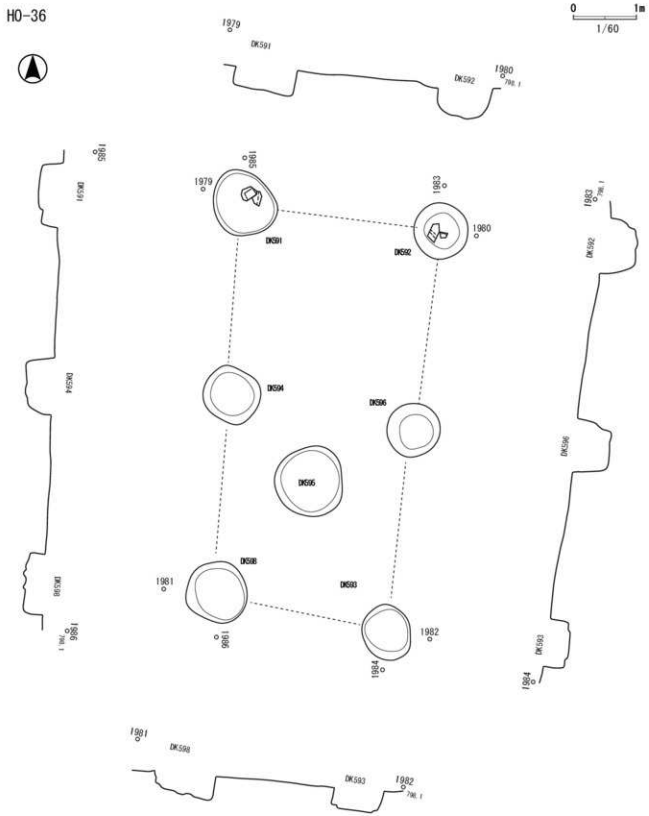


H0-017号掘立柱建物
位置　H-13-4-4
時期　管利Ⅴ式期
特記事項　1間×1間長方形建物と、1間×1間の棟持柱をもつ亀甲型建物、同一地点で回程度の建替えか、旧段階の柱穴が管利Ⅴ式古段階併行のH014号埋設土器に切られる。
柱穴に似た土坑と重複する、柱穴が管利Ⅳ式新段階、管利Ⅴ式新段階、管利Ⅴ式古段階、管利Ⅴ式新段階の土器破片、石器、両極石器、研磨石、多孔石、黒曜石剥片が出土。



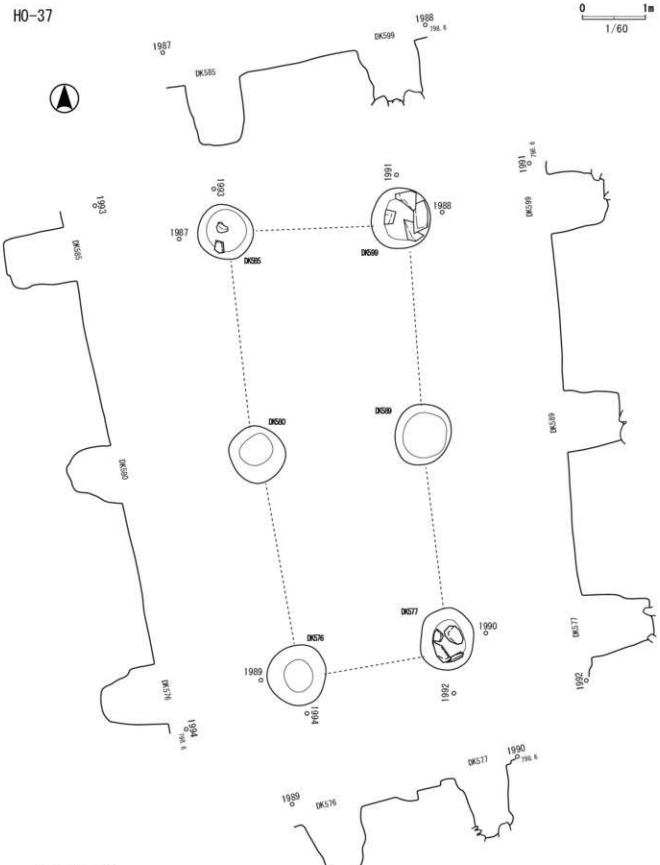
第 232 図　H0017 号建物・DK451 号土坑・DK452 号土坑


H0-20
0 1m
1/100
DK464
1714
1712
1716
DK461
DK456
DK443
1716
DK482
DK446
DK463
DK474
DK453
DK480
DK471
DK406
DK470
DK477
DK485
DK472
DK438
1713
1715
1717
1711
DK481
DK456
DK462
DK444
DK453
DK455
DK440
DK419
DK480
DK470
DK472
DK419
1712
1714
1711
1715
1713
1716
1717
1715
1711
DK443
DK446
DK463
DK474
DK453
DK455
DK440
DK419
DK480
DK470
DK477
DK485
DK472
DK438
DK471
DK406
DK461
DK456
DK482
DK444
DK462
DK481
DK456
DK455
DK440
DK419
DK480
DK470
DK477
DK485
DK472
DK438
DK471
DK406
DK463
DK474
DK453
DK482
DK446
DK443
DK464
DK461
DK481
DK462
DK444
DK463
DK474
DK453
DK455
DK440
DK419
DK480
DK470
DK477
DK485
DK472
DK438
DK471
DK406
DK482
DK446
DK443
DK464
DK461
DK456
DK481
DK462
DK444



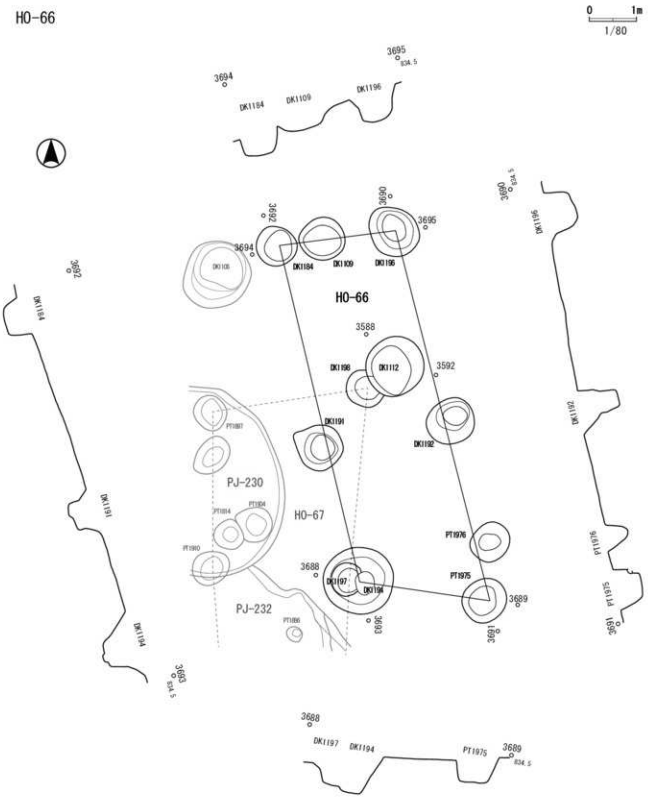
H0-036号掘立柱建物
位置　I-16-3-I
時期　総之内Ⅰ式期
特記事項　1間×2間の長方形建物、柱穴から管利Ⅳ式、管利Ⅴ式、加曽利B式、加曽利B式、関沢類型、朴名寺Ⅰb式、総之内1式、珪質頁岩、砂岩剥片。

第 234 図　H0036 号建物



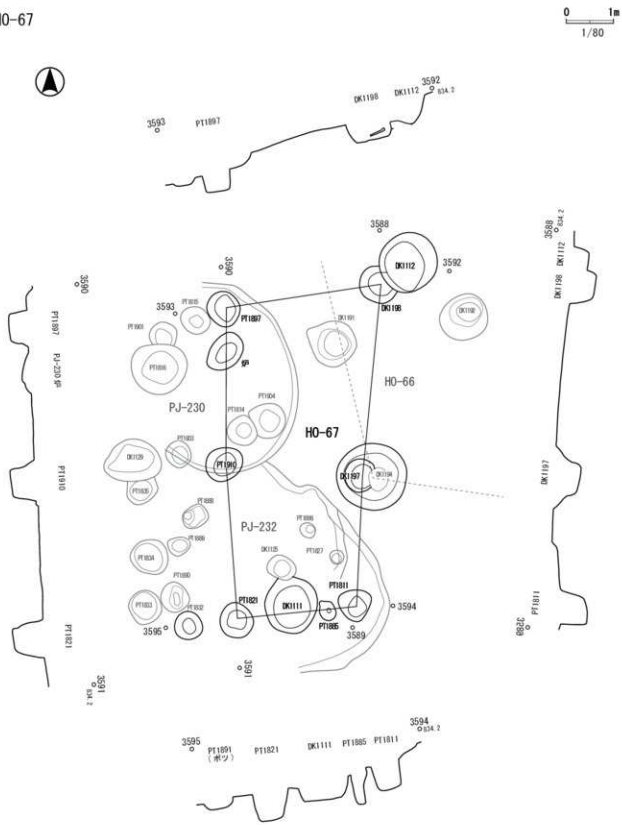
H0-037号掘立柱建物
位置　　I-16-4-1
時期　　堀之内1式期
特記事項　1間×2間、長方形。H0036号住居に近接。建物構造、規模が類似する。柱穴から称名寺式か堀之内1式と思われる土器破片、石鏃。

第 235 図　　H0037 号建物



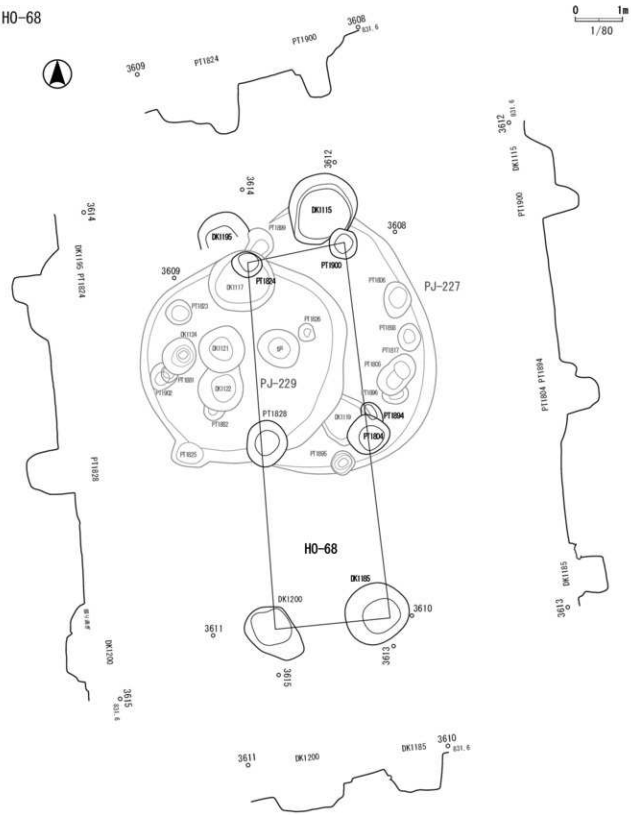
HO-066号掘立柱建物
位置　　G-24-4-2
時期　　曽利Ⅴ式期？
特記事項　1間×2間。H0067号掘立柱建物と重複。柱穴PT1975から中期的な形状の打製石斧。柱穴配置がH0068号掘立柱建物に類似。曽利Ⅴ式期か。

第 236 図　　H0066 号建物



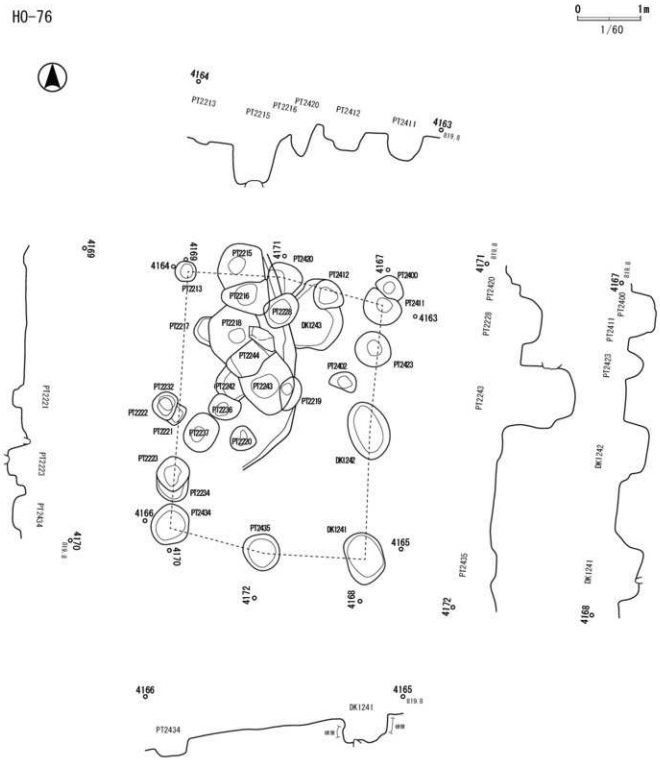
HO-067号掘立柱建物
位置　　G-24-2-4
時期　　曽利Ⅴ式期？
特記事項　1間×2間。PJ230号、PJ232号住居と重複。柱穴配置がHO068号掘立柱建物に類似。曽利Ⅴ式期か。

第 237 図　　HO067 号建物



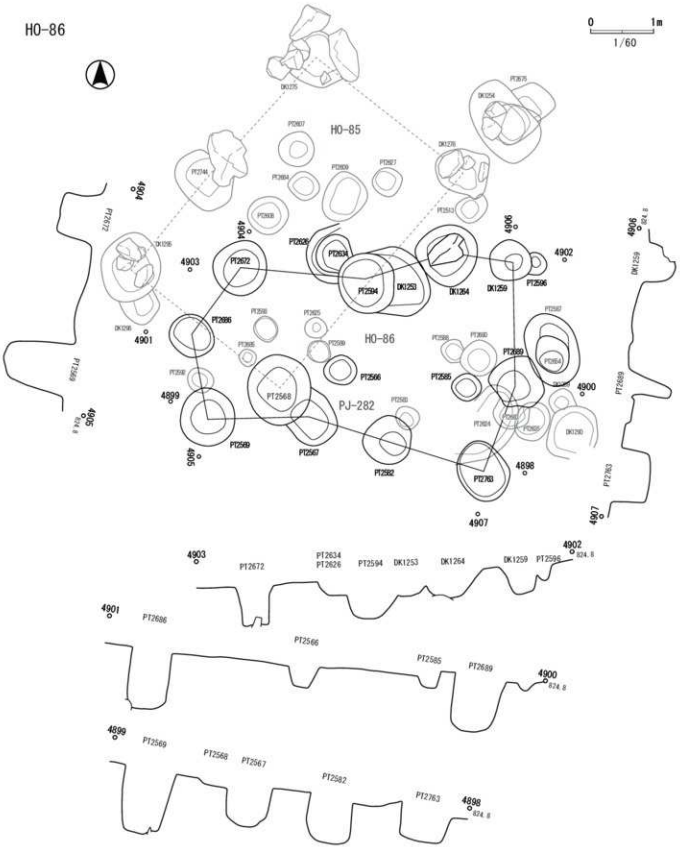
H0-068号掘立柱建物
位置　　G-24-2-1
時期　　曽利Ⅴ式期
特記事項　1間×2間。PJ227号住居、PJ229号住居と重複。柱穴DK1185から曽利Ⅳ式新段階土器破片、DK1200から曽利Ⅴ式土器破片が出土。

第 238 図　H0068 号建物



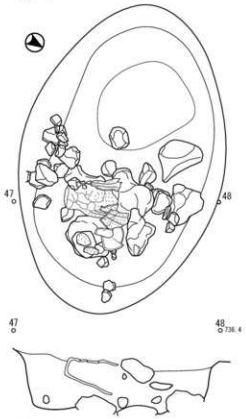
HO-076号掘立柱建物
位置　　G-22-2-4
時期　　堀之内I式期
特記事項　PJ264号住居と重複。2間×2間。柱穴から堀之内I式？土器破片、粗製土器破片。周囲にも掘立柱建物あり。

第 239 図　　HO076 号建物

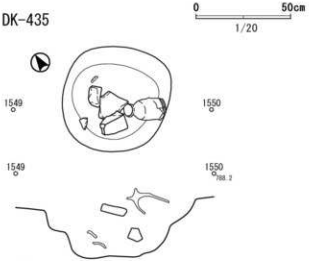


HO-086号掘立柱建物
位置　　F-22-1-1
時期　　曽利Ⅴ式期
特記事項　2間×3間、亀甲型。PJ282号住居と重複。柱穴DK1259で曽利Ⅴ式古段階土器破片、台石。PT2689で曽利Ⅳ式～Ⅴ式土器破片。PT2567で曽利Ⅴ式古段階土器破片。

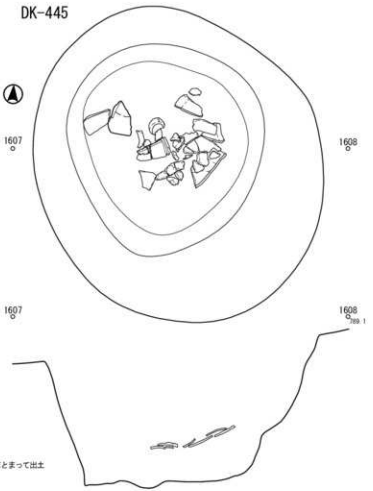
第 240 図　　H0086 号建物



天王原1工区
DK001号土坑
位置　F-I-3-4
時期　曽利Ⅴ式期
特記事項　曽利Ⅴ式古段階一中段階の土器2個体が土坑上面で横倒しになって出土.黒曜石剥片

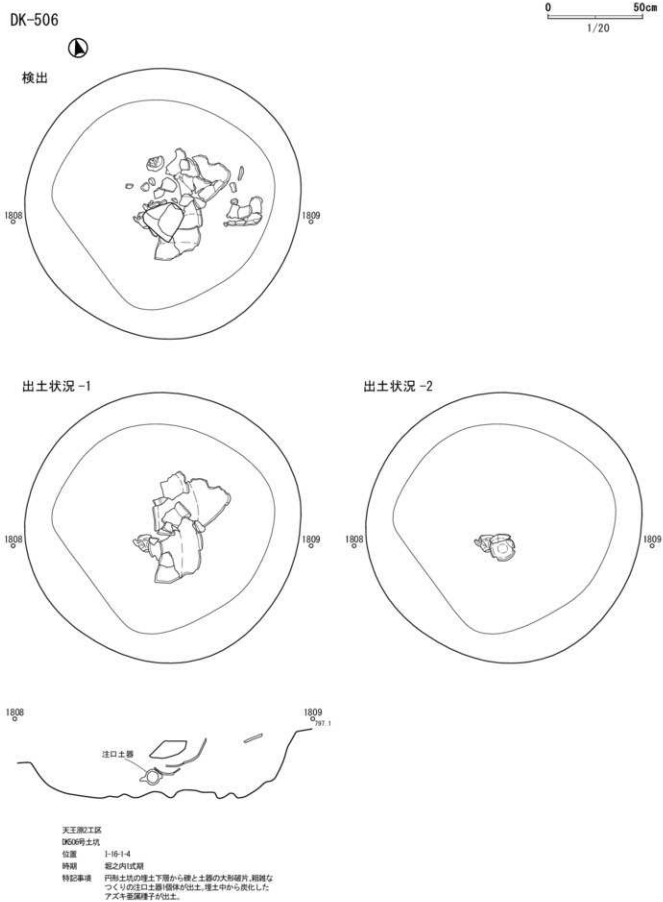


天王原2工区
DK435号土坑
位置　H-14-2-2
時期　曽利Ⅴ式期
特記事項　RJ51号住居を切る.円形土坑の埋土下層で横倒しになった曽利Ⅴ式の縦付深鉢形土器,鉄平石が出土.

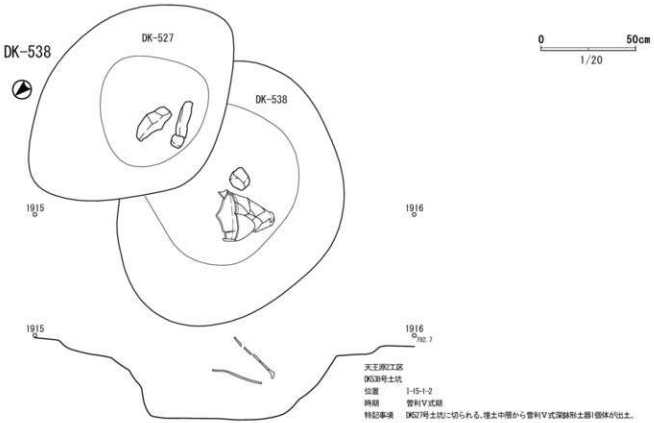


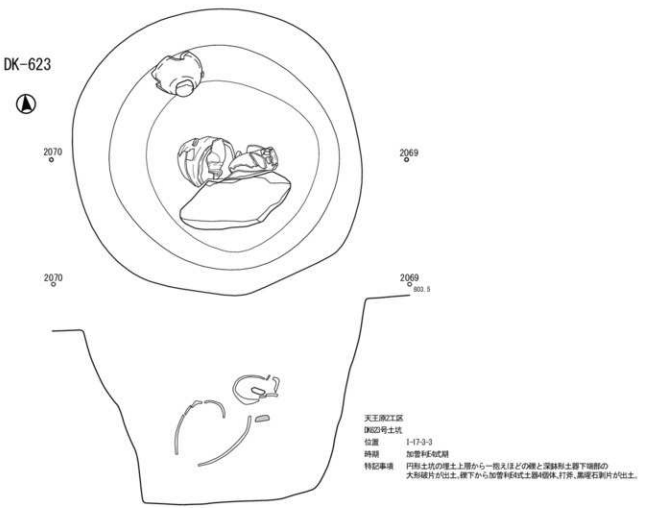
天王原2工区
DK445号土坑
位置　I-14-1-1
時期　曽利Ⅴ式期
特記事項　円形土坑の埋土中間から曽利Ⅴ式土器破片がまとまって出土

第 241 図　1 工区 DK001 号土坑・2 工区 DK435 号土坑・DK445 号土坑

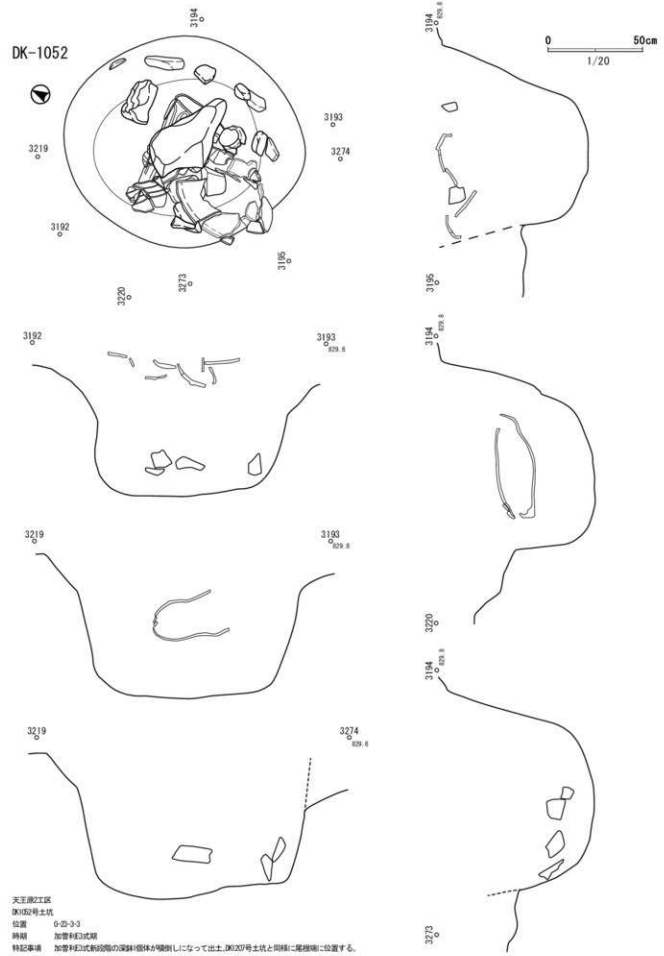


第 242 図　DK506 号土坑



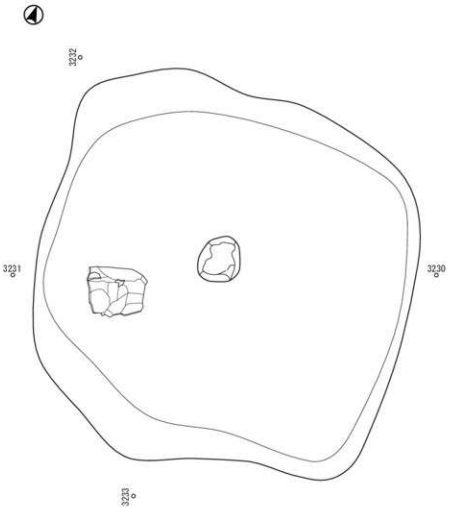


第 243 図　DK538 号土坑・DK623 号土坑



第 244 図　DK1052 号土坑

DK-1065

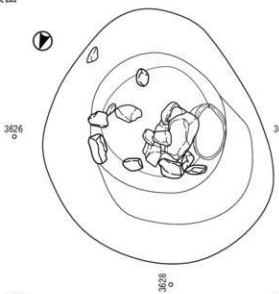


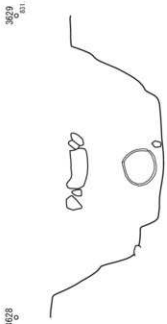
天王原江区
DK1065号土坑
位置　E-23-3-2
時期　早期鵜ヶ島台式期
特記事項　隅丸方形、平底の土坑。埋土中から鵜ヶ島台式の深鉢型土器の大形破片と人頭大礫が出土。

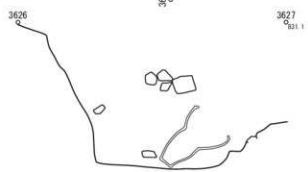
第 245 図　DK1065 号土坑

DK-1207

検出

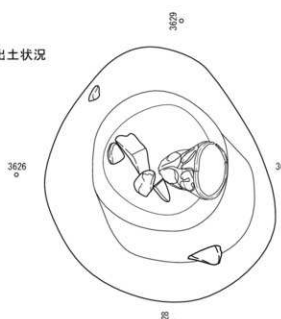




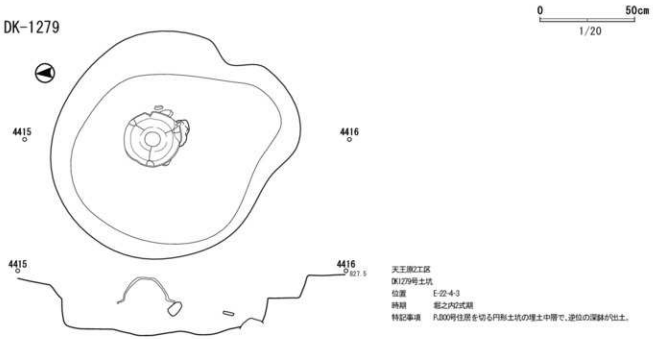


天王原2工区
DK1207号土坑
位置　　G-24-1-3
時期　　加曽利E式期
特記事項　住居が分布する尾根筋が埋没河谷に落ち込む尾根端に位置する。深鉢1個体が出土。
同じ形状の土坑(DK1052,DK1053,DK1055,DK1066,DK1067など)が尾根端で並んで検出された。

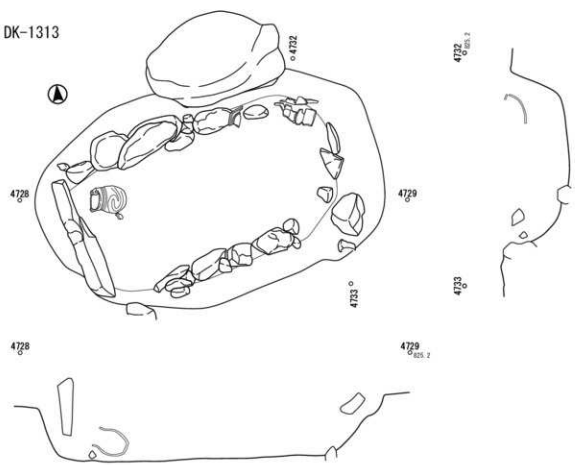
出土状況



第 246 図　　DK1207 号土坑

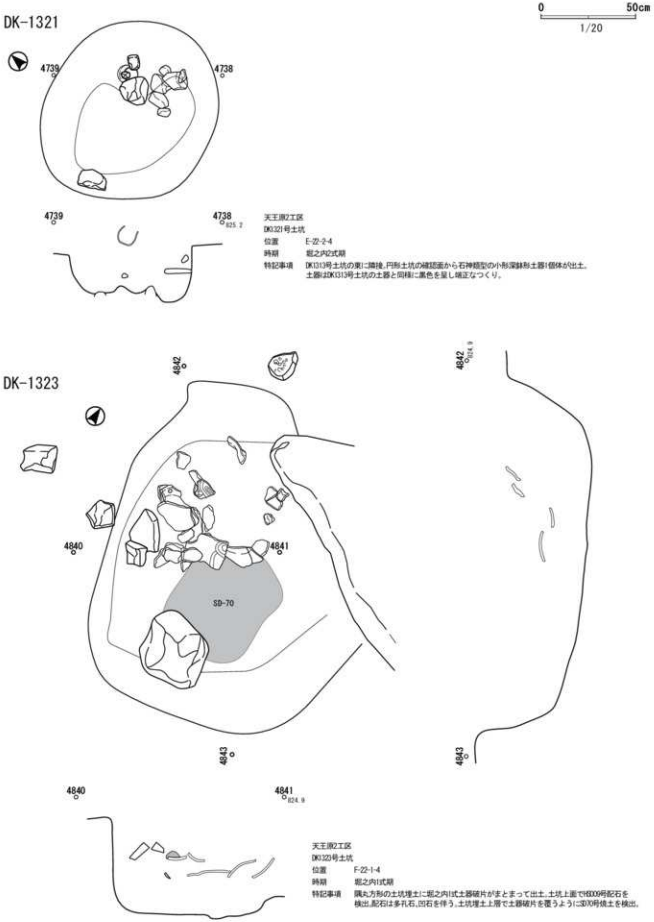


天王原2工区
DK1279号土坑
位置　E-22-4-3
時期　堀之内式期
特記事項　F.800円住居を切る円形土坑の埋土中間で、逆位の深鉢が出土。



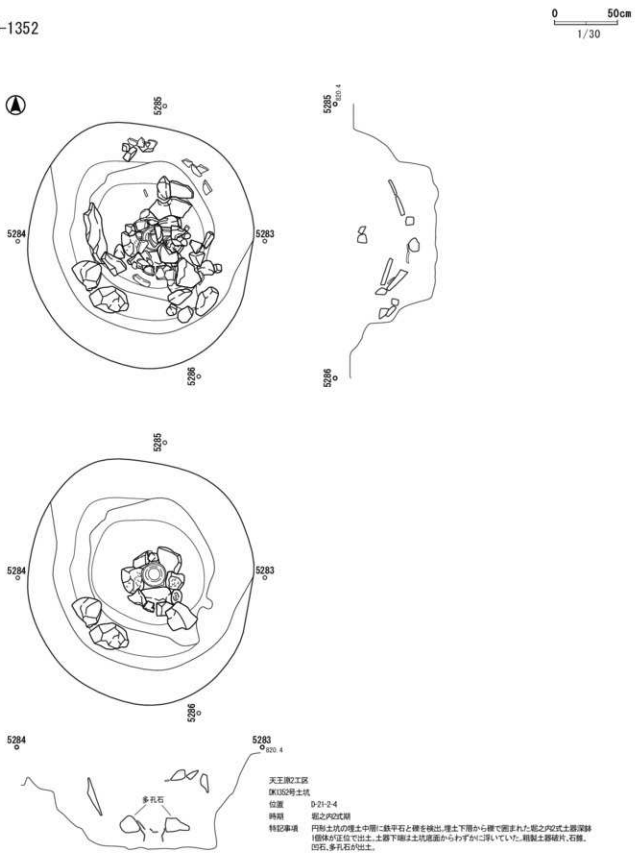
天王原2工区
DK1313号土坑
位置　E-22-2-4
時期　堀之内式期
特記事項　長方形の隅り方の壁際に線を並べた石板状の土坑。一短辺に平石を立てる。石神類型の注口土器1個体、深鉢1個体の大形破片、浅鉢1個体の小破片が出土。土器はいずれも黒色を呈し堅正なつくり。

第 247 図　DK1279 号土坑・DK1313 号土坑

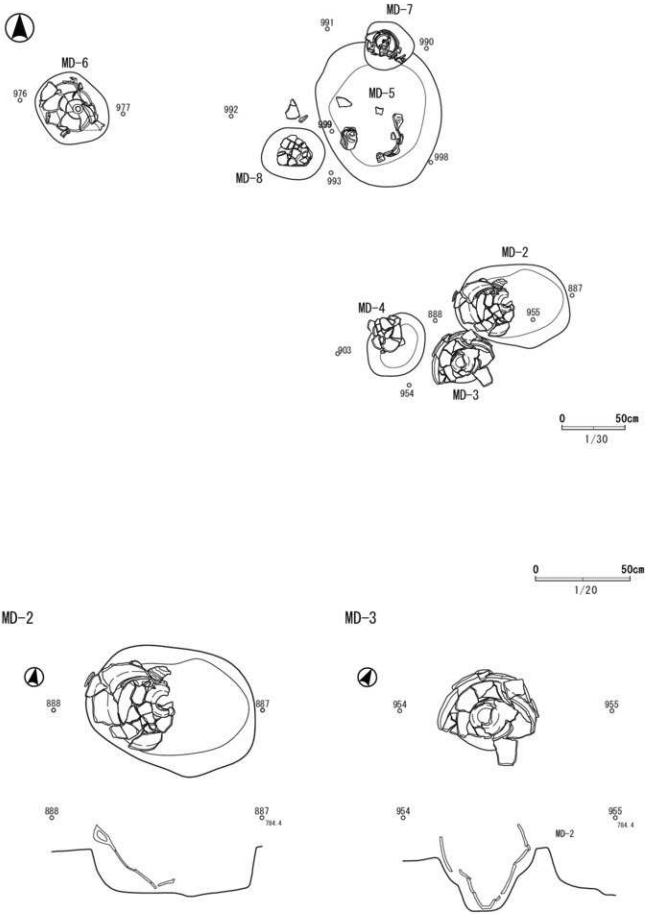


第 248 図　DK1321 号土坑・DK1323 号土坑

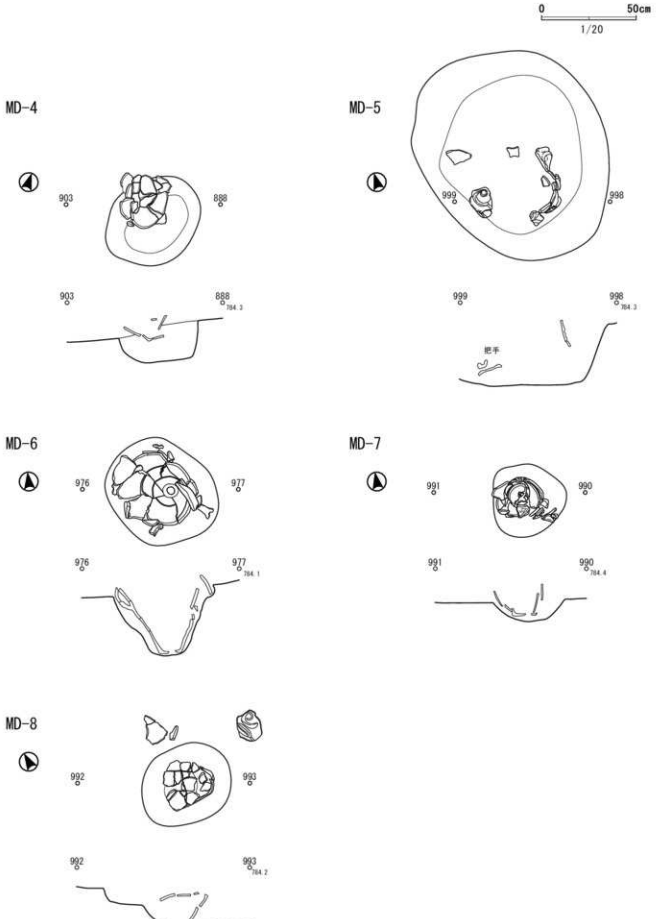
DK-1352



第 249 図　DK1352 号土坑

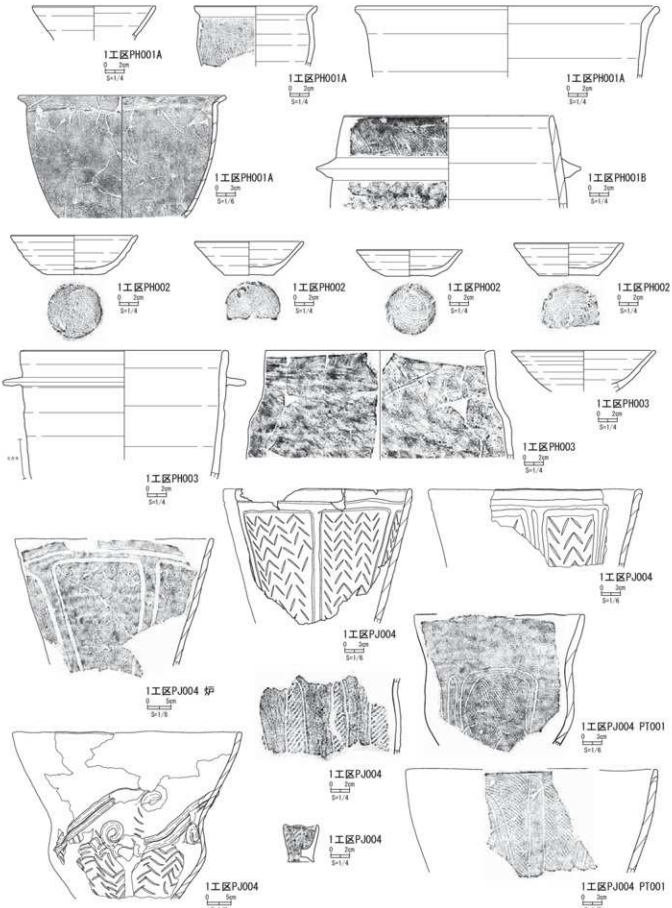


第 250 図　MD002 ～ MD008 号埋設土器



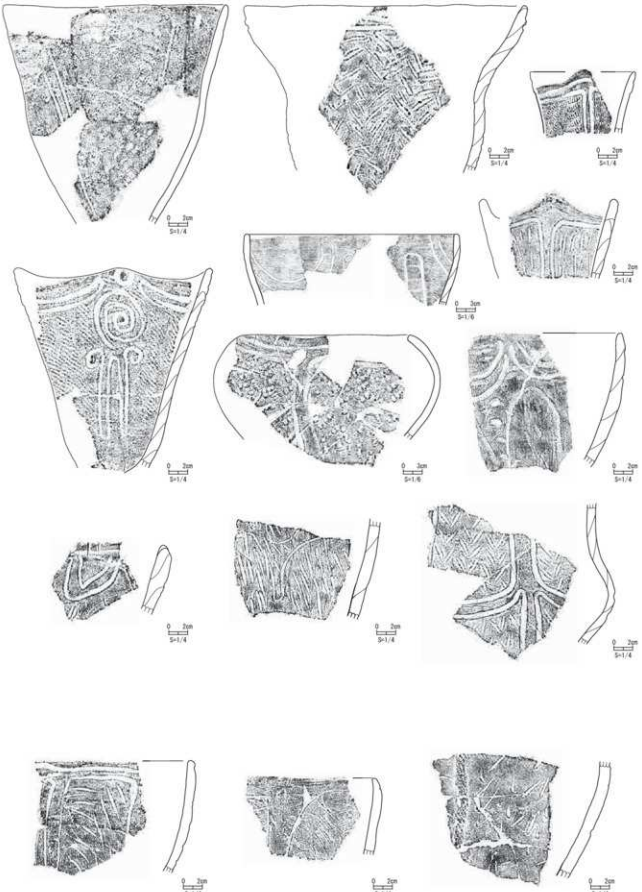
第 251 図　MD004 ～ MD008 号埋設土器

1工区出土遺物

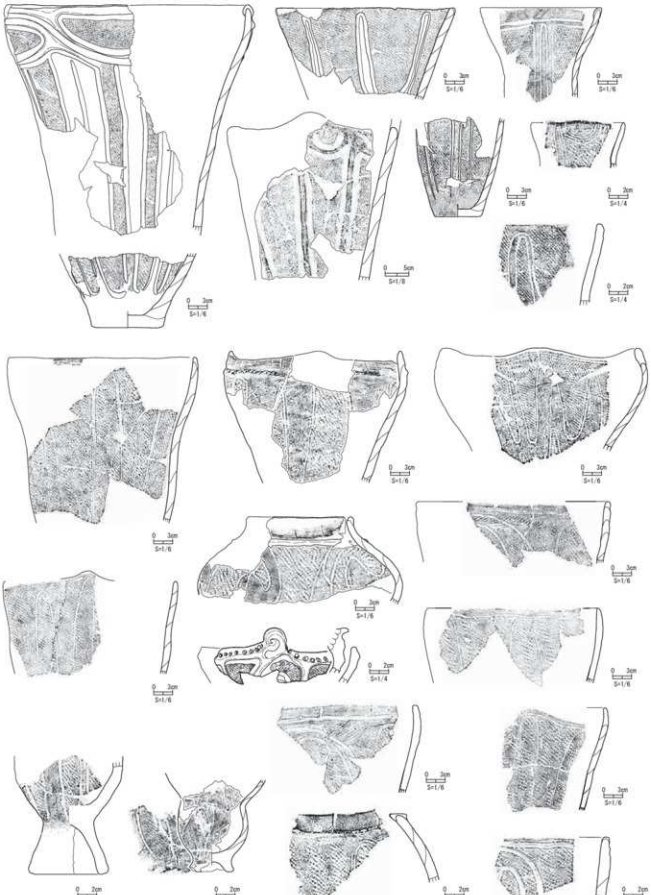


第 252 図　上原遺跡出土遺物

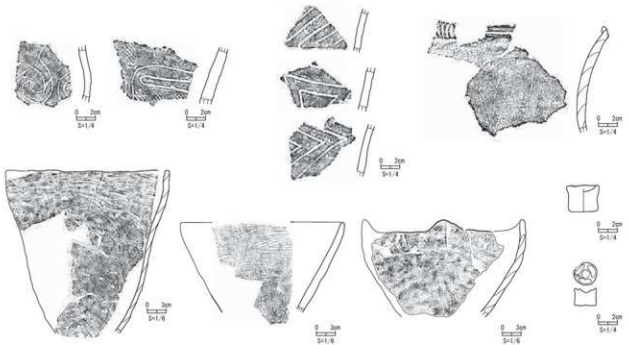
第 253 図　上原遺跡出土遺物



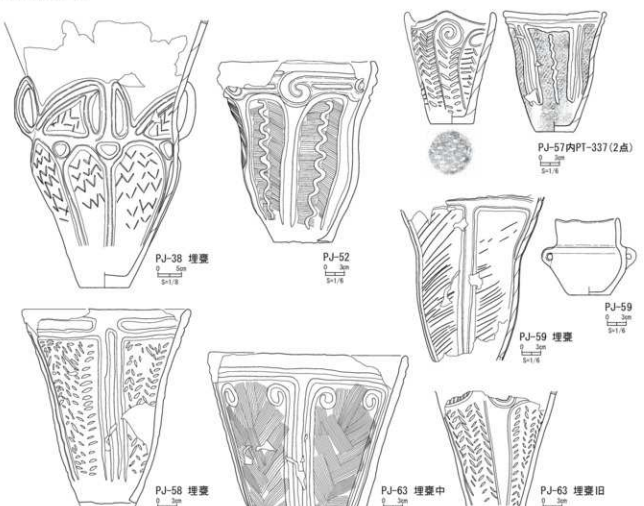
第 254 図　上原遺跡出土遺物



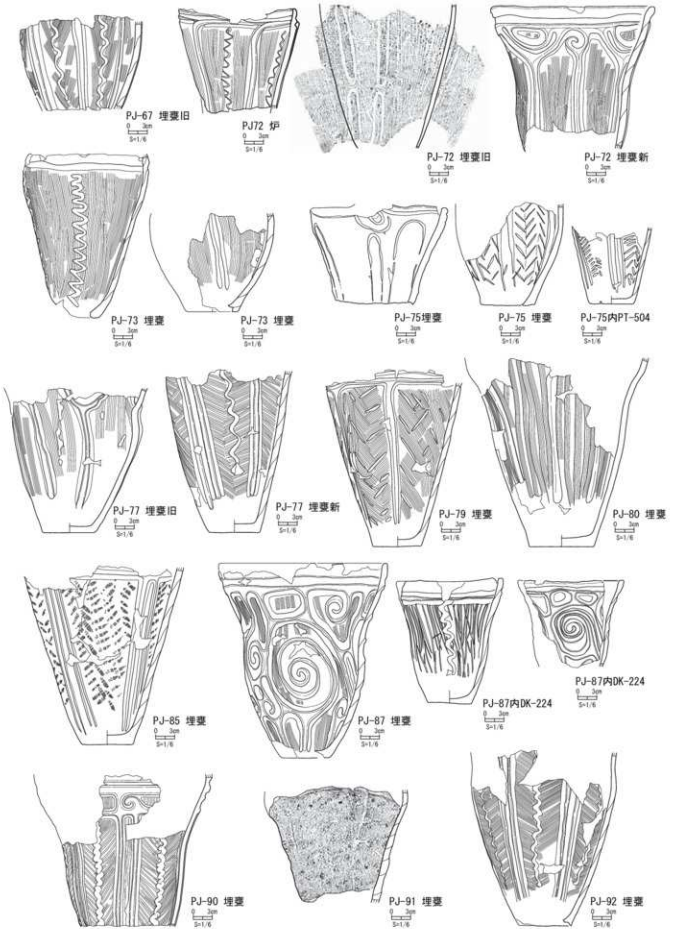
第 255 図　上原遺跡出土遺物



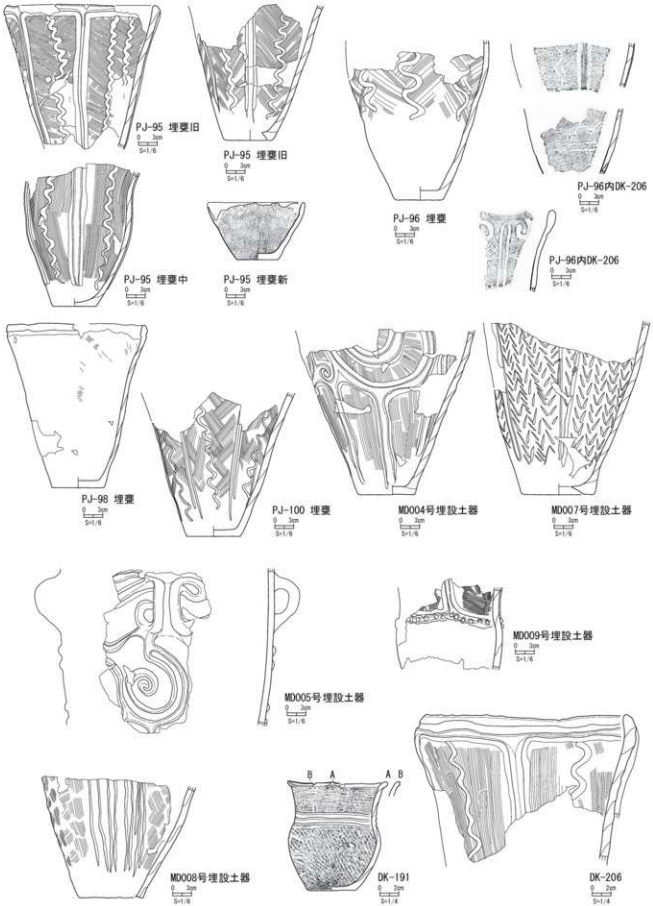
2工区出土遺物



第 256 図　上原遺跡出土遺物



第 257 図　上原遺跡出土遺物



第 258 図　上原遺跡出土遺物

第４章　理化学分析

第１節　北杜市上原遺跡出土土器付着炭化物の炭素 14 年代・同位体比の測定

小林謙一・尾嵜大真・大森貴之・米田穣

上原遺跡出土土器付着炭化物の分析結果につき下記の通り報告する。本研究は中央大学小林謙一の科研費研究としておこない、YNAK-401・402 については 2015 年度に山形大学高精度加速器測定センターなどに測定委託し、その他の試料は 2020 年度に東京大学総合研究博物館年代測定室との共同研究として測定した。

１．分析試料と前処理

試料は、北杜市埋蔵文化財センターにおいて、小林謙一が YNAK-401・402 は 2015 年２月に、その他の試料は 2019 年 11 月に採取した。すべて、土器付着炭化物試料である。YNAK は山梨県旧明野村、a は内面付着、b は外面付着を表す。

試料の前処理は小林謙一が国立歴史民俗博物館年代測定実験室でおこなった。有機溶媒による洗浄後、マニュアルで AAA 処理をおこなった。まず、アセトン中で５分間の超音波洗浄をおこなった後、クロロホルムとメタノールを容量２対１で混合した溶媒（CM 混液）による 30 分間の還流を２回、アセトン中で５分間の超音波洗浄を１回おこなった。この操作で、油分や接着剤などの成分が除去されたと判断できる。

酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理として、酸処理では、1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いて 80 度で 60 分の処理を２回おこなった。アルカリ処理では一回目 0.01M、２回目 0.1M、３回目以降 1M の水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用いて、各 60 分の処理を、溶液に着色がほぼなくなるまで４～５回繰り返した。さらに、1M の塩酸（HCl）を用いて 60 分の処理を２回おこなった。最後に純水により 30 分の洗浄を４回おこない中和していることを確認し、試料を回収した。測定試料の前処理の結果は表２の通りである。

表１．分析試料

試料	番号	採取日	出土区	保管遺構	部位	土器型式
YNAK	401	20150225	DK-642, I-019-2014　スス KH-2	DK642	胴上外	加曽利 E4
YNAK	402a	20150225	DK-642, I-019-2014　スス KH-1	DK642	胴下部内	曽利Ⅴ
YNAK	402b	20150225	DK-642, I-019-2014　スス KH-1	DK642	胴外	曽利Ⅴ
YNAK	413	20191121	実測 1558　I-019-2015　PJ-203　住・57　10 区	PJ203	胴中外	称名寺Ⅰc
YNAK	414	20191121	実測 1554　I-019-2015　PJ-203　住・IG3503　10 区	PJ203	底内	称名寺Ⅰ？
YNAK	416	20191121	実測 1505　I-019-2015　PJ-206　住 13・同 80　10 区	PJ206	胴上外	称名寺Ⅱ
YNAK	417	20191121	実測 1590　I-019-2015　PT-1623　土坑　10 区	PT1623	口縁外	称名寺Ⅱ
YNAK	418	20191121	実測 1594　I-019-2015　DK-914　土坑　10 区	DK914	口縁内	称名寺Ⅱ
YNAK	420	20191121	実測 1578　DK918 土坑	DK918	胴上内	曽利Ⅴ(13b)
YNAK	421	20191121	実測 1593　PT1623 土坑	PT1623	胴下内	堀之内Ⅰ
YNAK	422b	20191121	実測 1454　I-109-2014　PJ179　内 PT1242, 1259	PJ179	胴上外	堀之内Ⅰ細沢
YNAK	423	20191121	実測 505　I-109-2013　PJ59 住一括	PJ59	口縁内	曽利Ⅳ(12a)
YNAK	424	20191121	実測 1646　I-109-2014　PJ153　住Ⅰ　IG889　3 区	PJ153	口縁内	曽利Ⅳ(12c)
YNAK	425	20191121	実測 1909　I-109-2014　PJ177　住 7　IG2944　DK754	PJ177, DK754	胴上内	曽利Ⅴ(13a)
YNAK	426	20191121	実測 1785　I-109-2014　PJ147　住 8・10・15　IG1353　DK432	PJ147	胴下内	曽利Ⅳ(12a)

表２．前処理の状況

試料名	採取量 mg	処理量 mg	回収量 mg	回収率 %
YNAK-401	219	100	1.59	1.6%
YNAK-402a	106	58	11.44	19.7%
YNAK-402b	103	39	15.33	39.3%
YNAK-413	130	130	7.85	6.0%
YNAK-414	96	96	54.65	56.9%
YNAK-416	45	45	8.2	18.2%
YNAK-417	80	80	10.29	12.9%
YNAK-418	145	145	3.18	2.2%
YNAK-420	98	98	9.46	9.7%
YNAK-421	165	165	5.27	3.2%
YNAK-422b	117	41	7.06	17.2%
YNAK-423	20	20	6.17	30.9%
YNAK-424	37	37	1.23	3.3%
YNAK-425	21	21	2.28	10.9%
YNAK-426	108	60	32.01	53.4%

2．EA-IRMS 測定結果

IRMS による安定同位体比および炭素・窒素の重量含有率の測定は、YNAK-402ab については SI サイエンス（株）に委託した。その他は、東京大学総合研究博物館年代測定室でおこなった。放射性炭素年代測定室において、Thermo Fisher Scientifics 社製の Flash2000 元素分析を前処理装置として、ConFlo IV インターフェースを経由して、Delta V 安定同位体比質量分析装置で測定する、EA-IRMS 装置を用いておこなった。約 0.5mg の精製試料を錫箔に包み取り、測定に供した。測定誤差は、同位体比が値付けされている二次標準物質（アラニン等）を試料と同時に測定することで標準偏差を計算した。通常の測定では、δ^{13}C の測定誤差は 0.2‰、δ^{15}N の誤差は 0.2‰である。

表 3．元素および安定同位体比の分析結果

試料名	δ^{13}C	δ^{15}N	炭素濃度	窒素濃度	C/N 比
YNAK-402a	-24.4‰	1.36‰	54.9%	2.22%	28.9
YNAK-402b	-24.8‰	13.0‰	63.2%	2.70%	27.3
YNAK-413	-26.9‰	—	7.1%	0.30%	29.1
YNAK-414	-27.0‰	3.5‰	69.9%	1.80%	46.1
YNAK-416	-26.1‰	9.3‰	15.8%	0.70%	27.3
YNAK-417	-25.8‰	8.7‰	21.5%	1.00%	25.5
YNAK-420	-26.9‰	4.5‰	63.5%	4.10%	18.1
YNAK-421	-26.1‰	2.3‰	45.2%	3.10%	17.2
YNAK-422b	-24.9‰	8.9‰	59.8%	2.80%	25.1
YNAK-425	-27.3‰	6.4‰	35.3%	3.50%	11.8
YNAK-426	-22.9‰	1.8‰	69.7%	3.30%	24.5

YNAK-413 については窒素量が少なく、窒素の同位体比分析結果を得ることができなかった。

3．炭素精製およびグラファイト化

YNAK-401・402 は山形大学 YU-AMS グループが、元素分析計、質量分析計、ガラス真空ラインより構成されるグラファイト調整システムにてグラファイト化をおこなった。以外の試料は、東京大学年代測定室において、銀カップに秤量し、Elementar 社製 vario ISOTOPE SELECT 元素分析計に導入し、燃焼後、精製された二酸化炭素を真空ガラスラインに導入し、あらかじめ鉄触媒約 2mg を秤量したコック付き反応管に水素ガス（炭素モル数の 2.2 倍相当）とともに封入して、650℃で 6 時間加熱して実施した（Omori et al. 2017）。

表 4．グラファイト化の結果

試料名	試料重量	グラファイト化率	グラファイト重量	Fe 重量	C/Fe 比
YNAK-413	4.25 mg		0.18 mg	4.10 mg	0.043
YNAK-414	1.99 mg	82.5%	1.20 mg	2.00 mg	0.6
YNAK-416	2.44 mg	76.8%	0.42 mg	2.05 mg	0.205
YNAK-417	2.47 mg	72.1%	0.39 mg	1.95 mg	0.2
YNAK-418	2.17 mg	82.8%	0.98 mg	1.98 mg	0.495
YNAK-420	2.31 mg	80.0%	0.87 mg	2.08 mg	0.418
YNAK-421	2.29 mg	89.2%	0.91 mg	1.91 mg	0.476
YNAK-422b	2.15 mg	91.5%	1.17 mg	2.13 mg	0.549
YNAK-423	3.35 mg	96.2%	0.19 mg	4.10 mg	0.046
YNAK-426	1.92 mg	80.5%	0.96 mg	2.11 mg	0.455
YNAK-424	0.37 mg	AMS 測定に必要な炭素量が得られず			

YNAK-413、423 については、燃焼後、炭素精製の際に確認された炭素量が 400 μg 以下であったため、同等量の標準試料を用意し、微量炭素用のプロトコル（大森ら 2017）にてセメンタイトを生成し、AMS 測定をおこなった。表中のグラファイト量欄にはセメンタイト生成後の秤量値ではなく、炭素精製の際に見積もられた炭素量を記した。

4．AMS 測定結果

グラファイト化した炭素試料における放射性炭素同位体比の測定は、YNAK-401・402ab は山形大学において、山形大学総合研究所 1 階に設置した加速器質量分析計（YU-AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて 2015 年 10 月に放射性炭素年代を測定した。その他の試料は東京大学総合研究博物館が所有する加速器質量分析装置（AMS）を用いて 2020 年 9 月および 12 月に測定した。慣用 ^{14}C 年代（BP 年代）を算出するために、同位体比分別の補正に用いる δ^{13}C 値は AMS にて同時測定した値を用いている（Stuiver and Polach 1977）。

表5．放射性炭素年代測定の結果

試料名	測定 ID	^{13}C 年代	補正用 δ^{13}C
YNAK-401	YU-3937	4109 ± 23 BP	-21.00 ± 0.37 ‰
YNAK-402a	YU-3938	3947 ± 23 BP	-25.24 ± 0.31 ‰
YNAK-402b	YU-3939	4095 ± 22 BP	-25.56 ± 0.41 ‰
YNAK-413	TKA-22350	3938 ± 42 BP	-26.2 ± 1.0 ‰
YNAK-414	TKA-22378	3791 ± 23 BP	-28.1 ± 0.3 ‰
YNAK-416	TKA-23098	3876 ± 23 BP	-32.7 ± 0.3 ‰
YNAK-417	TKA-23099	3876 ± 24 BP	-29.4 ± 0.5 ‰
YNAK-418	TKA-22379	4040 ± 23 BP	-27.2 ± 0.5 ‰
YNAK-420	TKA-22380	3969 ± 22 BP	-28.0 ± 0.3 ‰
YNAK-421	TKA-22381	3775 ± 23 BP	-27.4 ± 0.5 ‰
YNAK-422b	TKA-23100	3854 ± 23 BP	-26.5 ± 0.3 ‰
YNAK-423	TKA-23083	4286 ± 39 BP	-12.4 ± 1.0 ‰
YNAK-426	TKA-23101	4164 ± 22 BP	-25.4 ± 0.3 ‰
YNAK-424	測定不能		

^{14}C 年代の誤差は 1 標準偏差を示す。

表6．推定される較正年代（cal BP 表記）

試料名	較正年代（1SD）	較正年代（2SD）
YNAK-401 加曽利E4式	4795 cal BP(20.2%)4761 cal BP 4691 cal BP(5.2%)4680 cal BP 4624 cal BP(32.4%)4569 cal BP 4554 cal BP(10.4%)4532 cal BP	4809 cal BP(25.2%)4755 cal BP 4703 cal BP(30.8%)4669 cal BP 4652 cal BP(59.5%)4525 cal BP
YNAK-402a 曽利V式	4508 cal BP(9.5%)4489 cal BP 4439 cal BP(37.5%)4401 cal BP 4370 cal BP(8.4%)4355 cal BP 4325 cal BP(12.9%)4301 cal BP	4516 cal BP(14.7%)4480 cal BP 4445 cal BP(62.6%)4346 cal BP 4335 cal BP(18.2%)4294 cal BP
YNAK-402b 曽利V式	4785 cal BP(11.9%)4767 cal BP 4616 cal BP(13.8%)4595 cal BP 4586 cal BP(42.6%)4528 cal BP	4800 cal BP(19.4%)4758 cal BP 4697 cal BP(5.3%)4675 cal BP 4648 cal BP(69.7%)4521 cal BP 4461 cal BP(1.0%)4454 cal BP
YNAK-413 称名寺Ⅰc式	4505 cal BP(4.6%)4492 cal BP 4437 cal BP(43.7%)4347 cal BP 4334 cal BP(19.9%)4294 cal BP	4518 cal BP(12.8%)4471 cal BP 4448 cal BP(82.7%)4244 cal BP
YNAK-414 称名寺Ⅰ式？	4232 cal BP(30.7%)4199 cal BP 4182 cal BP(10.3%)4168 cal BP 4160 cal BP(11.0%)4147 cal BP 4118 cal BP(16.4%)4097 cal BP	4242 cal BP(95.4%)4090 cal BP
YNAK-416 称名寺Ⅱ式	4401 cal BP(18.3%)4370 cal BP 4355 cal BP(19.0%)4325 cal BP 4301 cal BP(31.0%)4247 cal BP	4411 cal BP(94.1%)4235 cal BP 4196 cal BP(1.3%)4187 cal BP
YNAK-417 称名寺Ⅱ式	4401 cal BP(18.2%)4370 cal BP 4355 cal BP(18.9%)4325 cal BP 4301 cal BP(31.2%)4247 cal BP	4412 cal BP(93.8%)4235 cal BP 4196 cal BP(1.7%)4186 cal BP
YNAK-418 称名寺Ⅱ式	4567 cal BP(4.7%)4558 cal BP 4530 cal BP(17.3%)4510 cal BP 4487 cal BP(46.3%)4441 cal BP	4573 cal BP(95.4%)4424 cal BP
YNAK-420 曽利V式	4510 cal BP(28.5%)4487 cal BP 4441 cal BP(39.7%)4413 cal BP	4521 cal BP(45.1%)4463 cal BP 4452 cal BP(48.9%)4403 cal BP 4367 cal BP(1.0%)4358 cal BP 4312 cal BP(0.5%)4307 cal BP
YNAK-421 堀之内１式	4227 cal BP(18.5%)4203 cal BP 4157 cal BP(13.3%)4141 cal BP 4130 cal BP(36.5%)4091 cal BP	4238 cal BP(94.9%)4085 cal BP 4022 cal BP(0.5%)4018 cal BP
YNAK-422b 堀之内１式	4353 cal BP(11.8%)4329 cal BP 4298 cal BP(44.4%)4234 cal BP 4199 cal BP(8.3%)4181 cal BP 4169 cal BP(3.7%)4159 cal BP	4405 cal BP(77.6%)4225 cal BP 4205 cal BP(17.9%)4155 cal BP
YNAK-423 曽利Ⅳ式	4874 cal BP(68.3%)4827 cal BP	4968 cal BP(91.8%)4817 cal BP 4750 cal BP(3.6%)4725 cal BP
YNAK-426 曽利Ⅳ式	4822 cal BP(14.4%)4796 cal BP 4760 cal BP(7.9%)4745 cal BP 4734 cal BP(23.1%)4693 cal BP 4679 cal BP(19.9%)4643 cal BP 4634 cal BP(2.9%)4627 cal BP	4828 cal BP(19.5%)4785 cal BP 4768 cal BP(73.7%)4615 cal BP 4597 cal BP(2.3%)4584 cal BP

較正年代の算出には、OxCal4.4（Bronk Ramsey, 2009）を使用し、較正データには IntCal20（Reimer et al. 2020）を用いた。

5．年代的位置付け

IRMS による安定同位体比を見ると、YNAK-426 のみ δ^{13}C 値が -22.9‰と重い値を示すが、窒素同位体比や C/N 比は他の試料と大きな違いはなく、海洋リザーバー効果の影響が見られるかは判断できない。安定同位体比が -23.99‰～ -20‰を示す土器付着物（特に内面付着物）は、年代的にさい年代を示す例が多く、海産物調理に伴うお焦げと推定できる場合がある（小林 2022）が、YNAK-426 の場合は内面付着の煮コゲであるものの、年代的に

古い年代を示しているとはいえず、ここでは判断を保留する。他の IRMS の測定試料の $\delta^{13}C$ 値は概ね -25 ～ -26‰ 台の値であり、植物質由来の可能性が高い。

較正年代では、中期に比定される試料から後期に比定される試料まで、それぞれおおよそ年代的に推移するが、これまでの測定結果（小林 2019）に照らすと、YNAK-423 は中期後葉前半の年代に相当するなど、一部に検討を要する年代が見られる。土器および出土遺構の検討を重ねたい。

おわりに

北杜市教育委員会の協力により年代測定試料採取をおこなった。測定は、日本学術振興会科学研究費助成基盤研究 (B)「炭素 14 年代測定による縄紋文化の枠組みの再構築－環境変動と文化変化の実年代体系化」（課題番号 25284153, 研究代表小林謙一，平成 25 ～ 29 年度）、2020 年度日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤 B）「東アジア新石器文化の実年代体系化による環境変動と生業・社会変化過程の解明」（研究代表者小林謙一　課題番号 18H00744）、2020 年度国際共同研究加速基金（国際共同研究強化 (B)）「ユーラシアにおける土器出現の生態史」（研究代表者小林謙一　課題番号 19KK0017）の経費による。試料前処理には国立歴史民俗博物館坂本稔、箱崎真隆、山本里絵、AMS および IRMS 測定には山形大学高感度加速器質量分析センター門叶冬樹、森谷透の各氏に多大な協力を得た。

引用文献

Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon 51(4), 337-360.

Omori, T., Yamazaki, K., Itahashi, Y., Ozaki, H., Yoneda, M., (2017) Development of a simple automated graphitization system for radiocarbon dating at the University of Tokyo. The 14th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry.

Reimer, P. J., Austin, W. E. N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hajdas, I., J Heaton, T., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kromer, B., Manning, S. W., Muscheler, R., Palmer, J. G., Pearson, C., J. van der Plicht, C., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Turney, C. S. M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S. M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A., Talamo, S., (2020) The IntCal20 Northern hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon in press.Omori, T., Yamazaki, K., Itahashi, Y., Ozaki, H., Yoneda, M., (2017) Development of a simple automated graphitization system for radiocarbon dating at the University of Tokyo. The 14th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry.

Stuiver., M., and H.A. Polach (1977). Discussion: Reporting of ^{14}C data. Radiocarbon 19(3), 355-363.

大森貴之、山崎孔平、椛澤貴行、板橋悠、尾寄大真、米田穣 2017「微量試料の高精度放射性炭素年代測定」第 20 回 AMS シンポジウム

小林謙一 2022「縄紋時代後期土器付着物の同位体比の検討」『紀要』史学第 67 号(第 291 号)，中央大学文学部

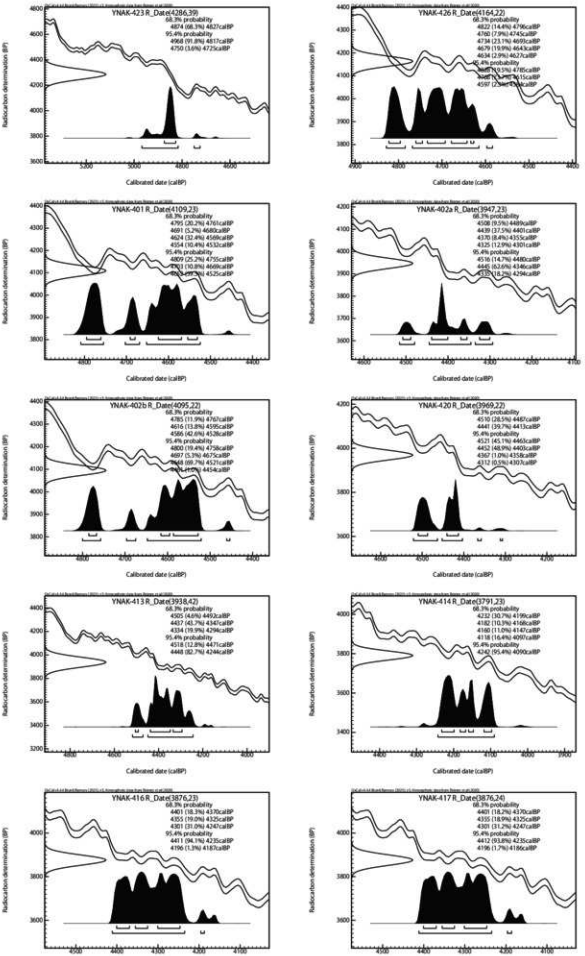


図1　上原遺跡測定結果の較正年代確率分布密度(IntCal20)(その1)

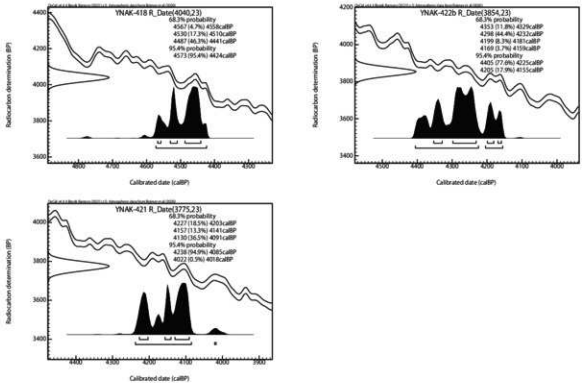


図2　上原遺跡測定結果の較正年代確率分布密度(IntCal20)(その2)

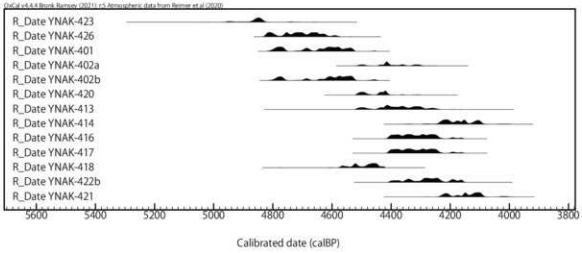


図3　上原遺跡　型式順の較正年代確率分布密度(IntCal20)(OxCal4.4)(その2)

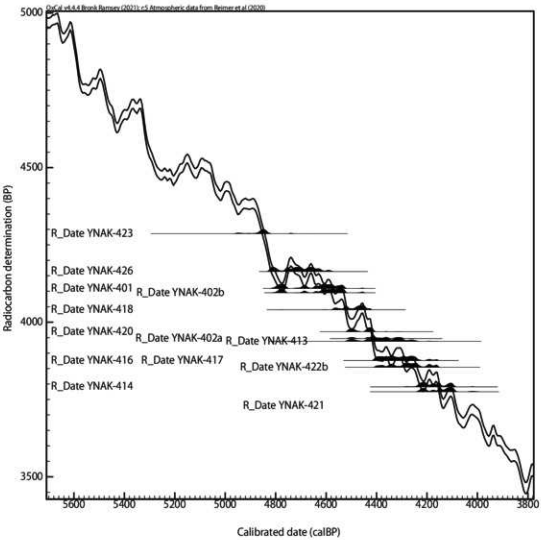


図4　上原遺跡測定結果の較正年代確率分布密度と較正曲線(IntCal20)(OxCal4.4)

YNAK-401　曽利Ⅴ式外面

YNAK-402　曽利Ⅴ式

YNAK-402a　胴部下部内面

YNAK-402b　胴外面

YNAK413　称名寺Ⅰ式　胴外面

YNAK-416　称名寺２式　胴外面

YNAK-414　称名寺式　底部破片

YNAK-414　底部内面

YNAK-417　称名寺２式　口縁外面

YNAK422b　堀之内１式粗製　胴上外面

YNAK-418　称名寺２式　口縁外面

YNAK-418　口縁内面

YNAK-420　曽利Ⅴ式

YNAK-420　胴上部内面

YNAK-421　堀之内１式

YNAK-421　胴下部内面

YNAK-423　曽利Ⅳ式

YNAK423　口縁内面

YNAK-425　曽利Ⅴ式

YNAK425　胴上部内面

YNAK-426　曽利Ⅳ式

YNAK-426　胴下部内面

第４章　理化学分析

第２節　上原遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

1. はじめに

北杜市明野町の上原遺跡から出土した炭化材について、縄文時代中期から後期の古植生の特徴と変遷を調べる目的で、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、縄文時代中期末葉と縄文時代後期前葉の遺構から出土した炭化材である。発掘調査現場で採取された大型の炭化材と、土壌サンプルから採取された炭化材の破片がある。土壌サンプルは同一遺構から複数の試料が採取されている場合もある。なお、土壌サンプルから採取された炭化材は、およそ 5mm 以上で分析可能な試料について悉皆調査を行った。

縄文時代中期末葉の遺構はいずれも竪穴住居跡で、曽利Ⅳ式期の PJ-50、PJ-52、PJ-72、PJ-80、PJ-81、PJ-82、PJ-87、PJ-95、PJ-96、PJ-100、曽利Ⅴ式期の PJ-36、PJ-63、PJ-67、PJ-75、PJ-77、PJ-79、PJ-86、PJ-98、PJ-147、PJ-152、PJ-266、PJ-282、PJ-310、PJ-348、PJ-351、加曽利 E4 式期の PJ-262 である。縄文時代後期の遺構は、称名寺式期の竪穴住居跡 PJ-231、PJ-271、堀之内１式期の竪穴住居跡 PJ-203、PJ-244、PJ-245、PJ-247、PJ-248、PJ-249、PJ-253、PJ-258、PJ-263、PJ-265、PJ-267、PJ-268、PJ-276、PJ-293、PJ-294、PJ-300、PJ-301、PJ-305、PJ-306、PJ-342、PJ-350、PJ-354、土坑 DK-528、DK-726、DK-754、ピット PT1531、堀之内２式期の竪穴住居跡 PJ-281、PJ-285、PJ-288、PJ-289、PJ-302、PJ-304、PJ-349、堀之内式期の PJ-270、加曽利 B1 式期の竪穴住居跡 PJ-280、PJ-291、細分時期不明の後期住居跡 PJ-286 である。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で３断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製　VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3. 結果

樹種同定の結果、針葉樹はモミ属とマツ属複維管束亜属、カヤの３分類群、広葉樹はカツラとキブシ、バラ属、サクラ属、ケンポナシ属、ケヤキ、クワ属、クリ、ブナ属、コナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）、コナラ属コナラ節(以下、コナラ節)、コナラ属アカガシ亜属(以下、アカガシ亜属)、オニグルミ、ハンノキ属ヤシャブシ亜属(以下、ヤシャブシ亜属)、カバノキ属、クマシデ属イヌシデ節（以下、イヌシデ節）、アサダ、ニシキギ属、ヌルデ、カエデ属、トチノキ、キハダ、ミズキ、クマノミズキ類、エゴノキ属、ツツジ属、トネリコ属シオジ節（以下、シオジ節）、トネリコ属トネリコ節（以下、トネリコ節）、イボタノキ属、ムラサキシキブ属、ガマズミ属の 31 分類群、単子葉類のタケ亜科の、合計 35 分類群が確認された。結果の一覧を付表１に示す。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1) モミ属　Abies　マツ科　図版１　1a-1c (PJ77)

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織で数珠状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、１分野に１～４個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約５種がある。材は軽軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

(2) マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　図版1　2a-2c（PJ267炉）

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。大型の樹脂道を薄壁のエピセリウム細胞が囲んでいる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側向きに鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。材は油気が多く、靭性は大である。

(3) カヤ　Torreya nucifera (L.) Siebold et Zucc.　イチイ科　図版1　3a-3c（PJ270炉）

仮道管と放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。仮道管壁に2本対のらせん肥厚がある。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に4個程度存在する。

カヤは宮城県以南の温帯から暖帯に分布する常緑高木である。材は木理直通で緻密であり、弾性および耐久力が強く、水湿にも強い。

(4) カツラ　Cercidiphyllum japonicum Siebold et Zucc. ex Hoffm. et Schult.　カツラ科　図版4a-4c（PJ67）

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。道管の穿孔は階段状で、30段程度となる。放射組織は1～3列幅で、平伏細胞と方形細胞からなる異性である。

カツラは暖帯から温帯に分布する落葉高木である。材は軽軟で靭性があり、加工は容易である。

(5) キブシ　Stachyurus praecox Siebold et Zucc.　キブシ科　図版1　5a-5c（PJ300炉）

小型で角張った道管が、単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は1～3列幅で、単列部の方形細胞もしくは直立細胞が長く連なる異性である。

キブシは温帯から暖帯にかけて分布する落葉小高木である。材はやや硬く、均質である。

(6) バラ属　Rosa　バラ科　図版1・2　6a-6c（PJ52）

やや大型の道管が年輪のはじめに配列する環孔材で、晩材部の小道管はほぼ単独で散在する。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。木部繊維は厚壁である。放射組織は1～10列幅の異性で、高さが1mmを超えるものもある。

バラ属は亜熱帯から亜寒帯に広く分布する落葉の低木である。ノイバラ節やハマナシ節、サンショウバラ節などに分かれ、約15種があるが、変種や園芸種も多い。

(7) サクラ属（広義）　Prunus s.l.　バラ科　図版2　7a-7c（PJ75炉）

やや小型の道管が、単独あるいは斜め方向に2～3個複合する散孔材である。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、1～5列幅である。

サクラ属は温帯に生育する落葉または常緑の高木または低木である。サクラ属はさらにサクラ亜属やスモモ亜属、モモ亜属、ウワミズザクラ亜属などに分類され、25種がある。木材組織からはモモとバクチノキ以外は識別困難なため、この2種を除いたサクラ属とする。材は、比較的重硬および緻密だが、加工は容易である。

(8) ケンポナシ属　Hovenia　クロウメモドキ科　図版2　8a-8c（PJ276炉）

やや大型の道管が年輪はじめに配列し、晩材部では厚壁で小型の道管が単独もしくは2～3個複合して散在する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～3列幅である。

ケンポナシ属は暖帯から温帯に分布する落葉高木で、ケンポナシとケケンポナシの2種がある。材の重さおよび堅さは中庸で、切削加工は容易、狂いや割れは少ない。

(9) ケヤキ　Zelkova serrata (Thunb.) Makino　ニレ科　図版2　9a-9c (PJ349 炉)

大型の道管が年輪のはじめに1列に並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は3～5列幅程度の異性で、上下端の細胞に大きな結晶をもつ。

ケヤキは暖帯下部に分布する落葉高木で、肥沃地や渓畔によく生育する。材は重硬だが、加工はそれほど困難ではなく、保存性が高い。

(10) クワ属　Morus　クワ科　図版2　10a-10c (PJ36 炉⑥)

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は3～5列幅で、上下端の1～2細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は亜熱帯から温帯に分布する落葉高木で、ケグワとマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、靭性に富む。

(11) クリ　Castanea crenata Siebold et Zucc.　ブナ科　図版2・3　11a-11c (PJ36 炉④)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは暖帯から温帯下部に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性および耐湿性に優れ、保存性が高い。

(12) ブナ属　Fagus　ブナ科　図版3　12a-12c (PJ291 炉)

小型で単独の道管が密に分布し、晩材部ではやや径を減ずる散孔材である。道管の穿孔は、単一のものと階段状の2種類がある。放射組織はほぼ同性で、単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類がある。

ブナ属は温帯に分布する落葉高木で、ブナとイヌブナがある。材は堅硬および緻密で、靭性があるが、保存性は低い。

(13) コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　図版3　13a-13c (PJ67)

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では急に径を減じた円形で厚壁の小道管が単独で放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

クヌギ節は暖帯に生育する落葉高木で、クヌギとアベマキがある。材は重硬および強靭で、加工困難である。

(14) コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　図版3　14a-14c (PJ63)

大型の道管が年輪のはじめに1列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の2種類がある。

コナラ節は暖帯から温帯下部に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

(15) コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図版3　15a-15c (PJ63)

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靭で、水湿に強い。

(16) オニグルミ　Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis (Komatsu) Kitam.　クルミ科　図版 3　16a-16c (PJ36　セク①)

やや大型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して散在し、晩材部で径を減ずる半環孔材である。軸方向柔組織は線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性で、1～4列幅である。

オニグルミは暖帯から温帯に分布する落葉高木で、川沿いなど湿気の多いところに生育する。材はやや軽軟で粘りがあるが、保存性は低い。

(17) ハンノキ属ヤシャブシ亜属　Alnus subgen. Alnaster　カバノキ科　図版 4　17a-17c (PJ52)

小型の道管が,放射方向に数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状もしくは散在状となる。道管の穿孔は 10 ～ 20 段程度の階段状である。放射組織は単列で、同性である。

ヤシャブシ亜属は主に温帯に分布する落葉高木または低木で、ミヤマハンノキやヤシャブシなど 4 種がある。材の硬さと重さは中庸である。

(18) カバノキ属　Betula　カバノキ科　図版 4　18a-18c (PJ289 炉)

やや小型で丸い道管が、ほぼ単独でまばらに分布する散孔材である。道管の穿孔は 10 ～ 20 段程度の階段状である。放射組織はほぼ同性で、1 ～ 3 列幅である。道管相互壁孔は交互状で極めて小さく、密に分布する。

カバノキ属は温帯から亜寒帯に分布する落葉高木もしくは低木で、カバノキやミズメなど 11 種がある。材は全般的にやや重厚で、切削および加工は中庸である。

(19) クマシデ属イヌシデ節　Carpinus sect. Eucarpinus　カバノキ科　図版 4　19a-19c (PJ67)

やや小型から中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は晩材部で 1 列幅の接線状となる。放射組織は同性で 1 ～ 3 列幅、集合放射組織がみられる。

イヌシデ節は暖帯から温帯の低山地に分布する落葉中高木で、イヌシデとイワシデ、アカシデがある。材は重硬で靭性が大きく、割裂しにくい。

(20) アサダ　Ostrya japonica Sarg.　カバノキ科　図版 4　20a-20c (PJ80 炉)

径が中型の道管が、単独あるいは放射方向に数個複合して、ややまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、1 ～ 4 列幅である。

アサダは温帯の山地に生育する落葉高木である。材は極めて重硬であり、切削加工および割裂は困難である。

(21) ニシキギ属　Euonymus　ニシキギ科　図版 4　21a-21c (PJ203)

小型の道管が、単独で年輪内に均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、すべて平伏細胞からなる同性である。

ニシキギ属は暖帯から温帯に分布する落葉または常緑の高木ないし低木であるが、ときに藤本もある。ニシキギやマサキ、マユミなど 18 種がある。マユミの材はやや硬堅だが、割裂は容易である。

(22) ヌルデ　Rhus javanica L. var. chinensis (Mill.) T.Yamaz.　ウルシ科　図版 4･5　22a-22c (PJ87)

大型の道管が、年輪のはじめに単独もしくは数個複合して配列する半環孔材である。晩材部では道管の大きさは徐々に減じ、年輪の終わりでは小道管が集団をなして接線状～斜線状に配列する。道管の穿孔は単一である。放射組織は平伏細胞と直立細胞が混在する異性で、1 ～ 3 列幅である。

ヌルデは熱帯から温帯に分布する落葉高木である。材は、耐朽性および保存性はあまり高くないが、吸水しにくく、切削および加工が容易である。

(23) カエデ属　Acer　ムクロジ科　図版5　23a-23c (PJ96)

径が中型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して分布する散孔材である。横断面において木部繊維の壁厚の違いによる雲紋状の模様がみられる。道管の穿孔は単一で、道管壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織はほぼ同性で、1～5列幅である。

カエデ属は主に温帯に分布する落葉高木で、オオモミジやハウチワカエデ、イタヤカエデなど26種がある。木材組織からはチドリノキーカジカエデ以外は識別困難なため、この2種を除いたカエデ属とする。材は全体的に緻密で、靭性がある。

(24) トチノキ　Aesculus turbinata Blume　ムクロジ科　図版5　24a-24c (PT1531)

やや小型の道管が、単独もしくは放射方向に数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列で、すべて平伏細胞で構成される同性である。接線断面において放射組織は層状に配列する。

トチノキは暖帯から温帯に分布する落葉高木で、やや湿り気のある肥沃な土地の深い谷間や中腹の緩傾斜地によく生育する。材は柔らかく緻密であるが、保存性は低い。

(25) キハダ　Phellodendron amurense Rupr.　ミカン科　図版5　25a-25c (PJ63)

大型で丸い道管が早材部に配列し、晩材ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状～斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性、1～6列幅できれいな紡錘形となる。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

(26) ミズキ　Cornus controversa Hemsl. ex Prain　ミズキ科　図版5　26a-26c (PJ294炉)

小型の道管が、単独もしくは数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。放射組織は縁辺部に方形もしくは直立細胞が2～4程度ある異性で、細胞幅は5列程度である。

ミズキは落葉中高木で、温帯から亜寒帯に広く分布する。材はやや硬いが、加工は比較的容易である。

(27) クマノミズキ類　Cornus cf. macrophylla Wall.　ミズキ科　図版5・6　27a-27c (PJ248炉)

やや小型で丸い道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。放射組織は3～4列幅で、縁辺部に方形もしくは直立細胞が2～4細胞あるる異性である。以上の特徴からクマノミズキかヤマボウシと思われるが、これ以上の同定は困難であるため、クマノミズキ類とした。

クマノミズキおよびヤマボウシは暖帯から温帯に分布する落葉中高木である。材はやや硬いが、一般に加工は容易である。

(28) エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科　図版6　28a-28c (PJ271炉)

小型の道管が、放射方向に数個複合して分布する散孔材で、晩材部で道管が小型になり、数も減る。軸方向柔組織は短接線状となる。道管の穿孔は10段程度の階段状である。放射組織は1～4列幅で、異性である。

エゴノキ属は熱帯から温帯にかけて分布する落葉小高木で、エゴノキやハクウンボク、コハクウンボクの3種がある。材はやや重硬で緻密である。

(29) ツツジ属　Rhododendron　ツツジ科　図版6　29a-29c (PJ285炉)

小型で角張った道管が、ほぼ単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は20段程度の階段状である。道管相互壁孔は階段状となる。放射組織は単列と5～10列幅の2種類からなる異性で、単列部は接線断面においてレンズ状を呈する。

ツツジ属は熱帯から寒帯まで幅広く分布し、樹形も低木から高木まである常緑もしくは落葉の広葉樹である。ツツジ亜属やシャクナゲ亜属などを含む約50種がある。

(30) トネリコ属シオジ節　Fraxinus sect. Fraxinaster　モクセイ科　図版6　30a-30c (PJ203)

年輪のはじめに大型の道管が数列並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小道管が単独もしくは放射方向に2～3個複合して散在する。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、1～3列幅である。

シオジ節は温帯に分布する落葉高木で、シオジとヤチダモがある。材はやや重硬で粘りがあり、加工性および保存性は中庸である。

(31) トネリコ属トネリコ節　Fraxinus sect.Ornus　モクセイ科　図版6　31a-31c (PJ310炉)

年輪のはじめに大型の道管が1列程度並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小道管が単独もしくは放射方向に2～3個複合して散在する。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、1～3列幅である。

トネリコ節は温帯に分布する落葉高木で、トネリコやアオダモなど7種がある。材は中庸～やや重硬で、切削加工は容易、保存性も中庸である。

(32) イボタノキ属　Ligustrum　モクセイ科　図版6　32a-32c (PJ36炉②)

小型の道管が単独もしくは数個複合して分布する散孔材で、年輪のはじめにやや大きめの道管が1列程度配列する。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～4列幅である。

イボタノキ属は暖帯から温帯に分布する落葉広葉樹である。イボタノキやネズミモチ、ミヤマイボタなど7種がある。

(33) ムラサキシキブ属　Callicarpa　シソ科　図版7　33a-33c (PJ280炉)

小型の道管が、単独もしくは数個複合して分布する散孔材である。軸方向柔組織は随伴散在状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1～4列幅である。

ムラサキシキブ属は熱帯から温帯にかけて分布する落葉または常緑の低木または小高木で、ヤブムラサキやムラサキシキブなど11種がある。

(34) ガマズミ属　Viburnum　レンプクソウ科　図版7　34a-34c (PJ79)

小型の道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は40段以上の階段状である。放射組織は異性で、1～4列幅で細胞高が高い。

ガマズミ属は熱帯から温帯に分布する落葉または常緑の高木または低木で、日本にはカンボクやオオカメノキ、ヤブデマリ、ガマズミなど16種がある。

(35) タケ亜科　Subfam. Bambusoideae　イネ科　図版7　35a-35c (DK726)

柔細胞と維管束で構成される単子葉類で、維管束は柔細胞中に散在する。維管束は一対の道管と、それと直行する原生木部間隙と師部で形成され、その周囲を厚膜組織からなる維管束鞘が取り囲む。

タケ・ササの仲間で日本では12属が含まれるが、稈の組織のみから属や種を識別するのは難しい。割裂性が非常に大きい。

4. 考察

時期別の樹種同定結果を表1、土器型式別の樹種同定結果を表2に示す。樹種同定の結果を時期別にみると、縄文時代中期末葉の遺構から出土した炭化材では、モミ属とマツ属複維管束亜属、カヤ、カツラ、バラ属、サクラ属、ケンポナシ属、ケヤキ、クワ属、クリ、クヌギ節、コナラ節、アカガシ亜属、オニグルミ、ヤシャブシ亜属、イヌシデ節、アサダ、ヌルデ、カエデ属、キハダ、ミズキ、クマノミズキ類、シオジ節、イボタノキ属、ムラサ

キシキブ属、ガマズミ属の、26 分類群が確認された。縄文時代後期前葉の遺構から出土した炭化材では、モミ属、マツ属複維管束亜属、カヤ、キブシ、ケンポナシ属、ケヤキ、クワ属、クリ、ブナ属、クヌギ節、コナラ節、オニグルミ、カバノキ属、イヌシデ節、アサダ、ニシキギ属、カエデ属、トチノキ、ミズキ、クマノミズキ類、エゴノキ属、ツツジ属、シオジ節、トネリコ節、ムラサキシキブ属、タケ亜科の、26 分類群が確認された。

時期別にみると、縄文時代中期末葉と縄文時代後期前葉の遺構出土の炭化材では、どちらもクリやオニグルミを中心に多様な落葉広葉樹が確認され、モミ属やマツ属複維管束亜属、カヤといった針葉樹も確認された。確認された広葉樹に多少の違いはあるものの、時期別では樹種構成に明確な違いはみられなかった。縄文時代中期末葉～後期中葉にかけて周辺の樹木植生は、大きな変化は見られなかったと考えられる。縄文時代中期末葉～後期中葉は日本列島の環境文化史区分で PG Cold-1 から PG Cold-2 に相当し、関東地方では武蔵野台地などの台地上ではクリが優勢となる傾向が確認されている（工藤, 2012）。山梨県においても同様の傾向であったと考えられる。

今回の分析で確認された針葉樹や広葉樹は、いずれも温帯～暖帯に分布し、人里や山野に生育する樹種である。ただし、山梨県では縄文時代中期や後期は冷涼な環境であり、温暖な地域に分布するアカガシ亜属やクヌギ節が生育していたとは考えにくいため、新しい時期の炭化材の混入物である可能性がある。山梨県の遺跡で確認された縄文時代中期～後晩期の炭化材では、クリやオニグルミが多く、そのほかにトチノキやクマシデ属、ミズキ属、トネリコ属、マツ属複維管束亜属などが確認されている（伊東・山田編, 2012）。今回の分析でも、同様にクリやオニグルミを中心とした多様な樹種が確認されており、周辺地域の木材利用傾向と類似している。

引用・参考文献

平井信二(1996)木の大百科．394p, 朝倉書店.

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p, 海青社.

工藤雄一郎(2012)旧石器・縄文時代の環境文化史：高精度放射性炭素年代測定と考古学．373p, 新泉社

表1　時期別の樹種同定結果

樹種	縄文時代中期	縄文時代後期	合計
モミ属	7	4	11
マツ属複維管束亜属	4	12	16
カヤ	2	1	3
カツラ	2		2
キブシ		1	1
バラ属	2		2
サクラ属	2		2
ケンポナシ属	2	4	6
ケヤキ	2	6	8
クワ属	7	4	11
クリ	44	43	87
ブナ属	1	2	3
コナラ属クヌギ節	10	4	14
コナラ属コナラ節	4	3	7
コナラ属アカガシ亜属	1		1
オニグルミ	23	27	50
ハンノキ属ヤシャブシ亜属	1		1
カバノキ属	1	10	11
クマシデ属イヌシデ節	3	2	5
アサダ	2	4	6
ニシキギ属		1	1
ヌルデ	6		6
カエデ属	2	5	7
トチノキ		1	1
キハダ	2		2
ミズキ	2	5	7
クマノミズキ類	2	9	11
エゴノキ属		1	1
ツツジ属		1	1
トネリコ属シオジ節	1	5	6
トネリコ属トネリコ節	2	1	3
イボタノキ属	1		1
ムラサキシキブ属	1	1	2
ガマズミ属	1		1
タケ亜科		1	1
合計	140	158	298

表2　土器型式別の樹種同定結果

樹種	縄文時代中期			縄文時代後期					合計
	曽利Ⅳ式	曽利Ⅴ式	加曽利E4式	称名寺Ⅰ式	称名寺Ⅱ式	堀之内1式	堀之内2式	加曽利B1式	
モミ属	2	4	1			3	1		11
マツ属複維管束亜属	1	3				7	3	2	16
カヤ	1					1		1	3
カツラ	1	1							2
キブシ						1			1
バラ属	1	1							2
サクラ属		2							2
ケンポナシ属	2					4			6
ケヤキ	1	1		1	1	2	1	1	8
クワ属	3	4				3	1		11
クリ	13	30	1	1	1	31	7	1	85
ブナ属		1				1			2
コナラ属クヌギ節	6	5			1	3	1		16
コナラ属コナラ節	1	3				2		1	7
コナラ属アカガシ亜属		1							1
オニグルミ	9	14		1		18	7	1	50
ハンノキ属ヤシャブシ亜属	1								1
カバノキ属		1				7	4		12
クマシデ属イヌシデ節	2	1				1	1		5
アサダ	2					3		1	6
ニシキギ属						1			1
ヌルデ	3	3							6
カエデ属		2			1	2	1	1	7
トチノキ						1			1
キハダ		2							2
ミズキ	1	1				5			7
クマノミズキ類	1	1				5	3	1	11
エゴノキ属					1				1
ツツジ属							1		1
トネリコ属シオジ節		1				5			6
トネリコ属トネリコ節		2				1			3
イボタノキ属		1							1
ムラサキシキブ属		1						1	2
ガマズミ属		1							1
タケ亜科						1			1
合計	51	87	2	3	5	108	31	11	298

付表１　樹種同定結果一覧

地区	遺構番号	出土位置	樹種	残存径	時期	土器型式
2	PJ-36	セク①	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			オニグルミ	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
		炉①	クリ	0.5cm		
		炉②	クリ	1.0cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
			イボタノキ属	0.5cm		
		炉③	クリ	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
		炉④	クリ	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
		炉⑤	クリ	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			バラ属	0.5cm		
		炉⑥	クリ	1.0cm		
			クワ属	1.0cm		
		炉⑦	クリ	1.0cm		
			オニグルミ	1.0cm		
		炉⑧	クリ	1.0cm		
			オニグルミ	1.0cm		
2	PJ-50	－	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅳ式
			オニグルミ	0.5cm		
			クワ属	0.5cm		
			カツラ	0.5cm		
			ミズキ	0.5cm		
			クマシデ属イヌシデ節	0.5cm		
2	PJ-52	－	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅳ式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			ケヤキ	0.5cm		
			バラ属	0.5cm		
			ハンノキ属ヤシャブシ亜属	0.5cm		
			クマノミズキ類	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
2	PJ-63	－	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			コナラ属アカガシ亜属	0.5cm		
			コナラ属コナラ節	0.5cm		
			キハダ	0.5cm		
			サクラ属	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			ムラサキシキブ属	0.5cm		
2	PJ-67	－	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			オニグルミ	0.5cm		
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			クワ属	0.5cm		
			カツラ	0.5cm		
			クマシデ属イヌシデ節	0.5cm		
			モミ属	0.5cm		
2	PJ-72	炉①	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅳ式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			コナラ属コナラ節	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			クワ属	0.5cm		
			ヌルデ	0.5cm		
			アサダ	0.5cm		
			カヤ	0.5cm		
		炉③	クリ	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
		炉④	クリ	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			ヌルデ	0.5cm		
2	PJ-75	－	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			ヌルデ	0.5cm		
		炉	クリ	0.5cm		
			キハダ	0.5cm		
			サクラ属	0.5cm		
			ヌルデ	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
2	PJ-77	－	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			オニグルミ	0.5cm		
			トネリコ属シオジ節	0.5cm		
			モミ属	0.5cm		
2	PJ-79	－	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			ガマズミ属	0.5cm		
			クワ属	0.5cm		

付表１ 樹種同定結果一覧

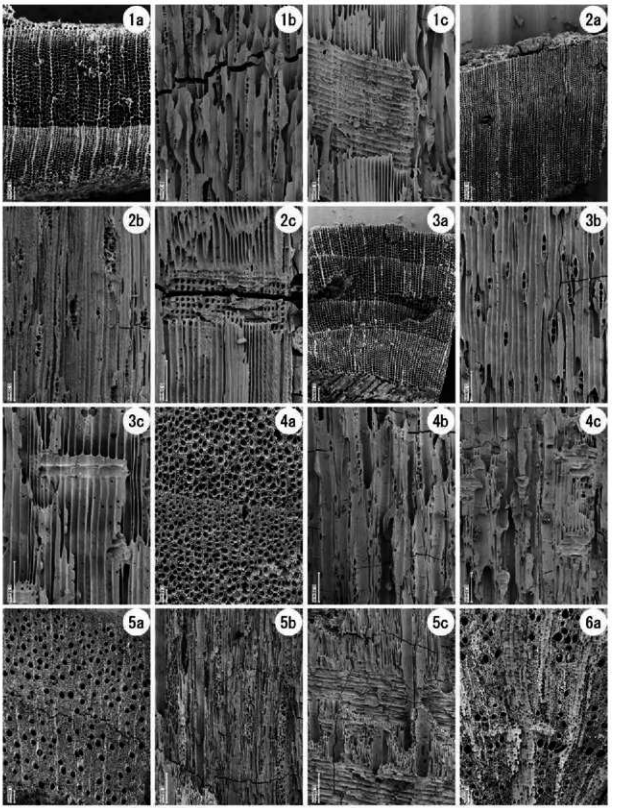
地区	遺構番号	出土位置	樹種	残存径	時期	土器型式
2	PJ-80	gP	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅳ式
			アサダ	0.5cm		
2	PJ-81	gP	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅳ式
			オニグルミ	0.5cm		
			ケンポナシ属	0.5cm		
			モミ属	0.5cm		
2	PJ-82	-	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅳ式
			オニグルミ	0.5cm		
			クワ属	0.5cm		
2	PJ-86	gP	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			ヌルデ	0.5cm		
			カエデ属	0.5cm		
			モミ属	0.5cm		
2	PJ-87	-	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅳ式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			ヌルデ	0.5cm		
			クマシデ属イヌシデ節	0.5cm		
		gP	クリ	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
2	PJ-95	-	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅳ式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			モミ属	0.5cm		
		gP	クリ	0.5cm		
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
2	PJ-96	-	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			オニグルミ	0.5cm		
			クワ属	0.5cm		
			カエデ属	0.5cm		
		gP	クリ	0.5cm		
			モミ属	0.5cm		
2	PJ-98	-	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			ケヤキ	0.5cm		
2	PJ-100	-	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅳ式
			ケンポナシ属	0.5cm		
3	PJ-147	gP	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			コナラ属コナラ節	0.5cm		
			トネリコ属トネリコ節	0.5cm		
3	PJ-152	No. 15	クリ	3.0cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
		No. 16	クリ	2.0cm		
		gP	クリ	0.5cm		
10	PJ-203	-	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			トネリコ属シオジ節	0.5cm		
			ミズキ	0.5cm		
			ニシキギ属	0.5cm		
			アサダ	0.5cm		
		gP	クリ	0.5cm		
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			トネリコ属トネリコ節	0.5cm		
			カエデ属	0.5cm		
5	PJ-231	gP	クリ	0.5cm	縄文時代後期初頭	称名寺Ⅰ式
			オニグルミ	0.5cm		
			ケヤキ	0.5cm		
4	PJ-244	gP	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			クワ属	0.5cm		
4	PJ-245	gP	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
4	PJ-245	gP	マツ属複維管束亜属	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
4	PJ-247	No. 247	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
		gP	クリ	0.5cm		
			コナラ属コナラ節	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			アサダ	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
4	PJ-248	gP	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			トネリコ属シオジ節	0.5cm		
			クマノミズキ類	0.5cm		
4	PJ-249	gP	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			クマノミズキ類	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		

付表１　樹種同定結果一覧

地区	遺構番号	出土位置	樹種	残存径	時期	土器型式
4	PJ-253	－	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	2.5cm		
		No. 7	カバノキ属	2.0cm		
			トネリコ属シオジ節	1.0cm		
		No. 108	クリ	7.0cm		
4	PJ-258	－	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			モミ属	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
4	PJ-262	－	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	加曽利Ｅ4式
			モミ属	0.5cm		
4	PJ-263	－	カバノキ属	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
		No. 112	クリ	0.5cm		
		炉	クリ	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
4	PJ-265	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	0.5cm		
			クワ属	0.5cm		
4	PJ-266	炉	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ｖ式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
		埋め要土器内	クリ	0.5cm		
4	PJ-267	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	0.5cm		
			アサダ	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
4	PJ-268	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
4	PJ-270	炉	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	堀之内式
			オニグルミ	0.5cm		
			カヤ	0.5cm		
4	PJ-271	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期初頭	称名寺Ⅱ式
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			ケヤキ	0.5cm		
			エゴノキ属	0.5cm		
			カエデ属	0.5cm		
4	PJ-276	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	0.5cm		
			トネリコ属シオジ節	0.5cm		
			ケンポナシ属	0.5cm		
4	PJ-280	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期中葉	加曽利Ｂ1式
			オニグルミ	0.5cm		
			コナラ属コナラ節	0.5cm		
			クマノミズキ類	0.5cm		
			ムラサキシキブ属	0.5cm		
			アサダ	0.5cm		
			カヤ	0.5cm		
4	PJ-281	－	マツ属複維管束亜属	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内２式
		炉	クリ	0.5cm		
			コナラ属クヌギ節	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			クマノミズキ類	0.5cm		
			モミ属	0.5cm		
4	PJ-282	No. 19	クリ	3.0cm	縄文時代中期末葉	曽利Ｖ式
		炉	クリ	0.5cm		
			クマノミズキ類	0.5cm		
4	PJ-285	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内２式
			オニグルミ	0.5cm		
			カバノキ属	0.5cm		
4	PJ-285	炉	ツツジ属	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内２式
4	PJ-286	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期	？
			オニグルミ	0.5cm		
4	PJ-288	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内２式
			オニグルミ	0.5cm		
			クマシデ属イヌシデ節	0.5cm		
			カバノキ属	0.5cm		
			クマノミズキ類	0.5cm		
			クワ属	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
4	PJ-289	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内２式
			オニグルミ	0.5cm		
			カバノキ属	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
4	PJ-291	No. 128	マツ属複維管束亜属	0.5cm	縄文時代後期中葉	加曽利Ｂ1式
		炉	クリ	0.5cm		
			ケヤキ	0.5cm		
			ブナ属	0.5cm		
			カエデ属	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		

付表 1　樹種同定結果一覧

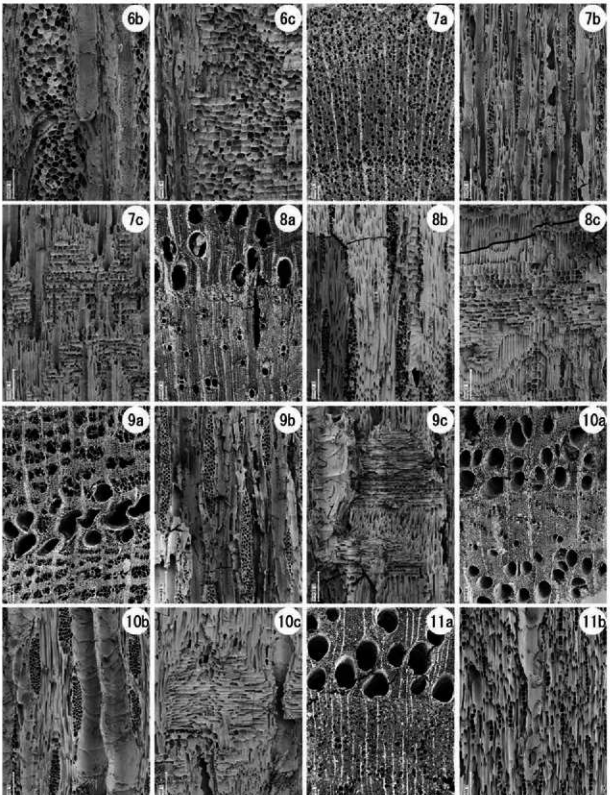
地区	遺構番号	出土位置	樹種	残存径	時期	土器型式
4	PJ-293	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			ケヤキ	0.5cm		
4	PJ-294	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			ミズキ	0.5cm		
			モミ属	0.5cm		
4	PJ-300	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	0.5cm		
			ケヤキ	0.5cm		
			キブシ	0.5cm		
			ブナ属	0.5cm		
			モミ属	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
4	PJ-301	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	0.5cm		
			コナラ属コナラ節	0.5cm		
			ケンポナシ属	0.5cm		
			クマノミズキ類	0.5cm		
4	PJ-302	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内２式
			オニグルミ	0.5cm		
			カエデ属	0.5cm		
4	PJ-304	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内２式
			オニグルミ	0.5cm		
4	PJ-305	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			カエデ属	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
4	PJ-306	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
4	PJ-310	炉	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			コナラ属コナラ節	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			トネリコ属トネリコ節	0.5cm		
			ミズキ	0.5cm		
			ブナ属	0.5cm		
農道	PJ-342	－	カバノキ属	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
		炉	クリ	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
			カバノキ属	0.5cm		
			ミズキ	0.5cm		
			マツ属複維管束亜属	0.5cm		
農道	PJ-348	炉	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			カバノキ属	0.5cm		
農道	PJ-349	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内２式
			ケヤキ	0.5cm		
			カバノキ属	0.5cm		
			クマノミズキ類	0.5cm		
			オニグルミ	0.5cm		
農道	PJ-350	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
農道	PJ-351	炉	クリ	0.5cm	縄文時代中期末葉	曽利Ⅴ式
			オニグルミ	0.5cm		
農道	PJ-354	炉	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
農道	PJ-354	炉	クマノミズキ類	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
3	DK-528	－	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	0.5cm		
3	DK-726	－	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	0.5cm		
			ケンポナシ属	0.5cm		
			カバノキ属	0.5cm		
			タケ亜科	0.5cm		
3	DK-754	－	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	0.5cm		
			ケンポナシ属	0.5cm		
			クマノミズキ類	0.5cm		
			カバノキ属	0.5cm		
			ミズキ	0.5cm		
10	PT-1531	－	クリ	0.5cm	縄文時代後期前葉	堀之内１式
			オニグルミ	0.5cm		
			トネリコ属シオジ節	0.5cm		
			クワ属	0.5cm		
			ミズキ	0.5cm		
			クマシデ属イヌシデ節	0.5cm		
			トチノキ	0.5cm		



図版1　炭化材の走査型電子顕微鏡写真（1）

1a-1c．モミ属（PJ77）、2a-2c．マツ属複維管束亜属（PJ267炉）、3a-3c．カヤ（PJ270炉）、4a-4c．カツラ（PJ67）、5a-5c．キブシ（PJ300炉）、6a．バラ属（PJ52）

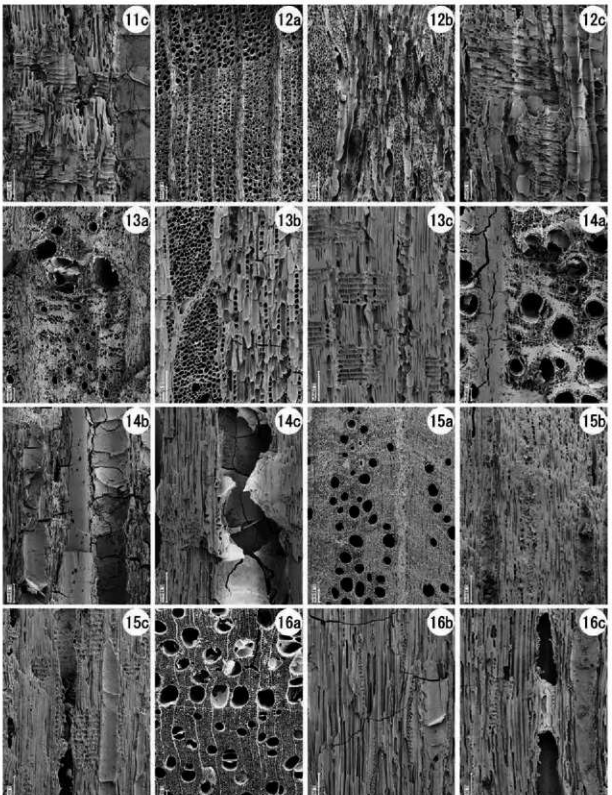
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



図版2　炭化材の走査型電子顕微鏡写真（2）

6b-6c．バラ属（PJ52）、7a-7c．サクラ属（PJ75炉）、8a-8c．ケンポナシ属（PJ276炉）、9a-9c．ケヤキ（PJ349炉）、10a-10c．クワ属（PJ36炉⑥）、11a-11b．クリ（PJ36炉④）

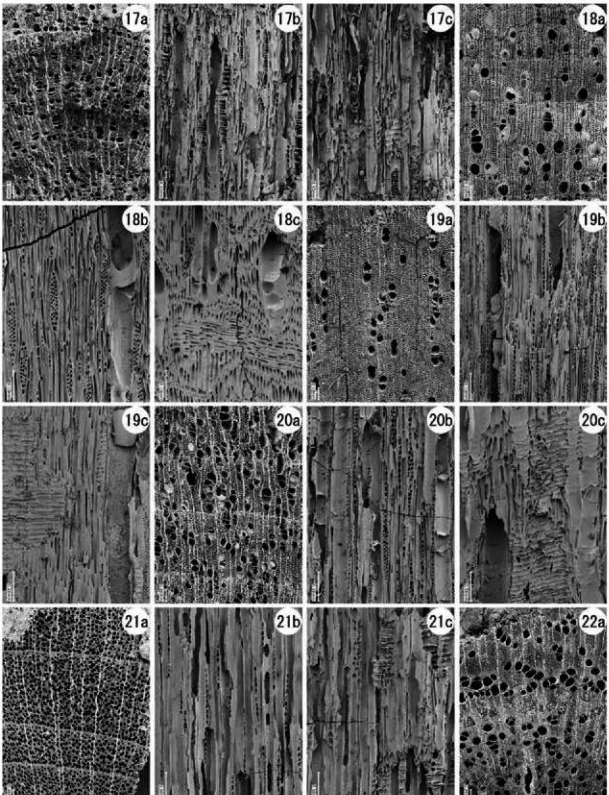
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



図版3　炭化材の走査型電子顕微鏡写真（3）

11c．クリ（PJ36炉①）、12a-12c．ブナ属（PJ291炉）、13a-13c．コナラ属クヌギ節（PJ67）、14a-14c．コナラ属コナラ節（PJ63）、15a-15c．コナラ属アカガシ亜属（PJ63）、16a-16c．オニグルミ（PJ36　セク①）

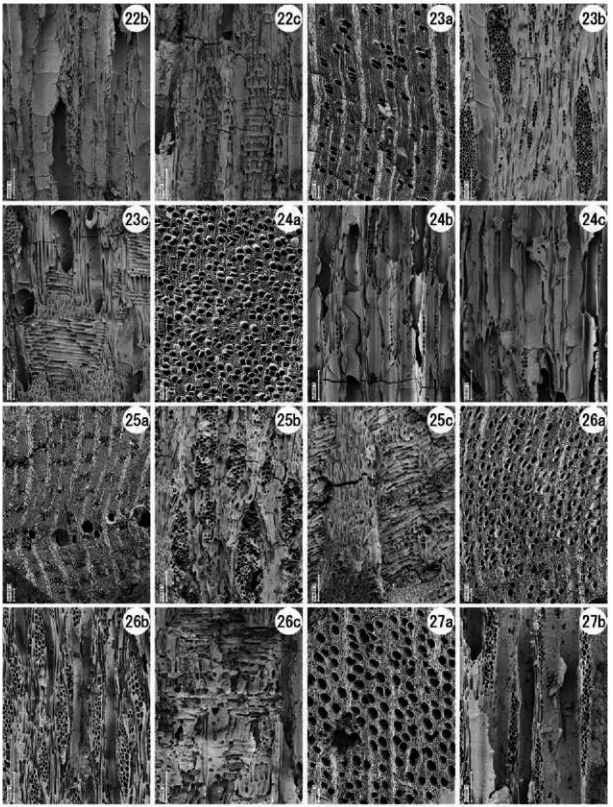
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



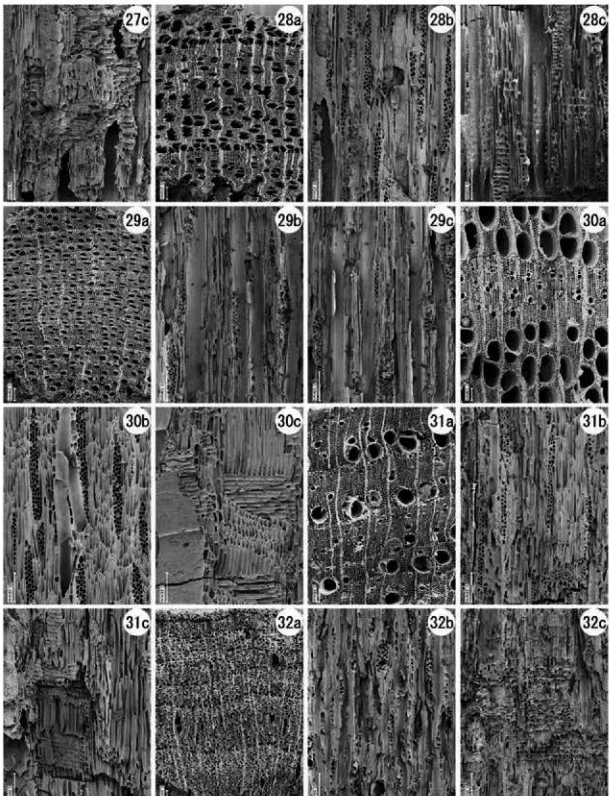
図版4　炭化材の走査型電子顕微鏡写真（4）

17a-17c．ハシノキ属ヤシャブシ亜属（PJ52）、18a-18c．カバノキ属（PJ289炉）、19a-19c．クマシデ属イヌシデ節（PJ67）、20a-20c．アサダ（PJ80炉）、21a-21c．ニシキギ属（PJ203）、22a．ヌルデ（PJ87）

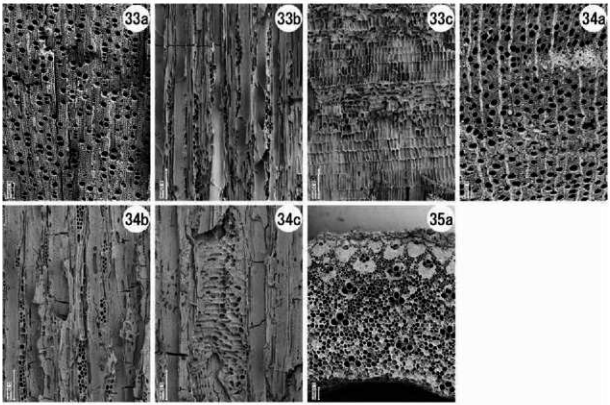
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



図版5　炭化材の走査型電子顕微鏡写真（5）
22b-22c．ヌルデ（PJ87）、23a-23c．カエデ属（PJ96）、24a-24c．トチノキ（PT1531）、25a-25c．キハダ（PJ63）、26a-26c．ミズキ（PJ294炉）、27a-27b．クマノミズキ類（PJ248炉）
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



図版6　炭化材の走査型電子顕微鏡写真（6）
27c．クマノミズキ類（PJ248炉）、28a-28c．エゴノキ属（PJ271炉）、29a-29c．ツツジ属（PJ285炉）、30a-30c．トネリコ属シオジ節（PJ203）、31a-31c．トネリコ属トネリコ節（PJ310炉）、32a-32c．イボタノキ属（PJ36炉②）
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面



図版7　炭化材の走査型電子顕微鏡写真（7）
33a-33c．ムラサキシキブ属（PJ280炉）、34a-34c．ガマズミ属（PJ79）、35a．タケ亜科（DK726）
a：横断面、b：接線断面、c：放射断面

上原遺跡から出土した炭化種実

バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ）

1. はじめに

山梨県北杜市明野町浅尾地内に位置する上原遺跡は、縄文時代中期末葉～後期前葉、古墳時代、平安時代の複合遺跡である。ここでは、縄文時代中期末葉～後期前葉の竪穴住居跡や土坑、ピットから得られた炭化種実の同定結果を報告し、当時利用された種実や周辺の植生について検討した。なお、同じ遺構から出土した木材の樹種同定と放射性炭素年代測定も行われている（樹種同定と放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

分析試料は、発掘調査で目視にて確認・回収された炭化種実と、土壌の水洗選別によって得られた炭化種実、計 80 試料である。試料の内訳は、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡 PJ-36 から 3 試料、PJ-72 と PJ-87、PJ-266 から各 2 試料、PJ-50 と PJ-52、PJ-63、PJ-67、PJ-75 ～ 77、PJ-79 ～ 82、PJ-86、PJ-95、PJ-96、PJ-98、PJ-100、PJ-147、PJ-152、PJ-262、PJ-266、PJ-282、PJ-310、PJ-319、PJ-320、PJ-348、PJ-351 から各 1 試料、縄文時代後期初頭から前葉の竪穴住居跡 PJ-203 から 2 試料、PJ-231 と PJ-244、PJ-245、PJ-247 ～ 249、PJ-253、PJ-258、PJ-263 ～ 265、PJ-267、PJ-268、PJ-270、PJ-271、PJ-276、PJ-277、PJ-280 ～ 281、PJ-285、PJ-286、PJ-288、PJ-289、PJ-291、PJ-293、PJ-294、PJ-300 ～ 306、PJ-321、PJ-331、PJ-342、PJ-343、PJ-349 ～ 350、PJ-354 から各 1 試料、土坑 DK-528 と DK-726、DK-753・754 から各 1 試料、ピット PT-1531 から 1 試料である。

土壌の採取と水洗および炭化物の抽出は、北杜市教育委員会によって行われた。種実は、土壌を水洗して浮遊物を回収後、篩を使用した水洗選別法により回収された。水洗前の土壌量は不明である。

同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として数え、1 個体に満たないものは破片とした。破片の産出数が多い分類群については、おおよその産出数を記号（+）で示した。試料は、北杜市教育委員会に保管されている。

3. 結果

同定した結果、木本植物では広葉樹のクリ炭化果実・炭化子葉とコナラ属コナラ節炭化子葉、コナラ属炭化果実・炭化子葉、オニグルミ炭化核、アサダ炭化果実、トチノキ炭化種子・炭化子葉、ムクロジ炭化種子、キハダ炭化果実・炭化小核、サンショウ炭化種子、イヌザンショウ炭化種子、ミズキ炭化核の 11 分類群、草本植物ではヒエ炭化種子（頴果）とイネ炭化稃・炭化種子（頴果）、アワ炭化種子（頴果）、オオムギ炭化種子（頴果）、コムギ炭化種子（頴果）、ダイズ属炭化種子、ササゲ属アズキ亜属炭化種子、オナモミ炭化総苞の 8 分類群の、計 19 分類群が見いだされた（表 1 ～ 6）。この他に、同定ができなかった不明 A 炭化種実と不明炭化鱗茎、残存状態が悪く微細な破片であるため、科以上の識別に必要な識別点を持たない同定不能炭化種実が得られた。炭化種実以外には、炭化した虫えいと子嚢菌が得られた。なお、縄文時代中期末葉～後期前葉には存在しないはずのイネ科穀類（ヒエ、イネ、アワ、オオムギ、コムギ）については、炭化していたものの、後世の混入物の可能性があるため、グレーの網がけで示し、記載は行うが、検討の対象外とした。

以下に、炭化種実の産出傾向を時期ごとに、遺構別に記載する。（上記のイネ科穀類と同定不能炭化種実を除く）。

[縄文時代中期末葉]

PJ-36：オニグルミが多く、クリとトチノキが少量、アサダとイヌザンショウがわずかに得られた。

PJ-50：オニグルミが多く、クリとトチノキが少量、ミズキがわずかに得られた。
PJ-52：オニグルミがやや多く、トチノキが少量、クリとコナラ属、ミズキ、ササグ属アズキ亜属がわずかに得られた。
PJ-63：オニグルミが多く、クリとトチノキが少量、ミズキがわずかに得られた。
PJ-67：オニグルミが多く、トチノキが少量、クリとコナラ属、サンショウがわずかに得られた。
PJ-72：クリとオニグルミが多く、トチノキが少量、キハダとミズキ、ササグ属アズキ亜属がわずかに得られた。
PJ-75：オニグルミが多く、トチノキが少量、クリとキハダがわずかに得られた。
PJ-76：オニグルミがやや多く、クリとトチノキがわずかに得られた。
PJ-77：オニグルミが多く、クリが少量、コナラ属とトチノキ、ミズキがわずかに得られた。
PJ-79：オニグルミが多く、クリとトチノキがわずかに得られた。
PJ-80：オニグルミがやや多く、クリとコナラ属がわずかに得られた。
PJ-81：少量のオニグルミが得られた。
PJ-82：オニグルミが多く、クリとトチノキがやや多く、コナラ属とミズキ、ササグ属アズキ亜属がわずかに得られた。
PJ-86：クリとオニグルミが少量、ミズキがわずかに得られた。
PJ-87：オニグルミが多く、クリとトチノキが少量、ササグ属アズキ亜属、不明鱗茎がわずかに得られた。
PJ-95：オニグルミが多く、クリが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-96：オニグルミが多く、クリが少量、コナラ属がわずかに得られた。
PJ-98：オニグルミが多く、クリが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-100：オニグルミが多く、クリが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-147：オニグルミが多く、クリとササグ属アズキ亜属がわずかに得られた。
PJ-152：オニグルミが少量、クリとトチノキがわずかに得られた。
PJ-262：オニグルミとトチノキがわずかに得られた。
PJ-266：オニグルミが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-270：オニグルミとトチノキがわずかに得られた。
PJ-282：トチノキがわずかに得られた。
PJ-310：オニグルミが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-319：同定可能な炭化種実は得られなかった。
PJ-320：オニグルミとトチノキが少量、クリがわずかに得られた。
PJ-348：オニグルミがわずかに得られた。
PJ-351：オニグルミが少量、トチノキがわずかに得られた。

[縄文時代後期初頭～中葉]

PJ-203：オニグルミとトチノキがやや多く、クリとミズキ、ダイズ属がわずかに得られた。
PJ-231：オニグルミが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-244：オニグルミが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-245：クリがわずかに得られた。
PJ-247：オニグルミが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-248：トチノキがやや多く、オニグルミが少量、サンショウがわずかに得られた。
PJ-249：オニグルミとトチノキがわずかに得られた。
PJ-253：少量のオニグルミが得られた。
PJ-258：少量のオニグルミが得られた。
PJ-263：トチノキがわずかに得られた。
PJ-264：クリがわずかに得られた。

PJ-265：オニグルミがわずかに得られた。
PJ-267：オニグルミが多く、トチノキが少量、コナラ属がわずかに得られた。
PJ-268：トチノキがわずかに得られた。
PJ-271：コナラ属が少量、コナラ属コナラ節とオニグルミがわずかに得られた。
PJ-276：ミズキとササゲ属アズキ亜属がわずかに得られた。
PJ-277：オニグルミが少量、クリとコナラ属コナラ節、トチノキがわずかに得られた。
PJ-280：オニグルミが少量、クリとムクロジがわずかに得られた。
PJ-281：オニグルミが少量、クリとトチノキがわずかに得られた。
PJ-285：オニグルミがやや多く、トチノキが少量、クリがわずかに得られた。
PJ-286：オニグルミが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-288：オニグルミがやや多く、トチノキが少量、クリとササゲ属アズキ亜属がわずかに得られた。
PJ-289：オニグルミが少量、クリとトチノキがわずかに得られた。
PJ-291：オニグルミとトチノキが少量、クリがわずかに得られた。
PJ-293：オニグルミがわずかに得られた。
PJ-294：オニグルミとトチノキが少量、コナラ属がわずかに得られた。
PJ-300：オニグルミがやや多く、クリが少量、トチノキがわずかに得られた。
PJ-301：オニグルミとトチノキが少量、クリがわずかに得られた。
PJ-302：オニグルミとトチノキが少量、クリがわずかに得られた。
PJ-303：同定可能な炭化種実は得られなかった。
PJ-304：少量のオニグルミとトチノキが得られた。
PJ-305：オニグルミが少量、黒とトチノキがわずかに得られた。
PJ-306：オニグルミとトチノキ、ミズキがわずかに得られた。
PJ-321：オニグルミとトチノキが少量、クリがわずかに得られた。
PJ-331：オニグルミがわずかに得られた。
PJ-342：オニグルミとトチノキが少量、クリがわずかに得られた。
PJ-343：オニグルミがやや多く、トチノキが少量、クリがわずかに得られた。
PJ-349：同定可能な炭化種実は得られなかった。
PJ-350：少量のオニグルミとトチノキが得られた。
PJ-354：オニグルミがわずかに得られた。
DK-528：オニグルミとトチノキがやや多く、ダイズ属とササゲ属アズキ亜属が少量、オナモミがわずかに得られた。
DK-726：トチノキが多く、オニグルミとダイズ属がやや多く、クリが少量、イヌザンショウがわずかに得られた。
DK-753・754：トチノキがやや多く、クリが少量、ミズキとササゲ属アズキ亜属がわずかに得られた。
PT-1531：オニグルミが多く、トチノキが少量、クリとミズキ、ダイズ属がわずかに得られた。

次に、産出した炭化種実の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名や順番については、米倉・梶田（2003-）に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

(1) クリ　Castanea crenata Sieb. et Zucc.　炭化果実・炭化子葉　ブナ科

果実は、完形ならば側面観は広卵形。表面は平滑で、細い縦筋がみられる。底面にある殻斗着痕はざらつく。残存高 3.6mm、残存幅 2.8mm。子葉は、完形ならば広卵形で、表面に縦方向のしわ状の溝がある。しわ以外の面は平坦で、硬質。残存高 10.1mm、残存幅 10.8mm。

(2) コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus spp.　炭化子葉　ブナ科

完形ならば円柱形で、上部はやや平坦、下半部が太い。コナラ属コナラ節のなかでも、全体の形状はミズナラまたはナラガシワに似る。縦方向にやや深い皺がある高さ 13.7mm、幅 8.3mm。

(3) コナラ属　Quercus spp.　炭化果実・炭化子葉　ブナ科

クヌギ節やコナラ節、アカガシ亜属に分類できない一群をコナラ属とした。果実は、臍が円形で、縁に沿って維管束の痕跡がリング状にあるため、コナラ属コナラ節もしくはアカガシ亜属である。残存高 6.1mm、残存幅 2.9mm。子葉は破片のため、全体形は不明であるが、円柱状を呈すると推定される。状態が悪く、節以上の詳細な同定はできなかった。残存高 12.0mm、残存幅 8.0mm。

(4) オニグルミ　Juglans mandshurica Maxim. var. sachalinensis (Komatsu) Kitam.　炭化核　クルミ科

すべて破片であるが、完形ならば側面観は広卵形。木質で、壁は厚くて硬く、ときどき空隙がある。表面に縦方向の浅い縫合線があり、浅い溝と凹凸が不規則に入る。断面は角が尖るものが多い。内部は二室に分かれる。残存高 17.9mm、残存幅 18.6mm、残存厚 10.9mm。

(5) トチノキ　Aesculus turbinata Blume　炭化種子・炭化子葉　ムクロジ科

種子は、完形ならば楕円形で、下半部は光沢がなく、上半部にはやや光沢がある。上下の境目の下に、少し突出した着点がある。種皮は薄く、やや硬い。種皮は 3 層からなり、各層で細胞の配列方向が異なる。種皮の表面には指紋状の微細模様が密にある。残存長 5.9mm、残存幅 5.9mm。子葉は厚みがあり、大型の子葉の破片と推定できる。表面の輪郭の湾曲具合から、元の形は球形に近かったと推定できる。表面に皺や筋などは見られず、平滑。破片は不定形に割れる。残存高 17.8mm、残存幅 11.0mm。

(6) ムクロジ　Sapindus mukorossi Gaertn.　炭化種子　ムクロジ科

完形ならば球形。上部は突出せず、やや平坦。表面は平滑。線状の着点の痕跡がある。種皮は厚い。残存長 4.0mm、残存幅 3.0mm。

(7) キハダ　Phellodendron amurense Rupr.　炭化果実・炭化小核　ミカン科

果実の上面観は完形ならば円形、側面観は広卵形。表面は粗く、不規則な皺がある。割れた面から内部の種子がみえる。残存長 5.3mm、残存幅 3.1mm。種子は、完形ならば上面観は両凸レンズ形、側面観は三日月形。表面に亀甲状で大きさのやや揃った網目状隆線がある。長さ 3.4mm、幅 2.2mm。

(8) サンショウ　Zanthoxylum piperitum (L.) DC.　炭化種子　ミカン科

上面観は卵形、側面観は楕円形ないし倒卵形。中央部まで伸びる縦方向の稜線があり、短い臍が斜め下を向く。網目状隆線は、低く細かい。種皮は厚く硬い。長さ 3.3mm、幅 2.7mm、厚さ 2.5mm。

(9) イヌザンショウ　Zanthoxylum schinifolium Siebold et Zucc.　炭化種子　ミカン科

上面観は卵形、側面観は円形。表面には小さな網目状隆線があり、一方の側面には、大きな着点がある。着点の長さは、種子の長さとほぼ同じ。長さ 3.1mm、幅 2.6mm、厚さ 2.2mm。

(10) ミズキ　Cornus controversa Hemsl. ex Prain　炭化核　ミズキ科

楕円形～ゆがんだ球形。基部に裂けたような大きな臍がある。縦方向に不規則な深い溝がある。長さ 3.4mm、幅 3.4mm、厚さ 3.0mm。

(11) ヒエ　Echinochloa esculenta (A.Braun) H.Scholz　炭化種子　イネ科

側面観は倒卵形、断面は片凸レンズ形で、厚みは薄く、やや扁平。胚は幅が広く、長さは全長の2/3程度と長い。長さ1.7mm、幅1.7mm。

(12) イネ　Oryza sativa L.　炭化籾・炭化種子（頴果）　イネ科

籾は、完形ならば上面観が楕円形で側面観が長楕円形。2条の稜があり、表面には四角形の網目状隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。残存長4.7mm、幅3.1mm。種子（頴果）の上面観は両凸レンズ形、側面観は長楕円形で、一端に胚が残る。両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ5.0mm、幅3.0mm。

(13) アワ　Setaria italica P.Beauv.　炭化種子（頴果）　イネ科

上面観は楕円形で、側面観は円形に近い。腹面下端中央の窪んだ位置に細長い楕円形の胚があり、胚の長さは全長の2/3程度。長さ1.3mm、残存幅1.3mm。

(14) オオムギ　Hordeum vulgare L.　炭化種子（頴果）　イネ科

側面観は長楕円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央付近にある。背面の中央部下端には三角形の胚がある。断面は楕円形である。長さ5.3mm、幅2.5mm、厚さ2.0mm。

(15) コムギ　Triticum aestivum L.　炭化種子（頴果）　イネ科

上面観・側面観共に楕円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸みを帯びている。長さ3.9mm、幅3.0mm、厚さ2.5mm。

(16) ダイズ属　Glycine spp.　炭化種子　マメ科

確認できた種子は変形しているが、本来の上面観は楕円形、側面観は長楕円形と思われる。臍は長楕円形で、全長の1/3未満の長さで、側面のほぼ中央にあったと推定されるが、残存していない。長さ8.6mm、残存幅4.9mm、厚さ4.1mm。種子はすべて発泡状態であったため、元の大きさは推定できなかった。

(17) ササゲ属アズキ亜属　Vigna subgenus Ceratotropis　炭化種子　マメ科

上面観は方形に近い円形、側面観は方形に近い楕円形。臍は全長の半分から2/3ほどの長さで、片側に寄ると推定されるが、残存していない。長さ4.8mm、幅3.1mm、厚さ3.0mm。

(18) 不明A　Unknown A　炭化種実

破片のため全体形は不明であるが、球形を呈すると推定される。表面にうねるような微細な縦シワが見られる。状態が悪く、詳細な同定はできなかった。残存長10.5mm、残存幅6.0mm。

(19) 不明　Unknown　炭化鱗茎

上面観は円形、側面観は狭卵形。鱗片葉が層状に密に重なっており、ユリ科ノビルまたはキジカクシ科ツルボの鱗茎に類似する。基部に円形の盤茎があり、わずかに突出する。実体顕微鏡による観察では、科以上の詳細な同定はできなかった。残存長3.3mm、幅2.6mm。

4. 考察

上原遺跡の縄文時代中期末葉～後期中葉にかけての竪穴住居跡や土坑、ピットからは、多量の炭化種実が得られた。以下、産出した炭化種実について、時期ごとに考察する。

縄文時代中期末葉の竪穴住居跡からは、野生植物で食用として利用可能な堅果類のクリとコナラ属、オニグルミ、トチノキ、液果類のサンショウとイヌザンショウ、キハダ、ミズキ、マメ類のササゲ属アズキ亜属が得られた。クリやオニグルミは破片で産出しており、食用にならない果実や核が、内部の子葉を利用するために割られた後に、炉内などに廃棄された可能性がある。トチノキは食べるにあたってアク抜きが必要である。利用できる部位である種子や子葉が出土しており、住居内でトチノキの加工が行われていた可能性を示している。アイヌの民族例によれば、キハダは食用だけでなく、香辛料や薬用にも利用できる（アイヌ民族博物館, 2004）。また、ミズキも香辛料としての利用が想定されている（辻ほか, 2006）。ミズキの利用例は、近現代の民俗例では確認されていないが、ミズキは縄文時代の遺跡からはしばしば出土し、住居跡の炉内から出土するなど、利用されていた可能性がうかがえる産出状況を示している。イヌザンショウは薬用として利用されており、サンショウは油として利用された可能性もある。PJ-36から得られたアサダの果実は、利用されないため、偶発的に炭化して住居内に堆積した可能性がある。

縄文時代後期の竪穴住居跡や土坑、ピットからも、食用可能な堅果類のクリとコナラ属コナラ節、コナラ属、オニグルミ、トチノキ、ムクロジ、しょう果類のサンショウとイヌザンショウ、ミズキ、マメ類のダイズ属とササゲ属アズキ亜属が得られた。PJ-271炉とPJ-277から得られたドングリ類は、コナラ属コナラ節（コナラ、ミズナラもしくはナラガシワ）と同定された。コナラ属コナラ節は、縄文時代中期から晩期の低湿地遺跡で頻繁にみられるため、選択的な利用が推定されている（佐々木, 2007；佐々木ほか, 2007）。クリとオニグルミは、食用にならない果実や核の破片も産出した。量的には食用になる子葉が多く、住居内や土坑、ピットに保管されていたクリが火災に遭って炭化した可能性や、調理中に炭化した可能性などが考えられる。トチノキの産出量は、縄文時代中期末葉に比べてやや増加する。PJ-280から得られたムクロジは、近現代の民俗例で洗剤や薬用としても用いられている（長沢, 2012）。

土坑DK-528とDK-726から得られたダイズ属は、すべて変形しており、那須（2018）で示された現代の野生種の大きさの上限値（長さ10.0mm）と比較するとややや小さかったが、栽培種に近い大きさである。また、今回PJ-276炉と土坑DK-528、DK-753・754から産出したササゲ属アズキ亜属の完形個体8点は、長さ4.3～5.2（平均4.6±0.3）mm、幅2.6～3.6（平均3.0±0.4）mm、厚さ2.8～3.6（平均3.2±0.3）mmで、那須（2018）に示された野生種の大きさの上限値（長さ7.0mm）よりも小さかった（表7）。周辺地域では、山梨県の中谷遺跡や大月遺跡、東京都の下宅部遺跡でも、同じ時期の遺構からアズキ亜属が検出されている（松谷, 1997；佐々木ほか, 2007；中山, 2015）。DK-528から得られたオナモミは、利用されないため、偶発的に炭化して土坑に堆積した可能性がある。

今回、縄文時代中期末葉～後期前葉の竪穴住居跡から得られたヒエ、イネ、アワ、オオムギ、コムギについては、縄文時代突帯文期のイネ科穀類の確実な出土例がこれまでに確認されていないため、後世の種実の混入である可能性がある。今後、放射性炭素年代測定による確認が必要である。

引用文献

アイヌ民族博物館(2004)アイヌと自然シリーズ第3集　アイヌと植物(樹木編). 32p, アイヌ民族博物館.

松谷暁子(1997)大月遺跡から出土した炭化植物について. 山梨県埋蔵文化財センター編「大月遺跡」: 115-117, 山梨県教育委員会.

長沢　武(2012)野外植物民俗事苑. 443p, ほおずき書籍.

中山誠二(2015)中部高地における縄文時代の栽培植物と二次植生の利用. 第四紀研究, 54 (5), 285-298.

那須浩郎(2018)縄文時代の植物のドメスティケーション. 第四紀研究, 57 (4), 109-126.

佐々木由香(2007)種実と土木用材からみた縄文時代中期後半～晩期の森林資源利用―関東地方を中心として. 安斎正人・高橋龍三郎編「縄紋時代の社会考古学」: 209-235, 同成社.

佐々木由香・工藤雄一郎・百原　新(2007)東京都下宅部遺跡の大型植物遺体からみた縄文時代後半期の植物資源利用. 植生史研究, 15 (1), 35-50.

辻　圭子・辻　誠一郎・南木睦彦(2006)青森県三内丸山遺跡の縄文時代前期から中期の種実遺体群と植物利用. 植生史研究, 特別第2号, 101-120, 日本植生史学会.

米倉浩司・梶田　忠(2003-) BG Plants 和名―学名インデックス(YList). http://ylist.info

表1　上原遺跡から出土した貝化種実（1）（括弧内は破片数）

	遺構	PJ-50			PJ-52		PJ-63		PJ-67		PJ-72		PJ-75		PJ-76		PJ-77		PJ-79	
	位置	－	モアシロ	gi	－	－	－	－	－	gi	－	gi	－	gi	－	gi	－	gi	－	gi
	土器型式	曽利IV式			曽利IV式		曽利V式		曽利V式		曽利V式		曽利V式		曽利V式		曽利V式		曽利V式	
分類群	時期	縄文時代中期末葉																		
クリ	炭化果実	(1)			(14)		(3)		(1)		(28)		(7)		(124)		(8)		(1)	
	炭化子葉						(10)		(1)		(5)				(3)		(1)		(4)	
コナラ属	炭化果実																		(1)	
	炭化子葉								(1)				(5)						(1)	
オニグルミ	炭化核				(++++)		(++++)		(+++)		(++++)		(++++)		(++++)		(++++)		(++++)	
アサダ	炭化果実		1																	
トチノキ	炭化種子				(42)		(35)		(15)		(27)		(33)		(7)		(11)		(5)	
	炭化子葉						(11)				(7)		(5)		(10)					
キハダ	炭化果実														(1)					
	炭化小核																1			
サンショウ	炭化種子												1							
イヌザンショウ	炭化種子	1	1		2 (4)															
ミズキ	炭化核						1		(1)		1 (1)				(1)		(1)			
ヒエ	炭化種子	1																		
イネ	炭化稃				1															
	炭化種子								1				1				2			
ゲツ	炭化種子	1																		
ヨスルボ	炭化種子		1						1 (1)				1				1			
ヨムボ	炭化種子								1				2				1			
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子								(1)						(1)		(2)			
同定不能	炭化種実				(21)		(5)		(40)		(21)		(12)				(27)		(13)	
虫食い	炭化	1					1 (2)				1		1		8 (1)		5 (11)			
子葉菌	炭化子葉														1					
菌類	炭化																			

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99, ++++:100以上

表2　上原遺跡から出土した炭化種実（2）（括弧内は破片数）

	遺構	PJ-80		PJ-81		PJ-82		PJ-86		PJ-87		PJ-95		PJ-96		PJ-98		PJ-100		PJ-147		PJ-152		PJ-203	
	位置	gi		gi		gi		gi		－		gi		－		－		－		gi		－		gi	
	土器型式	曽利IV式		曽利IV式		曽利IV式		曽利V式		曽利IV式		曽利IV式		曽利V式		曽利IV式		曽利IV式		曽利V式		曽利V式		堀之内式	
分類群	時期	縄文時代中期末葉																						後期前葉	
クリ	炭化果実					(58)		(17)		(18)		(26)		(13)		(23)		(46)		(2)		(3)			(2)
	炭化子葉					(6)				(1)				(7)											
コナラ属	炭化子葉	(1)				(6)								(1)											
オニグルミ	炭化核	(+++)		(++)		(++++)		(++)		(++++)		(++++)		(++++)		(++++)		(++++)		(++++)		(++)			(+++)
トチノキ	炭化種子					(26)				(13)		(4)				(5)		(2)				(7)			(96)
	炭化子葉					(6)				(14)															
ミズキ	炭化核					(4)		(1)																(3)	
ヒエ	炭化種子												1												
ダイズ属	炭化種子																								1
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子				1				2		(1)									(1)					
同定不能	炭化種実	(2)		(1)		(14)				(4)	(1)			(2)		(26)		(1)							
不明	炭化種実										1														
虫食い	炭化			1		2		2		1		(2)	1 (4)			(1)						1		(2)	
子葉菌	炭化子葉																					1			

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99, ++++:100以上

表3　上原遺跡から出土した炭化種実（3）（括弧内は破片数）

	遺構	PJ-231		PJ-244		PJ-245		PJ-247		PJ-248		PJ-249		PJ-253		PJ-258		PJ-262		PJ-263		PJ-264		PJ-265		PJ-266	
	位置	gi		gi		gi		gi		gi		gi		gi		gi		gi		gi		－		gi		－	埋ガメ
	土器型式	称名寺I		堀之内1		堀之内1		堀之内1		堀之内1		堀之内1		堀之内1		堀之内1		加曽利E4		堀之内1		堀之内1		堀之内1		加曽利E4	
分類群	時期	後期初頭								後期前葉								中期末葉				後期前葉				中期末葉	
クリ	炭化子葉					(1)																(1)					
オニグルミ	炭化核		(++)		(++)				(++)		(++)		(+)		(++)		(++)		(+)					(+)		(++)	
トチノキ	炭化種子		(6)		(8)				(4)		(90)		(1)						(3)		(1)					(1)	
	炭化子葉												(1)														
サンショウ	炭化種子										(1)																
オオムギ	炭化種子									1																	
不明A	炭化種実																										(11)
同定不能	炭化種実					(1)				(3)									(4)					(3)			

+:1-9, ++:10-49

表4　上原遺跡から出土した炭化種実（4）（括弧内は破片数）

	遺構	PJ-267		PJ-268		PJ-270		PJ-271		PJ-276		PJ-277		PJ-280		PJ-281		PJ-282		PJ-285		PJ-286		PJ-288		PJ-289		PJ-291	
	位置	gi		gi		gi		gi		gi		gi		gi		gi		gi		gi		－		gi		gi		gi	
	土器型式	堀之内1		堀之内1		曽利V		称名寺II		堀之内1		堀之内2		加曽利B1		堀之内2		曽利V		堀之内2		?		堀之内2		堀之内2		加曽利B1	
分類群	時期	縄文時代後期前葉				中期末葉		後期初頭		後期前葉				後期中葉		後期前葉		中期末葉		後期前葉		後期		後期前葉				後期中葉	
クリ	炭化果実													(1)		(6)				(3)				(3)					
	炭化子葉											(4)		(2)												(1)		(2)	
コナラ属コナラ節	炭化子葉							(1)				(1)																	
コナラ属	炭化子葉	(1)						(43)																					
オニグルミ	炭化核	(++++)				(+)		(+)				(++)		(++)		(++)				(+++)		(++)		(+++)		(++)		(++)	
トチノキ	炭化種子	(14)		(3)		(2)						(4)				(6)		(5)		(10)		(4)		(35)		(9)		(17)	
ムクロジ	炭化種子													(2)															
ミズキ	炭化核										(3)																		
オヤブ属アズキ亜属	炭化種子									1														(2)					
同定不能	炭化種実	(5)		(1)										(15)		(1)				(3)		(5)		(4)		(2)		(8)	
虫食い	炭化					(1)																							

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99

表5　上原遺跡から出土した炭化種実 (5)　(括弧内は破片数)

	遺構	PJ-293	PJ-294	PJ-300	PJ-301	PJ-302	PJ-303	PJ-304	PJ-305	PJ-306	PJ-310	PJ-319	PJ-320	PJ-321
	位置	炉	炉	炉	炉	-	-	-	炉	炉	炉	-	炉	炉
	土器型式	堀之内1	堀之内1	堀之内1	堀之内1	堀之内2	堀之内1	堀之内2	堀之内1	堀之内1	曽利Ⅴ	曽利Ⅳ	曽利Ⅱ	堀之内1
分類群	時期	縄文時代後期前葉									縄文時代中期末葉			後期前葉
クリ	炭化果実				(1)								(3)	
	炭化子葉			(11)		(1)			(1)					(2)
コナラ属	炭化子葉		(1)											
オニグルミ	炭化核	(+)	(++)	(+++)	(++)	(++)		(++)	(++)	(+)	(++)		(++)	(++)
トチノキ	炭化種子		(21)	(9)	(29)	(14)		(20)	(7)	(1)	(4)		(27)	(20)
ミズキ	炭化核									1				
ヌマスギ	炭化種子		1											
同定不能	炭化種実		(2)		(2)	(2)		(1)			(3)	(5)	(2)	(7)
備考		種実なし												

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99

表6　上原遺跡から出土した炭化種実 (6)　(括弧内は破片数)

	遺構	PJ-331	PJ-342	PJ-343	PJ-348	PJ-349	PJ-350	PJ-351	PJ-354	DK-528	DK-726	DK-753・754	PT-1531
	位置			炉	炉	炉		炉	炉				
	土器型式	堀之内1	堀之内1	堀之内1	曽利Ⅴ	堀之内2	堀之内1	曽利Ⅴ	堀之内1	堀之内1	堀之内1	堀之内1	堀之内1
分類群	時期	縄文時代後期前葉			中期末葉	後期前葉		中期末葉		縄文時代後期前葉			
クリ	炭化果実			(2)							(7)	(13)	(1)
	炭化子葉		(1)	(2)							(8)	(2)	
コナラ属	炭化子葉												
オニグルミ	炭化核	(+)	(++)	(+++)	(+)		(++)	(++)	(+)	(+++)	(+++)		(++++)
トチノキ	炭化種子		(18)	(40)			(13)	(5)		(42)	(60)	(71)	(47)
	炭化子葉		(1)							(14)	(57)		
イヌザンショウ	炭化種子										(3)		
ミズキ	炭化核											(1)	1
ダイズ属	炭化種子									3 (8)	8 (50)		(2)
ササゲ属アズキ亜属	炭化種子									10 (17)		1	
オナモミ	炭化総苞									(1)			
同定不能	炭化種実							(4)		(9)	(30)	(4)	(8)
虫こい	炭化		1								2 (1)	2 (1)	
子嚢菌	炭化子嚢										3		
備考		種実なし											

+:1-9, ++:10-49, +++:50-99, ++++:100以上

表7　ササゲ属アズキ亜属炭化種子の大きさ

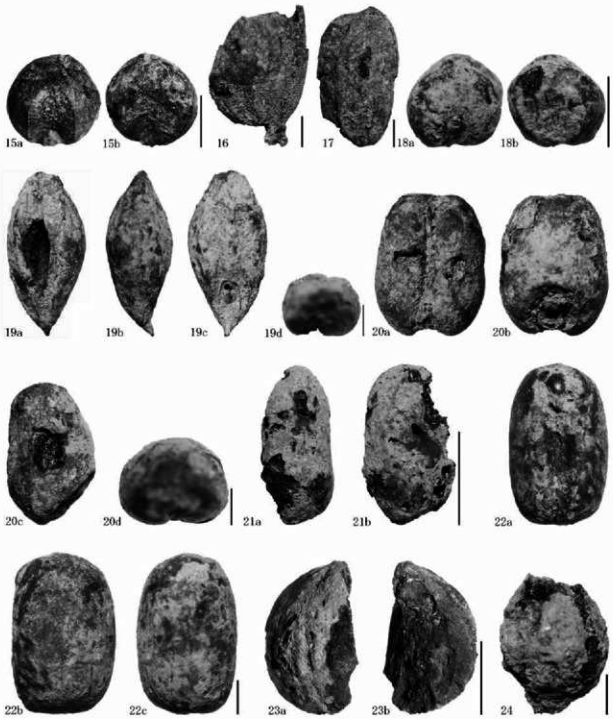
	長さ	幅	厚さ
PJ-276	4.4	2.7	3.3
DK-528	4.8	3.1	3.0
	5.2	3.6	3.4
	4.7	2.7	2.9
	4.3	2.8	2.8
	4.3	2.6	2.9
	5.0	3.4	3.3
DK-753・754	4.4	3.3	3.6
最小	4.3	2.6	2.8
最大	5.2	3.6	3.6
平均	4.6	3.0	3.2
標準偏差	0.3	0.4	0.3

(単位：mm)

スケール 1, 4, 7, 9-14:1mm, 2, 3, 5, 6, 8:5mm

図版1 上原遺跡から出土した炭化種実 (1)

1. クリ炭化果実 (PJ-72炉)、2. クリ炭化子葉 (PJ-87)、3. コナラ属コナラ節炭化子葉 (PJ-277)、4. コナラ属炭化果実 (PJ-77)、5. コナラ属炭化子葉 (PJ-267炉)、6. オニグルミ炭化核 (PJ-331)、7. トチノキ炭化種子 (PJ-263炉)、8. トチノキ炭化子葉 (DK-726)、9. ムクロジ炭化種子 (PJ-280)、10. キハダ炭化果実 (PJ-72炉)、11. キハダ炭化小核 (PJ-75)、12. サンショウ炭化種子 (PJ-67)、13. イヌザンショウ炭化種子 (PJ-36炉)、14. ミズキ炭化核 (PT-1531)



スケール 15-20, 22, 24:1mm, 21, 23:5mm

図版2 上原遺跡から出土した炭化種実 (2)

15. ヒエ炭化種子（頴果） (PJ-36) 、16. イネ炭化籾 (PJ-36炉) 、17. イネ炭化種子（頴果） (PJ-67) 、18. アワ炭化種子（頴果） (PJ-36) 、19. オオムギ炭化種子（頴果） (PJ-52) 、20. コムギ炭化種子（頴果） (PJ-67) 、21. ダイズ属炭化種子 (DK-726) 、22. ササゲ属アズキ亜属炭化種子 (DK-528) 、23. 不明A炭化種実 (PJ-266埋ガメ) 、24. 不明炭化鱗茎 (PJ-87)

第４章　理化学分析

第３節　種実圧痕

出土土器の整理作業過程で土器に残された種実等の圧痕調査を実施した。調査対象とした土器は、縄文時代早期後半から縄文時代後期までの完形土器および土器破片である。土器の総重量は未計量である。

検出された圧痕はレプリカを作成し、実体顕微鏡、デジタル顕微鏡、走査型電子顕微鏡で検鏡し、種を同定した。一連の作業は北杜市埋蔵文化財センターが行った。同定が難しかった一部の試料について、佐々木由香氏、那須浩郎氏のご教示、ご指導を得た。種同定の概要は以下のとおりで、同定結果は添付DVDに一覧表を収録した。

上原遺跡でヤブマメと思われる圧痕１点（試料番号KH-2083）が検出されている。ヤブマメは史前帰化植物ともいわれ、マメ科植物利用が顕著な縄文時代にあっても検出事例は少ない。北杜市内ではこれまでに西川遺跡（北杜市須玉町）、南沢遺跡（北杜市白州町）で圧痕２点の検出事例がある程度である。

第５章　総括

平成24年度から令和３年度に及んだ上原遺跡の発掘調査は、多くの遺構が検出されたうえに調査期間と調査費用の制約があり、開発対象区域のうち盛り土造成される部分は遺構確認に留めて盛り土保存した。また整理作業は実施したものの、その成果を報告書に充分に盛り込むことができなかった。調査成果は、後日どのような形でかまとめて公表したい。

上原遺跡は以前から埋蔵文化財包蔵地として地元にはよく知られていて、地元のご老人から遺物が表採された話を伺っていた。また北側に隣接する須玉町上ノ原遺跡が先行して発掘調査されていたため、縄文時代中期末葉から後期の集落跡が予想された。しかし、実際に発掘調査してみると多くの住居跡が検出されて、繰り返し調査計画の変更を余儀なくされた。土地改良事業関係機関と地権者のご理解、ご協力に感謝したい。本発掘調査の成果は多岐にわたるものの、紙幅の都合上、植物資源利用と遺跡における土地利用の様相に限って総括したい。

上原遺跡の土地利用は中期末葉の曽利Ⅳ式期から本格化し、加曽利B2式期をもって終了する。早期後半、中期中葉、中期末葉の曽利Ⅱ式期にも限定的な土地利用が認められるが、集住的な居住地として利用されるのは曽利Ⅳ式期からである。中期末葉の曽利式期には、上原遺跡の南約１kmに当該期の環状集落、梅之木遺跡がある。また西側、鰻沢川の下流２kmには中期中葉から末葉にかけての諏訪原遺跡が知られる。そのほかにも上原遺跡から４km足らずの範囲に寺前遺跡、平林遺跡の中規模、大規模な集落遺跡が知られる。これら中期末葉の集住的な居住地はすべて曽利Ⅴ式末に廃絶し、後期の遺跡は、上ノ原遺跡、上原遺跡、清水端遺跡、屋敷添遺跡がみられるに過ぎなくなる。いわゆる環状集落の解体・衰退とされる現象であり（山本1976など）、関東地方から中部地方で広域的に発生したことから、環境変化なかでも気候の寒冷化が原因と考えられている。実際、地球科学、古気候研究の分野でも4300年前頃の急激な寒冷化を示す情報が得られ報告されている（Kajita2020）。地球規模の環境変化が縄文時代の人びとの暮らしに影響したことは想像に難くないが、果たして当時の人びとは環境の変化にどのように対応し、中期末葉から後期中葉へと存続する上原遺跡での生活を築いたのだろうか。

上原遺跡では、曽利式期の遺構から炭化したトチノキ種子が検出され、当時の人びとがトチノミを利用したことが確認された。炭化種子の細片ばかりであり食料として利用されたことが確実に裏づけられたわけではないが、梅之木遺跡などこれまでの中期遺跡では検出されたことがない点を踏まえると、食料資源として利用された可能性が高いと思われる。

サポニンを多く含有するトチノミは、アク抜きして食料化するのに多量の流水を必要とする。たとえば梅之木遺跡の場合、利用できる河川は湯沢川の小さな流れに限定され、複数世帯が同時にアク抜き作業できるだけの水量が得られないと思われる。その点、上原遺跡が立地する鰻沢川源流付近では現在でも流水がある流路が複数あることに加え、複数の埋没河谷も認められる。これらが縄文時代当時に流水があったとすれば、複数世帯が同時にアク抜き作業できる環境条件にあったと推測される。

梅之木遺跡の炭化材、炭化種実の同定では、クリ、クルミに特化した植物利用が想定された。おそらく居住地の周辺ではクリ、クルミ以外の樹種を建材、土木材、燃料材として利用しつつ、クリ、クルミを管理・育成していたのだろう。その結果、遺跡周辺にトチノキが減少するか消滅していた可能性がある。一方、曽利Ⅳ式期以前に集中的に土地利用されていなかった上原遺跡では河谷沿いにトチノキの天然群落が生育していたのであろう。静岡県天竜区に「栃を伐る馬鹿　植える馬鹿」という俚諺があるように（野本 2012）、トチノキは食料資源として利用できるほどに生育するまでには 20 年以上の年月を要し、クリのように急速に生長しない。寒冷化と、おそらくは環境変動期にありえる天候不順の結果、クリ、クルミの収量が減少し、あるいは結実の予測可能性が低下する事態にあたり、曽利Ⅳ式期頃の人びとは、トチノミを新たな食料資源に加えて利用しようと試みたと思われる。そこでトチノキの天然群落があり、かつアク抜き作業に必要な複数の水流が得られる条件を備えた上原遺跡に新たな居住地を求めたと考えられる。おそらく梅之木遺跡など従前からの居住地も並行して利用されていたことだろう。このように考えると、上原遺跡と周辺の中期遺跡との併存も理解しやすい。

こうした新たな試みにもかかわらず集住的な居住地は存続せず、上原遺跡でもほかの遺跡においても曽利Ⅴ式期後半から称名寺Ⅰ式期にかけては小規模な居住地が分散している。クリとクルミに特化した労働集約型の植物利用戦略を採用した中期の人びとは、集住が生存に不利とみるや集住を停止して分散し、リスク回避を図ったものと思われる。上原遺跡で再び集住的な居住形態がみられるのは堀之内１式期になってからのことである。環境の回復、あるいはトチノキ林の管理・育成による増殖、トチノミ利用技術の洗練・向上が図られたのであろう。

後期の上原遺跡では住居が繰り返し建替えられている地点が点在している。住居の耐久期間は不明であるが、住居に居住した集団は同じ地点を継続的、断続的に占拠し、繰り返し住居を建替えたと推測される。こうした様相は中期の建替えとは異なる居住様式であると推測され、後期の居住の継続性、定住性の高まりを示唆していると考えられる。

上原遺跡から南西 4.5 kmに屋敷添遺跡がある。上原遺跡と同様に河川を臨む浅谷地形に立地する遺跡で発見された住居は数軒程度と少ないが、屋敷添遺跡では堀之内１式期から加曽利 B1 式期にかけての配石遺構、配石を伴う敷石住居が検出されている。多数の住居が検出されたが目立った記念物的遺構がない上原遺跡と上ノ原遺跡、住居が少ないものの配石遺構を伴う屋敷添遺跡は対照的であって、この点にも縄文時代後期の社会の特質が表れているように思われる。

八ヶ岳山麓周辺の中期土器には多数の植物種実圧痕が検出されることが知られているが、後期土器の種実圧痕は少ない印象である。しかし、上原遺跡で出土した後期土器からダイズ属、ササゲ属、ヤブマメ（？）のマメ類をはじめとしてサンショウ、ニワトコ、ミズキ、キハダ、アサなどの有用植物の種子圧痕が検出された。これらの圧痕は検出数こそ単位重量あたりの中期土器と比較して少ないものの、植物種は中期と変わらない。これらの有用植物の利用は中期から後期へと変わることなく受け継がれていると考えられる。圧痕の検出率の違いは土器製作の流儀の差なのであろう。さらに後期中葉加曽利 B2 式土器では大型のダイズ属圧痕が検出された。中期初頭以降に顕著となるマメ科圧痕の大型化傾向は後期にも継続していることが確認された。

Kajita H. et al 2020 'High time-resolution alkenone paleotemperature variations in Tokyo Bay during the Meghalayan: Implications for cold climates and social unrest in Japan' "Quaternary Science Reviews" 230
野本寛一　2012 『自然と共に生きる作法　水窪からの発信』静岡新聞社
山本暉久　1976 「敷石住居出現のもつ意味(下)」『古代文化』28 巻 3 号

K-6 グリッド周辺の調査区

平安時代の遺構が分布する調査地点を西上空から撮影

天王原 1 工区内の調査地点

G-2 グリッド一帯を東から撮影。調査地点は浅い谷地形になっている。

H-12 グリッド周辺の調査区

ブルーシートがある調査区は縄文時代中期の遺構が集中する地点。南上空から撮影

天王原 2 工区全景

写真下端が茅ヶ岳広域農道。2 工区は農道から東側にあたる。

H-12 グリッド付近の調査地点

縄文時代中期末葉の住居が分布するH-12グリッド付近を西上空から撮影

H-14 グリッド付近の調査地点

縄文時代中後期と平安時代の遺構が分布する地点を北西上空から撮影

F-20 グリッド付近の調査地点

黒色の埋没谷内にも縄文時代の遺構が検出された。南上空から撮影

G-22 グリッド付近の調査地点

南北の旧河道に挟まれた尾根上に縄文時代後期の遺構が分布する。西上空から撮影

H-20 グリッド付近の調査地点

南側の旧河道を臨む尾根筋に縄文時代後期と平安時代の遺構が分布する。西上空から

F-22 グリッド付近の調査地点

縄文時代後期の住居が密集する地点を北西上空から撮影

H-20 グリッド付近の調査地点

上空から。この地点は遺構確認のみで現状保存した。

E-22 グリッド付近の調査地点

後期住居は同じ地点で建替えを繰り返している。北西上空から撮影

E-19 グリッド付近の調査地点

東西に延びる農道工事個所を発掘調査した。東上空から撮影

C-12 グリッド付近の調査地点

南側に鍛沢川が流れる。西上空から撮影

E-20 グリッド付近の調査地点

農道工事個所。縄文時代と平安時代の遺構が確認された。西上空から撮影

C-23 グリッド付近の調査地点

縄文時代後期の遺構が確認され、現状保存した。西上空から撮影

天王原 1 工区 PJ004 号住居

曽利Ⅴ式期の住居。中央は試掘溝。西から

D-21 グリッド付近の調査地点

農道工事個所を西上空から撮影

天王原 1 工区 PJ004 号住居炉

奥壁側の炉石は三角形の板状安山岩を使用していた。

上原遺跡上空から上ノ原遺跡を臨む

写真左側が上原遺跡。右側のゴルフ場内に上ノ原遺跡がある。東上空から撮影

天王原 1 工区 PH002 号住居

西から撮影

天王原 1 工区 DK001 号土坑

曽利Ⅴ式土器が横倒しになって出土した。

天王原 1 工区 PH003 号住居

中央を試掘溝で破壊してしまった。西から撮影

天王原 1 工区 PH001 号住居

同一地点で建替えられた住居跡。西から撮影

PJ038 号住居炉跡

炉石は被熱し、激しく破砕していた。

天王原 2 工区（以下同じ）PJ036 号住居

曽利Ⅴ式期。3 本主柱穴

PJ050 号住居

曽利Ⅳ式期。5 本主柱穴

PJ038 号住居

炉跡、埋甕、散在する礫が検出された。曽利Ⅴ式期

PJ052 号住居遺物出土状況

埋土下層から土器がまとまって出土した

PJ050 号住居遺物出土状況

石囲炉上で土器が出土した。

PJ057 号住居

5 本主柱穴、石囲炉と地床炉を検出。曽利Ⅴ式期

PJ052 号住居

4 本主柱穴。炉跡、埋甕 2 基を検出。曽利Ⅳ式期

PJ059 号住居

4 本主柱穴、埋甕。炉石は失われていた。曽利Ⅴ式期

PJ057 号住居遺物出土状況

石囲炉周辺の埋土下層で土器がまとまって出土した。

PJ063 号住居

同心円状に周溝を検出。埋甕 3 基。曽利Ⅴ式期

PJ058 号住居

5 本主柱穴。埋甕を検出。炉石は失われていた。曽利Ⅴ式期

PJ067 号住居

4 本主柱穴、埋甕 2 基。炉石は失われていた。曽利Ⅴ式期

PJ063 号住居埋甕

埋甕がある壁際には偏平礫が立っていた。

PJ067 号住居遺物出土状況

埋土下層で土器がまとまって出土した。

PJ064 号住居

PJ073 と重複。5 本主柱穴。炉石は 1 枚のみ残存。曽利Ⅳ式期

PJ073 号住居

PJ064 を切る曽利Ⅴ式期の住居。炉跡、埋甕。3 本主柱穴か？

PJ072 号住居

5 本主柱穴、埋甕 2 基、地床炉。曽利Ⅳ式期

PJ074 号住居

4 本主柱穴。炉の傍らに小石が並べられていた。曽利Ⅳ式かⅤ式期

PJ072 号住居炉

炉南東角に土器が埋設されていた。

PJ074 号住居炉
炉は奥壁に寄って設けられる。出入口側に小石が並べられていた。

PJ075 号住居炉
炉周囲に平石が敷かれていた。

PJ075 号住居
PJ076 と重複。3 本主柱穴。埋設 1 基。骨刺 V 式期。

PJ076 号住居
PJ075 と重複。3 本主柱穴。骨刺 V 式期

PJ077 号住居埋甕

やや突出した出入口部で 2 基の埋甕を検出。ともに曽利Ⅳ式土器

PJ077 号住居

PJ082 と重複。手前が PJ077、奥側が PJ082。ともに曽利Ⅳ式期で PJ082 が新しい。

PJ078 号住居

3 本主柱穴か。炉跡は焼土のみ。出入口部で縄がまとまって出土。曽利Ⅴ式期？

PJ077 号住居炉と地床炉

炉手前側の床面がややくぼみ、強く被熱焼土化していた。

PJ080 号住居

石列は後世の耕地境界石。曽利Ⅳ式期。

PJ079 号住居遺物出土状況

炉が検出されたが柱穴は不明。曽利Ⅴ式期

PJ080 号住居

4本主柱穴、石囲炉と地床炉、埋甕1基を検出

PJ079 号住居炉

耕作による撹乱か、炉石はやや浮き上がっていた。

PJ083 号住居

楕円形の落ち込みと炉跡を検出したが柱穴は不明。曽利Ⅳ式かⅤ式期

PJ081 号住居

極端に奥壁側に寄った石囲炉。曽利Ⅳ式期

PJ085 号住居

PH066 に切られる。石囲炉、埋甕 1 基を検出。3 本主柱穴か。曽利Ⅴ式期

PJ081 号住居炉

出入口側は三角に突出した形状の石囲炉

PJ086 号住居
5本主柱穴、石囲炉、曽利V式期

PJ087 号住居
5本主柱穴、炉跡、地床炉、埋甕、曽利IV式期

PJ090 号住居
4本主柱穴、炉跡、地床炉、埋甕、曽利IV式期

PJ090 号住居埋甕と立石
埋甕がある出入口部壁際の床面上に立った石が出土した。

PJ093 号住居

4 本主柱穴、炉跡、地床炉。曽利Ⅴ式期

PJ091 号住居

PH099 と重複。石囲炉と埋甕を検出したが柱穴不明。曽利Ⅳ式期

PJ094 号住居

4 本主柱穴、石囲炉。曽利Ⅴ式期

PJ092 号住居

4 本主柱穴、炉跡、埋甕 2 基。曽利Ⅳ式期

PJ095 号住居

PJ101 と重複。5 本主柱穴、石囲炉、地床炉。建替えあり。埋甕 3 基。管利V式期

PJ095 号住居埋甕

旧住居廃棄を挟んで新旧埋甕 3 基を検出した。

PJ096 号住居

4 本主柱穴、石囲炉、地床炉。埋甕、立石。管利V式期

PJ096 号住居炉と立石

炉奥にピットを伴う立石を検出した。立石は板状整理の安山岩

PJ101 号住居

PJ95 号住居と重複。石囲炉のみを検出。柱穴不明。曽利Ⅴ式期

PJ098 号住居

3 本主柱穴、石囲炉、埋甕。曽利Ⅴ式期

PJ138 号住居

まばらに敷石、礫を検出した。加曽利 B1 式期

PJ100 号住居

5 本主柱穴、炉跡、地床炉、埋甕。曽利Ⅳ式期

PJ145 号住居炉

表土剥作業で奥壁側炉石を破壊してしまったが、三角形に尖る炉石と思われる。

PJ138 号住居完掘状況

対ピットと 5 本主柱穴構造と思われる。

PJ147 号住居

写真下側がPJ148。5 本主柱穴？石囲炉、地床炉。曽利Ⅴ式期

PJ145 号住居

石囲炉、埋甕。奥壁側にピットを検出したが、柱穴配置は不明。曽利Ⅴ式期

PJ149 号住居

3 本主柱穴、炉跡、MD12 が埋没、SD24 が地床炉。曽利Ⅴ式期

PJ148 号住居

PJ147 と重複。柱穴不明。曽利Ⅴ式期

PJ150 号住居炉

石囲炉のみを検出。奥壁側に小配石を伴う。柱穴は不明。曽利Ⅴ式期

PJ148 号住居炉

炉石は被熱し破砕していた。

PJ152 号住居炉

奥壁側に三角形の炉石を使用している。

PJ151 号住居

5 本主柱穴、炉跡、地床炉、埋甕 2 基。曽利Ⅳ式期

PJ152 号住居

三角形の炉石を用いた石囲炉は遠景の烏帽子山の方向を向く。

PJ152 号住居

3 本主柱穴、石囲炉、埋甕。曽利Ⅴ式期

PJ155 号住居
3 本主柱穴、石囲炉、埋甕 2 基。曽利Ⅴ式期

PJ153 号住居
5 本主柱穴、炉跡、埋甕。曽利Ⅴ式期

PJ155 号住居埋甕
2 基の埋甕を検出した。

PJ154 号住居
3 本主柱穴、石囲炉。曽利Ⅴ式期

PJ158 号住居

5 本主柱穴、石囲炉、地床炉、埋甕。曽利Ⅳ式期

PJ156 号住居

柱穴は 3 基を検出。5 本主柱穴構造か。炉跡。曽利Ⅳ式期

PJ159 号住居

3 本主柱穴？、石囲炉、埋甕 2 基。新旧建替えあり。曽利Ⅴ式期

PJ157 号住居

5 本主柱穴、石囲炉、地床炉、埋甕。曽利Ⅴ式期

PJ162 号住居

まばらに敷石を検出した。炉は削平されている。堀之内１式期

PJ159 号住居

調査区境界にあたり、住居北側を追加検出した。

PJ162 号住居完掘状況

対ピット、７本主柱穴と思われる。

PJ160 号住居

柱穴不明。石囲炉、埋甕を検出。曽利Ｖ式期

PJ164 号住居完掘状況

対ピット、7本主柱穴か。堀之内1式期

PJ163 号住居

まばらな敷石、石囲炉を検出。堀之内1式期

PJ165 号住居

まばらな敷石を検出した。写真下側は削平されている。堀之内1式期

PJ163 号住居完掘状況

精査したが柱穴は不明

PJ165 号住居完掘状況

石囲炉を中心に多数の柱穴が環状に並んで検出された。写真下側が対ピットか。

PJ165 号住居炉

石囲炉を検出した。

PJ166 号住居完掘状況

SD35 が炉跡。対ピット、5 本主柱穴。堀之内 1 式期

PJ165 号住居敷石

平石がまとまって残り、敷石と同じ高さで堀之内 1 式土器破片が出土した。

PJ169 号住居炉

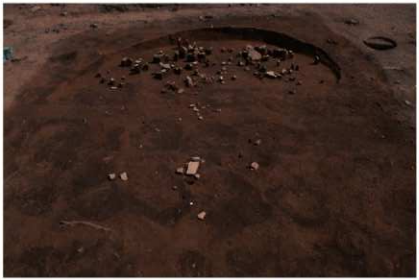
入れ子状に重ねられた炉体土器

PJ168 号住居

対ピット、5 本主柱穴か。炉跡は削平されたか。堀之内 1 式期

PJ169 号住居完掘状況

2 ヶ所の炉跡を検出。7 本主柱穴。対ピットは検出されなかった。



PJ169 号住居

まばらに礫を検出した。写真下側は削平されている。堀之内 2 式期

PJ172 号住居完掘状況

円形の落ち込みと石囲炉を検出したが、柱穴は不明。曽利Ⅴ式期

PJ170 号住居完掘状況

対ピット、5 本主柱穴か。炉は削平されたか。堀之内 1 式期

PJ173 号住居

3 本主柱穴、炉跡。曽利Ⅴ式期

PJ171 号住居

部分的に敷石を検出。環状に並ぶピットを検出。炉は削平されたか。堀之内 1 式期

PJ174 号住居完掘状況

奥壁に沿って並ぶピットを検出したが、柱穴数は不明

PJ174 号住居

部分的な敷石を検出した。堀之内 1 式期

PJ175 号住居完掘状況

中央に敷石と炉体土器風の土器を検出したが焼土なし。堀之内 2 式期

PJ174 号住居炉跡

炉体土器を伴う炉跡。炉石は失われていた。

PJ178 号住居

まばらな礫と土器が出土し焼土を検出。柱穴不明。曽利Ⅴ式期

PJ176 号住居

中央に炉体土器が残る。柱穴は不明。堀之内１式期

PJ179 号住居

対ピット、９本主柱穴。炉跡。建替えあり。堀之内１式期

PJ177 号住居完掘状況

落ち込みを検出したが住居か不明。堀之内１式期

PJ203 号住居
敷石と炉跡を検出。堀之内Ⅰ式期

PJ203 号住居完掘状況
対ピット、7 本主柱穴。炉跡は 2 ヶ所。建替えあり。

PJ204 号住居
壁沿いの敷石。炉跡を検出した。堀之内Ⅰ式期

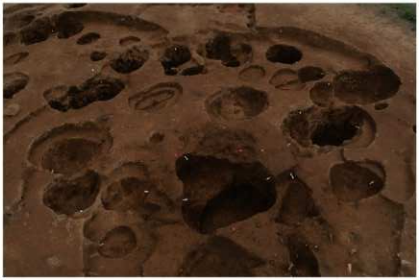
PJ204 号住居
対ピットの両脇に礫がまとまっていた。

PJ206 号住居

壁沿いの敷石、炉跡を検出した。堀之内 1 式期

PJ204 号住居炉

炉体土器と焼土を 2 ヶ所で検出した。このほかもう 1 ヶ所の焼土がある。



PJ206 号住居完掘状況

対ピット、5 本、7 本、8 本主柱穴と建て替えか。

PJ204 号住居完掘状況

対ピット、9 本ないし 11 本主柱穴と思われる。3 回以上の建替えあり。

PJ224 号住居

北から撮影。壁沿いに敷石を検出。加曽利 E4 式期

PJ212 号住居

PH205、PJ203、PJ206 に切られる中期中葉の住居と思われる遺構。藤内式期

PJ224 号住居完掘状況

壁柱穴が検出されたが柱穴配置は不明瞭

PJ221 号住居

敷石とまとまった土器を検出したが炉跡、柱穴は不明。曽利Ⅴ式期

PJ226 号住居完掘状況

5 本主柱穴。西から撮影

PJ226 号住居

北から撮影。石囲炉を検出。曽利Ⅴ式期

PJ227 号住居

奥壁側から撮影。石囲炉を検出。堀之内 1 式期

PJ226 号住居炉と立石

炉奥に立石を検出した。

PJ228 号住居炉

石囲炉を検出した。

PJ227 号住居完掘状況

西から撮影。対ピット、5 本主柱穴と思われる。深い竪穴は PJ229

PJ229 号住居完掘状況

PJ227 に切られる。3 本主柱穴。炉跡と竪穴を検出。曽利Ⅴ式期

PJ228 号住居完掘状況

西から撮影。柱穴配置が不明瞭。堀之内 1 式期

PJ231 号住居

石囲炉と土器のまとまりを検出したが、柱穴は不明。称名寺Ⅰ式期

PJ230 号住居

北から撮影。石囲炉と竪穴を検出。堀之内Ⅰ式期

PJ231 号住居炉

横長な形状の石囲炉。

PJ230 号住居

西から撮影。対ピット、5本主柱穴か。柱穴位置と竪穴範囲が合致しない。

PJ233 号住居

木株手前が対ピット。裏側に炉。壁柱穴。称名寺Ⅰ式期

PJ232 号住居

石囲炉、竪穴を検出。5 本主柱穴。曽利Ⅳ式期

PJ233 号住居炉

PJ231 と同様に横長の石囲炉。奥壁側から撮影

PJ232 号住居完掘状況

細めのピットが PJ232 の柱穴

PJ235 号住居

住居中央に 3 本主柱穴と壁柱穴 7 本の柱穴配置か。

PJ234 号住居

PJ224 と重複。5 本主柱穴か。曽利Ⅱ式期

PJ235 号住居炉

木株下で検出した石囲炉

PJ235 号住居

まばらな敷石を検出。木株下に石囲炉がある。称名寺式期

PJ236 号住居完掘
断片的な敷石、炉跡と柱穴を検出。柱穴不明。堀之内 1 式期

PJ237 号住居
対ピット、5本主柱穴と壁柱穴、炉跡を検出。称名寺 I 式期

PJ238 号住居
石囲炉を検出した。曽利IV式期

PJ238 号住居炉
炉底面に土器破片

PJ240 号住居炉

炉体土器を伴う。

PJ238 号住居完掘状況

床面を掘り下げてようやく 5 本の柱穴を確認した。

PJ243 号住居

奥壁沿いに敷石が残る。堀之内式期

PJ240 号住居

4 本主柱穴、石囲炉、埋甕。曽利Ⅱ式期

PJ244 号住居炉

写真上側が PJ244 炉、下側は PJ267 炉と判断した。

PJ243 号住居完掘状況

壁沿いで環状に並んだ小ピットを検出した。

PJ244 号住居完掘状況

対ピット、6 本主柱穴

PJ244 号住居

奥壁沿いに敷石。PJ267、PJ274 を切る。堀之内 1 式期

PJ247・PJ248 号住居

壁沿いにまばらな敷石を検出。敷石は PJ248 分。ともに堀之内 1 式期

PJ245 号住居

奥壁沿いでまばらな敷石を検出した。堀之内 1 式期

PJ247 号住居炉

焼土と炉体土器を検出した。左隣に PJ248 炉跡がみえる。

PJ245 号住居完掘状況

木株裏側に対ピット、炉跡。壁沿いに柱穴が並ぶ。

PJ248 号住居炉

炉体土器を伴う石囲炉。写真右上に PJ247 炉跡

PJ247 号住居完掘状況

PJ248、PJ249、PJ257 と重複。対ピット、5 本主柱穴にピンポールを立てた。

PJ249 号住居完掘状況

対ピット、5 本主柱穴にピンポールを立てた。

PJ248 号住居完掘状況

PJ247 と重複。対ピットと 5 本主柱穴にピンポールを立てた。

PJ251 号住居完掘状況

写真下側が対ピット。7 本主柱穴。中央に炉跡

PJ249 号住居炉

入れ子状に土器を重ねた炉体と焼土を検出した。

PJ253 号住居

壁沿いで敷石を検出した。堀之内 1 式期

PJ251 号住居

壁沿いに敷石を検出した。堀之内 1 式期

PJ253 号住居完掘状況
対ピット、6本主柱穴か、中央に炉跡

PJ257 号住居
対ピット、5本主柱穴にピンポールを立てた、堀之内Ⅰ式期

PJ258 号住居
まばらな敷石を検出した、堀之内Ⅰ式期

PJ258 号住居炉
炉体土器を伴う石囲炉

PJ262 号住居

PJ270 と重複。石囲炉を検出。柱穴不明。加曽利 E4 式期

PJ258 号住居完掘状況

対ピット、5 本、7 本主柱穴と建て替えか

PJ264 号住居

まばらな敷石、炉跡を検出。堀之内 1 式期

PJ259 号住居完掘状況

PJ253 と重複。7 本主柱穴か。細分時期不明。後期

PJ265 号住居炉

炉体土器を伴う石囲炉

PJ264 号住居完掘状況

PJ265 と重複。対ピット 6 本主柱穴。建替えあり

PJ265 号住居完掘状況

対ピット、5 本主柱穴。壁沿いの床が被熱、焼土化していた。

PJ265 号住居

PJ264 と重複。断片的な敷石、石囲炉を検出した。堀之内 1 式期

PJ266 号住居完掘状況

柄部との連結部に埋甕。7 本壁柱穴。柄部側にピット 2 基

PJ266 号住居

円形主体部と大きな敷石を伴う柄部。曽利Ⅴ式期

PJ268 号住居

奥壁側に断片的な敷石が残り、炉跡を検出。堀之内 1 式期

PJ266 号住居炉

炉石は被熱し破砕。1 枚は失われていた。

PJ270 号住居

奥壁沿いに敷石。炉跡を検出。左下は HS003 号配石。堀之内式期

PJ268 号住居完掘状況

PJ265、PJ275 と重複。布掘り状に壁柱穴が連なる。

PJ270 号住居完掘状況

壁柱穴 8 本を検出

PJ269 号住居完掘状況

PJ268、PJ275 と重複。東壁沿いにピットが並んでいる。堀之内式期と思われる。

PJ271 号住居完掘状況

対ピット、5 本主柱穴か。竪穴と柱穴の確認は困難であった。

PJ271 号住居

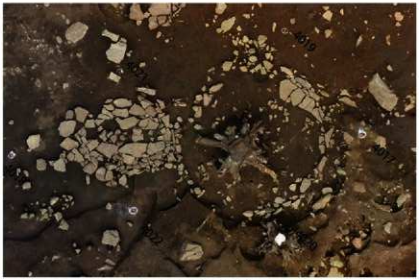
奥壁側に乱雑な礫の集中。称名寺Ⅱ式期

PJ272 号住居完掘状況

壁柱穴 8 本を検出。炉は検出されなかった。称名寺Ⅰ式期

PJ271 号住居炉

炉体土器を伴う石囲炉。炉石は被熱、破砕



PJ274 号住居

円形主体部の壁沿いに敷石が残る。

PJ273 号住居完掘状況

奥壁沿いに敷石が残る。7 本主柱穴。堀之内 1 式期

PJ274 号住居完掘状況

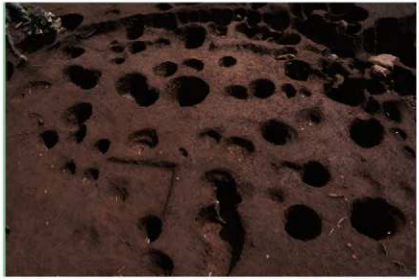
木株下が炉跡と思われるが炉石、焼土は検出されなかった。6 本主柱穴か。

PJ274 号住居

写真下側の集石が柄部と思われる。堀之内 1 式期

PJ276 号住居炉

炉体土器を伴う石囲炉



PJ275 号住居

PJ268、PJ269 と重複。対ピット、5 本主柱穴か。堀之内 1 式期

PJ276 号住居完掘状況

対ピット、6 本主柱穴。右端は昭和 30 年代の簡易水道管

PJ276 号住居

まばらな礫を検出。堀之内 1 式期

PJ277 号住居完掘状況

2 組の対ピットの間に大きな平石。5 本の主柱穴にピンポールを立てた。

PJ277 号住居

一帯で最も新しい住居。堀之内 2 式期

PJ280 号住居

まばらな敷石、礫を検出。加曽利 B1 式期

PJ277 号住居炉

炉体土器を伴う石囲炉

PJ281 号住居

まばらな敷石、炉跡を検出。堀之内 2 式期

PJ280 号住居炉

炉体土器を伴う石囲炉

PJ281 号住居炉

炉体土器と焼土を検出

PJ280 号住居完掘状況

対ピット、7 本主柱穴か

PJ282 号住居炉

炉石の一部は失われていた。

PJ281 号住居完掘状況

対ピット、7 本主柱穴

PJ282 号住居完掘状況

3 本主柱穴

PJ282 号住居

石囲炉、埋甕、礫と土器のまとまりを検出。曽利Ⅴ式期

PJ283 号住居完掘状況

5本主柱穴。対ピットは検出されなかった。

PJ283 号住居

敷石、炉跡を検出。堀之内1式期

PJ284 号住居

竪穴と礫、土器のまとまりを検出。加曽利E4式期

PJ283 号住居炉

炉体土器と焼土を検出した

PJ286 号住居完掘状況

PJ281 に切られる。7 本主柱穴が環状に並ぶ。細分時期不明。称名寺式期か

PJ284 号住居完掘状況

炉掘り方と焼土を検出。8 本の壁柱穴

PJ288 号住居

まばらな敷石、石囲炉を検出。堀之内 2 式期

PJ285 号住居炉

PJ281 などと重複。対ピット、7 本主柱穴か。堀之内 2 式期

PJ289 号住居

PJ291 を切る。壁沿いの礫、焼土を検出。加曽利 B1 式期

PJ288 号住居炉

炉体土器を伴う石囲炉

PJ289 号住居完掘状況

対ピット、6 本主柱穴

PJ288 号住居完掘状況

対ピット、9 本主柱穴

PJ290 号住居
一帯で最も新しい住居。壁溝いの跡、焼土を検出。称名寺Ⅱ式期

PJ290 号住居完掘状況
壁溝いに 8 本の主柱穴が環状に並ぶ。

PJ291 号住居
石囲炉と周辺の敷石を検出。加曽利 B1 式期

PJ291 号住居炉
炉体土器を伴う石囲炉

PJ293 号住居完掘状況

対ピット、5 本主柱穴。堀之内 1 式期

PJ291 号住居完掘状況

4 本の主柱穴を検出したのみで柱穴配置は不明

PJ294 号住居完掘状況

対ピット、5 本主柱穴。焼土を検出。堀之内 1 式期

PJ292 号住居完掘状況

5 本の主柱穴を検出。堀之内 1 式期

PJ295 号住居炉
PJ280 と重複。炉跡のみ検出。縄之内式期

PJ296 号住居
3 本主柱穴。曽利V式期

PJ297 号住居
5 本主柱穴。PJ296 に切られる。曽利V式期

PJ297 号住居炉
被熱した扁平礫が敷かれていた。

PJ303 号住居

PJ277 と重複。対ピット、5 本主柱穴。堀之内 1 式期

PJ300 号住居炉

PJ277 と重複。対ピット、5 本主柱穴。炉体土器を伴う炉跡。堀之内 1 式期

PJ304 号住居炉

PJ290 と重複。対ピット、7 本主柱穴。堀之内 2 式期

PJ302 号住居炉

PJ277 と重複。対ピット、8 本主柱穴。堀之内 2 式期

PJ305 号住居完掘状況
対ピット、6 本主柱穴、竈之内 1 式期か

PJ305 号住居炉
炉床土器を伴う石囲炉

PJ306 号住居完掘状況
6 本主柱穴、竈之内 1 式期

PJ306 号住居炉
炉床土器と焼土を検出した。

PJ310 号住居炉

奥壁側に小配石を伴う。

PJ309 号住居完掘状況

対ピット、5 本主柱穴。細分時期不明。後期前半～中葉か。

PJ312 号住居完掘状況

対ピット、5 本主柱穴。細分時期不明。堀之内式期

PJ310 号住居完掘状況

石囲炉、7 本主柱穴、埋甕。曽利Ⅴ式期

PJ315 号住居完掘状況
対ピット、5 本主柱穴、竈之内 2 式期か

PJ316・PJ317 号住居完掘状況
PJ316, PJ317 は同一遺構か、対ピット、7 本主柱穴、竈之内 2 式期

PJ318 号住居完掘状況
対ピット、5 本主柱穴、細分時期不明、後期前半～中葉か。

PJ319 号住居完掘状況
5 本から 7 本主柱穴へ建て替え、埋甕 2 基、曽利IV式期

PJ320 号住居遺物出土状況

奥壁沿いに伏甕が出土

PJ320 号住居完掘状況

5 本主柱穴、石囲炉、埋甕。曽利Ⅱ式期

PJ321 号住居炉

柱穴不明。石囲炉のみを検出。堀之内 1 式期か

PJ320 号住居炉

炉横の床面で小形深鉢形土器と釣手土器が出土。

PJ325 号住居完掘状況

遺物がまとまって出土したが、柱穴不明瞭。称名寺Ⅰb式期か。

PJ324 号住居完掘状況

6本主柱穴、堀之内1式期

PJ327 号住居完掘状況

遺物がまとまることから住居と判断した。柱穴不明。堀之内1式期

PJ324 号住居炉

炉体土器と焼土を検出した。

PJ337 号住居

農道工事のための狭い調査区内で敷石を検出。

PJ331 号住居

敷石を検出。左側は調査区外。堀之内 1 式期

PJ337 号住居炉

狭い調査区内で検出した炉。敷石と一体の遺構かも不明瞭。

PJ331 号住居完掘状況

1/2 以上が調査区外のため柱穴配置不明。

PJ342 号住居炉

炉体土器と焼土を検出

PJ341 号住居完掘状況

調査区内で 6 本の柱穴を検出。堀之内 1 式期

PJ343 号住居

壁沿いにめぐる敷石を検出。堀之内 1 式期

PJ342 号住居完掘状況

対ピット、7 本主柱穴。建て替えあり。堀之内 1 式期

PJ346 号住居

調査区端で敷石を検出。堀之内 2 式期

PJ343 号住居炉

石囲炉と焼土を検出

PJ346 号住居完掘状況

6 本の柱穴を検出。全体配置は不明

PJ343 号住居完掘状況

対ピット、4 本主柱穴と 3 本の補助柱穴構成と思われる。

PJ349 号住居

まばらな敷石を検出した。堀之内 2 式期

PJ348 号住居

竪穴と大きな土器破片を検出。曽利Ⅴ式期

PJ349 号住居完掘状況

対ピット、10 本の柱穴が壁沿いに布掘り状に連なる。

PJ348 号住居完掘状況

写真にあるピットは重複する堀之内 1 式期の PJ348B 号住居の柱穴。

PJ350 号住居完掘状況

5 本主柱穴と思われる。

PJ350 号住居

まばらな礫、石囲炉を検出した。堀之内 1 式期

PJ351 完掘状況

5 本主柱穴。2 個体の深鉢形土器が入れ子状になった埋甕。曽利Ⅴ式期

PJ350 号住居炉

石囲炉と焼土を検出

PJ352 号住居完掘状況
対ピット、6 本主柱穴。縄分神期不明、堀之内式期

PJ353 号住居完掘状況
柱穴と思われるピット 2 基を検出。大半が調査区外。加曽利 E4 式期

PJ354 号住居完掘状況
5 本主柱穴か。堀之内 1 式期

PJ355 号住居完掘状況
5 本の柱穴を検出。堀之内 1 式期

H0036 号掘立柱建物

1 間× 2 間。堀之内 I 式期

H0017 号掘立柱建物

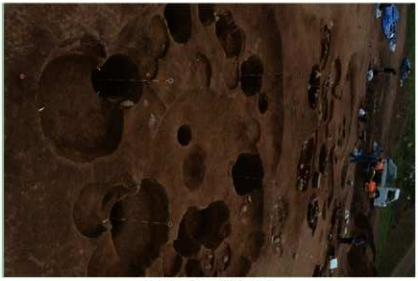
1 間× 1 間に棟持柱がつく亀甲形。曽利 V 式期

H0037 号掘立柱建物

1 間× 2 間。称名寺 I 式期

H0020 号掘立柱建物

1 間× 2 間に棟持柱がつく亀甲形。3 間に建て替え。曽利 V 式期



H0068 号掘立柱建物

1 間 × 2 間。曽利Ⅴ式期

H0066 号掘立柱建物

1 間 × 2 間。時期不明。出土した打製石斧は中期的な形状。

H0076 号掘立柱建物

2 間 × 2 間。堀之内式期。

H0067 号掘立柱建物

1 間 × 2 間。細分時期不明。縄文時代。

HS001 号配石（住居）炉

被熱し破砕した石囲炉。これにより住居跡と判断した。

H0086 号掘立柱建物

2 間 × 3 間に棟持柱がつく亀甲形。曽利Ⅴ式期

HS003 号配石

敷石住居の柄部のような配石だが、組み合う主体部が検出されなかった。後期か。

HS001 号配石（住居）

配石と命名したが、石囲炉が検出されたことから住居である。曽利Ⅳ式期

DK435 号土坑

曽利Ⅴ式の脚付深鉢形土器が横倒しで出土

HS002 号配石と MD015 号埋設土器

柱穴が検出されなかったが両者を組み合わせて住居跡と判断した。曽利Ⅴ式期

DK445 号土坑

曽利Ⅳ式土器破片がまとまって出土

MD002 ～ MD004 号埋設土器

周辺で合計 7 基の埋設土器がまとまって検出された。曽利Ⅲ～Ⅴ式期

DK623 号土坑

埋土中層から 5 個体の土器が出土。加曽利 E4 式期

DK506 号土坑

大きな土器破片の下から注口土器。埋土から炭化マメを検出。堀之内 1 式期

DK1052 号土坑

加曽利 E3 式土器が横倒しになって出土

DK538 号土坑

曽利Ⅴ式土器が横倒しになって出土

DK1065 号土坑

隅丸方形の土坑から早期後半の鳥台式土器が出土

DK1207 号土坑

尾根端の谷へと下りはじめる地点で検出した土坑。加曽利 E4 式土器が出土

DK1279 号土坑

PJ300 と重複する土坑。堀之内 2 式土器が逆位で出土した。

DK1313 号土坑

石棺状の長方形土坑。石神遺跡の土器 3 個体が出土。堀之内 2 式期

DK1352 号土坑

大きな円形土坑の中層から平石と多数の礫を検出。堀之内 2 式期

DK1321 号土坑

DK1313 号土坑の近くにある円形土坑。上層に石神類型の小形土器

DK1352 号土坑

土坑底面近くで深鉢形土器と土器を囲むように並ぶ礫を検出

DK1323 号土坑

土坑の上面に SD70 焼土と HS9 号配石を検出。堀之内 1 式期

DK1352 号土坑
深鉢形土器は土坑底面の中央から正位で出土した

PK015 号住居
地床炉を検出，古墳時代前期

PK126 号住居
地床炉を検出，古墳時代前期

PK127 号住居
地床炉を検出，古墳時代前期

PK260 号住居

地床炉、周溝を検出。古墳時代前期

PK128 号住居

地床炉と柱穴を検出。古墳時代前期

PK261 号住居

地床炉とピットを検出。PK260 に隣接。古墳時代前期

PK140 号住居

地床炉を検出。古墳時代前期

PH001 号住居

西から撮影。南東角にカマド。南西角にも焼土混じりの掘り込み。甲斐型XⅢ期か

PH002 号住居

南から撮影。南東角にカマド。甲斐型XⅢ期以降

PK329 号住居

地床炉を検出。古墳時代前期

PK330 号住居

地床炉、貯蔵穴 2 基を検出。焼失住居。古墳時代前期

PH005 号住居

西から撮影。東壁にカマド。多数の礫と炭化材、焼土を検出。甲斐型Ⅹ期

PH003 号住居

西から撮影。東壁にカマド。長めの煙道。甲斐型Ⅹ期

PH006 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅸ～Ⅹ期

PH004 号住居

南から撮影。東壁にカマド。焼失住居。甲斐型Ⅹ期

PH008 号住居カマド

袖石と支石が原位置を留めていた。

PH007 号住居

西から撮影。南東角にカマド。甲斐型Ⅹ Ⅲ期

PH009 号住居

西から撮影。南東角にカマド跡。ピットは H0002。甲斐型Ⅹ期

PH008 号住居

南から撮影。東壁にカマド。柱穴 4 基。甲斐型Ⅹ期

PH012 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅸ～Ⅹ期

PH010・013 号住居

南から撮影。PH010 は南東角にカマド。小形の PH013 が重複。甲斐型Ⅹ期・ⅩⅢ期

PH014 号住居

西から撮影。東壁にカマド。細分時期不明。平安時代

PH011 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ期

PH016 号住居
西から撮影。東壁にカマド。細分時期不明。平安時代

PH017 号住居
南から撮影。東壁にカマド。炭化モモ核が出土。細分時期不明。平安時代

PH018 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅹ III期

PH019 号住居
南から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅹ～Ⅹ I期

PH022 号住居

西から撮影。南東角に新カマド。東壁に旧カマド。4 本柱穴。甲類型ⅩⅢ期以降

PH020 号住居

南から撮影。撹乱が著しい。東壁にカマド。甲類型ⅩⅢ期

PH023 号住居

西から撮影。東壁にカマド。鉄滓が出土。甲類型ⅩⅢ期

PH021 号住居

南から撮影。南東角にカマド。鏃矢が出土。細分時期不明。平安時代

PH026 号住居

西から撮影。東壁にカマド。4 本柱穴。「隆平永宝」出土。甲斐型Ⅷ期

PH024 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ期

PH026 号住居カマド

袖石と支石が原位置を留めていた。

PH025 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ期

PH029 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ～Ⅺ期

PH027 号住居

西から撮影。東壁にカマド。4 本柱穴。甲斐型Ⅹ～Ⅺ期

PH029 号住居

袖石と支石が原位置をとどめていた。

PH028 号住居

西から撮影。南東角にカマド。4 本柱穴。甲斐型ⅩⅢ期以降

PH030 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅹ期

PH032 号住居
西から撮影。大小住居が重複する。甲類型Ⅹ期

PH033 号住居
西から撮影。北壁にカマド。甲類型Ⅹ期

PH034 号住居
西から撮影。北壁にカマド。焼失住居。甲類型Ⅹ期

PH035 号住居カマド

袖石、天井石が残る。

PH034 号住居カマド

袖石の一部と支石が原位置を留める。

PH037 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅺ～Ⅻ期

PH035 号住居

西から撮影。南東角にカマド。甲斐型Ⅻ期

PH039 号住居
西から撮影。南東角にカマド。甲類型Ⅱ期

PH040 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅱ期か

PH040 号住居カマド
袖石の一部と支石が原位置を留めていた。

PH041 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅱ～Ⅲ期

PH043 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ～Ⅺ期

PH042 号住居

西から撮影。南東角にカマド。甲斐型Ⅷ期と甲斐型Ⅺ期の重複

PH044 号住居

北西から撮影。大小 2 軒の重複。甲斐型Ⅺ期

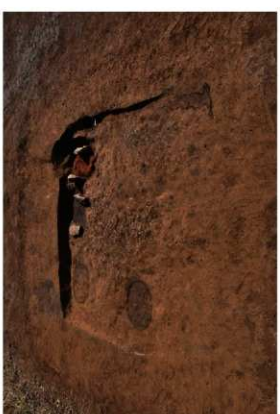
PH042 号住居カマド

天井石、袖石が原位置を留めていた。

PH045 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅷ期

PH045 号住居カマド
袖石と支石が原位置を留める。

PH046 号住居
西から撮影。東壁にカマド。北西角は撹乱。甲類型Ⅷ～Ⅸ Ⅲ期



PH047 号住居
西から撮影。東壁南寄りにカマド。甲類型Ⅸ Ⅲ期

PH051 号住居

保存状態が悪くカマド位置不明。甲斐型Ⅹ期

PH048 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ期か

PH053 号住居

新旧 2 軒が入れ子状に重複。甲斐型Ⅻ期

PH049 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ期以前か

PH054 号住居
西から撮影。東壁にカマド、南北壁に柱穴。甲斐型Ⅷ期

PH055 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅷ～Ⅸ期

PH056 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅸ期

PH060 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅸ末期

PH062 号住居

西から撮影。東壁にカマド。細分時期不明。平安時代

PH061 号住居

西から撮影。東壁にカマド。馬具出土。甲斐型XⅢ期

PH065 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅸ～Ⅹ期

PH061 号住居馬具の出土状況

北東角に近い東壁沿いから鉄製馬具（銜）が出土した。

PH066 号住居
西から撮影、東壁にカマド、甲類型Ⅸ～Ⅹ期

PH066 号住居カマド
袖石と支石が原位置を留めていた。

PH068 号住居
西から撮影、東壁にカマド、甲類型Ⅸ～Ⅹ期

PH068 号住居カマド
袖石と支石が原位置を留めていた。

PH088・089 号住居

円形、小形の竪穴。須恵器破片が出土。居住施設なのか。平安時代

PH069 号住居

西から撮影。西壁にカマドを設ける。甲斐型Ⅸ～Ⅹ期

PH099 号住居カマド

縄文時代のPJ091 号住居を切り、カマド跡のみを検出した。甲斐型Ⅹ期か

PH070 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅷ期

PH102 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型X期

PH103 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型X期

PH104 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型X期

PH105 号住居
西から撮影。東壁にカマド跡。甲類型X期か。

PH108 号住居

西から撮影。東壁に新旧カマド。甲斐型Ⅷ期

PH106 号住居

西から撮影。南東角にカマド。甲斐型Ⅹ Ⅲ期

PH109 号住居

西から撮影。東壁にカマド。「延喜通宝」？出土。甲斐型Ⅷ期

PH107 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ期

PH112 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅷ期

PH110 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ期

PH113 号住居

西から撮影。東壁にカマド。埋土下層に礫多数。甲斐型Ⅷ期

PH111 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ期か

PH116 号住居

西から撮影。南東角にカマド。甲類型ⅩⅢ期

PH114 号住居

西から撮影。東壁南寄りにカマド。甲類型ⅩⅢ期

PH117 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅻ～ⅩⅢ期

PH115 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅻ期。写真下は PH116

PH120 号住居

西から撮影。東壁にカマド。柱穴 3 基。甲類型Ⅹ期

PH118・119・161 号住居

西から撮影。新旧 3 軒が重複。高い床面が PH118。甲類型Ⅹ期・Ⅺ期

PH121 号住居

西から撮影。東壁南寄りにカマド。甲類型Ⅺ期

PH119 号住居

一段低い床が PH119 で最新。東壁にカマド。最小プランが PH161。甲類型Ⅺ期

PH124 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型XII期

PH122 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型XIII期

PH125 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型XIII期

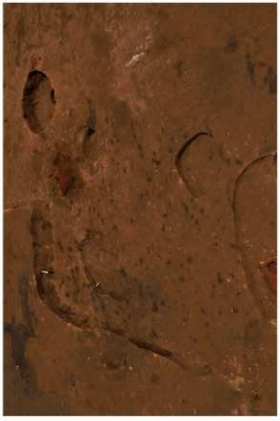
PH123 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型XI期

PH129 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ Ⅲ期

PH130 号住居
西から撮影。東壁中央と南東角に新旧カマド。甲斐型Ⅹ Ⅲ期

PH131 号住居
西から撮影。東壁にカマド。掘方時期不明。平安時代



PH132 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ Ⅲ期

PH135 号住居

西から撮影。南東角にカマド。細分時期不明。平安時代

PH133 号住居

西から撮影。東壁にカマド。「大伴」墨書出土。甲斐型Ⅹ期

PH136 号住居

西から撮影。東壁にカマド。細分時期不明。平安時代

PH134 号住居

西から撮影。東壁にカマド。柱穴４基。甲斐型Ⅹ期

PH141 号住居

保存状態が悪い。柱穴６基は掘立柱建物か。甲類型ⅩⅢ期以降

PH137 号住居

西から撮影。南東角にカマド。甲類型ⅩⅢ期か

PH142 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅻ期か

PH139 号住居

西から撮影。南東角にカマド。甲類型ⅩⅢ期か

PH146 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ期

PH143 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅹ～Ⅺ期

PH161 号住居カマド

PH119 号住居の床下で検出された住居。甲斐型Ⅺ期

PH144 号住居

西から撮影。東壁にカマド。羽口、鉄滓、鍛造剥片出土。甲斐型Ⅺ期

PH182 号住居

南から撮影。東壁南寄りにカマド。銅製鈴帯出土。甲斐型Ⅷ期

PH181 号住居

西から撮影。焼失住居。密に並ぶ垂木？と焼土を検出した。

PH183 号住居

西から撮影。東壁にカマド。柱穴４基。別遺構が重複。平安時代

PH181 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅸ～Ⅹ期

PH186 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅷ期

PH184 号住居

柱穴 4 基。小形の PH198 に切られる。カマドは PH198 分。甲斐型Ⅸ期かⅩ期

PH187・188 号住居

西から撮影。東壁にカマド。2 軒が重複。甲斐型Ⅺ期

PH185 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅸ期かⅩ期

PH191 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型XI期

PH189 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型X期かXI期

PH192 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型XI期かXIII期

PH190 号住居

西から撮影。東壁にカマド。建替えあり。甲類型XI期・XII期

PH195 号住居

西から撮影。東壁にカマド。柱穴４基。甲類型Ⅹ期

PH193 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅸ期かⅩ期

PH196 号住居

南から撮影。北壁にカマド。PH195 と重複。甲類型Ⅶ期

PH194 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅺ期

PH198 号住居

西から撮影。PH194 を切る小形プランが PH198。東壁にカマド。甲斐型双期

PH199 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型双期

PH200 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型双期

PH201・210 号住居

カマドは PH210 分で甲斐型双期。先行する PH201 は甲斐型区期～双期

PH205 号住居

西から撮影。東壁南寄りにカマド。甲斐型Ⅹ Ⅲ期

PH202 号住居

西から撮影。東壁にカマド。南壁沿いに踏み台のような礫。甲斐型Ⅹ Ⅲ期

PH207 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅺ期

PH202 号住居

南壁沿いの扁平礫は上面が磨耗し、出入口の踏み石と思われる。

PH208 号住居
南から撮影，北壁にカマド，甲斐型区期～2期

PH209 号住居
カマド位置不明，甲斐型2期

PH210 号住居
西から撮影，東壁にカマド，甲斐型2期

PH211 号住居
西から撮影，カマドを覆うようにSY005 号集石がある，甲斐型2期

PH216 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅷ期

PH211 号住居カマド

東壁南寄り、SY005 号集石の下で検出した

PH217 号住居

南から撮影。北壁にカマド。甲斐型Ⅷ期

PH215 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型Ⅸ期かⅩ期

PH220 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅹ期

PH218 号住居

南から撮影。西壁にカマドか。甲類型Ⅸ期かⅩ期

PH222 号住居

西から撮影。東壁にカマド。床面に焼土３ヶ所。鍛冶遺構か。甲類型Ⅺ期

PH219 号住居

西から撮影。焼失住居。東壁にカマド。細分時期不明。平安時代

PH239 号住居

西から撮影。東壁にカマド。ピット３基。甲斐型ⅩⅢ期

PH223・225 号住居

西から撮影。PH223 は北壁カマド、PH225 は東壁カマドを設ける。甲斐型Ⅹ期かⅪ期

PH241 号住居

西から撮影。南東角にカマド。柱穴４基。甲斐型ⅩⅢ期以降

PH223・225 号住居

北西から撮影。小形の PH225 に PH223 が切られる。

PH279 号住居

垂木は密に配置されている。

PH242 号住居

西から撮影。南東角にカマド。柱穴４基。甲類型ⅩⅢ期か

PH279 号住居

南東角にカマド。柱穴４基。甲類型ⅩⅢ期以降

PH279 号住居

西から撮影。焼失住居。放射状に垂木、焼土が出土した。

PH326 号住居

西から撮影。南東角にカマド。柱穴４基。甲斐型ＸⅢ期か

PH298 号住居

西から撮影。カマドは調査区外。甲斐型ＸⅢ期以降か

PH328 号住居

西から撮影。南東角にカマド。南壁沿いに柱穴２基。甲斐型ＸⅢ期以降

PH299 号住居

西から撮影。南東角にカマド。北壁に撹乱。甲斐型ＸⅢ期以降

PH332 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅷ期～Ⅸ期

PH333 号住居
西から撮影。東壁にカマド。甲類型Ⅸ期か

PH334 号住居
南から撮影。北壁にカマド。甲類型Ⅷ期～Ⅸ期

PH335 号住居
西から撮影。東壁にカマド。PH336 と重複。甲類型Ⅸ期

PH339 号住居

西から撮影。PH338 に切られる。東壁にカマド。甲斐型Ⅷ期

PH338 号住居・SY007 号集石

西から撮影。北西角に SY007 号集石。甲斐型Ⅷ期～ⅩⅢ期

PH340 号住居

西から撮影。南東角にカマド。甲斐型ⅩⅢ期か

PH338 号住居

西から撮影。東壁にカマド。

SY001 号集石

焼けた礫で構成される集石。細分時期不明。平安時代

PH345 号住居

西から撮影。写真左側は調査区外。甲斐型XI期かXII期

SY005 号集石

PH211 カマドを覆う集石。甲斐型XII期

PH347 号住居

西から撮影。東壁にカマド。甲斐型XII期

SY007 号集石

集石を外した状況。焼土と炭化材が検出された。

SY005 号集石

集石を外した状況。焼土と炭化材が検出された。

SY006 号集石

F-22-1-2 グリッド付近は礫を廃棄し、盛り土造成したような状況であった。

SY007 号集石

PH338 埋土中で検出した集石。焼けた礫で構成される。甲斐型Ⅷ期

調査風景

PJ263 付近の調査状況

鰻沢川の支流

遺跡南端の鰻沢川支流。縄文時代には支流が幾筋も集落内を流れていたと思われる。

埋め戻し作業

現状保存区域は遺構確認の後に砂を敷きならして埋め戻した。

調査前の遺跡の状況

牧草地、畑地、荒廃した桑園、山林が混在していた。

報告書抄録

ふりがな	かみはらいせき
書名	上原遺跡
副題	県営農地環境整備事業天王原地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	北杜市埋蔵文化財調査報告第46集
著者	佐野隆
発行機関	北杜市教育委員会
編集機関	北杜市教育委員会（学術課）
所在地／電話	山梨県北杜市明野町上手8310番地　0551-42-1375
印刷所	有限会社小宮山プリント　山梨県北杜市高根町箕輪新町14
発行日	2022（令和4)年2月18日

ふりがな	やまなしけんほくとしあけのちょうあさお
所在地	山梨県北杜市明野町浅尾4016番地ほか
位置	北緯35°　47′　50″　東経138°　27′　60″
調査原因	農業基盤整備事業
調査期間	2012年6月4日～2017年5月16日
調査機関	北杜市教育委員会
調査面積	59,595㎡（別に14,800㎡を現状保存）
時期	縄文時代、古墳時代、平安時代、中世
主な遺構	縄文時代中期末葉の住居75軒、掘立柱建物10棟、後期初頭から中葉の住居102軒、掘立柱建物25棟、時期不明の縄文時代の住居6軒、掘立柱建物6棟、古墳時代前期の住居9軒、平安時代の住居160軒、掘立柱建物14棟、時期不明の掘立柱建物44棟、配石9基、集石遺構7基、埋設土器18基、焼土跡74基（住居炉跡を含む）、杭列1条、土坑約1400基（住居貯蔵穴等を含む）、ピット約3500基（住居柱穴等を含む）、溝跡5条
主な遺物	縄文時代中期末葉の土器（曽利式）、後期初頭から中葉の土器（称名寺式、中津式、堀之内式、加曽利B式）、縄文時代の石器、平安時代の甲斐型土師器、鉄製品、鉄製馬具（銜）
特記事項	縄文時代中期末葉の炭化トチノミ（種皮）、縄文時代後期の大規模集落跡、後期前葉～中葉の地業跡、平安時代の「牧」に関連すると思われる鉄製馬具（銜）と集落

北杜市埋蔵文化財調査報告第 46 集
上原遺跡
県営農地環境整備事業天王原地区ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022 年 2 月 14 日印刷
2022 年 2 月 18 日発行

発行　北杜市教育委員会
山梨県北杜市明野町上手 8310 番地
TEL（0551）42-1375

印刷　有限会社小宮山プリント
山梨県北杜市高根町箕輪新町 14 番地
TEL（0551）47-4141